

型で、一七九の右端にある座像は觀世音菩薩、本尊からいふと左手になるが、其表札と、同じく本尊からだ右手になる勢至菩薩(圖では眞つ黒に
なつて了つたが)の表札とはよく見える。圖の左上のは後者で、次頁の二圖殊に一八〇にはつきり見えてゐる。

佛さんの表札を出すのは何も桃山に始まつた事ではなく、もつと古くからある。大阪府泉南郡西葛城村所在の本名觀音堂、普通木積釘無堂(つみぎくぎなしだう)の正面中三間の蒸股内に、例ひ其部分の材料が變つてゐるとしても、同様に一つづつの種子を入れてゐる。つまり少なくとも鎌倉時代からこの様なやり方はあつたといへる。ただこのは書いてあるだけ簡單化してゐるのである。

生憎寫眞が小さくてはつきりしないが、頭貫の間料束に當る所には、例の如く鬘斗目模様がかいてある。既記の通り此時代に賞用されたもので(四七)
(參照)、夫がまたここに用ひられてゐるのである。其上の長押には雲に天人が描いてあるが、其天人は慶長頃としては割合によくできてゐる。一八一に全體が寫つてゐるにはゐるが、小さくてとてもこれでは判るまいが、片足たしかに足首を出してゐる。鐘樓東妻懸魚緒の天人が足を出してゐるから、新しくなると天人は皆足を引込ませるといふ説は成立しない場合もあると書いたが、この天人も足を出してゐるのでは、どうもあの説は成立しさうもないし、成立してもかう除外例が多くては少しばかりまづい。

正面中央に須彌壇がある事は圖をみても明らかであるが、この他に兩方の外陣後方に脇壇がある。前者は唐様で主として黒漆塗、間間朱漆を用ひ、圖に於いて羽目板の上下にある稍や太い白線に見ゆる部分は金色、勾欄は唐様で甚だ美しい。羽目板には格狭間を入れてあるが、中央のもの最大最美、左右此につき、側面の分は其形も小さく且つ簡單である。其詳細は一八二・一八三に掲げた如くで、前者は正面中央、後者は其兩側のもの。地は黒、面は朱、若葉は金、盲連子は白縁で甚だ美麗である。其輪郭の線も慶長頃のものとしては意外に締りがあり、又下端に若葉を添へた意匠は、殆んど他では見受けな

いもの。この頃にこれ位しつかりしたのができたのに、江戸になつてどうしてあの様に拙くなつたか、考へてみると不思議でならぬ。

脇壇其物は大した問題にする程のものではないが、其格狭間は一八四に見る通り、これもよくでき過ぎてゐる。恐らく同時代であらうが、盲連子の上にまんべんなしに一面に唐草を入れてある。これは唐草は黒で葉は幾分か味を帯びてゐるやうだから、須彌壇の程見た所は美しくはないが、唐草は鎌倉から室町を経て順次に傳はつた事が明らかで、即ち鎌倉系統といふべく、その様な點から觀察すると一層興味のあるものである。

*

*

*

*

*

阿彌陀堂其物も、建築としては決して拙いものではないから、其内部にある須彌壇と共に、若し夫が詮議に及び難しとあれば、せめて須彌壇だけでも、何とか文部省あたりで考へて貰ふことはできないだらうか。

猿 (一八五・一八六)

抑、猿とは如何なる動物か。其原籍は背椎動物のうちの哺乳類のうちの奇蹄目、猿科に属する動物。全身に短毛を生じ、尾は短く鼻と上唇とは一緒になり、短い象の鼻の様な形をしてゐる。日本の動物園に来てゐるものは、後半身に白色の大斑文があるが、これはジャバ、スマトラ、マレー等に産する種類だといふ事である。

猿が建築彫刻に現はれたしたのは室町時代からの様である。或はこれは便化した猿ではなくて、唐獅子と象とから捏あげた理想動物かも知れない。とにかく尾極の鼻についてゐるのでも、猿股の兩脚内に納まつてゐるのでも、殆んどきまつて顔は獅子のできそくないで、鼻は短かい象の夫の如く、つまり象と獅子とのあひの子らしい風采である。だから實在の動物とは大分に縁の遠いものであるから、猿といふのは不適當な名かも知れないが、さりとて他に名のつけ様もないから、世間一般に通用してゐる通り、當分の間猿にして置く。

*

*

*

*

*

名古屋市の官幣大社熱田神宮の近くに本遠寺ほんえんじといふ寺がある。此寺の樓門は國寶に指定されてゐる。見たところは棧瓦葺の大した特徴があるとも思へない。いはば普通の三間一戸樓門に過ぎないが(一八五)、其中央通路の猿股には金網がかぶせ

てゐる。下から見たところでは珍物とも思へないし、室町位の猿股ならいくらもあるから、何も金網で保護しないでよからう、多分この邊では二なきもの位に考へてさうしたのだらう。結構には違ひないが、これでは見にくいから困る。金網をかけるならもつと他にいくらかもある筈だ、といふ様に見たから、去る昭和七年の正月と二月と續けて名古屋市へ行つた時、二度共此寺へ参詣したが、どうも獅子らしいと思ひ、別に梯子をかけて近くでみようとも思はなかつた。然るに其後ある書物を見たら、この猿股内には「羽象」が彫刻してゐると書いてあつた。

此は實に容易ならぬ次第である。法隆寺金堂壁畫のうちに大象はゐるが、羽は生えてゐない。羽象は印度ブダガヤ大塔周圍玉垣の圓文内の文様にあるのが私の知つてゐる一例で、印度が原産地と心得てゐるので、日本に来てゐる事はまるで知らなかつた。若しこの樓門の猿股の内にそんなものが入り込んでゐるならば、洵に以て一大事である。今度折があつたら一つ大に徹底的に調べて見度いと思つてゐるが、つい機會のない儘で昭和十六年八月になつて了つた。ところが其二日の早朝虎溪山永保寺をたつて多治見驛から汽車にのり、名古屋驛に下車して七つ寺から熱田神宮、夫から本遠寺といふ順序で、約十年振りで信州勇猛團の驥尾に附して歩いた。

熱田神宮参拜の節は、初めて土用殿の見學ができたのは大きな喜びであつた。夫から本遠寺へ行つたところ、住職伊藤友清師の厚意により自由に見てもよろしいことになつたのみならず、猿股の金網を取外しても差支ないとあつた。猿股には元來網なんかは覆ふてはなかつた。ところが先年名古屋高工のT教授が、これは大事なものだから極力保護せよとの注意があつたので、夫では金網を着せでもしたらよからう、といふのでさうしたのだから、外したつて少しも差支はないとあつた。梯子・脚達・釘拔・振子廻等直に用意され、次の瞬間に猿股は何年振かて其全貌を一行十三名の面前に現はした。

熟視する迄もなく、これは羽象でも何でもなくて、大に便化した獾であった(一八六)。天然の獾とは似てもつかない容貌で、例の唐獅子式顔面に皺だらけの短い醜鼻をつけ、天産のなら前肢に四趾後肢に三趾を有する筈なのに、判然しないが幾つかの趾があり、腹部は龍か蛇の夫の如く謂はゆる蛇腹じやばになり、尾は短かるべきのが非常に長く、元から五つか六つに分れ、逆に戻って胴の半を覆ふてゐた。さうして其空隙には便化した雲を充たしてあつた。圖で見る通り幕股の輪郭もさう大して力も入つてゐないし、脚端は葉化して上方に巻き上り、どちらかといふとさう大して傑作だとも思へないのみならず、寧ろ墮落しかけた形だし、獾と雲にしても先づ普通といふところ。併し金網で覆ふておけば、子供の悪戯を防ぐ用にはたつから結構である。

* * * * *

八月一日は大曇りで、永保寺では一日かかつて寫眞が二枚しか撮れなかつたと大にこぼしてゐた人もあつた位で、夜中から雨となり、二日朝はまだ大分降つてゐて、永保寺から多治見驛迄、車はなし傘なしでは到底歩けなかつた。名古屋へ着いた時分、小歇にはなつたが七つ寺へ出かけた時はまだ降つてゐたから、私は寫眞機を宿屋へおいて行つた。だから土用殿見學の際も、勇猛團の面々がとつてゐるのを羨しさうに見てゐたばかり。だからこの幕股も私はとれなかつたが、幸に此時團造子がとつたので、一枚焼付けて譲り受け、同氏の承諾を得てここに掲げ、羽象でない證據を提出したのである。これでやとと安心ができた、と同時に失望もした。若しこれが羽の生えた象でもあつたら、九ボで組んで五六頁位の法螺は吹けたであらう。圖でも入れたら十頁にはなつたかも知れない。

降棟の鴟尾 (一八七・一八八)

建造物の大棟の末端を裝飾すると同時に始末をつけるために、鴟尾、鬼瓦、鯀、獅子口等を用ふるのは、我國に於いては古來からの方法である。古來といつても此等全部が初めからあつたのではなく、平安朝位迄は鴟尾か鬼瓦で、鎌倉になつてから鬼瓦を簡略化した鬼板や、又獅子口ができたものの如く、此時代鴟尾も相當に用ひられたかどうか私は知らない。鯀は室町時代から遺物があるから確かである。

近來鴟尾はマカラから來たといふ説があると傳聞をした。マカラとは鰐魚とも龍ともつかぬ一種の理想動物であり、摩伽羅、摩迦羅、摩竭等ともかき、鯨魚、巨鼈等と譯す。書物には「摩迦羅魚、亦言摩竭魚、正言摩迦羅魚、此云鯨魚、謂魚之王也」云々とある位で、おそろしく大きなものらしい。【大唐西域記】には佛教を信じない商人が海でマカラに出會し、既に船ぐるみ吞まれさうになつたので、大あわてで觀世音菩薩を拜んで助かつた話が載せてある。

菩提樹の垣の西北、遠からざる所に窰塔波あり。鬱金香と謂ひ、高さ四十餘尺。漕炬吒國(Jaruda)の商主の建てし所なり。昔漕炬吒國に大商主あり、天神に宗事して祠りて福利を求め、佛法を輕蔑して因果を信せず、其後諸の商侶を將いて有無を貿遷し、舟を南海に泛べしとき風に遭ひて路を失へり。波濤を飄浪して時に三歳を経たり。資糧は罄き竭きて口を糊するに充たず。同舟の人は朝にして夕を謀ら

ず。力を戮せ志を同ふして事ふる所の天を念じ、心慮は已に勞して冥功濟らず。俄に大山を見る、崇崖峻嶺あり、兩の日ありて暉を聯ねて重明照期たり。時に諸商侶は更に相慰めて曰く、我曹は福有りて此大山に遇へり、宜く中に於いて止りて安樂を得べしと。商主曰く、山には非ず、乃ち摩竭魚のみ。崇き崖と峻しき嶺とは鬚鬣なり、兩の日の暉を聯ねたるは眼光なりと。言ふ聲未だ靜まらざるに、舟の帆は飄へり湊まりたり。是に於いて商主諸侶に告げて曰く、我れ聞く、觀自在菩薩は諸の危厄に於いて能く安樂を施すと。宜しく各誠を至して其名字を稱すべしと。遂に即ち聲を同ふして歸命して稱念するに、崇き山は既に隠れて兩の日も亦没したり。俄に沙門の威儀摩序として錫を杖いて虚を凌いで來り、溺れたるを拯ふを見る。時を踰へずして本國に至れり。因つて即ち信心貞固にして福を求むること回ならず、窳堵波を建てて式で供養を修し、鬱金香の泥を以て上下に周らし塗れり。……

と。これで見ると、船にのつて海に漂流してゐた時、遠方に大山があり、太陽が二つ光つてゐたが、實はこの大山はマカラの頭で、二つの太陽は其眼であつたさうである。其絶大なる大さは想像に難くあるまい。

印度のマカラには、尾を巻いて渦になつてゐると、魚尾のようになってゐるとある。其頭部は象の様なものもあるし(サナタ婆玉垣)、又鰐の様なものもある(パールハット廢塔玉垣)。この魚尾摩迦羅を便化すると大口魚となり、夫は其儘鯨になる。後世の城堡建築の屋根には、大棟の端に大鯨きまつて鯨がある。強さうに見え敵を威嚇するのに役にたつ。鯨の方がかういふ目的には鵞尾より遙に効果的である。以上初めに斷つた通り、鯨にしても鵞尾にしても何れも大棟の話である。

降棟となると、平降にしても妻降にしても、乃至隅降にしても、今迄私の知つてゐる範圍では、鬼瓦か鬼板か獅子口かに限られ、鯨や鵞尾は一つもなかつた。然るに全く偶然であつたが、昭和十二年の末に近く、隅降棟と稚子棟の末端とに、鵞尾を用ひてある建築に出あつた(一八七)。

豫て臨濟宗佛通寺派の本山なる佛通寺の地藏堂は、室町時代の優秀なる建築であるとして、明進寺の楚溪禪師から寫眞を載

いてゐたので、いつか見學の折を狙つてゐたところ、機漸く熟したから、例の園造子を同伴して、昭和十二年十二月十一日に京都を出發、三原で下車し直に自動車で佛通寺の門前迄乗りつけた。これも亦禪師の斡旋で同寺へ宿泊する事になつてゐたので、午後三時頃ついたが其日はゆつくりし、翌十二日は朝から夕刻迄、終日地藏堂で暮して又一泊。大分寒くはあつたが天気はよし、其頃の事とて炭も電燈も無制限であつたから、火鉢に山盛に火を起し、百燭の電燈をつけて楽しい二夜を過ぎた。十三日には尾道に出で、連絡船で今治(いまば)に行き、いつもの通りIさんのお宅の三階の角と其次の室とへ納まつた。翌十四日には、これも吉例(?)によりIさんを煩して車を雇つて載いで興隆寺へ往復した。如何にIさんが名望家で有力者であつても、今であつたら到底車のお世話は願へない。又願つたところで駄目であるが、其頃は費用も節約ができるといふ様なところから、大變に御迷惑をかけたと恐縮してゐる。

此時の旅行の目的は大概一通りこれですんだので、翌十五日の午前は市内の南光坊といふ相當に大きな寺へ行つて見た。別に目的があつてではなく、ただ慢然と行つたのであつた。ところが全然豫期しないものが目に入った。寶形造棧瓦葺の至極新しい建築であつたが、其隅降棟には正に鵞尾が上つてゐた。此建物は太子堂だとのことで、いつ頃の創建か知らぬし、昔もかういふ風にしたかも知らぬが、これで結構ものになつてゐたから、初めて斯様なものを見て随分に嬉しかった。

梯子を借りて軒先まで上り、そばで寫したかつたが、私一人では勿論、元來蒲柳の質にまします園造子が相手ではやはりものにならず、青井之登君か彦全の坊ちゃんでも居れば一人で掛けたりはづしたりして貰へるだらうのに、いくら残念があつても如何ともできないのであきらめ、成るべく近づいて下からとつたのが一八七。然るに此時から二年ばかり後に、文部省の一室で駄辯を弄してゐた時、宗教局保存課に當時勤務してゐたS君が、これはどうですといつて出したのが一八八。幸

にその以前に見てゐたので、これは今治の寺だと返事ができ、耻をかかずにすんだが、此時S君が持つてきたのは、この他に全景が一枚あった(と記憶し)。二枚ともやるといったので、丁度居合はせた某博士と籤引をしたら、拙者にこれがあつた。實は大きい方が欲しかつたので、都合よく當つたから鷗尾の部分をもう少しく大きく引伸しておいたのである。

釋尊寺觀音堂廚子 (一八九—一九三)

私がこの有名な布引山釋尊寺觀音堂に、世にも珍らしい廚子がある事を知つたのは昭和九年八月八日で、信州上田の長友Yさんから私が旅行不在中に着してゐた封書をあけた時、なかから出た寫眞を初めてみての事であつた。さうして實地見學をして寫眞をとつたりする事ができたのは、其時から約十ヶ月後の昭和十年五月二十三日であつたのである。【日本案内記】中部編、布引觀音の條に

小諸驛の西約六軒、千曲川の沿岸大久保村布引山にあり、電車の便がある。觀音堂は朱塗で三間三面入母屋造、江戸末期の築造にかかり、絶壁の洞窟前に作り出された舞臺造の建築である……昔この山麓に住んでゐた老婆が、牛の角にかかれる白布を追ふて遂に善光寺詣りしたと云ふ……傳説地である。

とある。觀音堂其物は、挿圖の通り景色としては申分はないが、そばでみると江戸末期ならまだいい方で、ことによると明治ではないかと思はれる位、感心のできぬ程度の建築である。といふのは後に此寺へ參詣して初めて知つたので、Yさんから送られた寫眞では、そんな事迄は勿論判らなかつた。手紙の中には

……先頃明治十四年以來秘められて居た布引山釋尊寺へ參り……お廚子を開いて漸く撮影いたしました。あまり裏腹が氣に入つた

ので御送りいたします……墨書銘の「嘉」字の所缺けておますので少しは判然しませんですが先づ確かな様に思われました……とあつた。其Yさんの氣に入つた墓股といふのは一九二に掲げたもので、他に手摺本が一枚入れてあつた。この時以來何とかして一度でいいから實物を見度く思つてゐたところ、洵に幸な事には翌年になつて其機會が到來した。實は其年の十月中旬、上田市の他の友人故Kさんから、あの廚子を見に来ないかといふお手紙を戴いたが、其時は久久で大分縣大野郡の神角寺へ參詣する前日であつたので、甚だ残念ではあつたが辭退した。然るに其年末に再び御親切な勸誘を受けたが、此時も亦豫定の用事のため拜辭をした。ところが三度目に翌十年四月中旬、もう大分日も永くなつたから五月中の然るべき日に來て布引山釋尊寺觀音堂全景

(昭和十年五月二十三日)



はどうかといふ手紙があつたので、今度は萬障を繰合はして出かけることにした。小諸驛についたのは五月二十三日の朝であつた。驛前から布引山下迄運轉してゐた布引電鐵は事業不振の爲、當時は廢線となつてゐた。例ひ電車が動いてゐたとしても、山を五六町徒歩で登らなければならぬ。併し登れば景色は何といつてもよろしい。本堂前から丁度爆發後で、初夏の透き通つた青空に白煙をゆるく棚引かしてゐた淺間山が眞正面に見

え、左手は岩石岬岬としてその中腹に觀音堂が建ち、文字通りの絶景であつた。庫裏の二階も亦淺間の爆發見物には上棧敷で、前夜大爆發の際の噴煙は實に美しかったとの事であつた。

* * * * *

觀音堂内陣の奥は岩窟で、其前に扉があるから、これがつまり最外の廚子といへる。此扉を開くと更にまた廚子がある。これが即ちここに目的にしてゐるもので洵に珍らしい型式のもの。このうちにもう一つ廚子があり、本尊はその内に安置してある。折角二度とない好機に、これではをしいから、住職及び關係者の諒解を得て、小さい廚子を一時他に移し、目的の中廚子を外陣迄持出してゆつくり見學したく思つたが、何分にも半分以上はくづれてゐるし、床も注意して歩かないとあぶないのみならず、最外の大廚子の扉の幅に比べて、中廚子が少し大きすぎるから、そのままでは例ひ堅牢であつても出しにくい。まして壞れかけてゐるものを、満足に持出す事は不可能であつたから、これは思ひとまつた。小廚子内安置の木彫立像は、兩手を失つてゐたので、何の像か不明であつたが、平安初期のもので衣文に特徴のあるものであつた。

此日は非常な好晴であつたから、Yさんの銀紙と私の持参したのとを障子二枚にはりつめ、六尺平方の大反射面をつくり、廚子の正面に充分の光線をあてることのできた。一八九一九一・一九三はこの反射光線を利用して寫したものであるが、何にしる奥にあるのだから、雨天の日は勿論、曇天でも夫が薄曇でない限り、多人數一時の見學はむづかしいし、寫眞は閃光でも用ひないと望みはあるまい。私のは反射光線が強すぎたせいで、まるで月世界で寫したものの様になり、如何にも素人臭いが、二重反射をつかはなかつたから仕方がない。

廚子は方一間、正面柱眞眞三尺五寸六分、側面一尺九寸、正面兩端の柱は大面取、一邊一寸九分五厘乃至二寸、面見付三

分五厘乃至四分、比約 $\frac{1}{5}$ 、背面の柱は見えないせぬか面を取ってなく、且つ一邊一寸七分五厘(向って左方は床危険にて近寄れず、従って實測はしなかつた)で、少し細いのは、別に正面のと同じ大きさにする必要がなかつたからであらう。大料の比約 $\frac{7}{10}$ 、巻料は $\frac{7.3}{10}$ 、柱も大料も巻料も總て鎌倉の比例より大きい。正面最下の間には格狭間を刻んであるが、其形は寧ろ平凡である。この部分は廚子を外へでも持出さなければ到底寫眞にはとれない。其上の上下長押で限られてゐる間は、中の廣い間には兩開の板扉が吊込んであるが、扉も八双金物も全體金色、脇の間は狭く従つて上下に細長く、自然細長い大して格恰のよくない直連子窓が裝飾に入れてある。其類縁は白緑だが、これは多分緑青が剥けたのであらう、連子は金色で實に美しい。こんな美しい仕上はつい見た事がな(九八)。

正面の幅が大分廣いせぬか、中央に臺輪と長押との間に東(柱と同じ)面取(柱と同じ)をたて、柱上と同じく出三料の料拱をのせてある(九一)。料拱間には唯一無二の蒸股が入れてある。色は緑で中心から左右が異なつてゐるのは、今日の様に半分描いて中央から折り返し、残りの半分をかくのではなくて、全く自由に左右別別にかいたものとみえる。だから同じではないが蒸股は生きてゐる。兩脚の外側に脚の先の様な簡單な飾をつけてゐるのは、恐らくこの設計者の創意であり、ここにはのみ用ひられたものと思はれる。唯一無二とかいたのは此點を指したのである。脚の開き僅かに約一尺の小さなものだし、作も亦決して叮嚀ではないが、これは圖案的裝飾蒸股の極致といつても差支はあるま(一九)。

明治十四年以降、如何なる場合にも決して大廚子を開扉しなかつたさうである。然るに昭和九年Yさんが特に寺に懇談して快諾を得、半世紀の後に開いたところ、斯様な廚子があつたのだから、日本建築歴史に精通せるYさんの驚愕といふよりも驚喜は拙筆の及ぶところではない。薄い刃物を裏に挿込んで少しこざれば直にとれる様な生氣潑刺たる天下一品の蒸股が二つも残つてゐたのは、半世紀間黑暗暗裏に監禁の資である。左もなかつたらとうの昔に僅の金のために骨董商に蹂躪されてゐたか、或は好事家の所有に歸して丁ひ、我我は到底伺ひ知る事は出来なかつたらう。

尙ほ其上に此廚子の屋根と妻飾とを見逃してはならない(三九)。朽葺くつきを模したものか、屋根は段形にしてある。大棟の鬼板、鳥衾等何れも注意せねばならぬ。鳥衾は古くからあるが、「鬼板」と稱するものは鬼瓦を簡單化したもので、鎌倉時代に初めて出現したものの如くである。ほんたうの瓦の遺物があるかどうか知らぬが、木製のは丹波花背の峰定寺本堂附屬厨迦井屋の屋根にあるもの、及び例ひ非常に小型であつてもこの廚子の等は、鎌倉時代のものとしては或は漸く現存する實例かも知れない。併し可なりひどくなつてゐるのは、惜しいものである。ところが幸なことには妻に「梅鉢懸魚」が残つてゐるのは有難い。大體鎌倉時代の梅鉢懸魚は、繪巻物でみた位の事で實例には出會はなかつた。下に平たくおいてゐるのは例の一呎の物差だから、夫に比べてみれば直に判断ができる通り、高も幅も僅に一寸五六分位のものである上に、鼠にでも噛られたか、あぶなく先端をなくすところを辛ふじて助かつた程度のなさけないものだが、將來他に完全なのが發見されぬ限り、これも亦唯一無二の貴重なる實例である。

此廚子は實物を見ない間は丹塗と思つてゐたが、夫は大なる誤りて黒塗であつた。さうして棟札もある。初めから切れはしの様な木片に書いたものか、或は長方形の板へ書いたのに、後に何かの都合で勝手な所を勝手に切り取り、不規則な形にしたものか、とにかく現在にはあちこちに切り欠きがある。長一尺七寸五分、幅三寸、全文左の通り

大行事熊野權現 大勸進明阿彌陀佛

右口傳建立志爲偏是石專寺 明阿彌陀佛(花押)

奉建立口傳一字

請觀音威光增益也且又爲

勸進上人現世百年之間預

小行事一切諸神 大番匠橋久繼

觀音加被當來頓證菩提也

橋久繼(花押)

右のうち上方中央に「奉建立口傳」^{一字}、下の方四行の文の書起しに「右口傳建立志……」とあるが、この「口傳」がどうも判らず、クデンかコーデンか、夫とも何と訓むか。口傳有之なかだとクデンだが、その邊でまことついでゐたが、これは「宮殿」のあて字だらうとの事に、如何にも其通りらしく、「宮殿」一字を建立し奉る。「右宮殿建立の志は……」で意味は充分に通ずる。其下の「石專寺」は「釋尊寺」で、石は石楠・溫石・石神井等「シヤク」と發音されるし、專はどこ迄もセンだらうが、これは尊の誤記とする、石專寺はシヤクソソジと發音し得る。橋久繼なんか如何にも鎌倉時代の建築家らしい。此廚子のできた正嘉二年を距る二十六年、弘安七年に建築された法隆寺新堂の建築家は大工橋國繼であつた。

此廚子はYさんの發見が昭和九年(いつか知らぬが寫眞を送つて戴いたのに添へた手紙)で、私が皆さんのお世話になつて見學し得たのが其翌年の五月下旬であつたのに、昭和十一年九月十八日には國寶に指定されたのは、洵にめでたいことである。

牡丹・蝶・猫 (一九四—二〇六)

牡丹の花には紅白がある様だが、大輪で甚だ美しい事は改めて記す迄もない。五月頃花が咲く。其頃は各種の蝶がそこいらを飛んでゐるから、揚羽蝶でも牡丹の花の咲いてゐる所を飛ぶこともあるだらう。蝶は決して牡丹の花には來ないさうだが、實は自身で氣をつけたこともないから、たださういふ話だといふだけで、ほんとは知らない。同じ揚羽でも黒い種類、例へばクロアゲハ、カラスアゲハ、乃至土地によつてはモンキアゲハ等と、牡丹の紅又は白の花と、綠色の葉とは、全く美しい取合はせである。併しこれは人類からの見方で、蝶としては牡丹の花等に來るのは最も損であらう。大根の花に白蝶、黄色の菜の花に黄蝶が集るのとは異り、紅や白に黒では夫が警戒色でない以上、直に敵に見出される虞が多分にある。生存競争の劇しい當事者にとっては、自己保存のために生命がけの努力をしてゐるので、人類の眼を樂ましめるため花から花に飛び巡つてゐるのではない。その上あの吻では蜜を吸ふのも容易であるまい、旁牡丹の花には來ないといふ説がよろしいと考へてゐる。

有名な「日光の眠り猫」、即ち東照宮東廻廊から坂下門へ行く通路の上にある蓋股内の彫刻は、牡丹と猫とだけで蝶は居な(IIIOK)。この猫は眠つてゐるので、「眠り猫」として甚だ有名である。案内人に言はせると、此は左甚五郎の作で、牡丹

の花の咲く頃は猫もねむいから夫でねてゐる。この様なのはもう一つ大阪の四天王寺にある。大阪のは雄で日光のは雌とか何とか説明してゐる。日光見物の時には、何をおいても眠り猫を見なければ、歸つて話ができない、日光へ来た甲斐がないとでも思つてゐるのか、筆者はある年の夏、東照宮の五重塔の邊を徘徊してゐたら、案内人を連れてゐない見物人が近づいてきて、せき込んだ調子で眠り猫の所在をきいた。そこで出来るだけ丁寧に教へた後、奥の院への通路の上だからいやでも見える。そこへ行く迄には、見るものが澤山にあるから、順序よく行くべく勸告したところ、其人は時間も充分にないし、眠り猫さへ見れば他のものはどうでもよろしいといふ素振で、早急に辭去したので、相當にあきれた事があつた。

大阪の四天王寺境内の東南隅に、聖徳太子を祀つた太子堂がある。其北門(四脚門)北側墓股脚間の彫刻には、向つて右方に左を向いた猫が踏つてゐる(一九七五)が、併し夫は隣分ひどく居り、顔等は殆んどとろけて了ひ、眼は開いてゐるのか閉ぢてゐるのか判然しないくらゐになつてゐる。此墓股に於いて當初の部分と認められるのは、猫及び其部分の輪郭だけで(一九七)、左の半分なる牡丹に鳳蝶(一九五・一九九)・裏面の牡丹(一九六)、及び其部の輪郭(一九五左・一九九)は全部後補である。この門は明治二十一年四月の復興ださうだから、或はこの時に補つたのかも知れない。

一九五・一九六は小さい寫眞だから、一見新古の區別はできにくいであらう。輪郭の曲線や脚の末端の形等にある多少の差は、いくら寫眞に現はれてゐても、全くの素人には識別し難からう。けれども一九七となると、右の猫と左の牡丹とは、風化の程度が異なるから直に判断がつくだらうし、又輪郭にしても、中央の上向きの茨から、左右の下向き茨に到る迄の曲線

* 四天王寺の眠り猫といふのは、太子殿北門の墓股内ので(一九五—一九八)、大分ひどく風化してゐる。大阪のが雄といつてゐるか雌にしてゐるか、今明らかに記憶してゐないが、何れにしても大した問題ではない。

が、右と左とで幾分の相違を看取できるであらう。尙ほ一九八の中央の白線は、便宜上新古の境界に引いたもので、右は猫で古く左は牡丹で新しい、だからこれを上圖と比較してみると、一層其差が呑込めるであらう。

雜誌【上方】第一卷第三號(昭和六年三月)には、四天王寺に就いての研究のみを主として登載してゐるが、其終りに近く「蜀山人の日記に現はれたる天王寺」と題し、享和元年三月から十二月迄の間に、數回四天王寺に參詣した時の記事が抄出してあるが、十二月五日の雷火で、同寺の諸建築物が焼失した有様を記してゐるうちに

……風烈數て廻廊より諸室に至る迄火かゝれるに太子堂の門なる猫の彫物を助けんとて人々聲掛辛うして取出せるとぞ……

とある。「太子堂の門なる猫の形の彫物」といふのは、確かにこの墓股のことをいつてゐるのであらう。その時分か或はもつと以前から相當に有名であつたのだらう。だからあわてて取出さうとしたに違ひない。併しさう急いだところで、早くはづせるものではない。それなのに力任せに無理をしたから壊れかけたらう。漸く取はづしたが、上から投げ出したかも知れない。さうしたら不幸にして猫に比べて大分きつちやな牡丹に蝶の方が、石か何かにあたつて壊れて了つたらう。だから後に壊れた方の半分を造り、つぎたして現在の様にしたのであらう。猫の方が桃山位で、あとが江戸末の様式をしてゐるところをみると、此想像は萬更しい加減でもあるまいと思つてゐる。

四天王寺には、この他にも猫はゐる。猫ばかりではなくて、牡丹も蝶もゐる。而も太子堂北門墓股のより遙に美事なものである。西門前でバスなり電車なりを下り、鳥居を入り、八脚門なる西大門を入つた左手、南面して建つてゐる經藏の内部、正面見返し(本)の墓股内の彫刻が夫である。

經藏は方三間寶形造本瓦葺、料栱三料、軒二重繁檼、中の間は料栱間墓股、脇の間は間料束、内部内陣柱(本)上は唐様挿

肘木に天竺様系統の料をのせ、外陣の繫海老虹梁を受けてゐる、中央に輪藏があり、妙心寺經藏の夫の様に、八方に丁度あ
の位の大きさの八天推輪の状を刻してあり、正面には傳大士と普賢・普成の像を安置してある。總て化粧屋根裏。



四天王寺經藏(昭和十六年十二月三十一日)

四天王寺西大門と稱する樓門を入り、伽藍への參詣道の傍に南面して
建つてゐる。つまり最も人通りの多いところにある上に、其傍に鳩にや
る豆を賣る店があるので何とも始末にわるく、もう少し右へよれば露店
の寫眞屋があるので一層拙くなり、どうしても眞隅に近いこの様な位置
しかない。人を雇つて来て一時交通を遮断するか、左もなくば終日待機
してゐて、人通りの絶えた時を見つけないければ目的を達し得ない。いつ
迄たつても少しも進歩しない素人寫眞としては、この
位のは上等の部と思つてゐる。

經藏は、現在四天王寺に於ける有數な立派な建築
で、元和三年建立といふ。夫を知らなくとも見れば
全部が桃山時代の様式を備へてゐる事が明らかに知
れる。外部中の間の臺股内には雲に四佛の種子が入
れてあり、甚だよくできてゐるが、内部のも同様で、
この方は外のより一層彫刻としては美しい。其方向
と彫刻との關係は

- 東。梅に鶯(三〇一)。
- 南。牡丹に蝶に猫(一九九)。
- 西。楓葉に鹿。
- 北。雲に舞鶴。

で、梅に鶯の春は判つてゐるが、牡丹だの蝶だのも
春だと思つてゐたのに、これは夏ださうだから、丁
度東からこの順に春・夏・秋・冬といふ工合に四季

を現はしてゐるのである。何れも輪郭も内部の彫刻も傑作揃で、一木から刻みだした入念のもので、日光東照宮廻廊の夫の
正に先驅をなしてゐるのである。

實は私も去年十一月五日に初めて見つけたのである。夫迄無慮數百回經藏の前を通りながら一度も入つて見た事がなかつ
た。此日は偶ま來合はせた遠齋老人他一名と共に内部の探検を試みた結果、思はぬ獲物をしたので、全く入つて見てよかつ
た。もう少し氣がつかずにゐたらば、知らずじまひになつたらうと獨語したら、直に遠齋老人から抗議がでた。つまり自分
はもう數年前に入らうと提議したのに、いつでも見られるから左程急がなくともよろしいと私が言ったのでやめたが、若し
あの時入つてゐたら、すつと以前に見付かつてゐた筈だといふのである。如何にも尤も千萬、正に其通であるが、とにかく
私は嬉しかった。これこそ日光のより二十年前から眠り續けてゐる事が確かだから。

經藏の「牡丹に蝶に猫」は、あらゆる點に於いて太子堂北門のより遙によろしい(一九九)。
ては極めて締つてゐて且つしつかりしてゐる。但し蝶は左上から斜に下を向いて居り、下からでは到底蝶とは思はず、前
翅と後翅とが殆んど同大同形で、認識不足の結果か、後翅の方が前翅の上に出てゐるから、あれでは飛べない。併し後翅に
は「尾(右方の分缺損)」をもつてゐるところは、ある程度迄は確かに寫生であらうが、全體の形はへビトンボかトビケラの如く、せ
いぜいよく見てテフトンボといふところである。臺股全體の大きさ下幅(脚先から)四尺七寸五分、高さ上の料も入れて一尺六
寸六分、相當に大きなもの。

和歌山縣海草郡和歌浦町に天滿神社といふのがある。三間社流造であるが、其社殿の右側面奥の方の料拱間の臺股内には
向て右に猫、左に牡丹に蝶を入れた公式通りのもの(二〇五)、同じ様な意匠だが前例の方が大分によろしい。此建築は慶



四天王寺經藏内部南側基股内「牡丹・蝶・猫」彫刻見上
(料上物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十六年十一月二十七日)

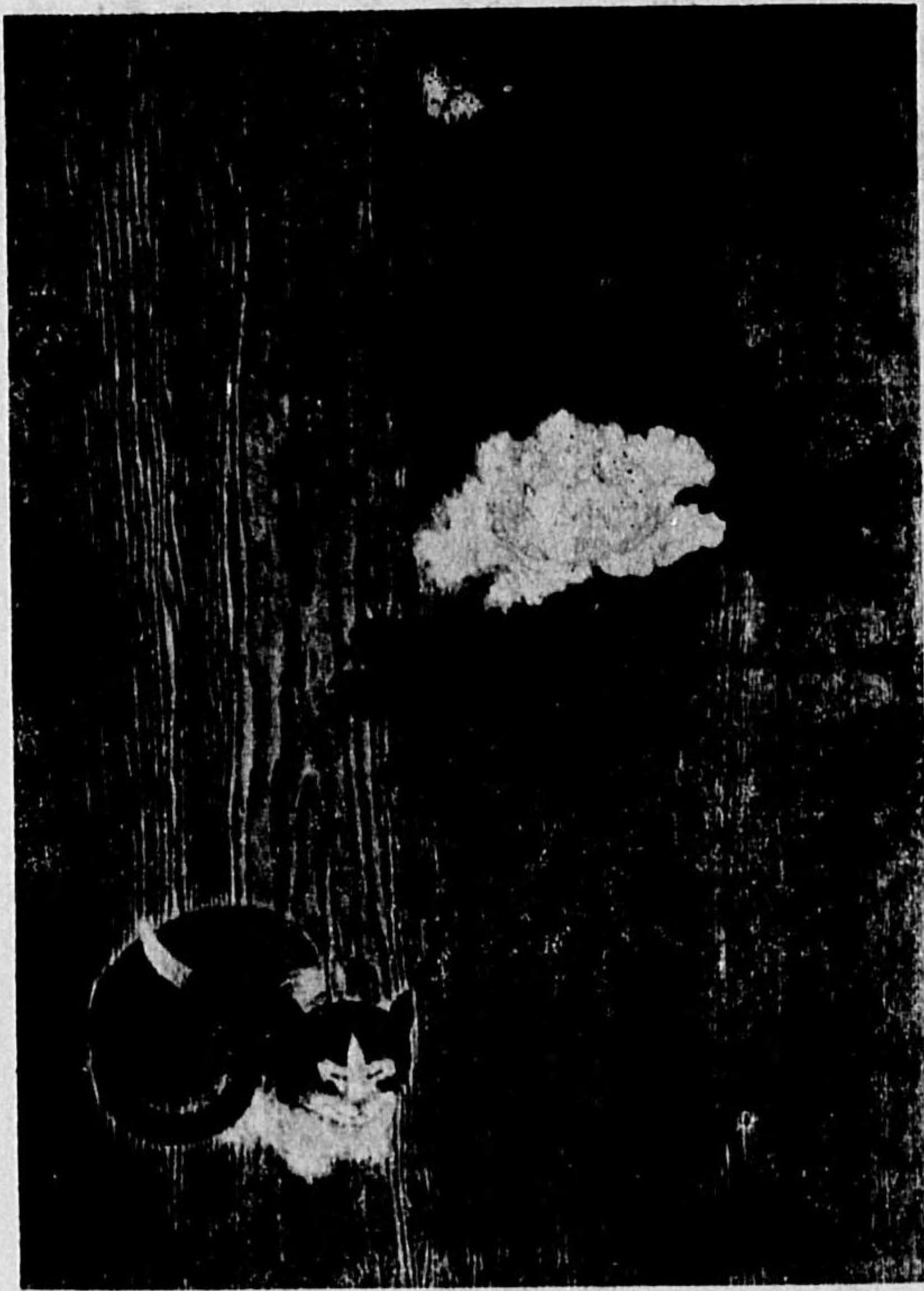
圖版一九九・二〇〇・二〇一に詳細に示してあるから最早必要もなからうと思つたが、蝶がどの様に輪郭についてゐるかよく判るし、眠つてゐる猫の調子もはっきりするので、序にもう一つ掲げたのである。蝶は翅の下端と胴體とを輪郭から刻み出してゐるから、しっかり固定してゐて落ちる心配はないが、其代り随分肥厚してゐて、まるで特種の蛾(メンガタスズメやシモフリスズメの様な)の翅を誇張した如く、到底蝶とは思へない不思議なものになつてしまつた、とにかく餘程厚い板をもつてこれだけのものを刻みだしたので、牡丹も猫も輪郭から随分前方に出てゐる。

基股脚内の彫刻が輪郭からはみ出し始めたのは桃山時代からの様に心得てゐる。欄間でも厚みもちだしたのは此時代からである。欄間でも輪郭はさう厚くはない。内部の透彫等の方がずっと前へはみ出してゐる。基股にしてもさうで、兩脚はさう厚くする事はできない。して出来ない事はないが、不恰好なものにはならない。だからしない。そこで内部の彫刻に厚味をもたせるためには、輪郭だけを薄くする必要がある。そこで此様な體裁のものが、桃山以降に多いのであらう。夫がどうしてもできなくなると、日光東照宮五重塔初重基股の様に、輪郭だけ簡単なものをこしらへて料拱間に取付け、彫刻は全然別の木できざみ、輪郭と關係なしに別に其前方長押の上に置いたりするやうになつたのであらう。

長十一年、淺野幸長再興すといふ。入母屋造で千鳥破風のある珍らしい型式である。

此等と比べると時代は少し上るが、仙臺市八幡町の大崎八幡神社(慶長十二年落成したものだ)が、うだが、拜殿正面階段の擬寶珠銘の終りに「慶長十五年己巳八月十五日」と刻してある。拜殿内部、正面西端の基股内にも、同様右端に左向きの猫が後肢を立てて居り、左方に牡丹と蝶がある。この場合多分猫は眼をさましてゐて、蝶を狙つてゐるのだらう。此は既に拙著に記した通りである(1101)。

牡丹も蝶もなく、猫だけなら、北野神社(京都市所在) 拜殿



の色彩からみると、どうしてもキアゲハの如くであるが、表面前翅基部の中室には、三本の黒線があるから、確かにキアゲハではない。さうして其上腹部が肥大してゐるから、アゲハの雌であらう。但し後翅の「尾」は大變に誇張して描かれて居り、先端がおそろしく膨れて球形をなしてゐる。これは繪空事として看過しておいてよからう。近江大津園城寺(三井寺)塔頭圓満院殿の杉戸にも同じく牡丹に猫がかいてあるが、蝶はない。さうして猫は「虎猫」で丸くなつてゐる。

(昭和九年九月九日)

妙心寺塔頭天球院の本堂、廣椽の右の隅のところに、折れ曲りに隅柱の左右、二枚づつの引違板戸がたててある。其板戸の廣椽に面した方には、満開の白牡丹と蝶と猫とが描いてある。ここに掲げたのは蝶も猫も居る部分だが、あとは牡丹ばかりである。圖には必要な部分だけをだしたから、物足りないかも知れぬが、繪全體として論ずるのではないので、今の目的にはこれで充分である。天球院の襖や杉戸の繪は全部狩野山樂筆といふ寺傳になつてゐる。私には繪は判らないからさういふ寺傳に敬意を表しておく。扱て此繪の猫は珍らしく型を破つて右を向いてゐる。眼は殆んど閉ぢてゐる如くで、極僅か開き、尾は四天王寺及天満神社流に、こちら側に持つて來て曲線を描き、先を少しはねてゐる。だから尾の描法は桃山式といつてよからう。

然るに此場合には、面積が廣いせいゝか蝶が二つ飛んでゐる。上のは少し剥落してゐてはつきり判らないが、モンシロテらしい。下のは横向きで大型で、これは正にアゲハテである。翅の裏面

南側の墓股にある。どうも見た所猫らしくない顔をしてゐるが(二〇三)、これはやはり猫ださうで、只一疋珍らしく右を向き、尾は十本に分れてゐる。九尾の狐といふのはよく聞くが、十尾の猫といふのは餘りきいた事がない様である。

墓股でなくてもよければ、慶長年間の建築なる吉野水分神社——ヨシノミクマリジンジャとよむので、ミクマリが訛つてミコモリとなり、ミがとれてコモリとなつたらしい。其所在地は奈良縣吉野郡吉野村大字子守。ここで安産の守護をだす。人丸神社のヒトマルを二つに分けてヒトマルと考へ、火伏せのお守を出すのとよく似てゐるやうである——本殿の手挾のうち、丁度鳳蝶のゐるらしい部分が壊れて了つたので、蝶の有無は判然しないが、猫に牡丹が透彫にしてある(一九四)。これなどは面積が廣いだけに、其複雑な曲線からできてゐる場所を、牡丹の花で巧に充填してゐる。

牡丹に猫は、時に蝶を添えて、建築附屬の建具、例へば椽の杉戸の繪等に用ひられてゐる。京都市では花園妙心寺塔頭天球院ので、猫はやはり殆んど寝てゐるし、此には少しく誇張してはゐるが、割合に忠實に寫生したと思はれるアゲハテフと、モンシロテフの様な粉蝶科の小型のものゝ兩方が添えてゐる。近江大津の園城寺(三井)圓滿院の杉戸には、蝶は居ないが牡丹と猫とが描いてゐる。

扱て以上列擧した猫は、桃山以降の彫刻及び繪畫を合せて九種ある。即ち

- 一。北野神社拜殿南側墓股
- 二。吉野水分神社本殿手挾

三。大崎八幡神社拜殿正面見返西間墓股

四。四天王寺經藏内部正面見返墓股

五。四天王寺太子堂北門墓股

六。和歌山市和歌浦町天滿神社本殿右側面墓股

七。日光東照宮東側廻廊墓股

八。妙心寺塔頭天球院杉戸

九。園城寺塔頭圓滿院杉戸

であるが、このうち北野神社は猫だけだから姑く措くとするも、夫でも八種ある。然らばこの種の彫刻は桃山時代に始まつたか、或はもう少し前からあつたか。

昭和十六年八月五日、例の勇猛團一騎當千の勇士のお供をして、飛驒の高山に近き安國寺經藏を見學した時、輪藏欄間の透彫に於いて牡丹に猫を見た。あの輪藏の欄間は、内外二重になつて居り、雙方共割合に精巧な透彫が入れてある。昭和五年の夏初めて行つた時は、何分高い所であつたのと、下から梯子をかついで上る事ができなかったで、内方の欄間は下からはつきり見えなかつた。何かほつてあつたにはあつたが、大した事はあるまい位に、申譯のない話だが、いい加減にしておいた。だから此時迄知らずにすましてゐたのである。

然るに昨夏はそんな生やさしい見學ではなかつた。老いたりとも雖も大兵肥滿、臂力壯者を凌ぎ勇氣儕輩を抜んずる團長が、

勵聲一番自ら大梯子を肩にして、石段數十級を上る事平地に行くが如くであつたから、衆これに勵まされ、中小の梯子乃至脚達の類を持ちて其後に續き、梯子をかけたなり脚達へ登つたり、遂に輪藏の内外二種の欄間を充分近くでゆつくり觀る事ができた。さうしたら内側欄間の一に、大部分は牡丹唐草(室町式をよ
く現はした)でうめてあつたが、向て右の端に小さい猫、牡丹の花に比べると随分小さい猫が蹲踞してゐた。蝶はゐないが、これで見ると牡丹と猫とだけなら室町時代からあつたことが判つた。而も其猫たるや、既記の通り欄間の向つて右に、左を向いてゐたのである。桃山時代に右端に左向きの猫が多いのは、こんなところから來てゐるのかも知れない。初めがさうだから、別段眞似をするのではないが、つかういふ癖になつたのかも知れない。さうすると北野神社拜殿のが、果して猫とすれば右向きなのは餘程珍らしく、日光の眠り猫が、これも型を破つて墓股の中央に坐り込み、正面を向いて香箱をつくり、狸を極め込んでゐるところは正に類例がなく、この點に於いて盛名を馳せてゐると見れば成程と領かれる。

*

*

*

*

*

牡丹に唐獅子が建築彫刻に現はれたのは鎌倉時代から考へてゐる。同じ哺乳類の猫科に屬してゐるのだし、日本に居ない獅子よりは猫の方が餘程親しみがある上に、筆の先で少しやさしく直せば獅子は直に猫になる。竹に虎も或は鎌倉にあつたかも知れぬが、今實例の記憶がない。若しあつたとすれば——餓虎投身の圖が古くからあるのだから、勿論あつたとは思ふが——尙更猫になる可能性がある。だから猫が此時代にあつていい筈である。とにかく室町には既記の通り原始的平面的圖案的の「牡丹に猫」があり、夫に蝶を添えて桃山に相當用ひられ、其儘江戸時代に移行し、四天王寺の猫は餘り天下に知られず、日光の眠り猫獨り天下を風靡し、他のものはあつてもなくても同じで、十把一棊で下積にされて了つた。運不運は

何も「牡丹と猫」には限らない。うまく當れば今月今日迄無名の士でも一躍名をあげ父母をあらはす事ができるが、一つ間違へば一生橡の下の力持に終らねばならない。

建築彫刻に現はれたる「松・竹・梅」(二〇七—二三三)

松と竹と梅と三つ揃へ、ショウ チク・バイといつてめでたいと考へたのはいつ頃の事か。文献を見たらば書いてあるかも知れないが、私は一つも讀んでゐないから、その方面から何もいふ資格はない。私は單に建築彫刻としては、凡そいつ時分からかう三つ揃へて用ひてあるかを、實物から述べてみようと思ふのである。勿論これだけといふのでない事は斷る筈もない。これから先探したらばいくつ出て來るか判らない。出揃ふ迄待つてゐては、いつになるか見當がつかないから、一先づ手許にあるだけの材料で書いてみるのである。

今更改めて述べる筈もない事だが、昔は建築に殆んど彫刻を用ひなかつた。先づ飛鳥時代にありては、彫刻といつても懸魚位のもので、其懸魚も謂はゆる忍冬文様からできた、もみぢの葉か天狗の羽團扇の様なものであつたらしいと推定し得る位のところ。今日法隆寺中門や金堂の勾欄腰組の料拱間に用ひられてゐる如き、曲線形の割束があつたとすれば、二本の木片を中央で合せたのでなくて、一木から刻み出されてゐる以上、あれも彫刻といつて言へぬ事もあるまい。併し虹梁は問題にしないでよからう。

奈良時代——夫も恐らく後期——に入つてから、漸く板葦股ができたと考へても大過あるまい。其板葦股の最も形による

しい曲線の締のあるのでも、先づ唐招提寺金堂内陣大虹梁上の程度であつたと思はれる。さうすると當代は先づ懸魚——天狗の羽團扇の先のまるくなつた形、大體今の猪目懸魚——と板葦股といふ事になる。

平安になると後期に二木片を中央で合せたもの、即ち原始的くりぬき裝飾葦股ができたので、懸魚と二種の葦股位のものであつたらしく、欄間等はまだ菱格子程度であつたらしい。然るに鎌倉時代に入つてから、今天竺様・唐様等と呼んでゐる新様式の建築が輸入され、「木鼻」とか「大瓶束」とかいふものもついで來た。又「手挾」と稱する特殊のものが木鼻から考案され、板葦股も新形式のものができ、くりぬき裝飾は長足の進歩をして、脚内に單に圖案的平面的の彫刻を入れたのみならず、左右相稱ならざる繪畫的彫刻を充填する様になつて來た。其輪郭の曲線及び圖案的左右相稱の葦股脚内彫刻は、實に當代に於いて完好の域に達したのである。又其末期に近づいてから、これも亦頗る厚さに乏しく扁平で圖案的ではあるが、欄間が長足の進歩をした。後世豪華な欄間の發達した元は當代にあつたといつて差支ないのである(近江大津市新羅善神堂)。室町は鎌倉の繼承で、無論發達進歩はしたが、さう大した事は大體に於いてなかつた。

木鼻や欄間等の彫刻が立體的で豪華なものになつて來たのは、何といつても桃山からである。殊に欄間は大したものゝに發展した。手挾・木鼻等は透彫や籠彫ができ、葦股脚内の彫刻は輪郭からはみ出し、大瓶束は結綿に意匠を凝し、何れも兩面形を異にする等、多種多様であつた。又棧唐戸の框や棧に飾金具を打ち、綿板には異なつた彫刻を其面に取つけ、あらゆる空隙には彫刻を充填せしむる等の方法をとつて、出來得る限り裝飾をした。従て彫刻の種類も非常に數に上つたのである。かくの如く彫刻は發達したが、同時に建築其物よりも彫刻を重んずる傾向を生じた事は否めない。さうして其儘江戸時代に入り、建築は愈木割法に抑はれた結果、遂に本末を誤つた様なものが相當に行はれる様になつた。

我國に於ける建築と彫刻との關係は大略右に記した様な都合であるが、さてここで松・竹・梅なるものが、いつ頃になつたら建築彫刻として出現する可能性があるかを考へてみるに、平安時代には到底あり得なかつたことは容易に推察できるであらう。だから勿論夫以前にはありようがない。次に鎌倉時代はどうかといふと、神社建築に於いて貫と長押との間又は脇障子の上部なる欄間に當る所に、扁平な透彫を入れたから、當時はそれ等に相當の實例があつたかも知れない。現に元應二年の建築たる宇太水分神社（奈良縣宇陀郡宇太村）東脇殿東脇障子上、竹の節欄間の透彫は枝振の面白い梅樹と見られる。これは寧ろ室町風のものと思はれるが、それは元應頃だから當然であるとして、既に梅がある以上、この様な所に松や竹も入れたのがあつたらうと思はれる。

室町には確かに三種とも遺物がある。山口市に古熊神社といふ立派な村社がある。社殿の内に素木の宮殿があり、其裏板の墨書に「天文十六年四月大吉日造立之」とあるので、社殿も其頃のものといふ見當をつけ得るが、三間社流造で、其向拜の三つの基股脚内の彫刻が次の通りになつてゐる。即ち

左（向つて右） 松に鳳 鳳（五二）
 中 央 梅に大内菱（六二）
 右（向つて左） 竹に鳳 鳳（七二）

で何れも頗る美事な作である。三つが別別で、一つ輪郭内にはないが、夫も一木から刻みだし、さうして薄いには薄いけれども、其薄いものを厚く見せようと努力してゐる、即ち奥行をもたせるべく苦心をしてゐるところがよく判る。中でも竹が

最も其點に於いて成功してゐると思ふ（七二）。桃山時代になつて、前代迄扁平であつた彫刻が急劇に厚みをもつたのではなく、この時分から既に少しづつさうなりかけてゐることが知れるのである。

尤も斯様に三つ揃はないで二つ又は一つのは、當代には大して珍らしくない様である。例へば

松に竹 兵庫縣加東郡小野町淨谷 八幡神社本殿（三三）
 梅に竹 滋賀縣愛知郡秦川村松尾寺 大行社本殿（三三八）
 竹 兵庫縣加東郡小野町淨谷 八幡神社本殿（三三三）

に於いて少しく仔細に觀察すると、「松に竹」は中央に松が生えて左右に枝を出して適當に葉をつけ、五葉を有する竹が左右に一本づつ同じ様な位置に同じ様にある。松の葉も、枝振りからいへば適當なところにあるが、よく見ると中央と左右に一塊づつ、其間に一塊づつになつてゐる。だから脚内に中央に垂直線を下ろすと、左右相稱で、其然らざるは松樹の枝だけである。だから此を以て鎌倉時代原始型直系のもの、換言すれば圖案的から繪畫的に移り變らんとしてゐる好例となし得るのである。

然るに「梅に竹」となると、前例よりは遙に進歩してることがよく判る。竹は左下から右上に、梅は左下から少し上に向ひ中央の下方へ生えてゐる。だから大體に於いて竹と梅との幹は平行してゐて、竹には竹の葉がつき、梅には梅の花が咲いてゐるのは當然だが、扱て其梅の花たるや、下方に三輪、中央に二輪、上方に三輪が殆んど等間隔に並び、これを縦に見ると左からも右からも二・一・二・一・二となつてゐる。だから此も亦中央へ垂線を下ろすと、梅花は左右相稱に配置され、細い竹と葉に對して太い梅の幹が、一は上に他は下に相對してゐる。そこいらあたりの空隙を充たしてゐる蕾等は大きくして間

題ではない。

最後に「竹」であるが、これは實に面白い圖案的文様の好例となすことができるのである。これは珍らしいことには中央へ垂直に竹を生やしたから、垂線を引いて見ないでも、これが立派な役目を果してゐる。其幹から左右に出てゐる葉は、洵に心地のいい程の純粹なる相稱で、餘り整然過るから、何かの模様になつてゐるのではないかと思つて氣をつけて見たが、別段さうらしくもない。ほんとうに珍種であり、佐牙神社(京都府綾喜郡三山本殿北殿正面の「檜の葉にみみづく」の墓股と好一對であらう。

竹に虎

滋賀縣甲賀郡油日村油日
油日神社本殿(三三〇)

竹に瑞鳥即ち鳳凰を添えたのは古熊神社にあつたが、ここには鳥でなしに獸を添えた一例を掲げておく。「牡丹に唐獅子」が既に鎌倉時代に建築の一部に用ひられてゐるのだから、室町時代に「竹に虎」の存在は當然だが、油日神社(明應二年上棟)のは竹林が背景になり、虎は其前を全速でかけてゐて、凡そ實際に遠い想像彫刻である。三三五・三三六のは勿論、竹に虎といへば、殆んど常に虎は竹林の前に全身を現はしてゐる。豹を虎の雌と思つてゐた様な時代で致し方がないかも知れぬが、どうも矛盾した表現である。輪郭の曲線の力も締りも彫刻の面白さも、遺憾ながら前三例に及ばないが、これは純粹の繪畫的彫刻である。

鎌倉時代の末頃から稀にあつた様だが、桃山時代になると両面で彫刻を異にした墓股が大に流行しだした。ここに示した一例は、元大阪府南河内郡古市町の「譽田八幡宮御陵前」に文祿年間建立の拜殿のもので、其「墨書銘によりて明か」であるといふ。此は今S氏の所有に歸してゐるが、この寫眞は先年私がS氏の宅で寫したものが、其時控えておいた銘文が、

どこへ入ったか判らないので、同氏へ問合はしたところ、其返事に確かな年號が載けなかつたので、不充分ながら桃山盛期のものとしておく。これは圖でみる様に

表。竹に虎

裏。松

で、輪郭はもう大分拙い(三三四に似てある點に注意)。虎のゐる竹林には、親竹ばかりでなく筍が生えてゐる。總じて新しい時代の竹藪には筍が添えてある。松も葉を圓錐體に整理し、全部をこちら向きか後ろ向きにしたのはどうも面白いとは思へない竝べ方である。

大きな墓股の一面に「竹に虎」、他面に「竹に梅」を彫つた頗る傑作が京都花園妙心寺の勅使門(慶長十五年)にある(三三九)。背の高い墓股の兩脚内、大きな面積を竹と梅とでうづめてあるが、さすが慶長のもので厚みがあり、足も踏み込めない様な竹の密生した藪に見える。

京都府久世郡久津川村大字久世に久世神社がある。室町時代の建築だが、其向拜墓股はどうも時代が少し後れるのであるまいか。以前から桃山と推定し、今でもさう考へてゐる(三三九)。文様は

表。松・竹、鶴・龜

裏。梅

で、表の方は山か岩の上、中央より少し右に二羽の鶴、左下に瑞龜、上の方に松、右下隅に竹をほり、裏は花と蕾とをつけ、た梅で一ぱいになつてゐる。多分蓬萊の圖であらう。桃山頃の和鏡の裏によくこの様な模様が現はしてある。社殿と同時で

建築彫刻に現はれたる「松・竹・梅」

室町かも知れないが、私は桃山の例としてここに圖示しておく。

名古屋市に性高院といふ寺がある。以前は有名な七つ寺の近所であったが、去年行ったら大分遠方へ移轉したさうで、同じ市内でも交通機關が市電だけになつて了つたので、行くのを見合はせざるを得なかつたが、此寺の門の墓股は一面は板墓股の如くで中央を圓形に凹ませ、浪に兔を彫り、一面はくりぬき墓股の如く兩脚を残して内を平たくし、そこへ

松・竹・鶴・龜(龜は例により謂はゆる義龜)

を刻み出してある。右上鶴、左下龜、左上松、右下竹で、これで裏に梅があつたら前例と同じである。

滋賀縣甲賀郡雲井村大字宮町に飯道神社といふのがある。これは町の中ではなく、大分山に登らなければならぬ。社傳によると和銅年間創立、長享元年再建といふが、全體としては桃山時代に屬すと認められてゐる。其社殿正面中の間の墓股は、形も割合によろしく、脚内には梅・松・竹と揃つて入れてある。竹は少ないが、少なくとも一つ墓股内に一つ方に三つあるのは稀有の例といへる(二一八)。久世神社向拜の夫の様に、一つ墓股でも表と裏とで三つ揃ふのを除くと、この飯道神社は片面に理想通り「松・竹・梅」が揃つてゐるので、現在私が知つてゐる唯一例である。

梅に鶯

大阪四天王寺經藏内部東側料拱間の墓股内には「梅に鶯」の彫刻が入れてある。これも牡丹に蝶に猫のと同時に見つけたのである。元和の建築だから江戸だが、様式から言へば江戸に下げるのは當らず、正に桃山に入れておくべきである。此墓股は特に傑作だから、**ニ一〇**から**ニ一三**迄、特別待遇で三枚出しておいたが、當初は極彩色で、さぞ美しかったらう。この複雑な梅に鶯が、輪郭諸共一木から刻み出してあるのだから、其手際は頗るよろしいといへるのである。

梅の太い幹は輪郭内左から1・4、右から3・4位のところで下から生え、早春らしく花と蕾のみ枝一面につけてゐるが、葉は一枚もない。其適當な枝の上に小鳥が二羽とまつてゐる。同じ方に向けてゐるが、一は下で後ろを向き、一は上で前方に向ひ嘴を開いてゐる。この嘴を開いてゐるのは轉つてゐるところを現はしたので、其證據には尾をあげてゐる、とある先生が教えてくださった。さう言はれてみると如何にもさうらしい。この彫刻が輪郭と一木から刻まれてゐるので、補強のため枝の先は殆んど總て輪郭の内側につけてある。

梅に鶯の様な構圖は桃山時代から始まつたか、或は前代には既にあつたか。多分室町末には無論あつた筈である。高知縣長岡郡一宮村に國幣中社土佐神社がある。社殿は室町末だが、其墓股の内には桃山の程洗練されてはゐないが、同じ考へものがあり、人物等も刻してある。私はこのうちに梅に鶯式のがあつたと思つて、手許にある此神社の墓股の寫眞を調べたが、つい見出すことができなかったので確たる證據は提供し得ぬが、こんな圖案は室町からとみる方がよささうである。

梅に竹だか何だかはつきり判明しないが、先づ添物といつた調子に何か小さい植物をおき、梅の枝に確かに鶯と思はれる小鳥をとまらしたのは、日光東照廻廊墓股にある。**ニ一三**は其一例で例の眠り猫に向て右手、東側廻廊と南側廻廊と交叉してゐるところの虹梁の上に北を向いてゐるから、眠り猫を見る序に右を向けばいやでも見える。これも割合に簡單でよくできてゐる。

「松に竹」の面白い室町時代の實例は既に**ニ一一**に圖示し、其解説も前に記したが、夫を少しばかり拙くした様なのが信州の田舎、上伊那郡伊那村の伊那森神社殿の向拜の墓股にある(**二一四**)。輪郭はどうも義理にも褒められないが、内容は少し面白い。竹を右に松を左に入れたが、竹は垂直なる幹に對し葉が相稱的に生じてゐる事は、簡單と複雑との差こそあれ、考

へは全く同じである。松は葉が階段式に配置されてゐる。「さんがいまつ」といふのがある様で、名はきいてゐるが、どの様な形をしてゐるか知らないけれども、ことによつたらこんなのを言ふのではないだらうか。此建築はいつ頃か知らぬが、料拱其他からみると江戸末期と考へられるもの。こんな時代迄梅なしのがあつたのである。正月諸官省や特權階級の人達が、門前に松に竹を添えてたてるが梅は添えてない。あの堂堂たる松竹の飾りに輪郭をつけると、差向き偉大なる葦股ができて面白いと、いつも興味深く眺めてゐたが、今年是非常時とあつて餘り見られなかつた様である。

江戸時代の「竹」ばかりの一例は弘前市(青森縣)最勝院五重塔初重四天柱上料拱間にある。竹林に雪が降つたところらしく、緑色の竹葉に白雪が積つてゐて可なり美しく見える。又輪郭のなくなつた墮落したもので「竹に虎」のを二二七に示しておいた。岩か山か何かあり、竹が生えてゐるが、大變に大きな背の高い竹と見え、上の方は雲中に突入してゐる。其竹林のこちら側に猙獰なる獅子と虎とのあひの子の様な獸がゐて、太い竹幹に噛みついてゐる。實におそろしい顔をしてゐるから百獸の王らしくも思へるが、古來竹に獅子といふのはつい見た事も聞いた事もないから、これはやはり虎であらう。先づ雛形本そっくりと言ひ度い様なものである。

* * * * *

以下記す實例は葦股ではない。多くは桃山時代以降の欄間の透彫であるが、やはり「松竹梅」が三つ揃つたものを拾ひ上げて見たのである。

第一例。瑞巖寺本堂欄間(二〇七)

瑞巖寺は日本三景の一と稱せられてゐる松島にある。天長五年慈覺大師の草創と寺傳にあるが、今の本堂は慶長九年から

同十四年にかけて落成したもの。桁行十三間、梁間八間と九間の大建築で、正面の廣椽に面した方に多くの美しい彫刻を入れた大欄間が入れてあるうちの一つに、中央に雄鶏、上から右方へかけて松、左方に梅、さうして竹はほんの申譯に極少しあるから、よく見ないと判らない位である。

第二例。二條城東大手門彫刻(二〇八)。

東大手門は一間一戸四脚門で、前後に唐破風がある堂堂たる建築であるが、其正面の控柱上の二重の虹梁間の彫刻の向つて右方、即ち東半分には中央に舞鶴をおき、其間隙に松竹梅と雲とを入れてあるが、他の場所には見出さぬ様である。序ながら其上方虹梁上の大瓶束左右には、牡丹に鳳蝶が二足飛ばしてある。これは兩側にあるが、牡丹の花には揚羽蝶等は來ないものだといふのに、これも亦いい加減な想像かも知れない。

第三例。二條城二之丸書院玄關脇の間窓(二〇九)。

玄關は東大手門を入ると直ぐ突き當りにある。即ち遠待の車寄せである。正面三間で中間が出入口、左右は白壁で上方に窓がある。これは窓といへば窓であるが、欄間といへば欄間ともいへて、どちらでも差支はないやうなもの。額椽の内側に細かい格子を入れ——かういふのを箴欄間あざらんまといふ——其中央に洲濱形の輪郭があり、其洲濱形の中には何か水鳥の様なものを中心し、松・竹・梅で充たしてある。但しこれは向つて右即ち東の方のだけで、西の方はさうではない。

第四例。二條城二之丸書院大廣間裏大廊下欄間(二一〇)。

大廣間の西側の廣椽を過ぎて、まっすぐに行くくと蘇鐵の間であるが、まっ直に行かず右へ曲ると大廣間の裏の廣椽になる。その取合はせのところに敷居鴨居があり、板戸が二枚たつてゐる。其上が竹の節欄間になつてゐるが、其欄間は中央に

ある竹の節で左右に分れ、左の方には小鳥が枝にとまつてゐるが、右の方には小鳥を飛ばしてゐるのが異なるだけで、兩方共美事な松・竹・梅が入れてある。其裏は兩方共同様にしてあり、鳥は居ない。だからこれは西側即ち圖示した方が正面であらう。はつきりしたよくだきた彫刻で申分はないが、強いていへば二一〇に於いては、左方に右を向いて止つた鳥がゐて左右相對してゐるが、二一一のは鳥が右の方に左を向いてゐるだけで、どうも少しく物足りないやうな氣がする。中央か或は少し左(松の幹の)に枝があるから、右を向けてそのあたりにとまらしたらどんなものか。

第五例。園城寺圓滿院宸殿廣椽欄間(二一一)。

此も中美しい作であるが、前例の方が私は好きである。左下のは私は竹と思ふのでここへ入れたが、若しこれが竹でないとするれば、止むを得ないから「梅・松」だけのものとしておく。

第六例。別格官幣社東照宮(日)本殿脇障子欄間(二一二)。

此は東側脇障子上の欄間であるが、其全面積の殆んど³/₄は梅で、僅に左の隅の¹/₄が竹。但しこの場合、他の多くの例の様に、申譯に竹葉が添えてあるのではなくて、堂堂たる竹藪をなしてゐる。脇障子には松に天人を透彫してあるが、天人は下の方にゐるので、上の方には松葉が一ぱいに彫つてある。だから欄間の梅・竹と合せて、丁度三つ揃うのである。

第七例。日光大猷院廟拜殿向拜彫刻(二一四)。

向拜柱上料栱間には蓋股を入れてあるが、承應二年の建築であるせむか桃山直系の優秀なる彫刻を以て其間を充填してある。夫が即ち「松・竹・梅」で、竹は例により左程多くはないが、二二二圖の様に竹だか何だか判らないといふ心配はなく、これなら誰人が見ても誤りはあるまい。

* * * * *

扱て以上記したところを通覽するに、「松・竹・梅」は欄間には七種(二一三を除く)あるが、蓋股となると一面に三つ揃つてゐるのは僅に一種(二一八)で、表裏合せて揃ふのが一種(二一九)で合せて二種だから、欄間に比べて甚だ少ない。勿論以上は漸く私が見たものだけだから、未見のもの即ち知らないものが幾つあるか判らない。現存してゐるのを全部調べ上げてでない、めつたな事は言へも書けもしないが、先づ大體に於いて今のところ次の様な結果になるのではあるまいか。

一。松・竹・梅は大凡室町時代に現れ、桃山江戸時代と漸く多くなつたが、三つ揃ふ場合は主なるものは「松」と「梅」で、「竹」はいつも副として僅かに添えてあつた。

二。此種の彫刻は欄間に比較的多く用ひられ、蓋股脚内の彫刻としては少なかつた様である。

三。「松・竹」の様に二種のみが新しい時代迄あるのを見ると、必ずしも三つ揃えなくともよかつたものの如くである。

其一種二種又は全部を衣裳の模様にしたたり刺繍に用ひたり、蒔繪にしたたり茶碗や皿にかいたり、そんな場所へは廣く用ひられたかも知れない。筆者は永正丁丑(十四)年の鑄造にかかる鐵製の眞形釜に、一方に「松」他方に「梅」を陽鑄せるもの、及び桃山時代(江戸初期と見た方がよきさうに思ふが)かも知れない朱漆塗の高坏で、其脚に三個所に相竝んで別別に松竹梅を透彫にした例を知つてゐる。この様なものを探したら相當に出て來るかも知れない。

* * * * *

筆者はある時、京都市の豊國神社へ參拜したが、恰も其時ある案内人が遊覽者を連れて來て、唐門の前で禮拜をした。此

唐門は伏見城の遺構ださうで、桃山時代の代表的建築の一であるが、其唐破風下なる虹梁臺股の間には、一面に「松・竹」の彫刻を以て充填し、梅はない。今の人の考では、三つが揃つてゐないと何となく物足りないと思ふのか、案内人は

松と竹とだけにして梅がほつてない。普通は三つ揃へて松竹梅といふのに何故梅をやめたかといふと、梅を若しほれば其梅は飛んで行つて了うかも知れないから、それでやめて松と竹とだけにしておいた。上から下がつてゐる鶴にしても眼が入れてないが、これも亦同様の理由からである。

と説明をした。下がつてゐる鶴といふのは、時代が時代だから、鶴のまるぼりを唐破風の輪極から下げてあるので、私は近くで見た事がないから、責任はもてぬが、最初は勿論彩色がしてあり、眼もはつきり下から見えた筈だが、古くなって色が剥落した爲、判らなくなつたので、いい加減なことをいつてゐるのである。眼のない鶴がどこにあるものか。夫は夫として梅を彫ると梅が飛んで行くといふのは、菅公の飛梅とごつちやにしてゐるのかも知れない。併し夫なら菅公を祀つた北野神社拜殿正面軒唐破風の内には「梅・松」だけ「竹」はない。而も兩方同じ位だから、とうにどこかへ飛んで行つて了ひ、なくなつたあとは随分目立つであらう。あの案内人が北野神社へ参拜して、正面軒唐破風内の彫刻を見たら、何と説明するか聞き度いものである。

*

*

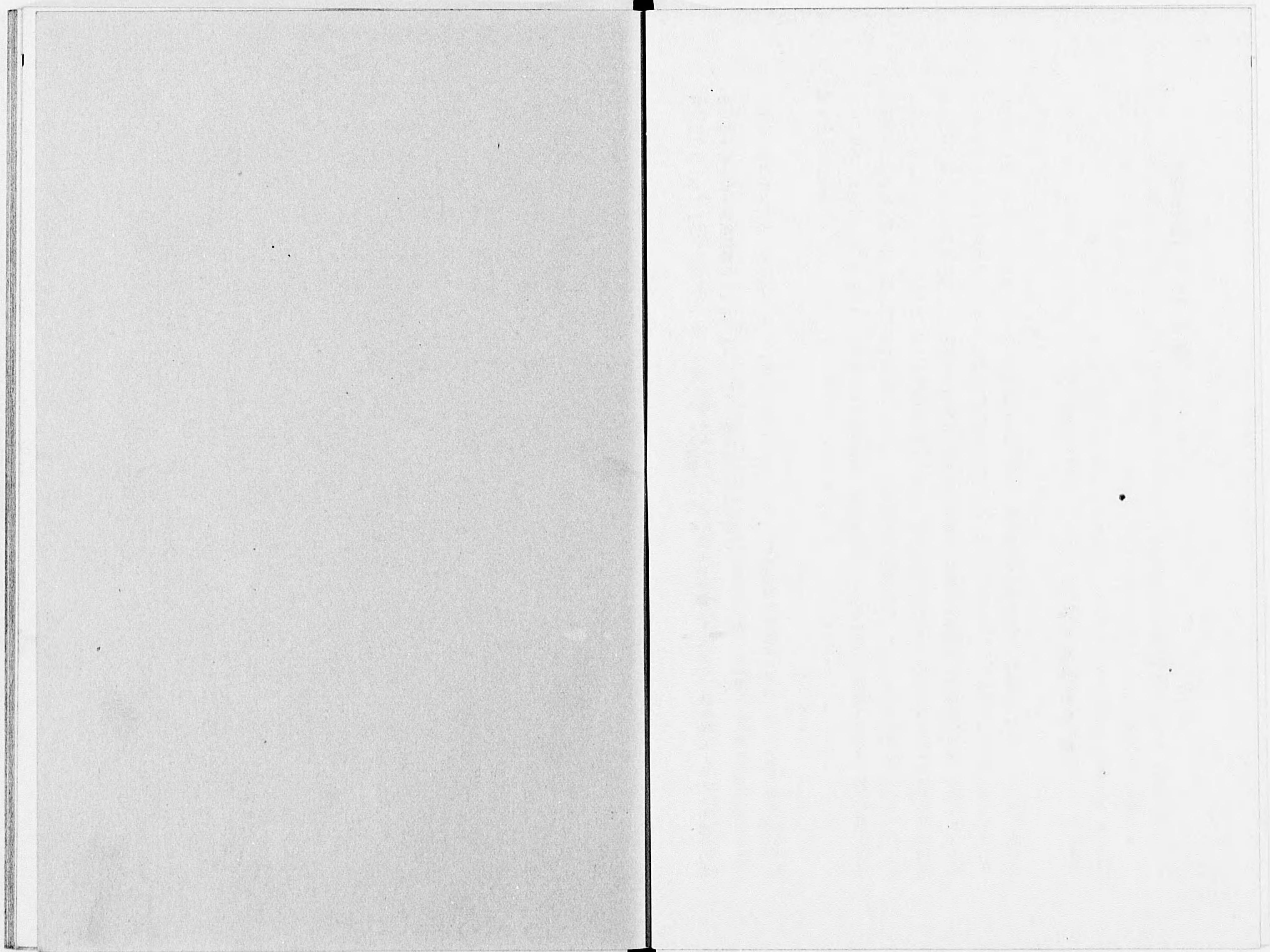
*

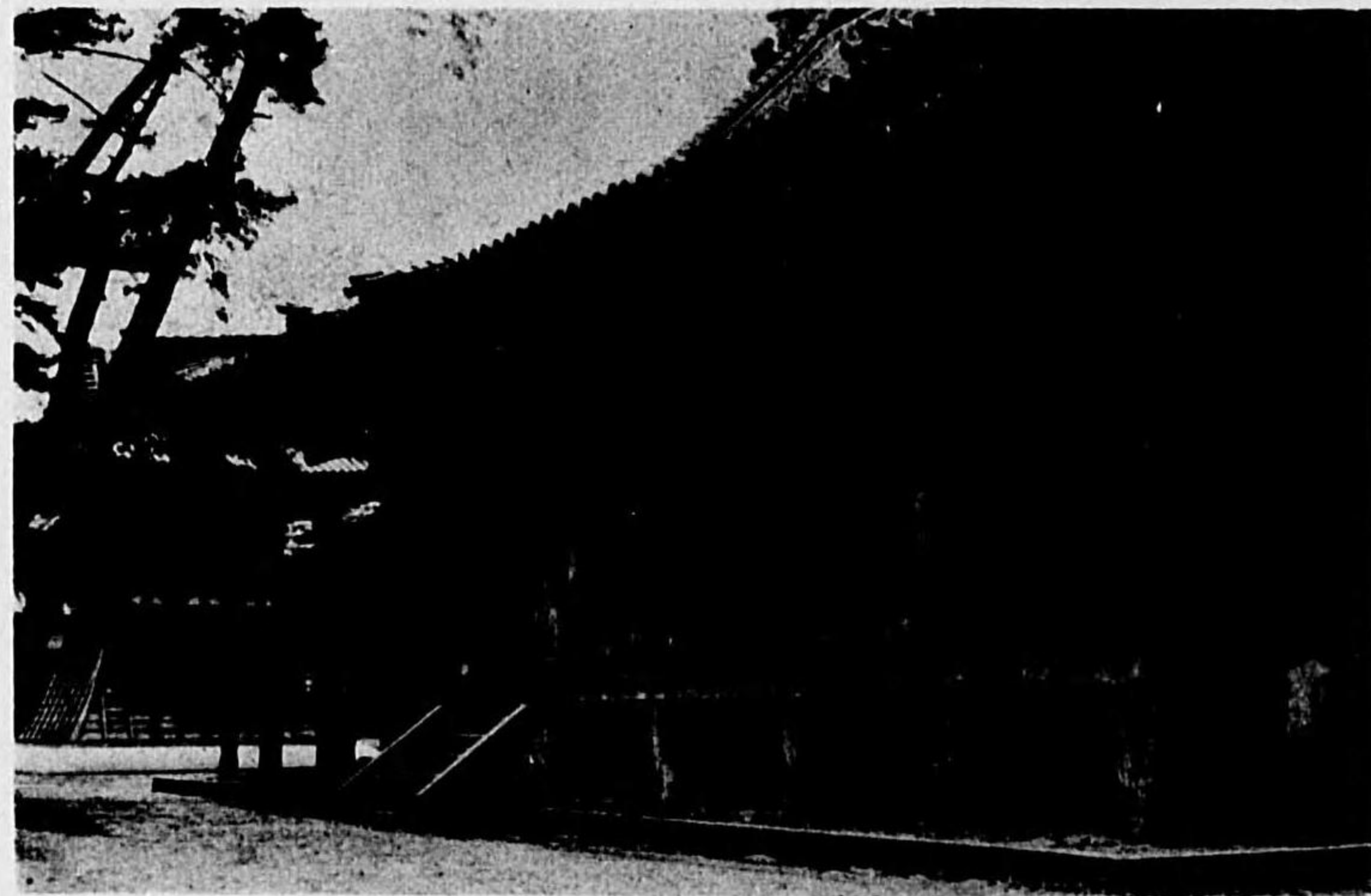
*

*

最後に石燈籠の火袋に、各別別だが三つ陽刻した例をあげておく。夫は京都市の枳殻邸の構内に様式上江戸時代(明治かも知れない)と認められる一基の石燈があるが、雪が降り積つた所を現はしたもので、寶珠にも笠にも基礎にも上端には積雪のある様に彫刻してある。變つた意匠ではあるが、大して感心はできない。其火袋は六角型で相對する二方は火口、あとの四方に一間

に一つづつ「松」・「竹」・「梅」と、夫から山(であつたと記憶するが、或は誤つてゐるかも知れない)と浮き彫にしてある。ただ珍らしいといふだけのもの。序ながら日光大猷院廟には可なり精巧な梅を火袋に刻したのである。

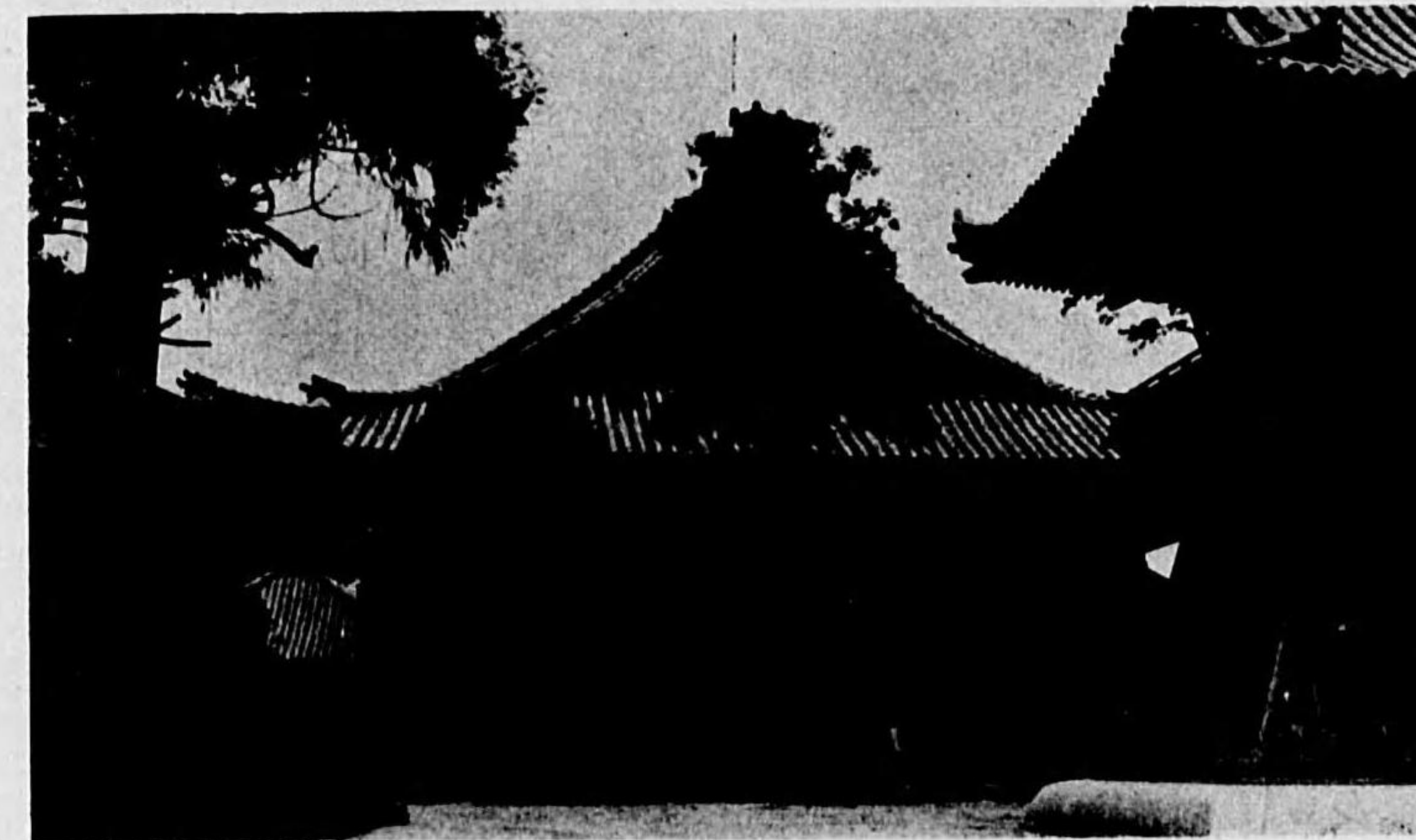




上, 三 鶴林寺本堂背面 (昭和十一年六月十二日)

下, 四 同 正面部分 (昭和十一年六月十一日)

上圖右方は本堂の西北隅で、左方二間は閑伽棚(小窓附)が出てゐて、残りの四間が棧唐戸になってゐるから、前頁の圖と比較してみると、側通四方共見えてゐることになる。下圖は軒の一部で、柱上二手先和檼の料拱と、其間の板葺股上唐様二つ料と、鎬のある棧唐戸及び礎座等を見せたのである。



上, 一 鶴林寺本堂正面 (昭和十一年六月十二日)

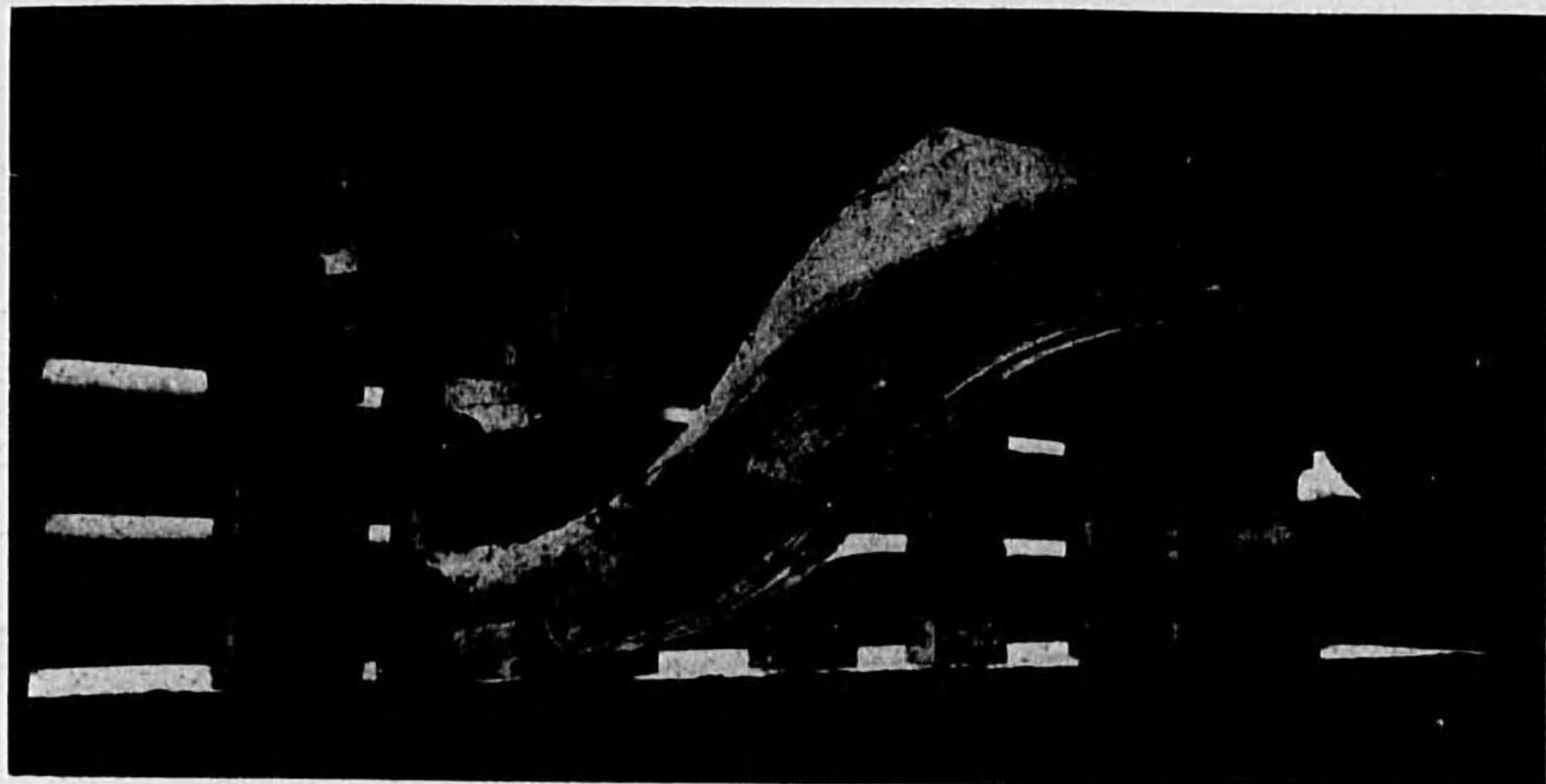
下, 二 同 側面 (昭和十一年六月十二日)

上圖の正面七間全部、下圖六間の内右端の一間を除いた五間は、總て兩開棧唐戸を吊込んである。側面は反對側も同様であり、背面は次頁上圖に明らかな様に、東端の二間と西端の一間とを除いては、何れも出入口であるから、此本堂は二十六間のうち、五間を除いた残り二十一間が扉で、窓のない建築である。柱上料拱間には、板葺股の上に唐様二つ料をのせたものを以て飾つてある。つまり河内の觀心寺本堂の様な謂はゆる折衷様の一層進歩したものとして有名である。上圖右方、下圖左方は太子堂、下圖右方は鐘樓の一部(共に修理後)。



上、五 鶴林寺本堂外陣正面繫海老虹梁 其一
下、六 同 其二

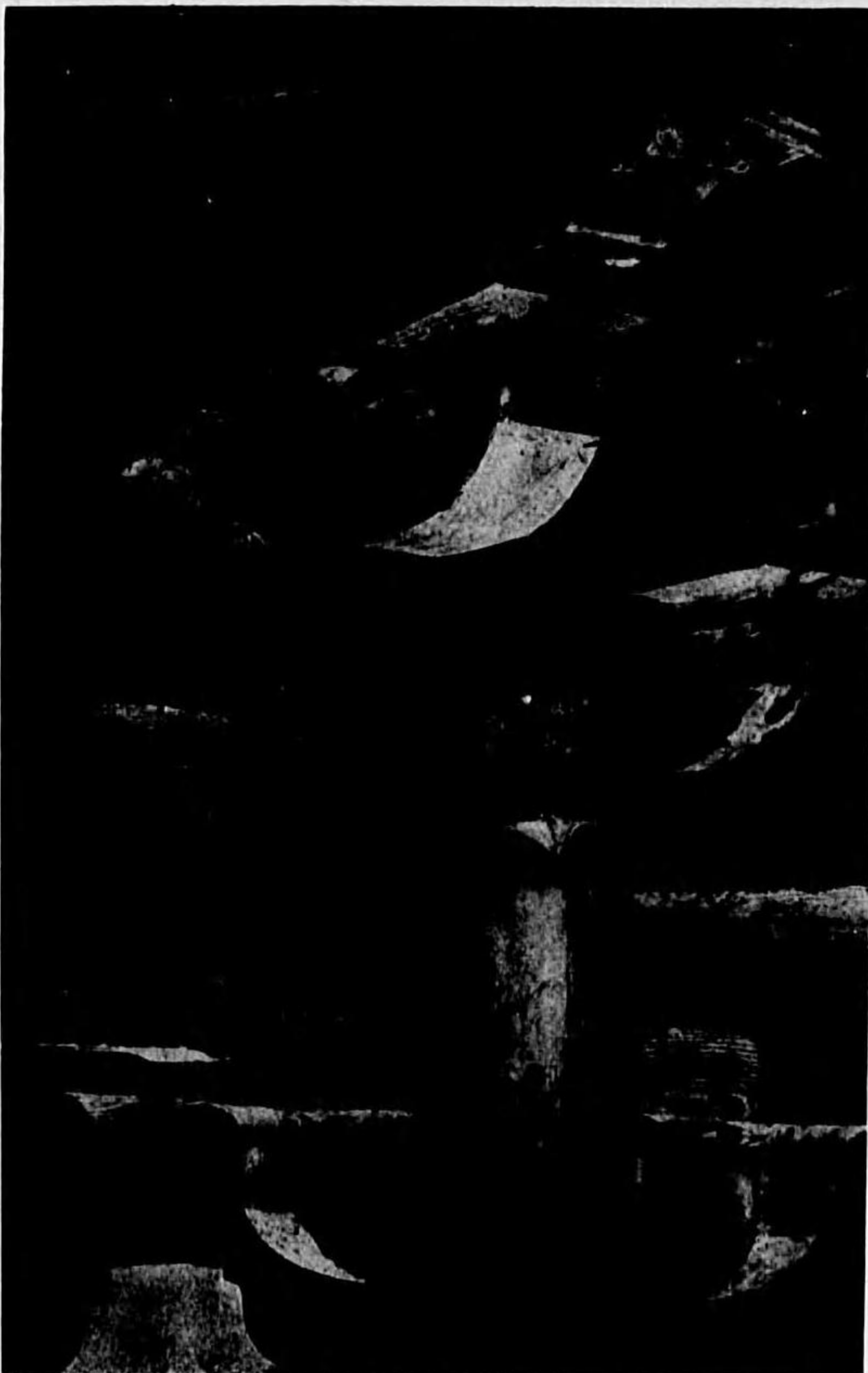
外陣入側の繫には總て海老虹梁を用ひてある。其一つ一つの形に就いては完好とは言へないが、斯様に多數揃つた所はさすがに美しい。この様な手法は唐様建築には殆どきまつて用ひられたのである。虹梁の上端に補強のために、つなぎを入れてるのは洵に行届いた注意である。併しこれはよくある手法で、敢てここに限られたやり方ではない。

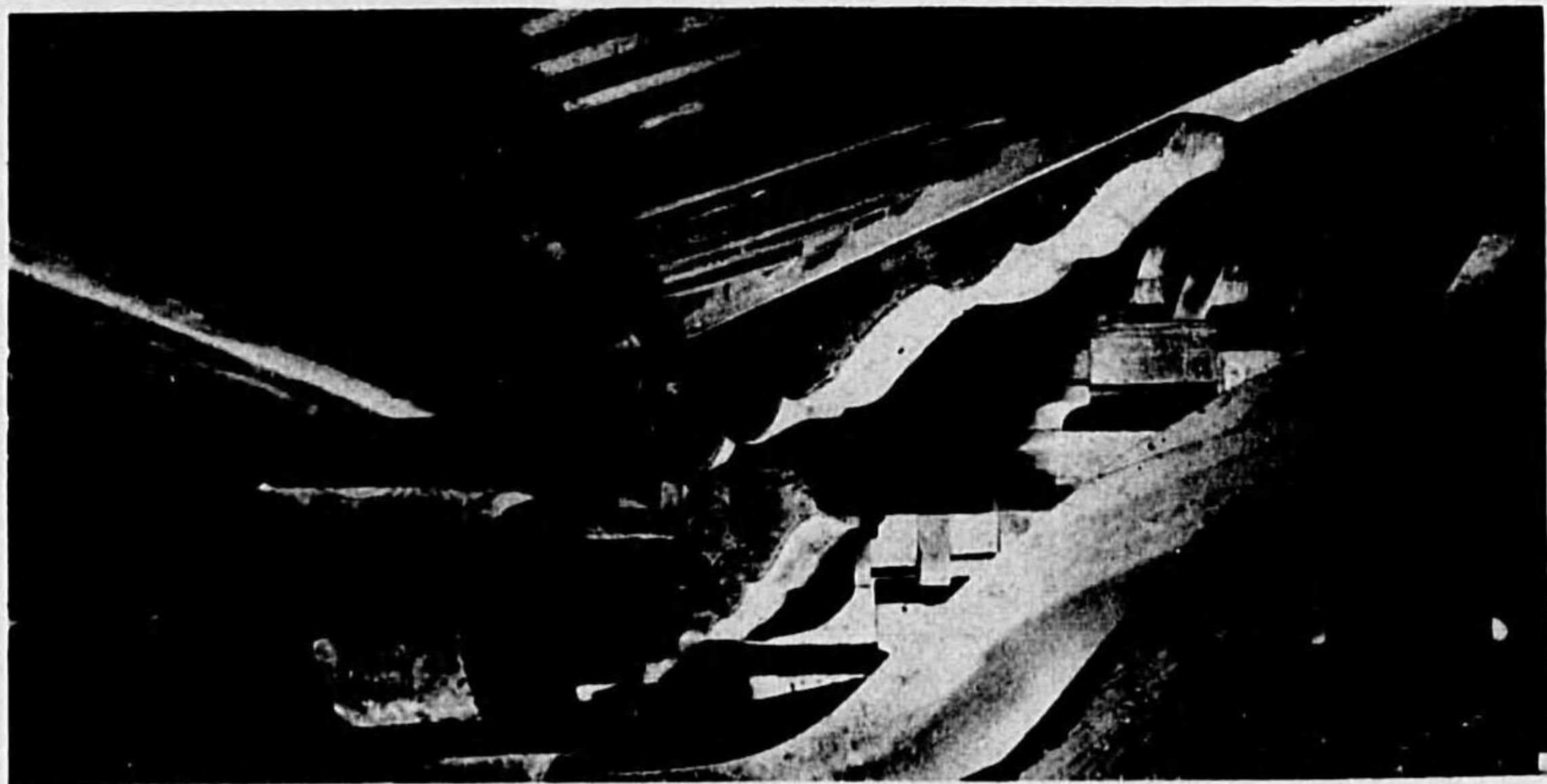


上、七 鶴林寺本堂外陣西側繫海老虹梁
下、八 同 入側境西南隅柱上料拱

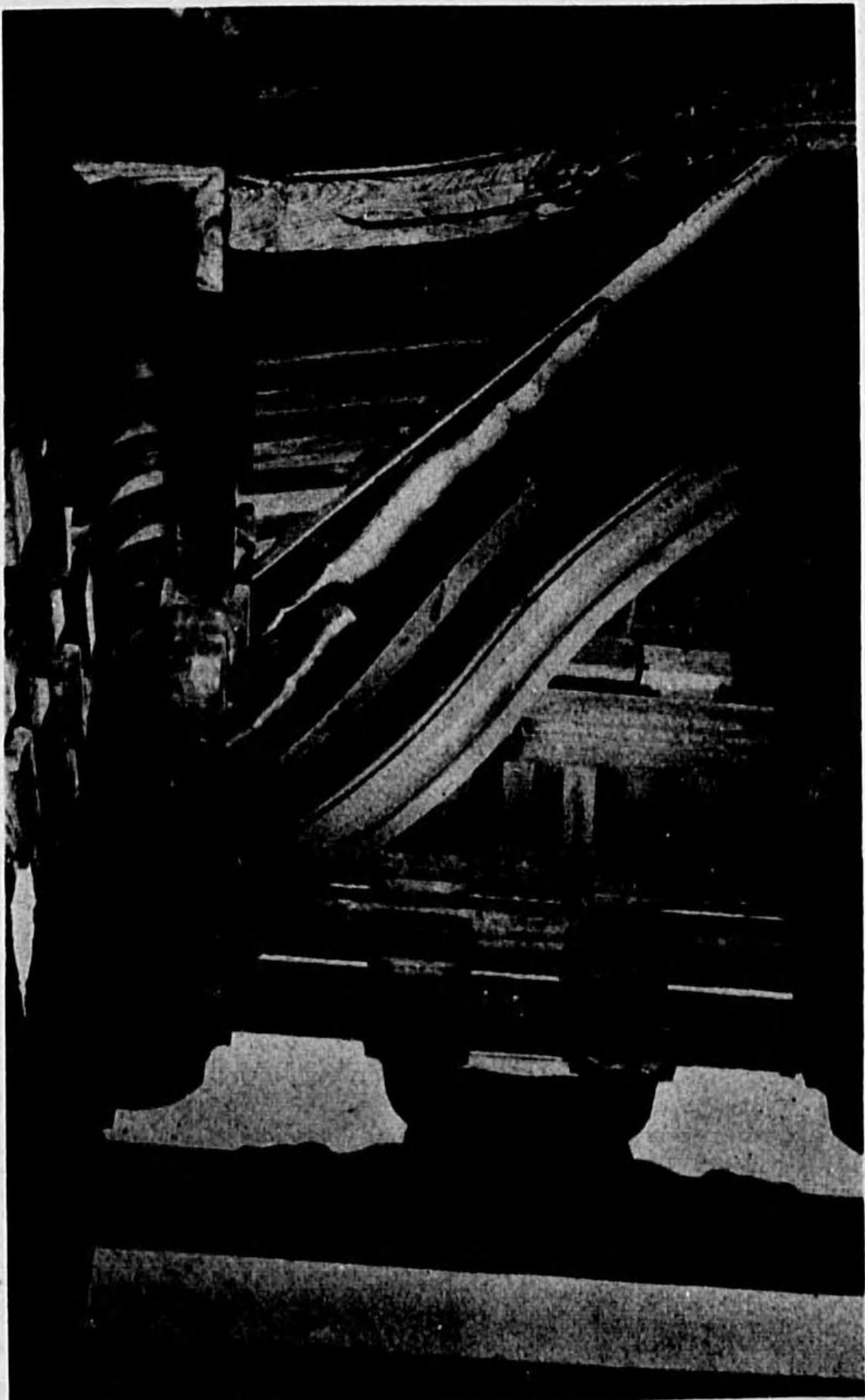
(昭和十四年十一月一日)
(昭和十四年十一月一日)

上圖は入側の繫海老虹梁が、側柱上の料拱と交叉してゐるところで、これは西側ではあるが、正面でも同じであるから、前頁の圖と併せて見るとよろしい。下圖は同じく外陣の入側境西南隅柱上の料拱を西南方から見た詳細圖で、二種の木鼻に注意せよ。

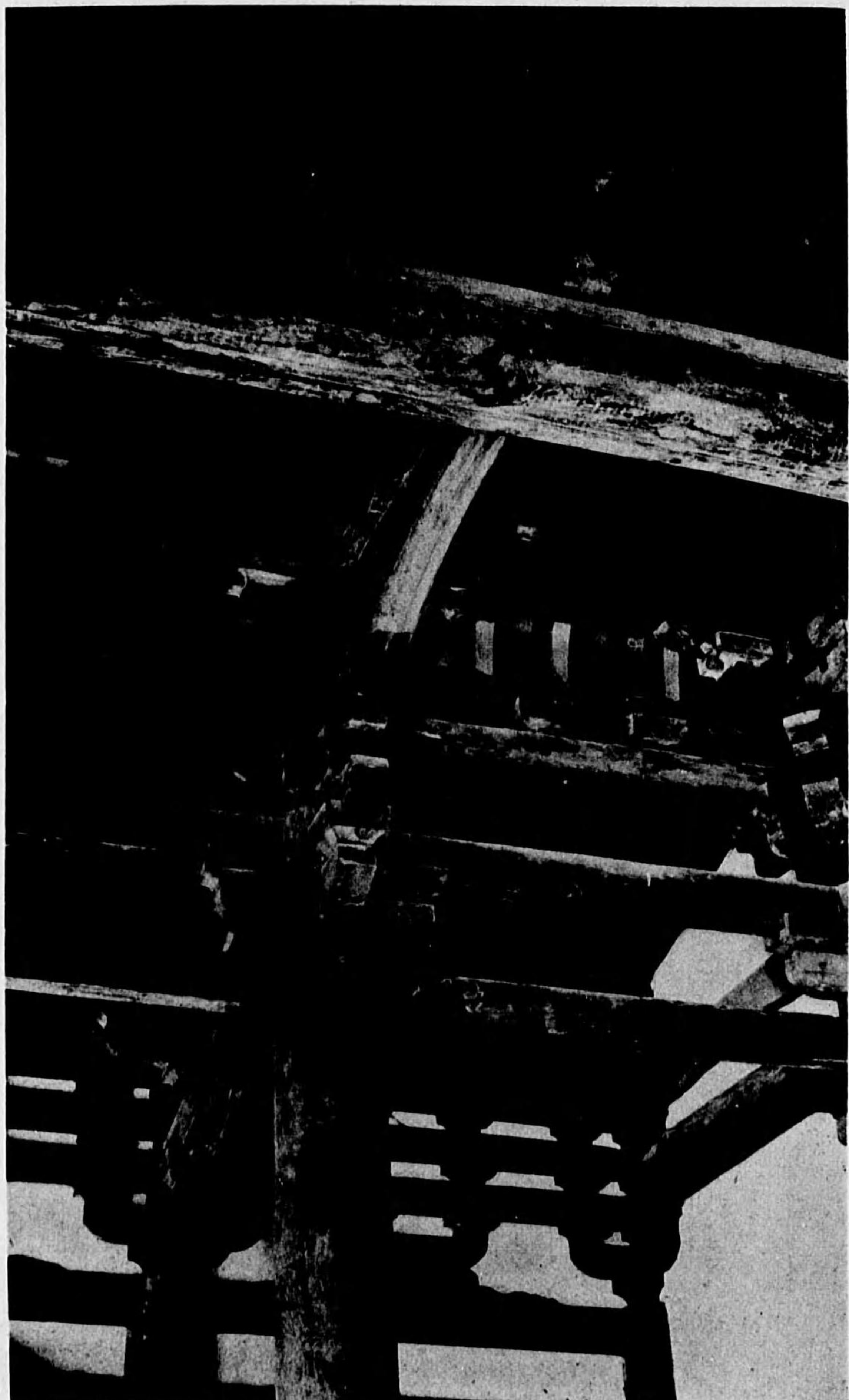




上、九 鶴林寺本堂外陣西南隅持送 其一
 下、一〇 同 其二
 外陣入側の兩隅には、隅行に少し長手の海老虹梁を使つてあるが、其上方化粧隅木の下に、裝飾と構造とを兼ねて持送りが添へてある。此持送りは板葦股を中央から二等分して逆置した如くで、鎌倉・室町頃の向拜に用ひてある手袂によくこの様な形をしたのがあつた。惜しい事に光線不十分で大概の人は氣がつかない。

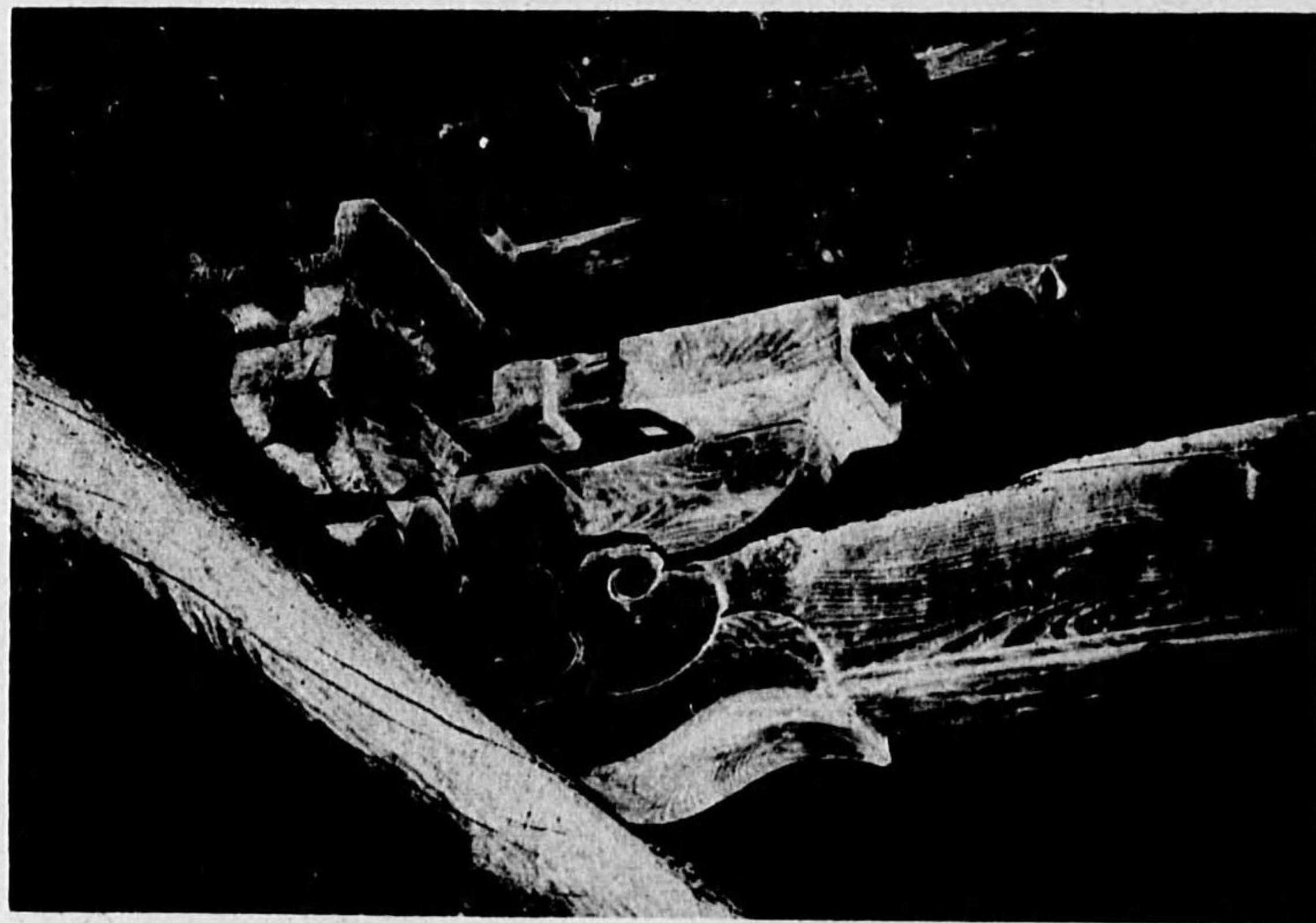
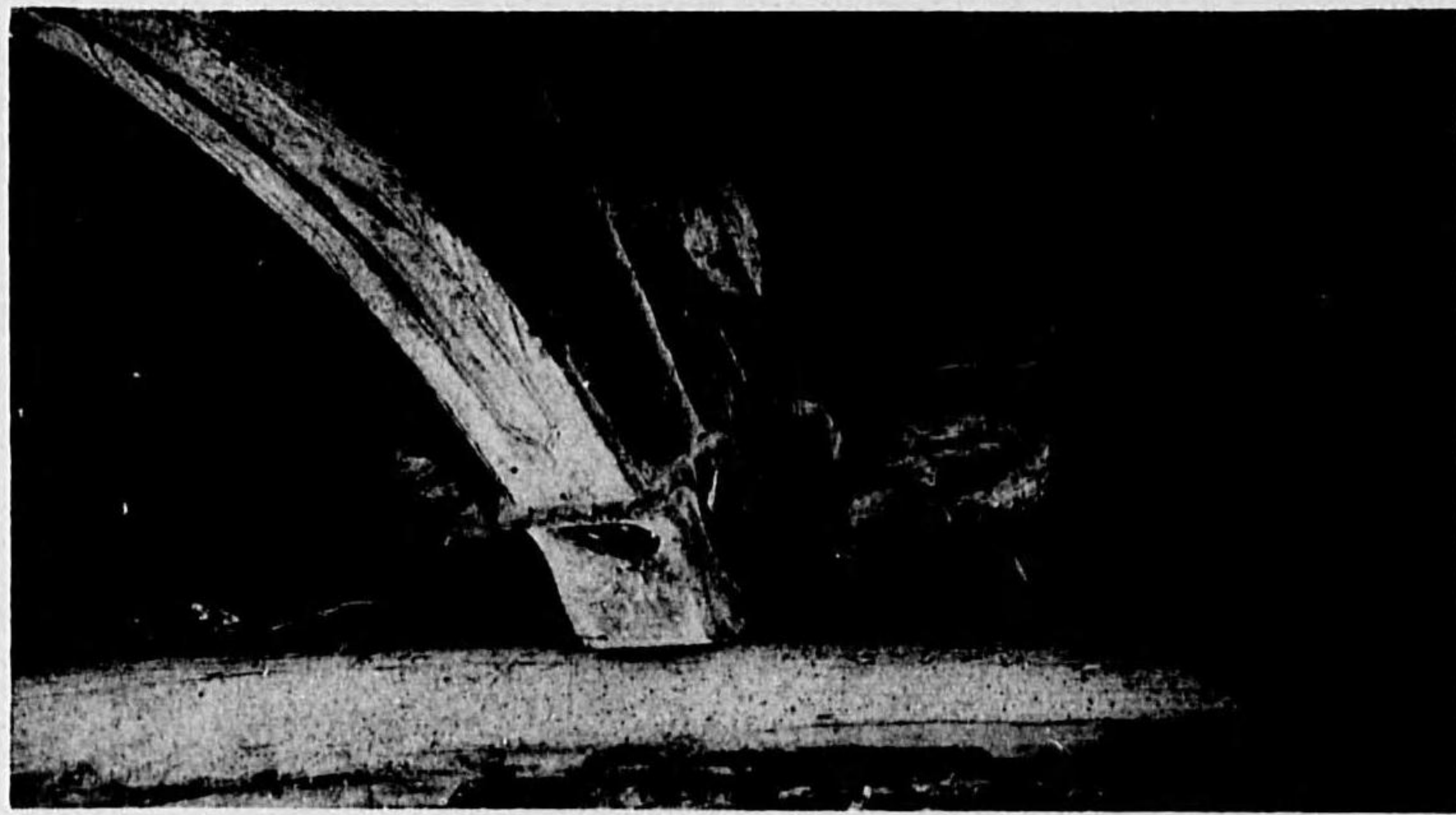


一一 鶴林寺本堂外陣西側天井廻



(昭和九年十二月二十一日)

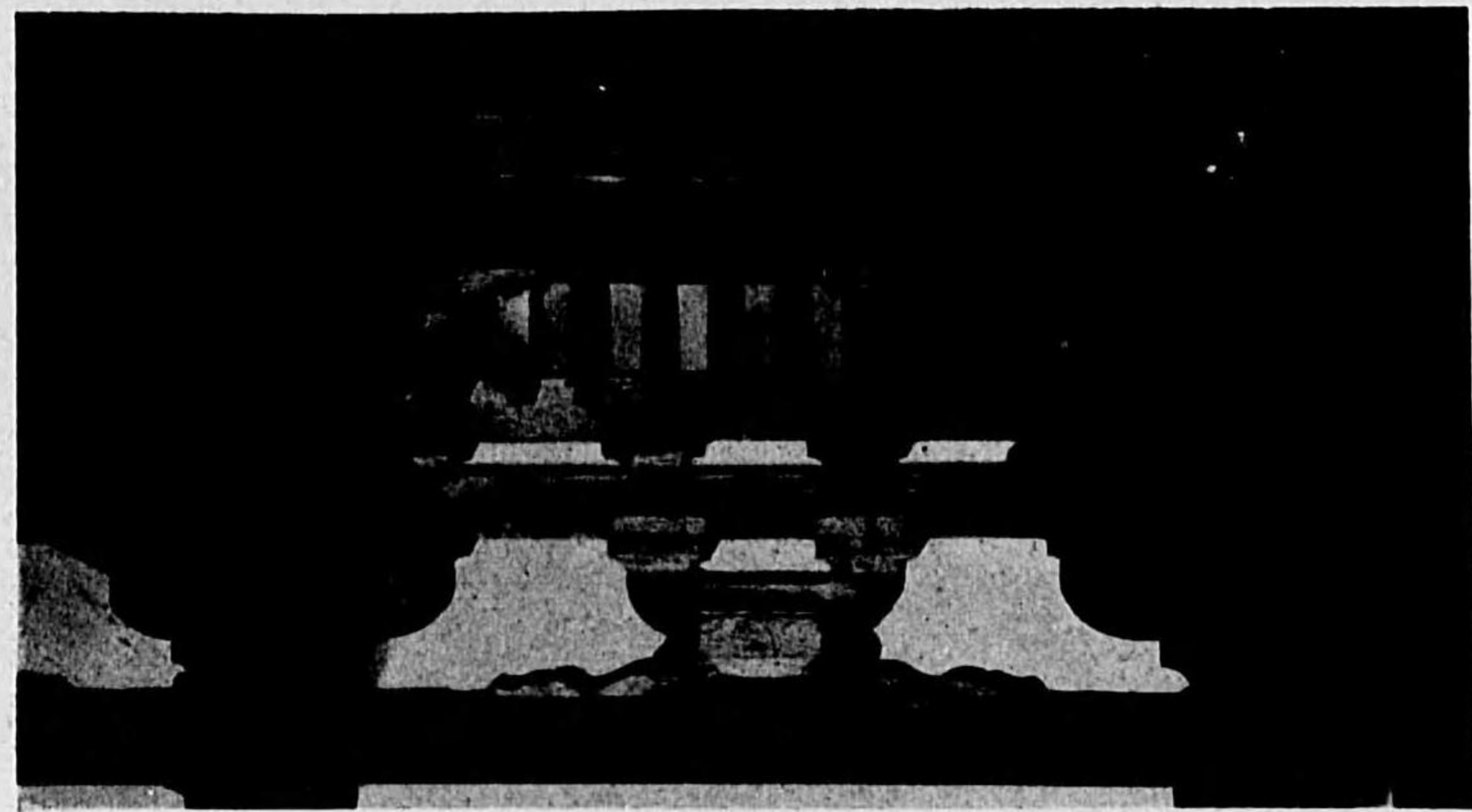
正面入側の部分には、五・六に見る様になつて海老虹梁が用ひてあるのだが、兩側面は少しく型式を異にしてゐる一種の虹梁で外陣兩端の大虹梁と連絡をとつてゐる。此圖は東南方から西側をみた全景である。



上、一四 鶴林寺本堂外陣側面繫虹梁と大虹梁との交叉 其一
 下、一五 同 其二

(兩圖共昭和十四年十一月一日)

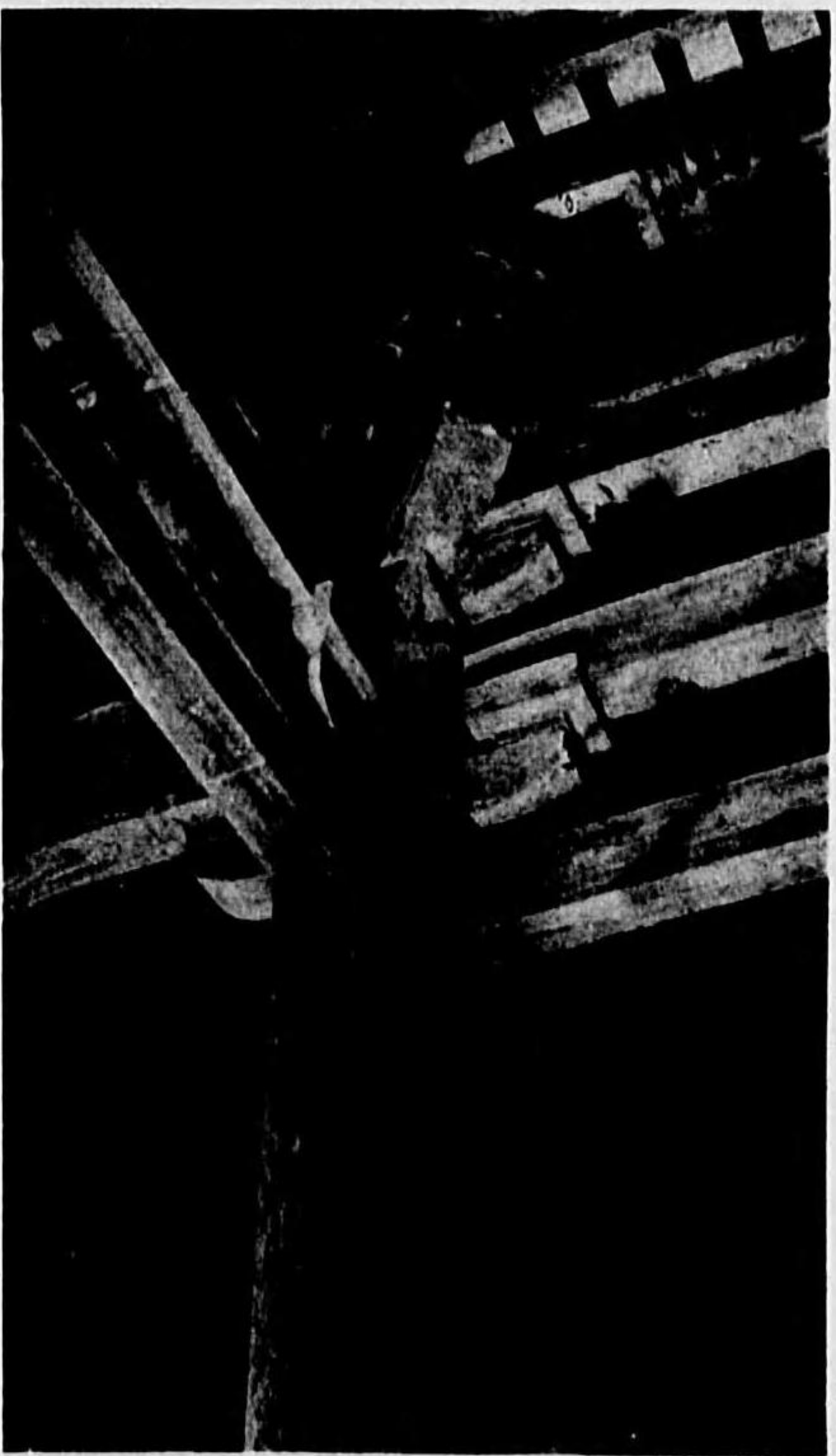
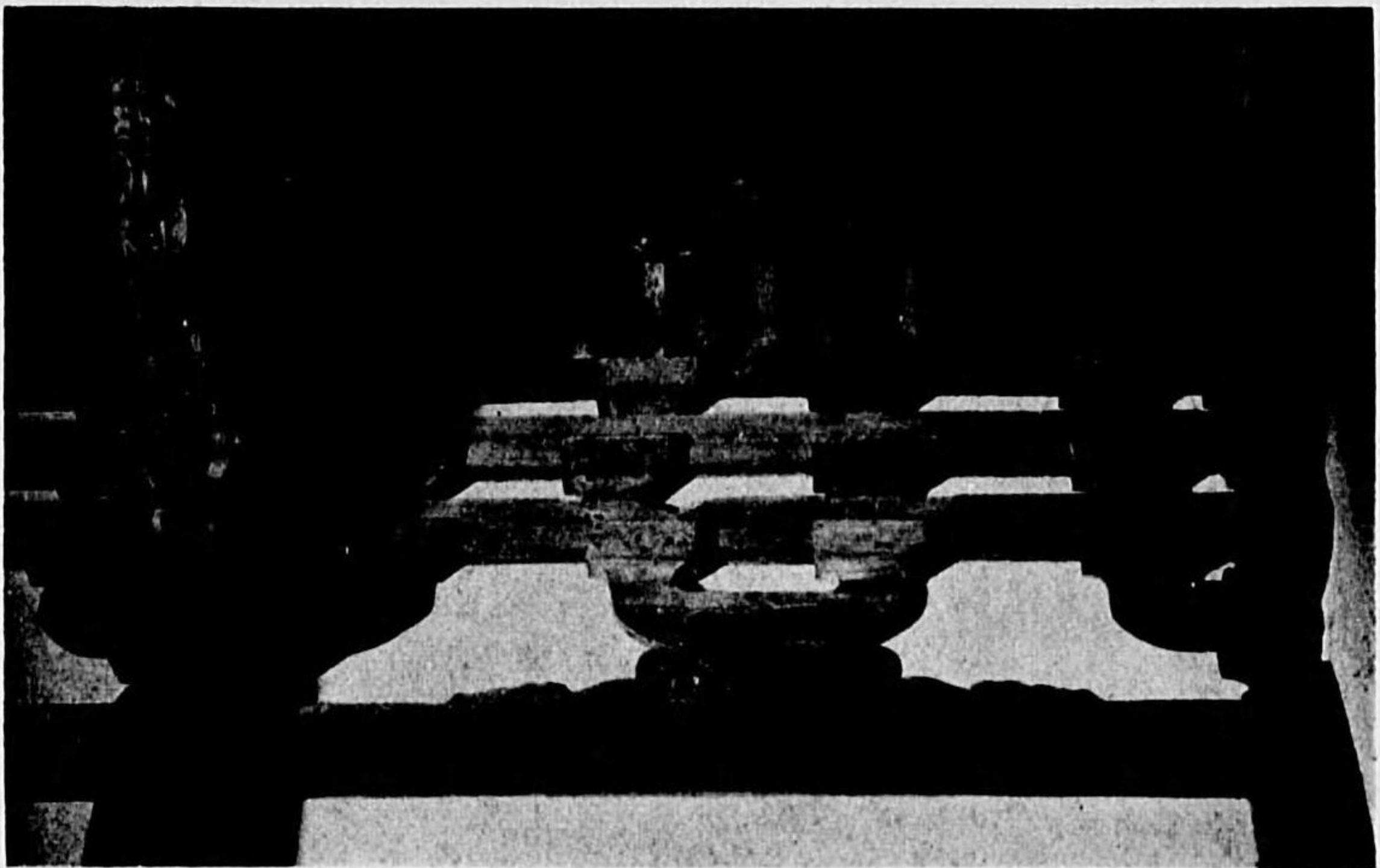
前頁の二圖と同じ虹梁と、外陣大虹梁との關係は、此等上下二圖で知る事ができるであらう。殊に一二左上は一五の中央と同じも部分と同じ方向から見た寫眞だから一層其關係が明瞭な筈である。この虹梁が大虹梁上の板葦股と交會する點に施した裝飾に注意せよ(二〇・二一參照)。



上、一二 鶴林寺本堂外陣側面繫虹梁 其一
 下、一三 同 其二

(昭和十四年十一月一日)
 (昭和十四年十一月一日)

(上圖葦股上の料上及び下圖木鼻上線形付の料上の物差は曲尺の約一尺(二呎)である。外陣繫虹梁のうち、東側の方の入側柱との關係を見せたもので、上下圖共南方からの寫眞である。虹梁袖切の部分を含んである料には、料尻に皿料の如く見ゆる線形があること、下圖に特に明らかであるが、これはいふ迄もなく天然様料である。此を上圖の板葦股上の唐様二つ料と比較する時は、下圖和様の肘木と共に三様式の混淆を看取できるであらう。

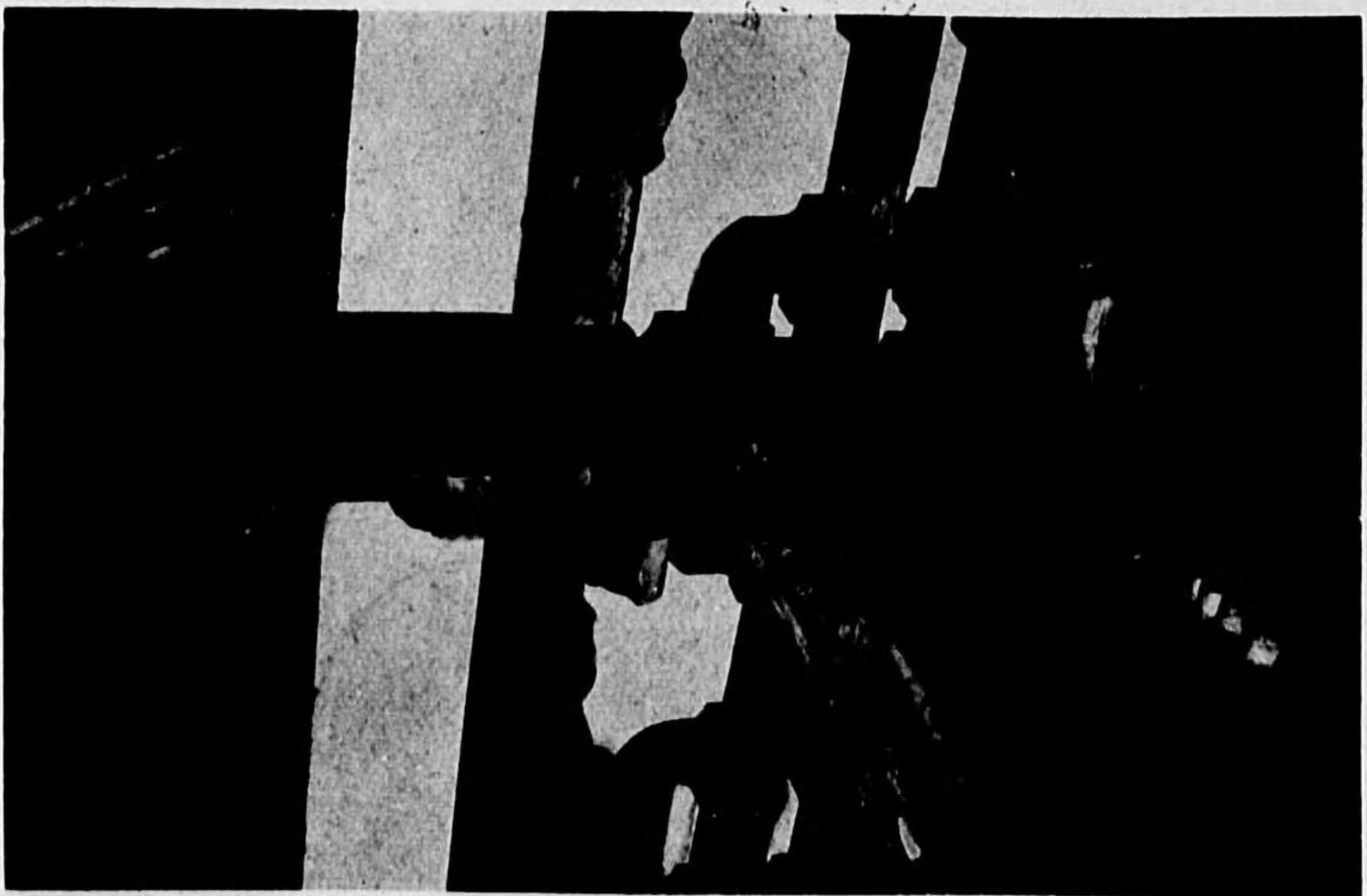


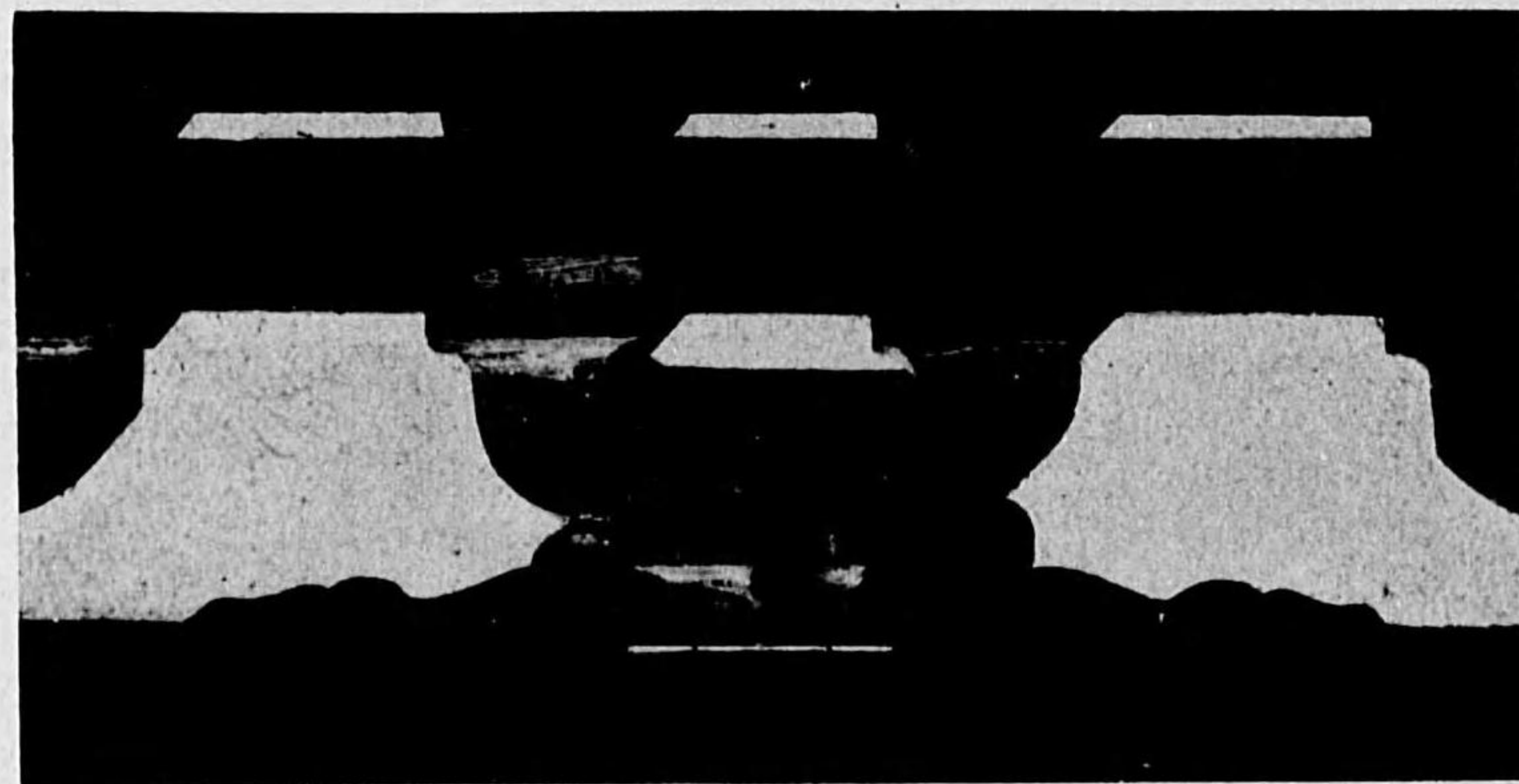
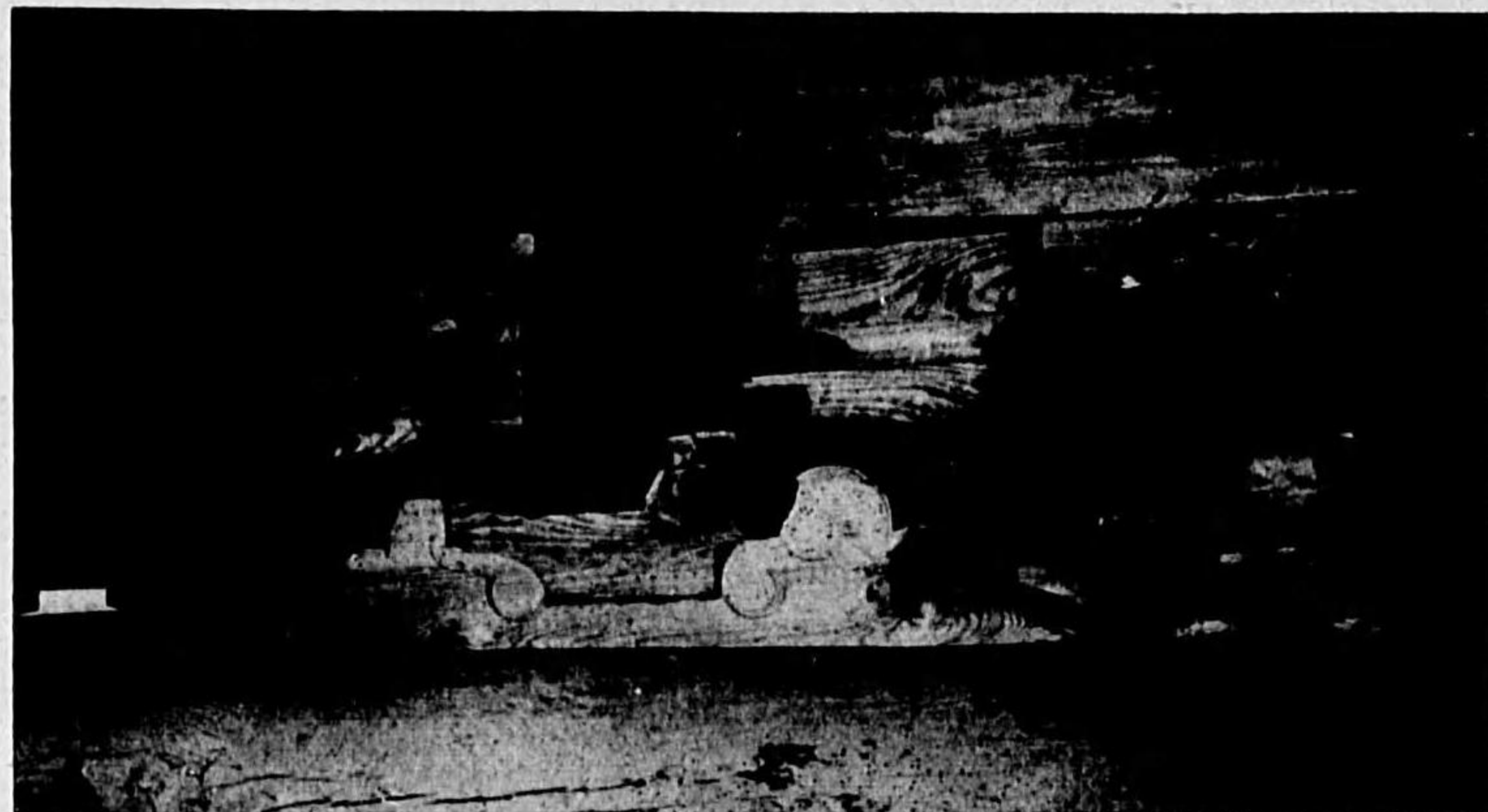
上、一六 鶴林寺本堂外陣西側北端
下、一七 同 入側境西南隅柱内側 (昭和九年十二月十七日)

既に記した通り、柱上和様二手先料拱の間、換言すれば柱間頭貫には、二三に大きく明瞭に示した様に、板葦股の上に唐様二つ料をのせたもので裝飾をしてあるが、面白いのは一六の場合に、其二つ料に含まれた通肘木上の向って左方の料が少し左方にずれてゐる事で、丁度通肘木にきずがあり、正位置におけないために自由に左へ動かしたものと思はれる。一七は外陣西南隅の入側柱上を内部から見たもの。入側も外陣も共に折上にしてあるのがよく判る。

右、一八 鶴林寺本堂内外陣境柱上 (昭和十四年十一月一日)
左、一九 同 外陣入側境柱上 (昭和十四年十一月一日)

右圖は外陣大虹梁と内外陣境の柱上との關係を、左圖は其同じ虹梁の入側柱との關係を示したもので、兩端共同様に取扱つてあるのが明らかであらう。大虹梁を受けてゐる料は、二三に見えてゐる天竺様系統のものを用ひて、柱上部の手法を一致させてゐる點も亦、注意すべきである。





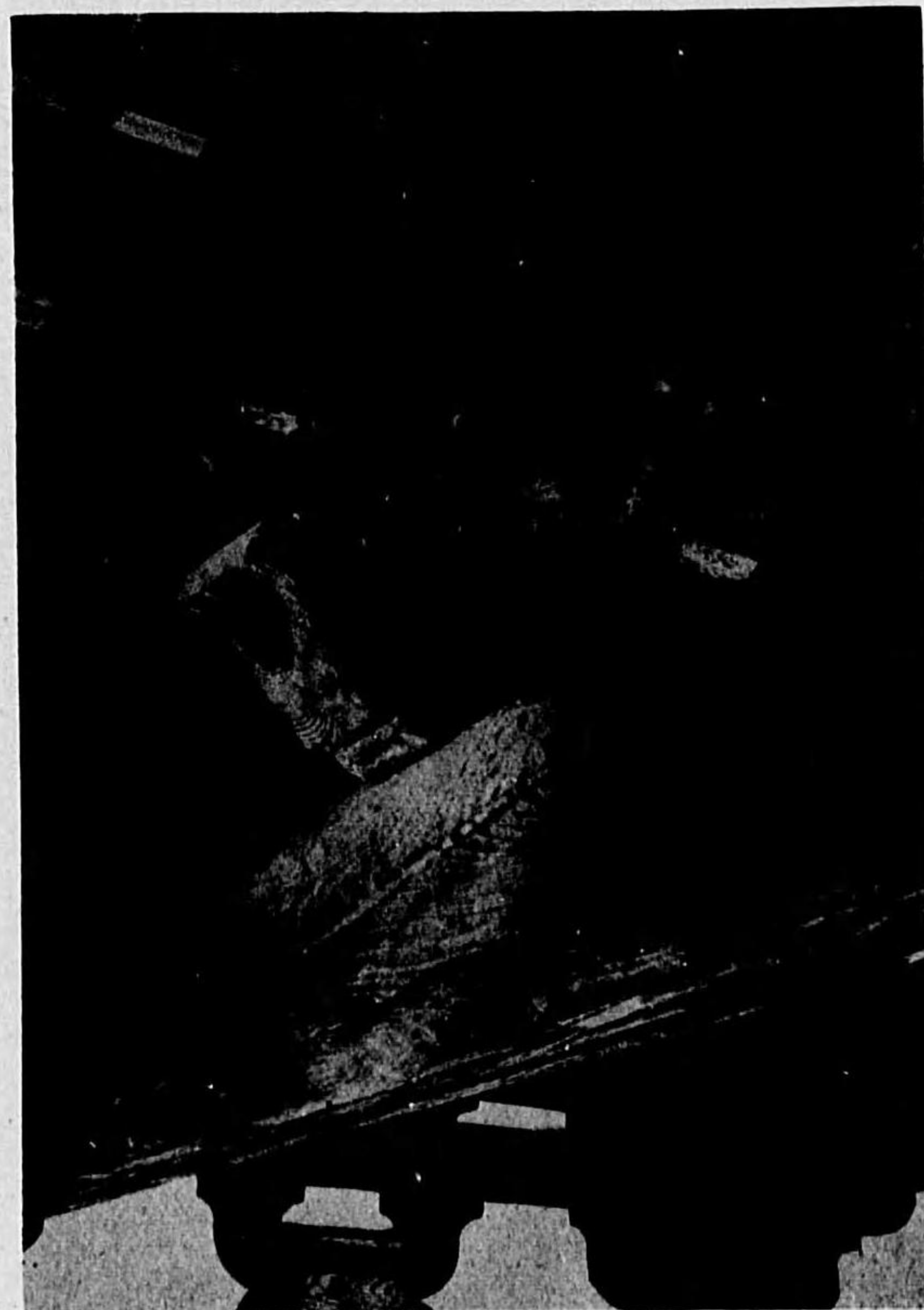
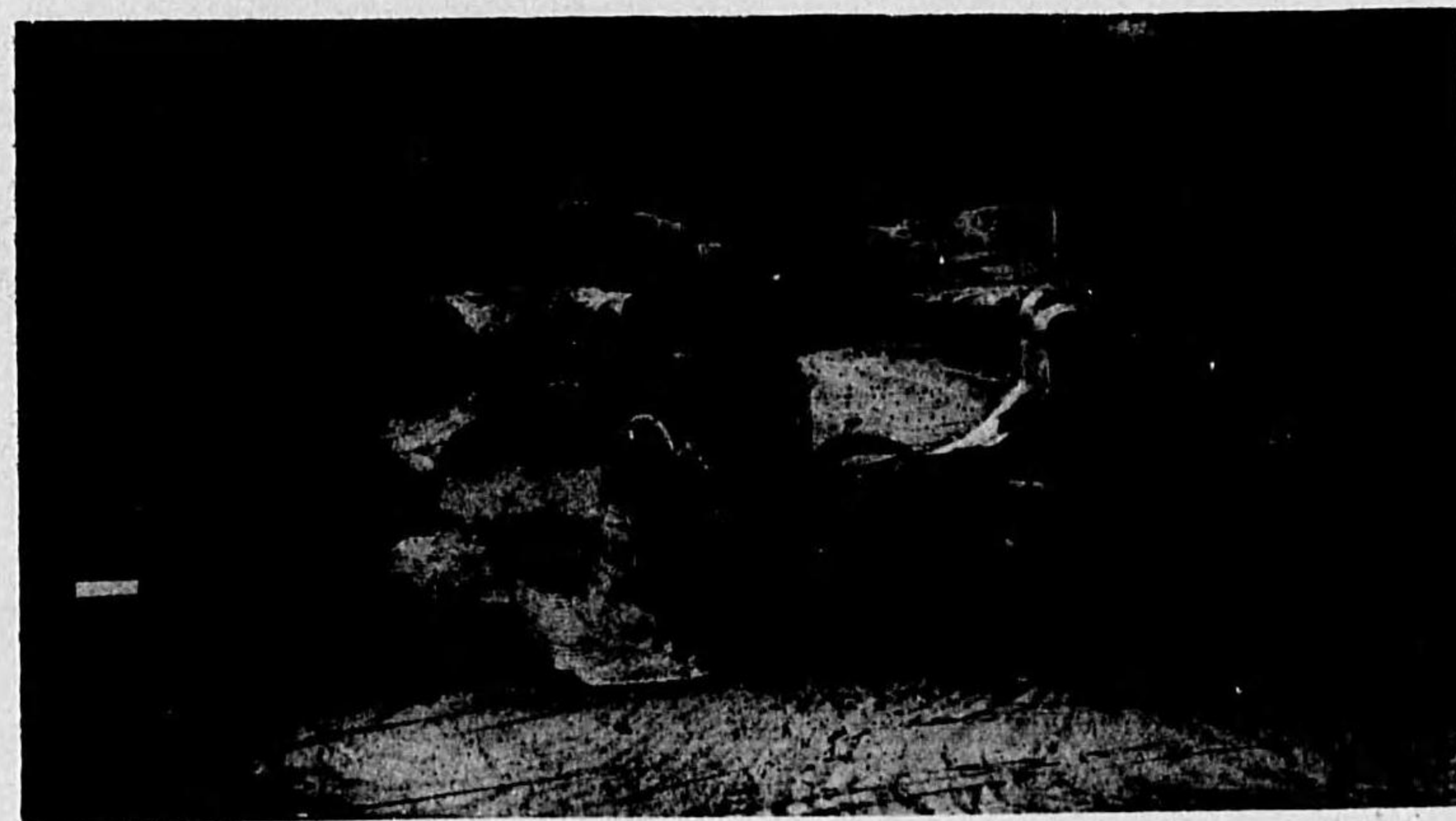
上、二二 鶴林寺本堂外陣大虹梁上墓股

下、二三 同 西側頭貫上墓股

(兩圖共昭和十四年十一月一日・下圖物差は曲尺の約一尺(一呎))

外陣大虹梁上の板墓股も、柱間頭貫上の夫も、夫夫二二・二三で見える様に、曲線の性質に於いては全く同じで、ただ前者は後者に比し、肩の「茨」が一つ多いだけである。其ため上の方は下の方から見ると大分に背が高い、従て料尻の兩方に渦紋が刻んであったりするから、馴れない眼には全然異なった感があるかも知れないから、氣をつけて観るべきである。

併しながら全然異なるのは、此等の墓股に含まれた肘木である。上圖は木口と下端との境がはっきりしてゐるし、下圖は圓弧の様な曲線から成り、木口と下端との區別が全くない。前者を「和様」、後者を「唐様」の肘木といふ。



上、二〇 鶴林寺本堂外陣繫虹梁鼻

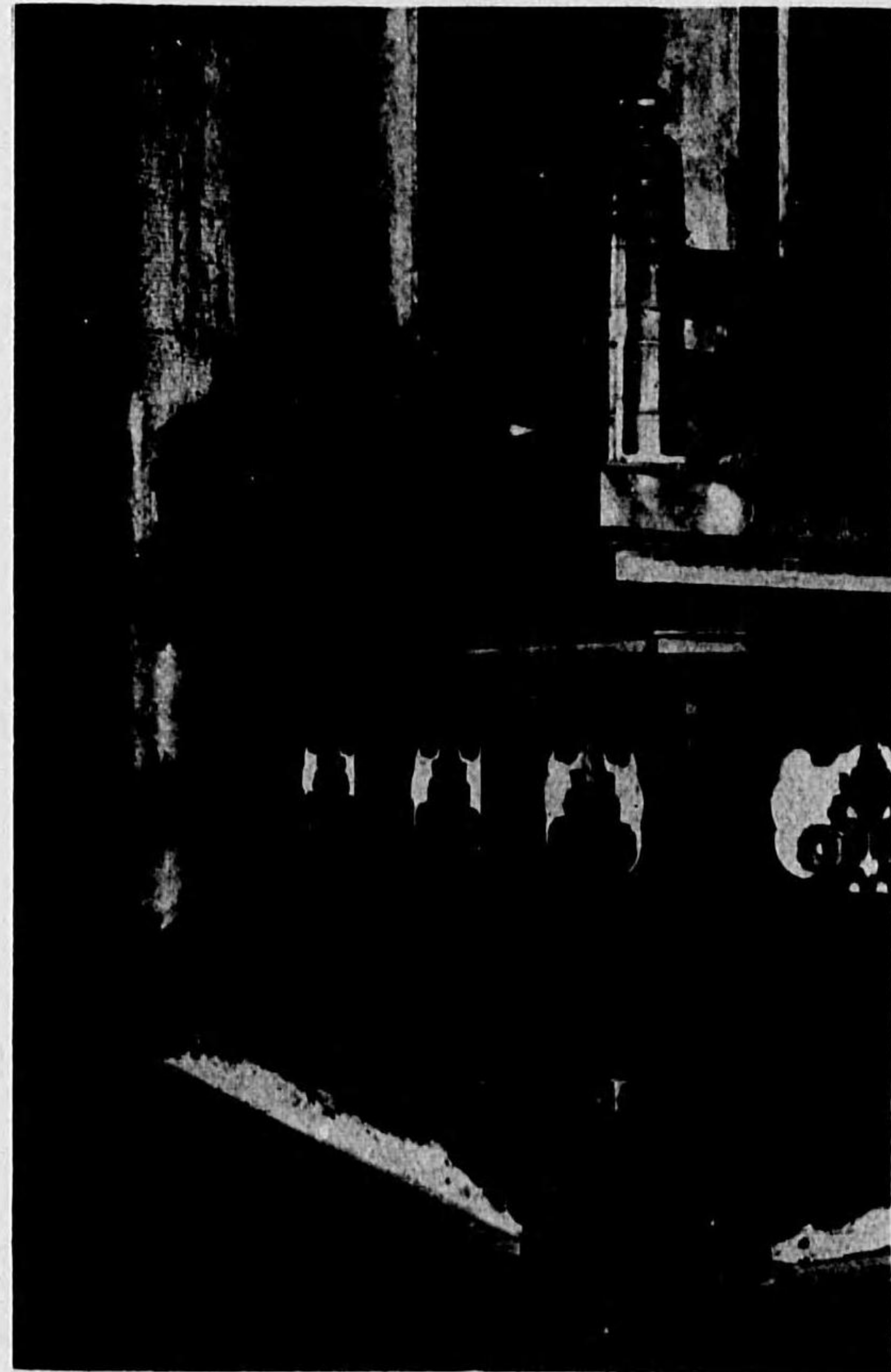
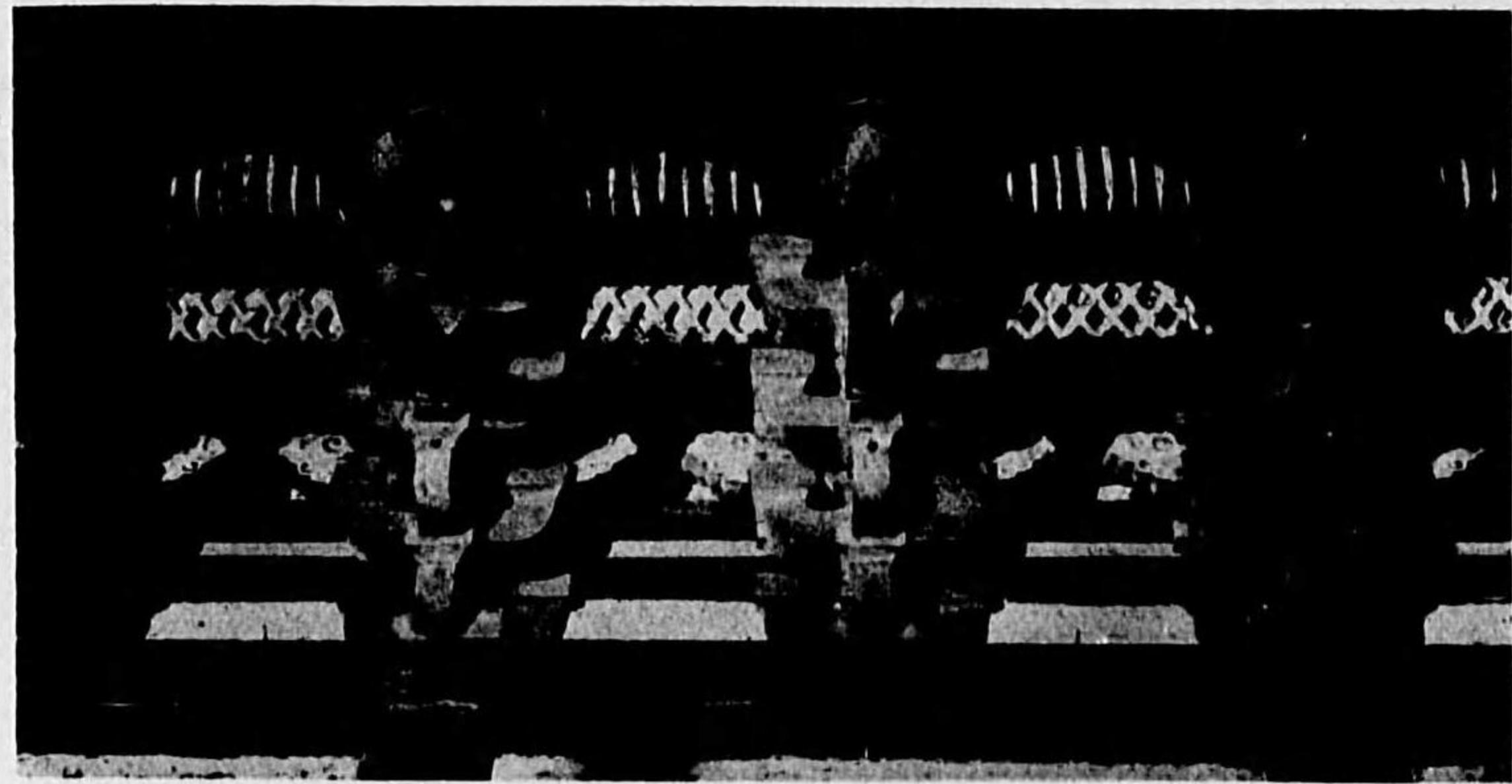
其一

下、二一 同

其二

二二―二五に示した外陣繫虹梁の先端、即ち外陣東西の大虹梁上の板墓股と交會して先へ出た——此部分はことによつたら單に添へた飾りに過ぎないかも知れぬが——部分の取扱を見せたのである。一一・一四・一五と比較せよ。

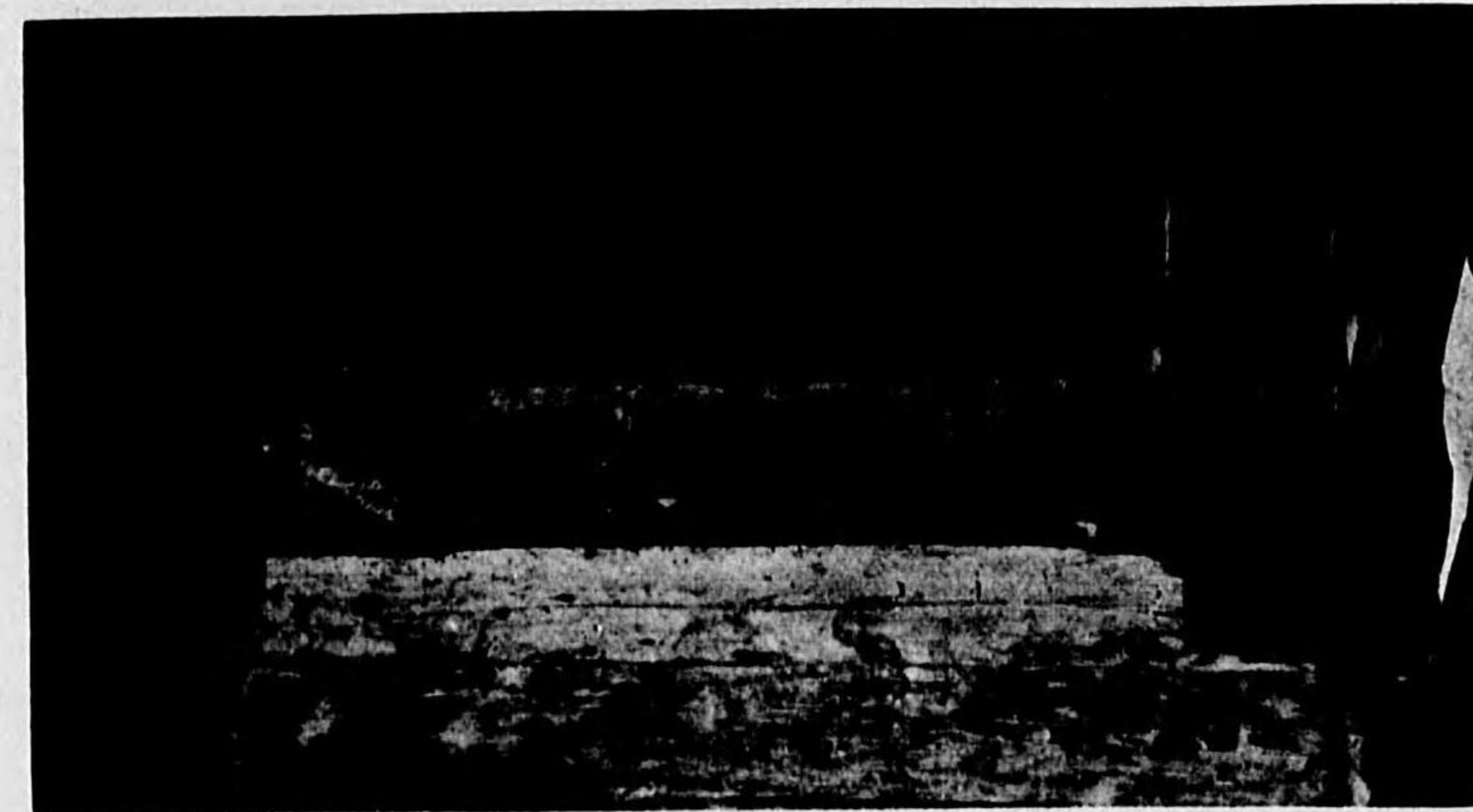
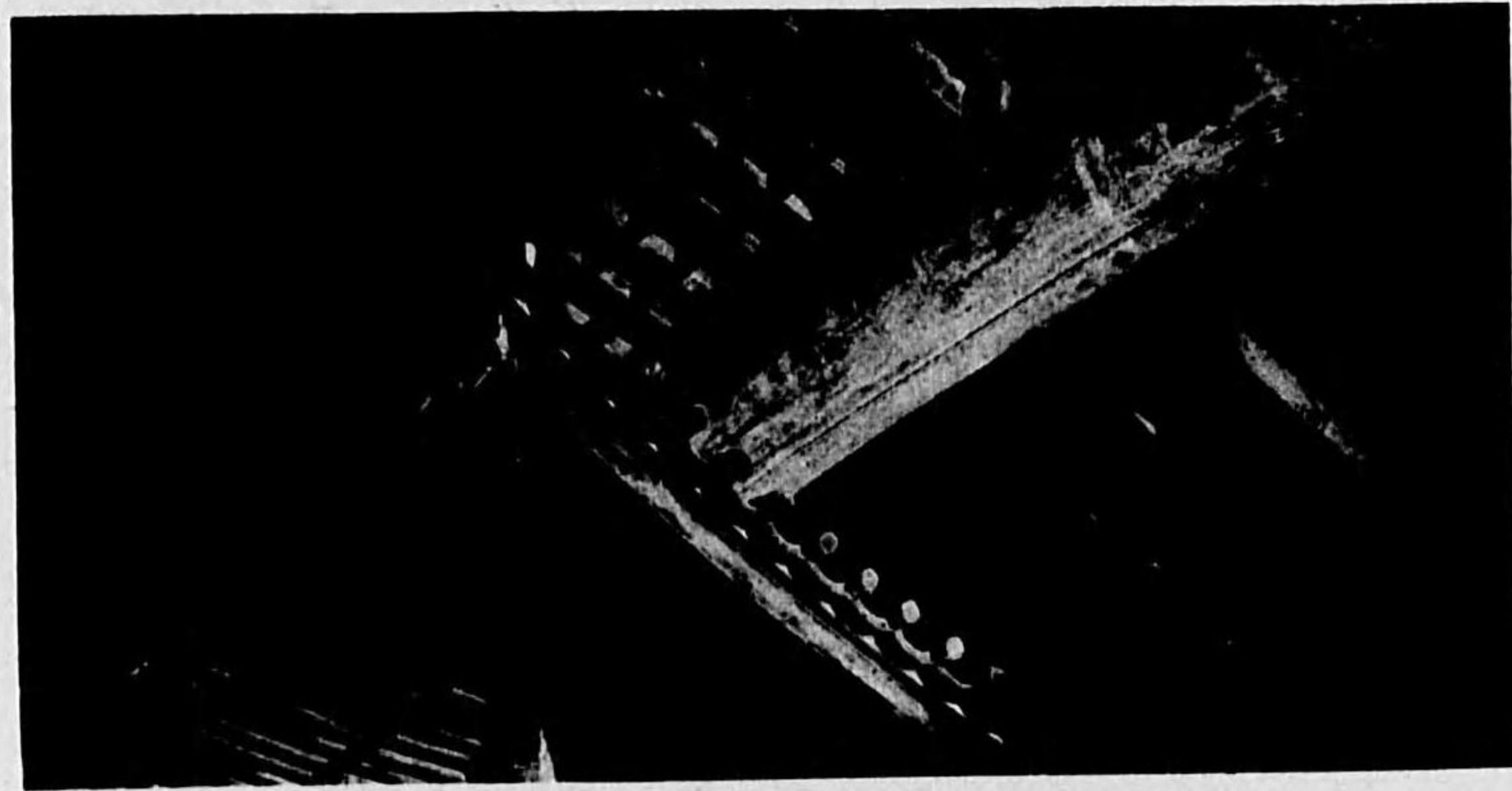
(昭和十四年十一月一日)
(昭和十四年十一月一日)



上、二六 鶴林寺本堂内陣須彌壇上厨子軒料拱一部
下、二七 同 部分

下圖の須彌壇に足のある事、上下に同じ様な多くの線形を反対につけてゐる所、間の羽目板を束で幾つかに分けてゐる所等は唐様で、羽目板の格狭間や勾欄は和様と見るべく、上圖では詰組の料拱・尾垂・花肘木・支輪等に注意すべきである。

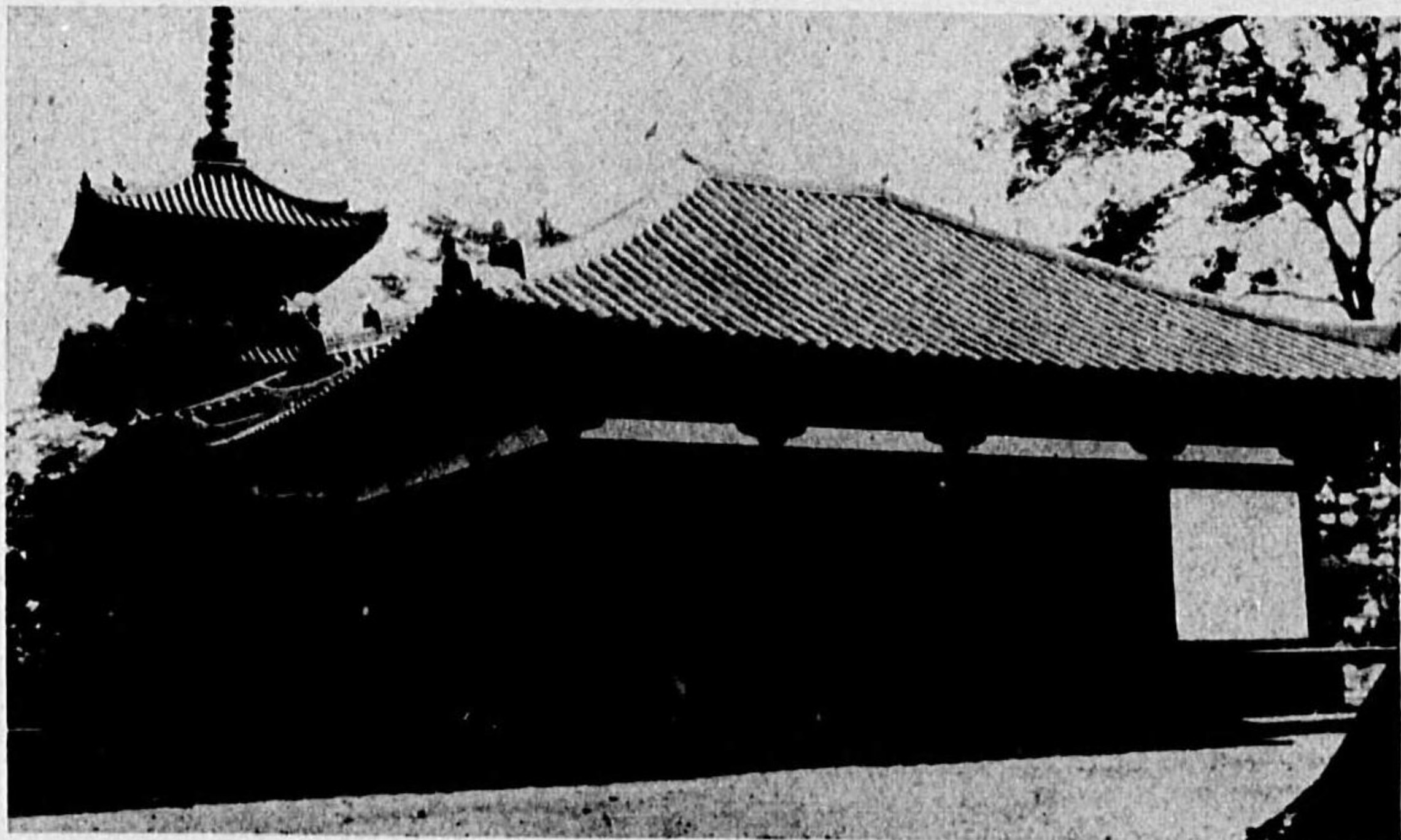
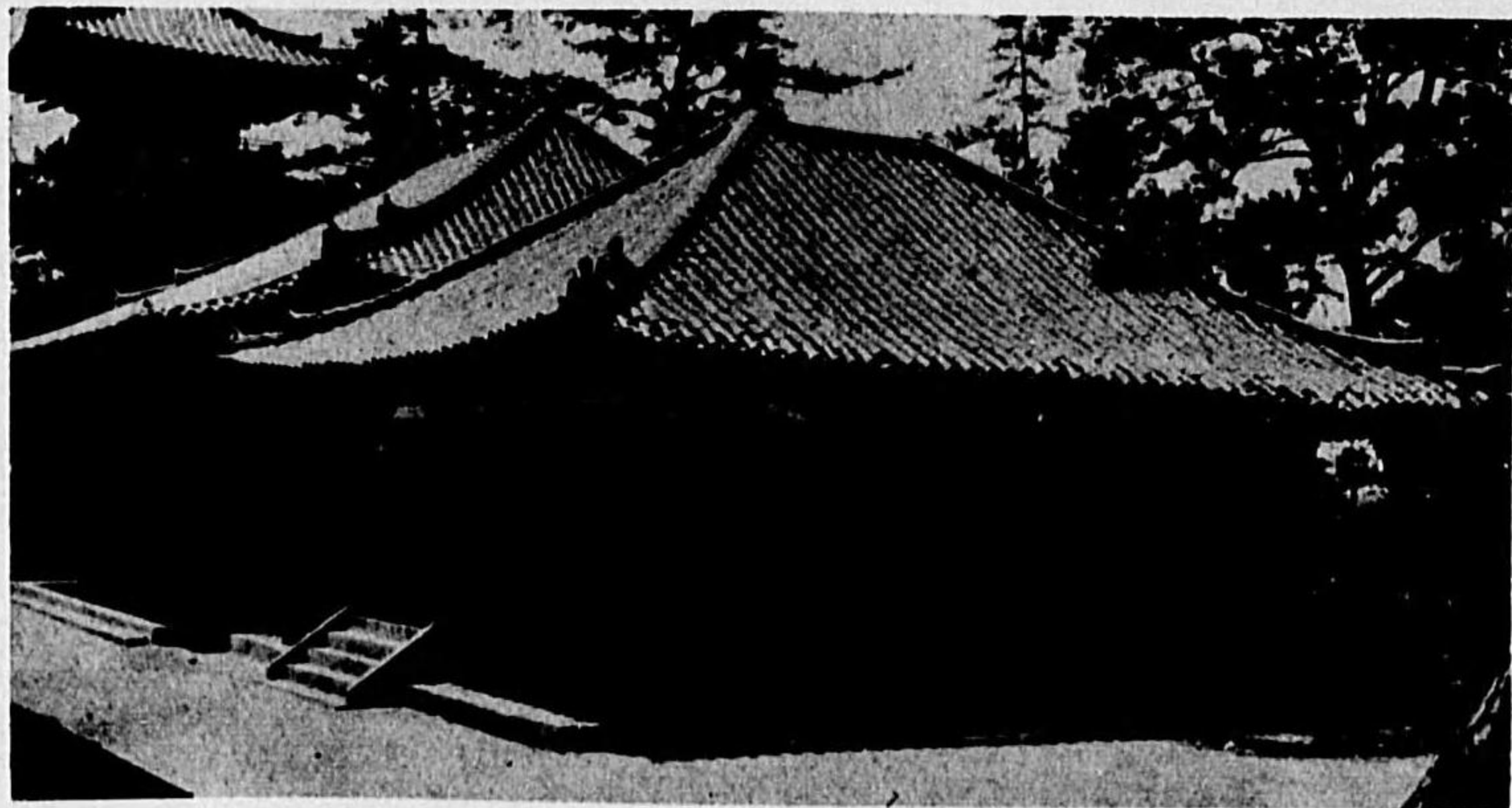
(昭和九年十二月十七日)
(昭和九年十二月十七日)



上、二四 鶴林寺本堂内陣大虹梁部分 (昭和九年十二月十七日)
下、二五 同 入側境西側部分 (昭和九年十二月二十一日)

内陣はやはり兩側面と背面とに入側がある。其入側は外陣の夫と同様に化粧屋根裏である。其入側を除いた部分には、これも亦外陣と同様前後に太い圓形に近い断面を持った、どちらかといふと天竺様の虹梁に近い形の大虹梁を架渡し、其上に外陣同様の組入天井を設けてゐること二四の如くである。左下の直角等脚三角形の様なものは厨子の屋根。

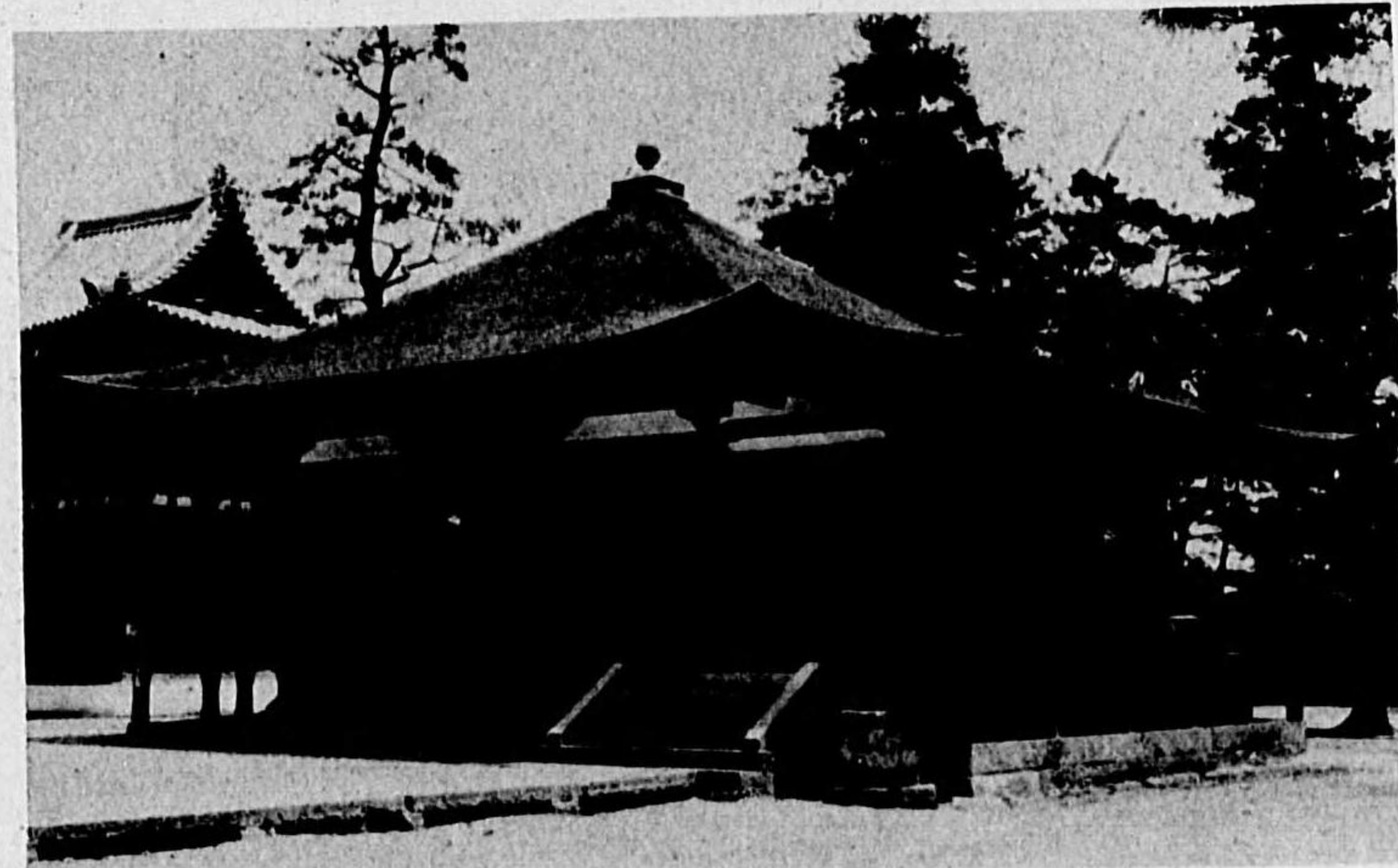
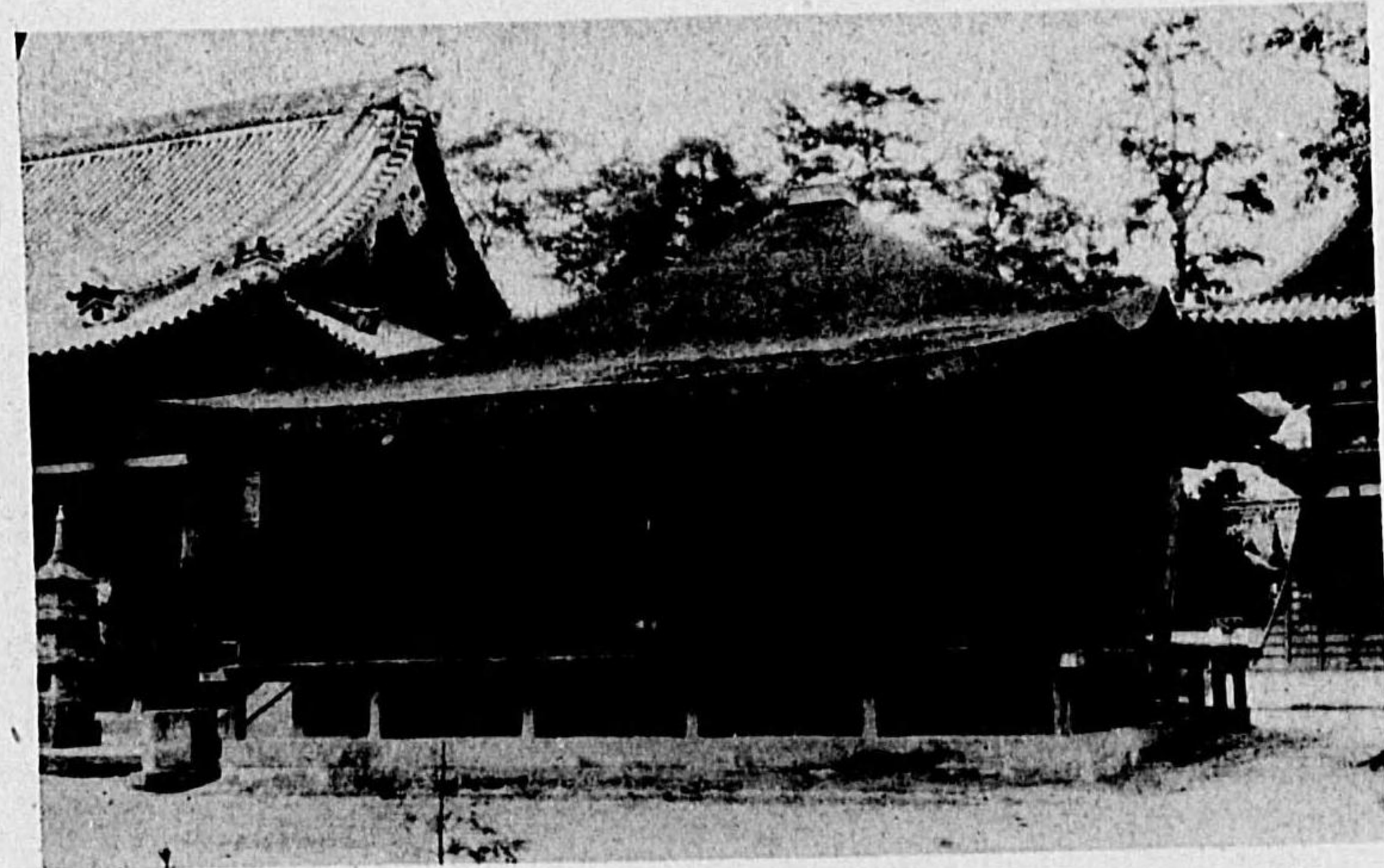
二五は内陣側面最後方の間の上の方で、唐様の繫虹梁を用ひ、後方即ち向て右端は、袖切の部分を料で受け、左端は柱から持送りを出さず、鯖尻のあたりに大瓶束を立ててゐる。この邊は洵に意匠の自由自在なことをよく現はしてゐる。尙ほ虹梁下端には「錫杖彫」が施してある。



上, 三〇 鶴林寺常行堂全景 (修理前) (昭和八年六月十一日)

下, 三一 同 (修理後) (藤原義一氏)

常行堂の正面北端の間に向ひ、元は本堂から渡廊下がつけてあった。だから上圖の様な寫眞は到底とれなかつた。併しいつ頃かこの渡廊下は除去されたので、見た所はどの位よくなったか知れない。此建物は正面三間側面四間だから、屋根は四注で妻入になってゐる。修理前は上圖でみる様に正面一間通吹放しになって居り、少なくとも北面は引違板戸だの、板壁だのであったが、修理の進行に連れ、現場に於いて慎重調査の結果、下圖の様に板屏を吊込んだり、半部にしたり、或は白壁にしたり、いろいろにしたのださうな。文字通り面目を一新した。太子堂と共に平安後期の建築。

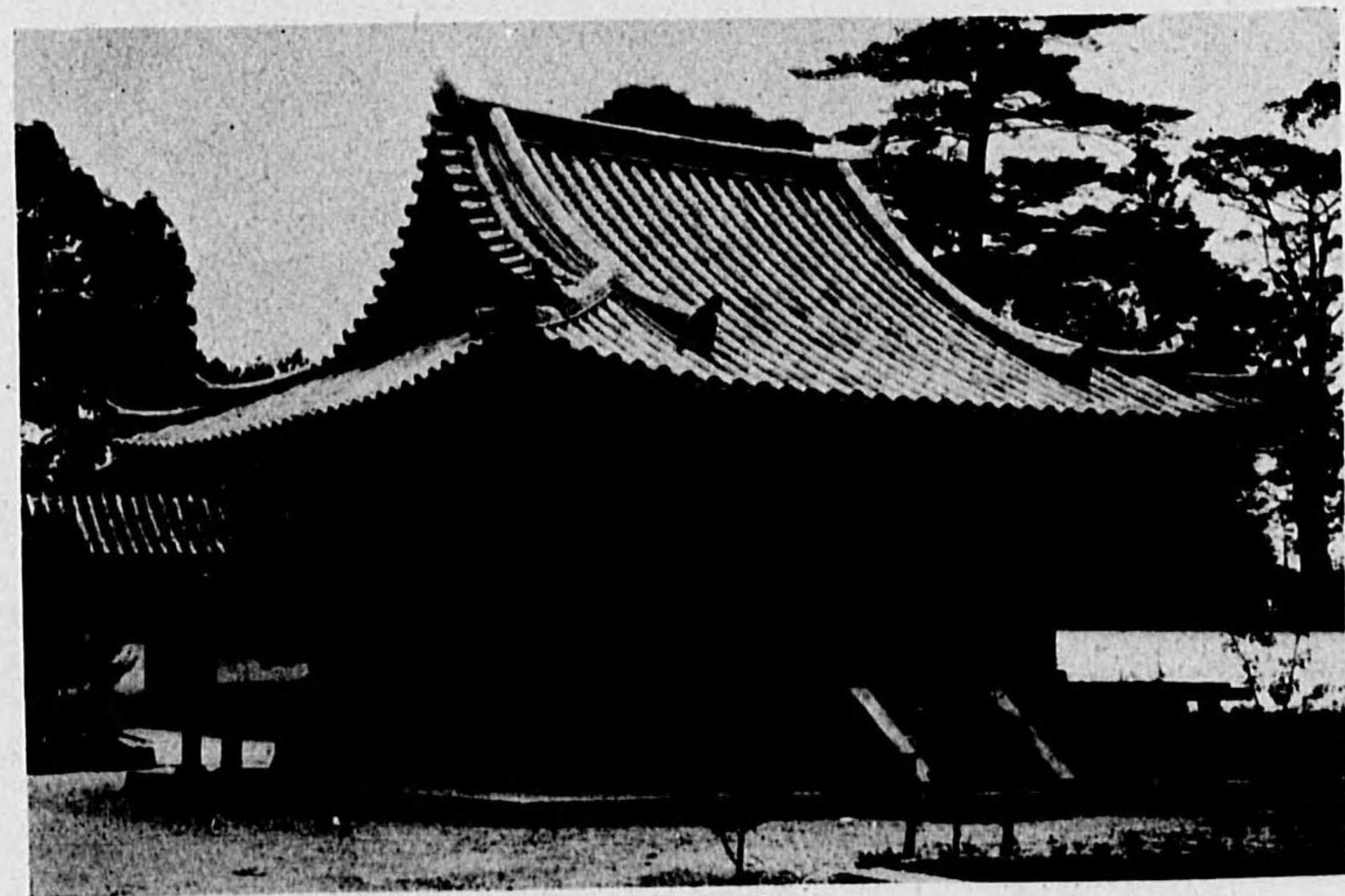
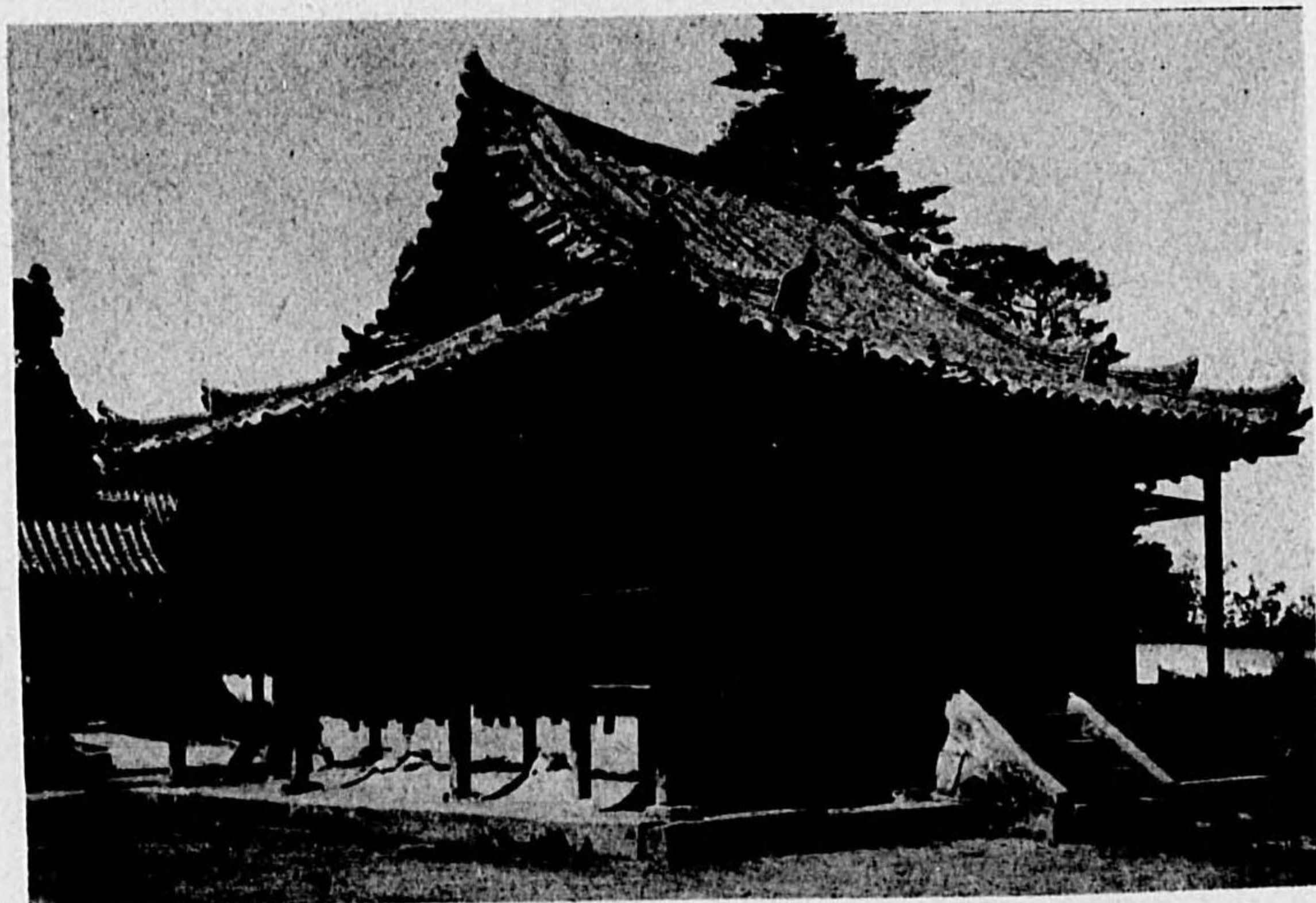


上, 二八 鶴林寺太子堂全景 其一 (昭和八年六月十一日)

下, 二九 同 其二 (昭和八年六月十一日)

修理前は本堂の椽から側面に渡廊下をつけたり、右側面前方に見える石階の上に向拜の様なものや、建物の前面に瓦葺葺下ろしの廂を架けたり、甚だ美觀を損してゐるが、大修理の結果は上下圖でみる様に洵に美しくなつた。序に露盤寶珠を造り直したら一層引立つたであらう。現在は方三間寶形造の正面に深さ一間の廂の間をつけ、縮破風で主屋の屋根に連絡せしめてある。主屋圓柱、廂方柱面取、

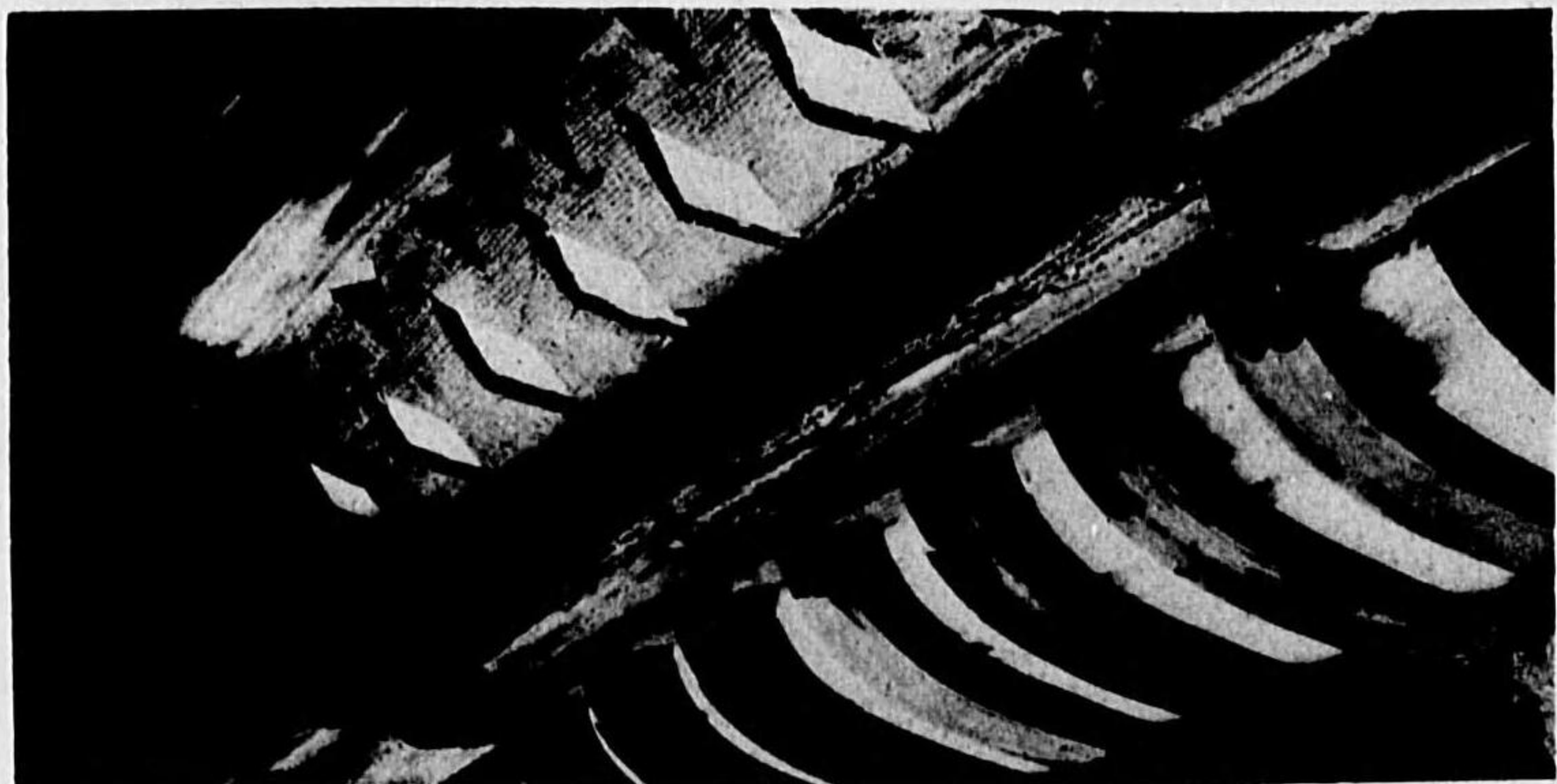
料拱大料肘木、間配極。



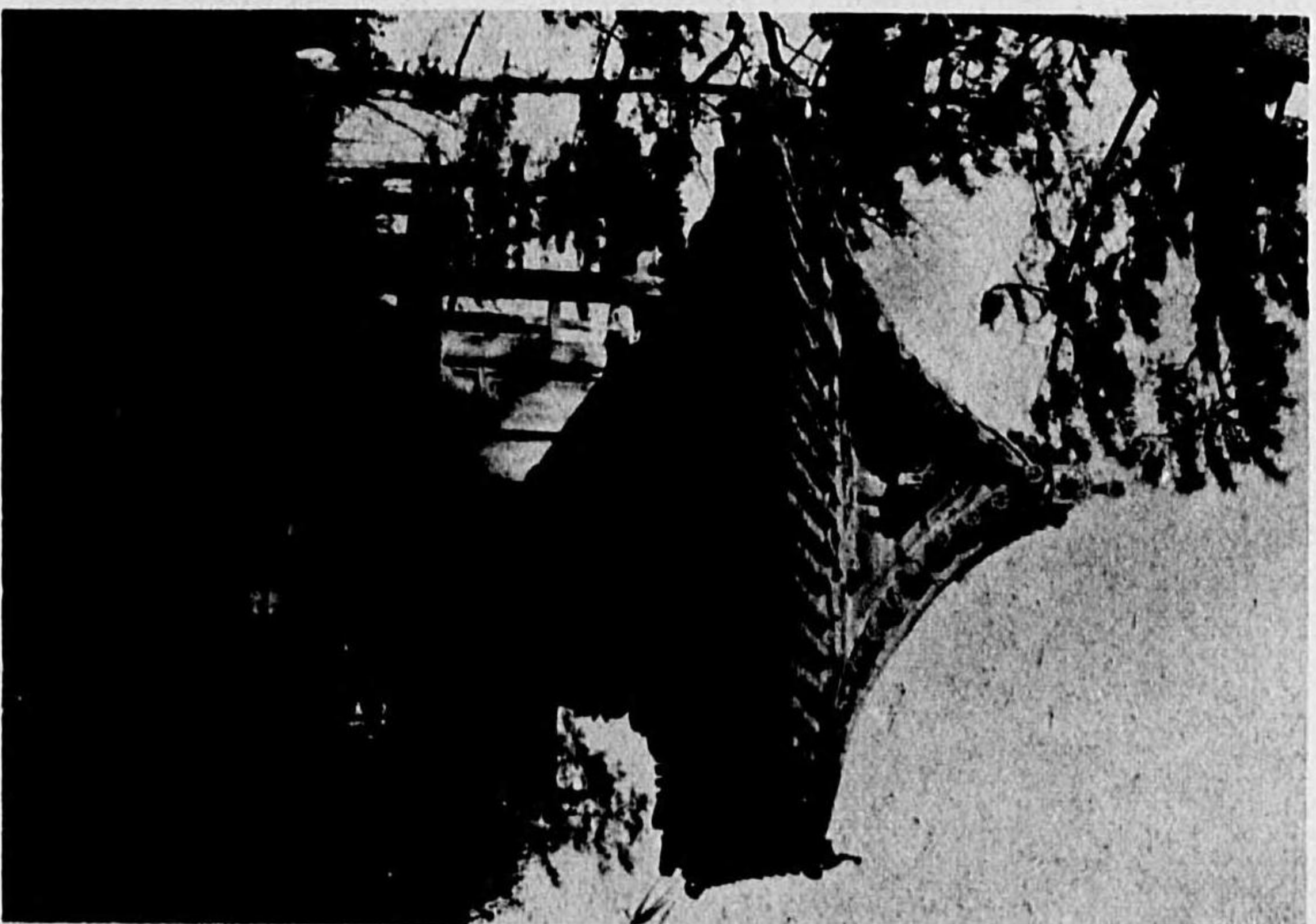
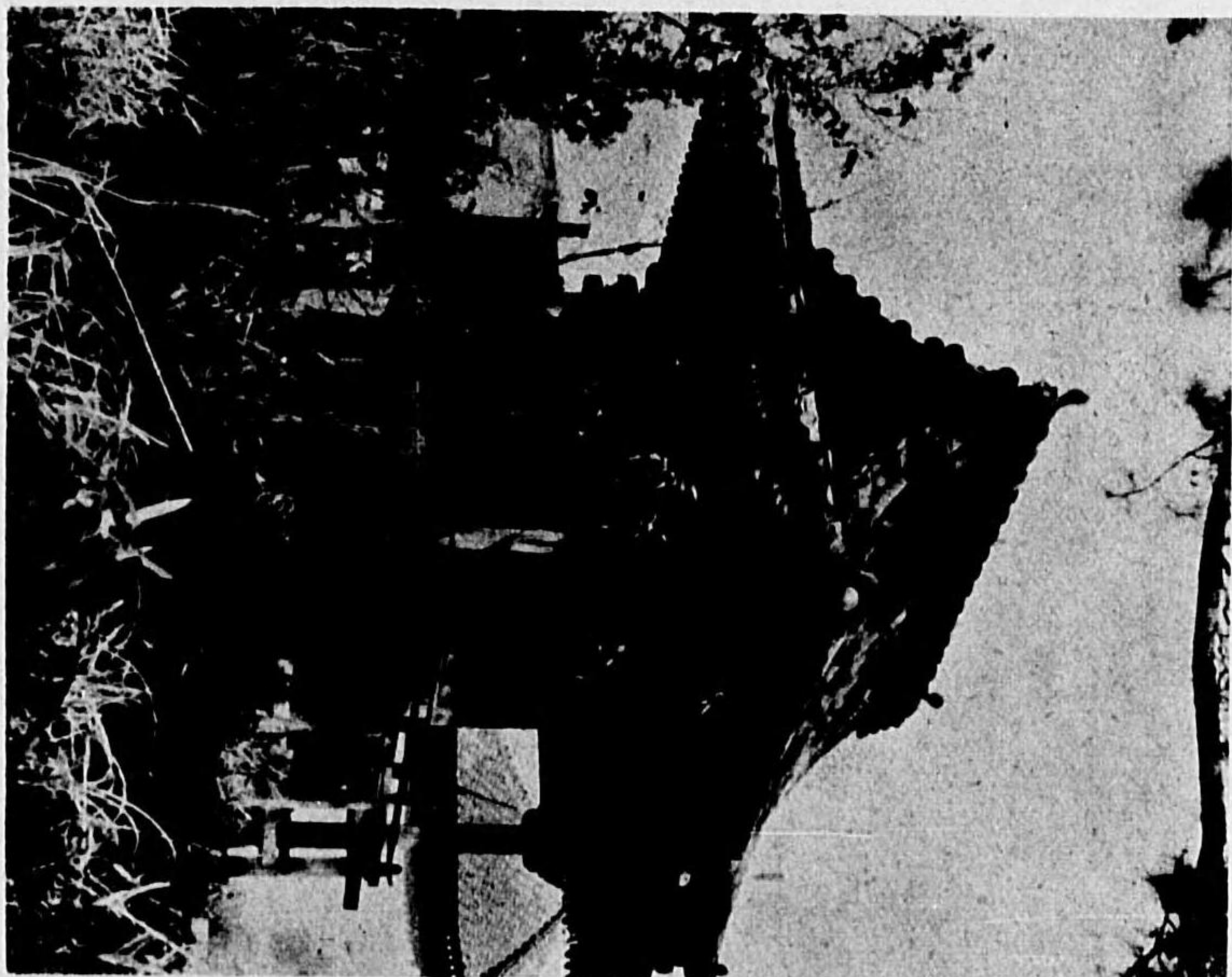
上、三二 鶴林寺護摩堂全景（修理前）（中野藝術院）
下、三三 同（修理後）（昭和十一年六月十二日）

創立はいつかはっきりしてゐない様だが、寺傳によると永祿六年の再建といふ。修理前は軒下に支柱が多かつたが、上圖の様な有様であったが、修理後は下圖の様にさっぱりとした。内部の構造は簡單だが可なり面白い。

右、三四 鶴林寺鐘樓全景（修理後）（昭和十一年六月十二日）
左、三五 同 軒支輪一部（昭和十一年六月十二日）
袴腰付の典型的鐘樓で、寺傳養老二年創立といふ。併し現存の棟札には應永十四年の再建とある。上層三手先の斜拱の間に二種の支輪を用ひてあるが、下方の斐支輪は一木から刻みだしてある事左圖の如くである。



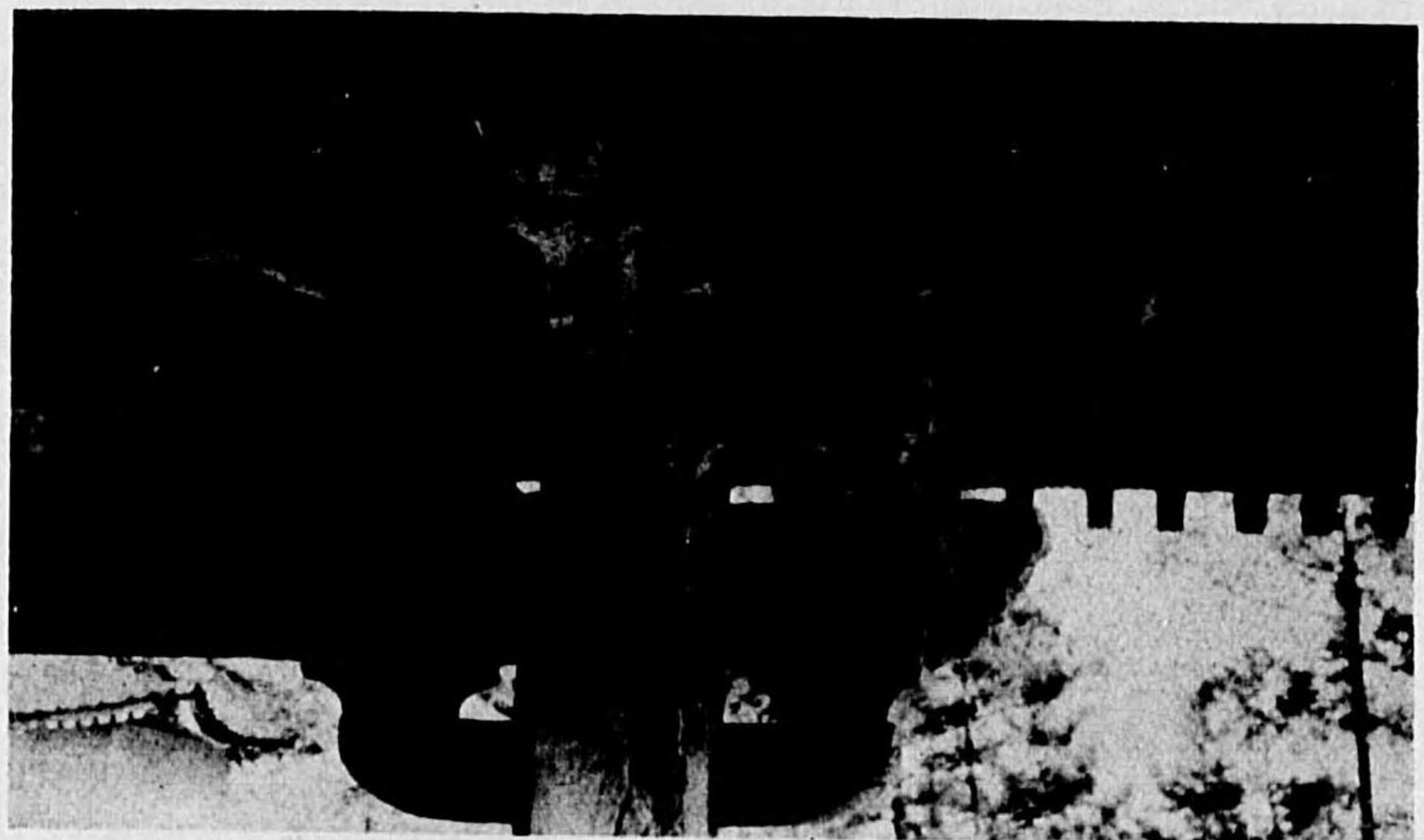
右 三六 鶴林寺行者堂正面
 (昭和十七年一月十九日)
 左 三七 同
 背面
 (昭和十七年一月十八日)



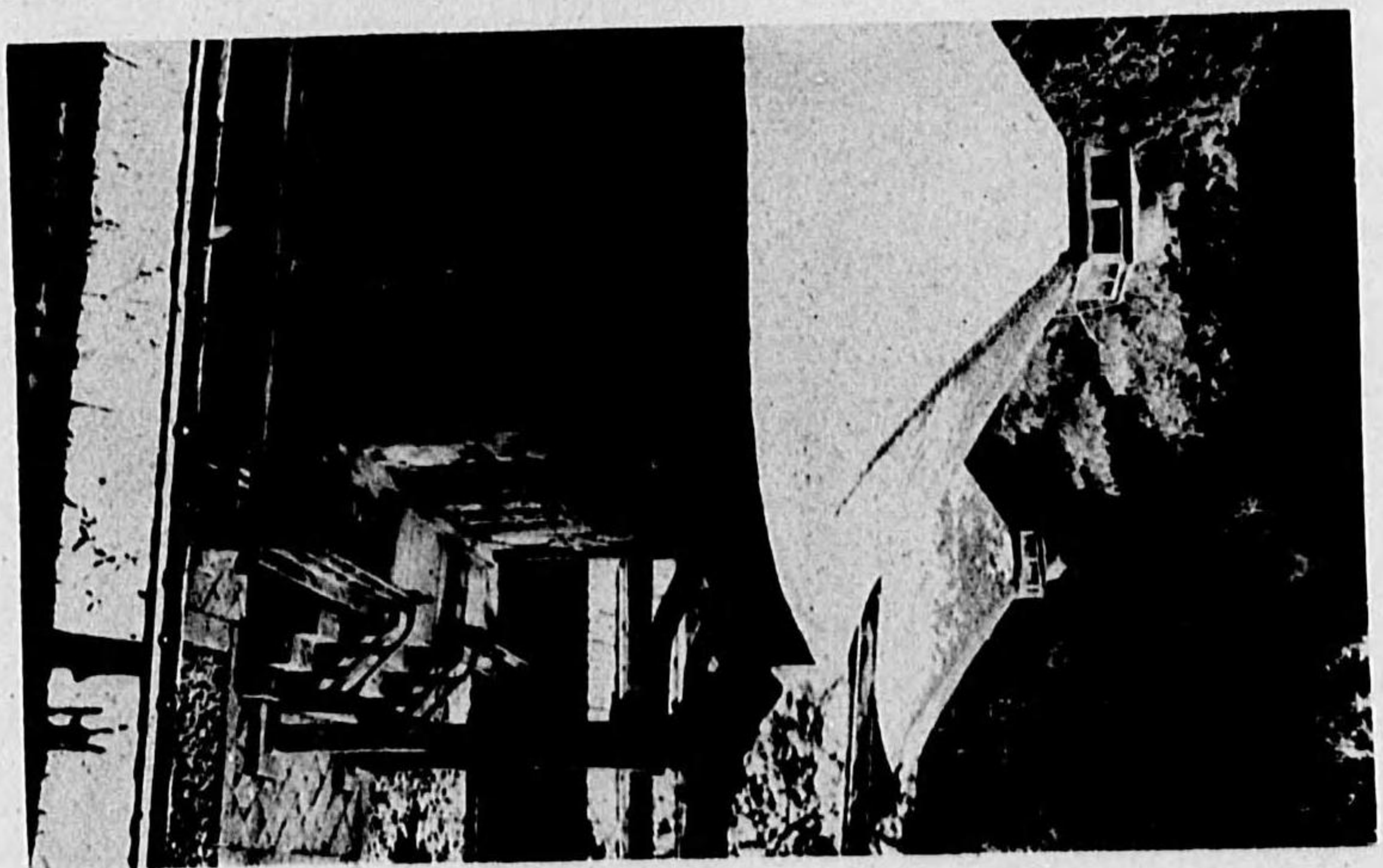
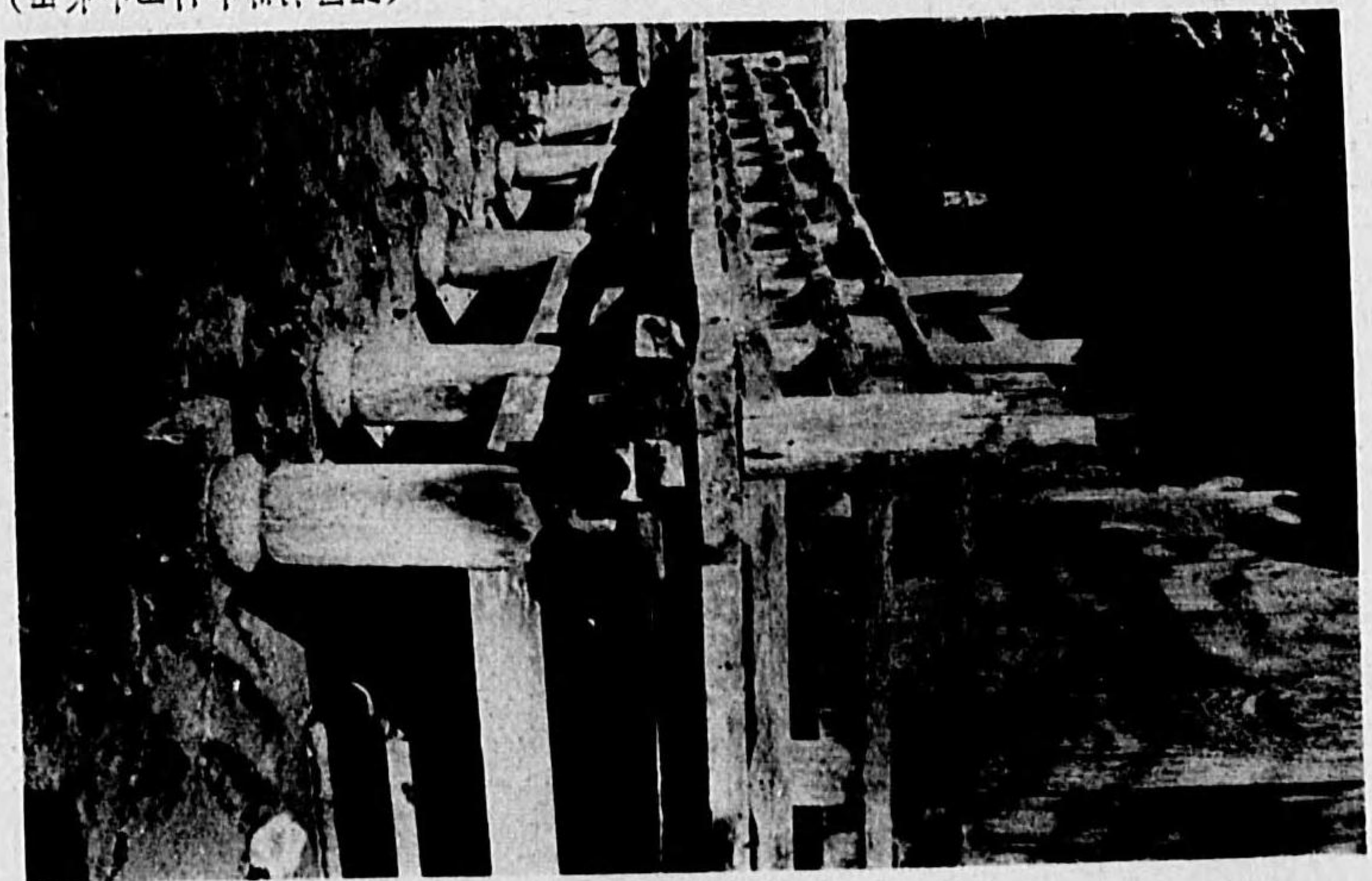
上 三八 鶴林寺行者堂細部 其一
 下 三九 同 其二

(昭和十七年一月十八日)
 (昭和十七年一月十八日)

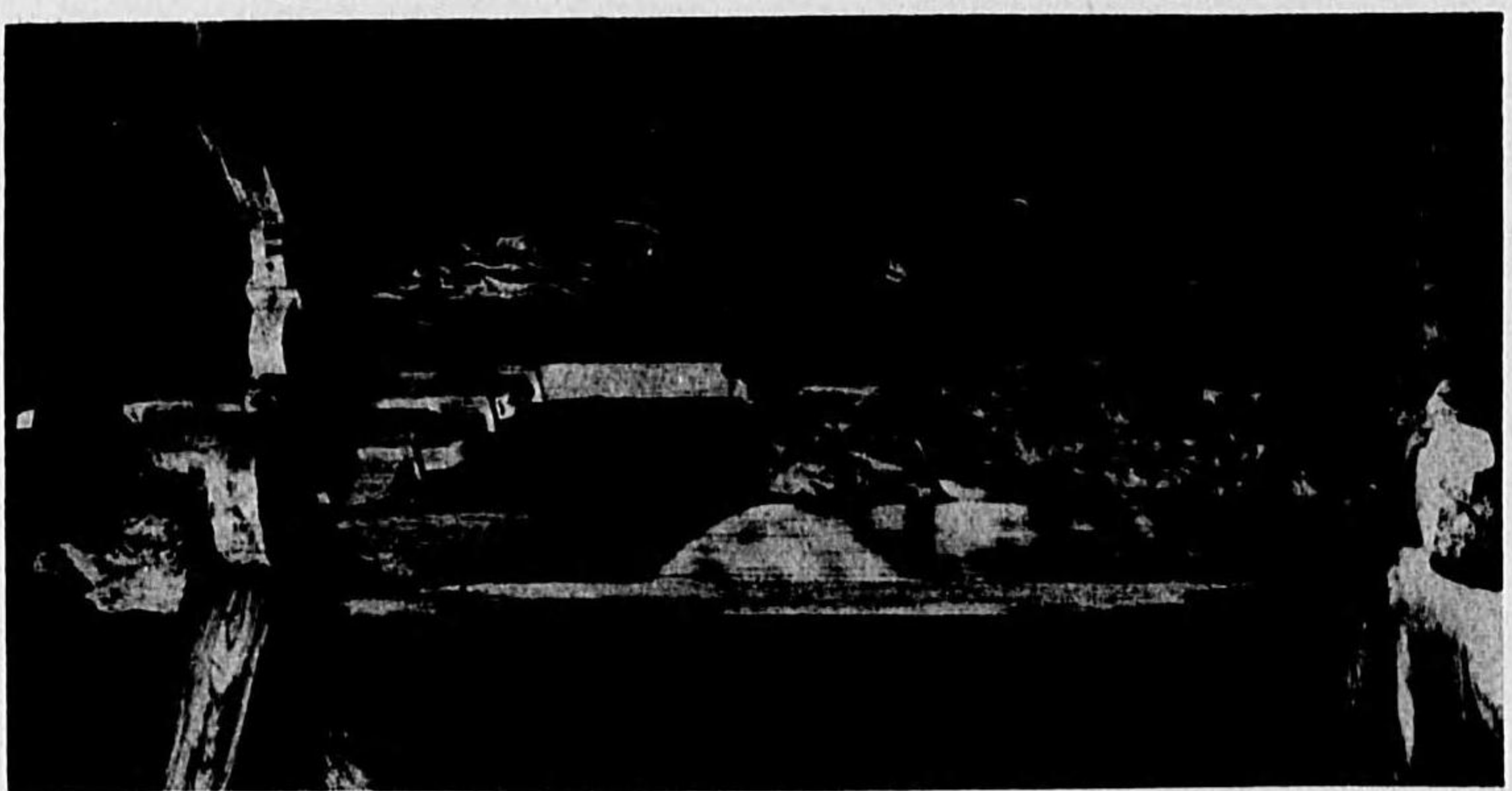
今は行者堂といつてゐるが、前頁二圖で明らかな様に、立派な神社建築である。舊は鎮守の社で、山王権現を祀つたといふ。正面からだると、春日造にしか見えないが、實は隅を少し缺いただけで、隅木を備へた入母屋造であり(三六)、後面は入母屋造にしてある(三七)。向拜及び主屋の木鼻・料拱等は、小さくて簡單ではあるが可なり面白い。脇障子上の欄間が残つてゐたら相當のものであつたと思はれるが、惜しい事になつて了つた。諸書に室町初期らしいとある。



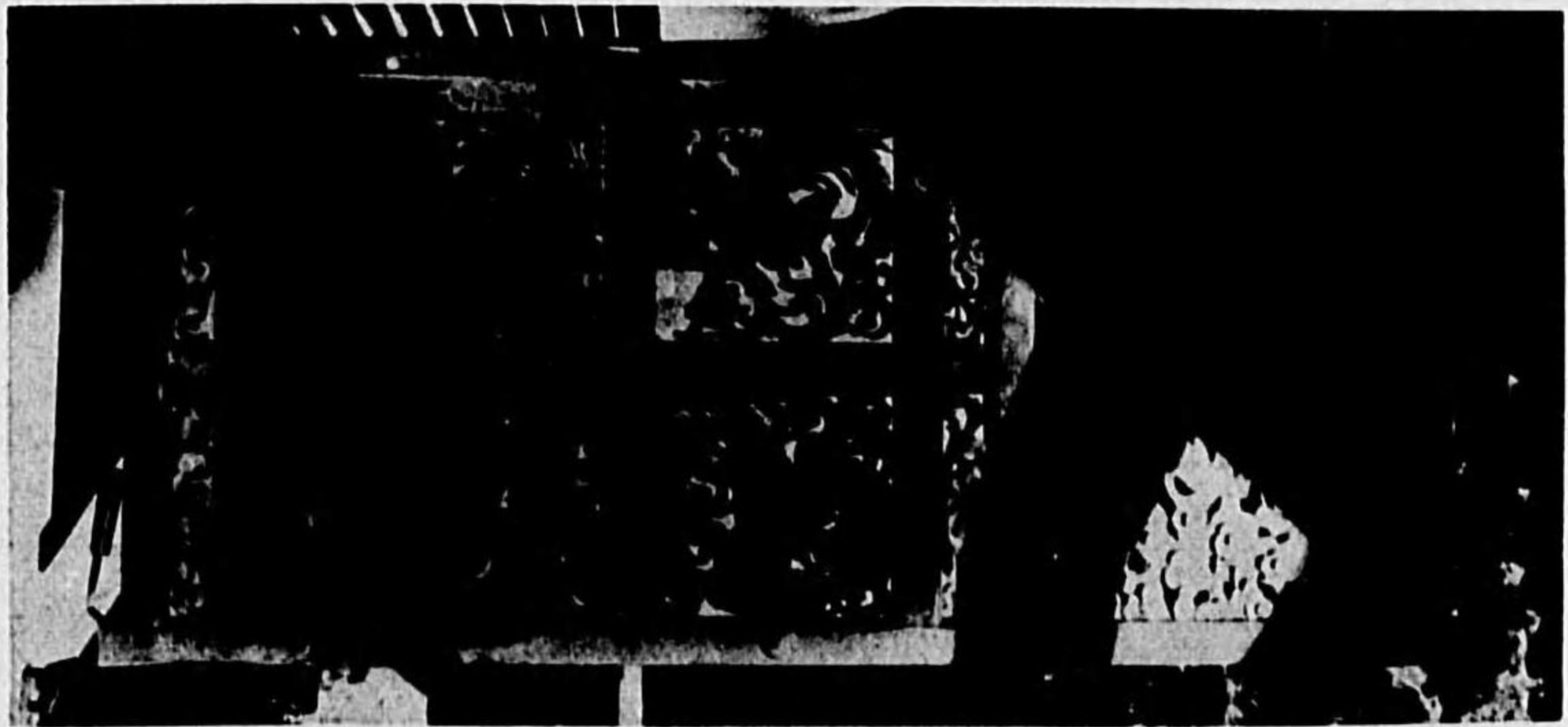
右、四〇 金剛峰寺薬師堂及位牌堂
 (昭和七年十二月十六日)
 左、四一 同
 椽及勾欄
 (昭和十一年十月十四日)



此等の二棟は同大同式、方三間竪形造であるが、右圖に於いて近いのが位牌堂」
 で遠い方が薬師堂である。即正面からだと向って右が「薬」で左が「位」。左圖は薬
 師堂椽の一部で、椽束は圓く下に礎盤があり、椽桁下に斜拱をおいてある。勾欄擬
 寶珠は青銅製であったと見え、その昔に盗まれて了つてゐる。内外部共随分立派で
 あつたが、外部の彫刻佛金具等は全部剝き取られてゐる。此等兩堂は共に寛永二十
 年の建立といふ。



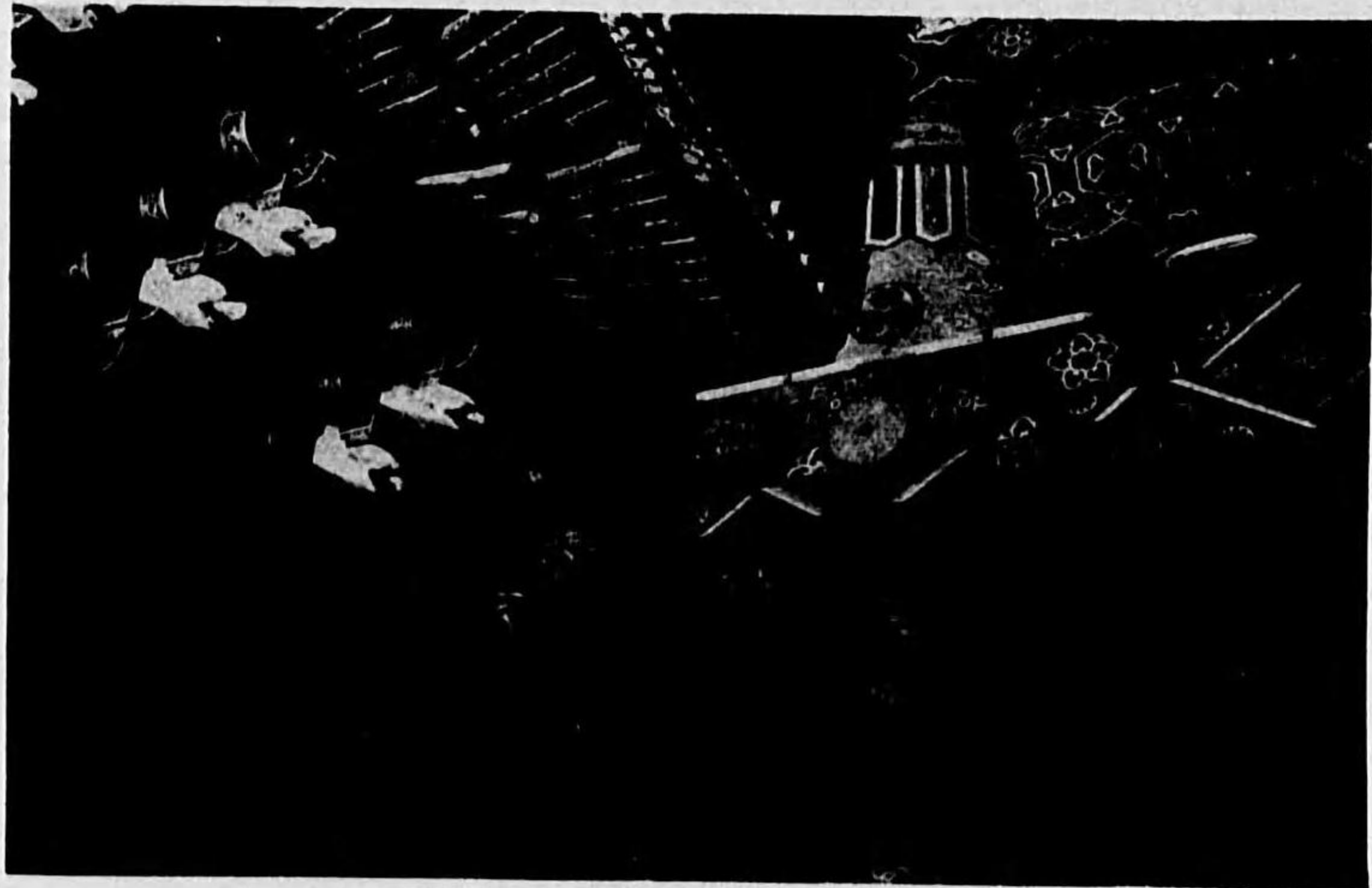
上、四二 金剛峰寺薬師堂正面向拜一部詳細
 (昭和十一年十月十四日)
 下、四三 同 正面
 (昭和十一年十月十四日)
 向拜は大唐破風で、内部の彫刻は全然桃山式。葦股の輪郭は特に良好である。



右、四四 金剛峰寺薬師堂軒料拱 (昭和十一年十月十四日)

左、四五 同 正面棧唐戸 (昭和六年八月五日)

右圖は唐様三手先料拱の見上げで、一六三と同じものであるが、ただ時代は彼が文和元で此が寛永二十だから、そこに二九一年即ち約三〇〇年の差があるので、下の側の尾樫の先が猿化してゐる違がある。尾樫の鼻を象にした猿にしたりしたものは、桃山時代かららしい。此場合、猿とはいふものの、凡そ實物の猿とは雲泥の差があり、象と獅子と加へて二で除いた様なものだが、こんなのは何れも猿頭として片付けてゐるのである(一八六)。長押・臺輪・榿等の飾金具は全部ない。左圖は正面扉を開いたところ。内側から繪板の彫刻は残してゐるが、外側の分は、上の廣間の透彫雲に天人以外全部削ぎ取られて了つてゐる。

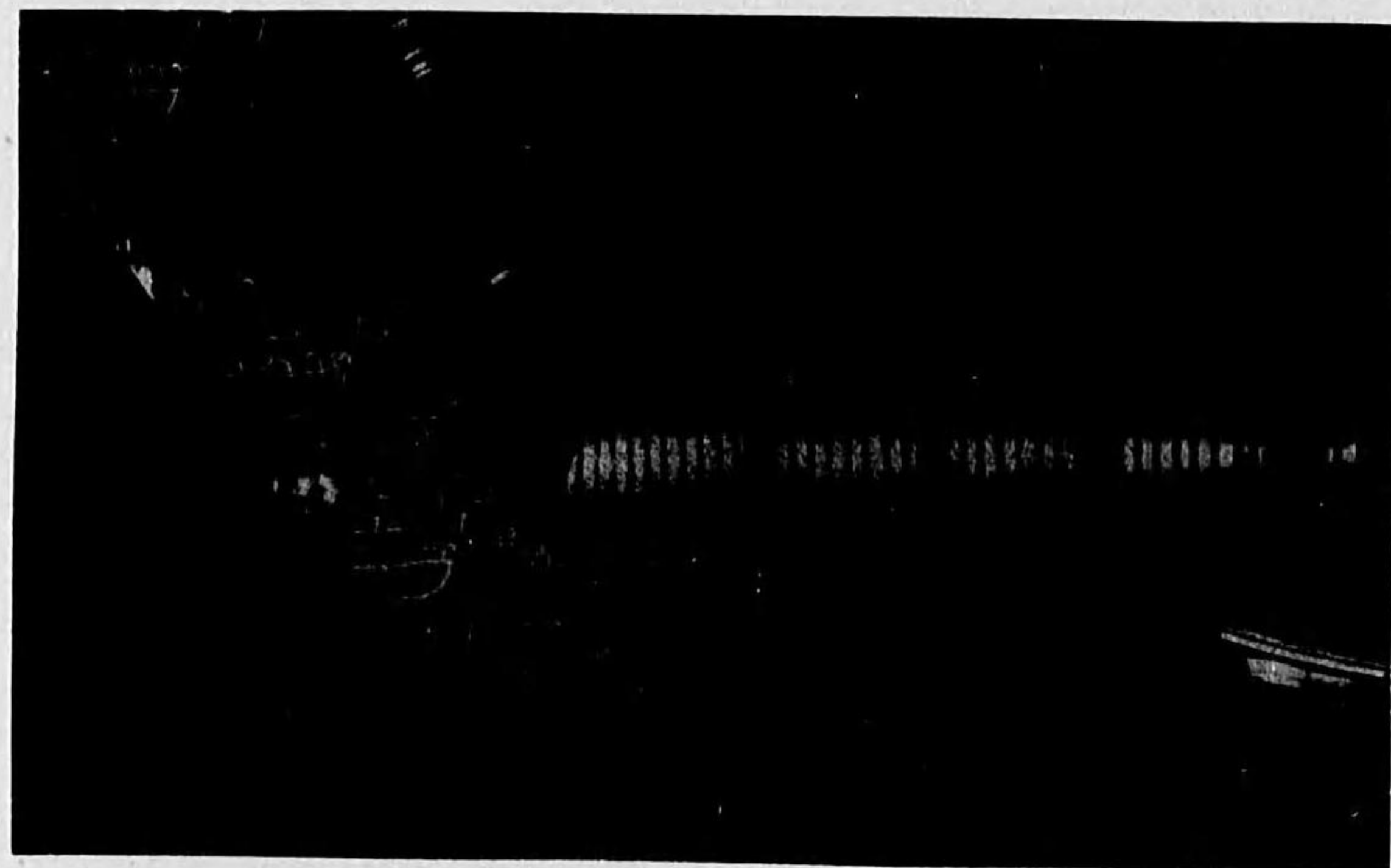


上、四六 金剛峰寺薬師堂内部 其一 (昭和六年八月五日)

下、四七 金剛峰寺薬師堂内部 其二

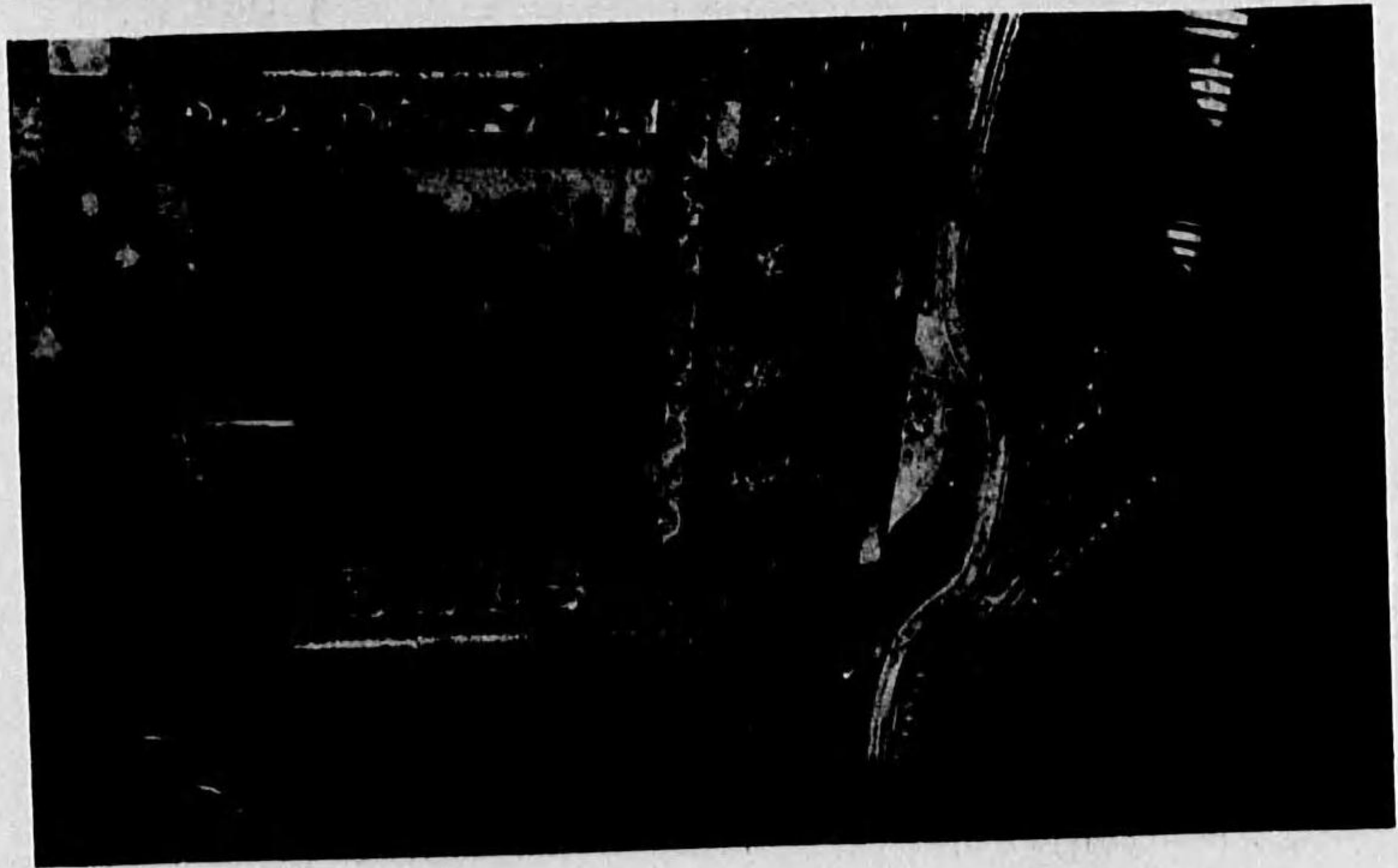
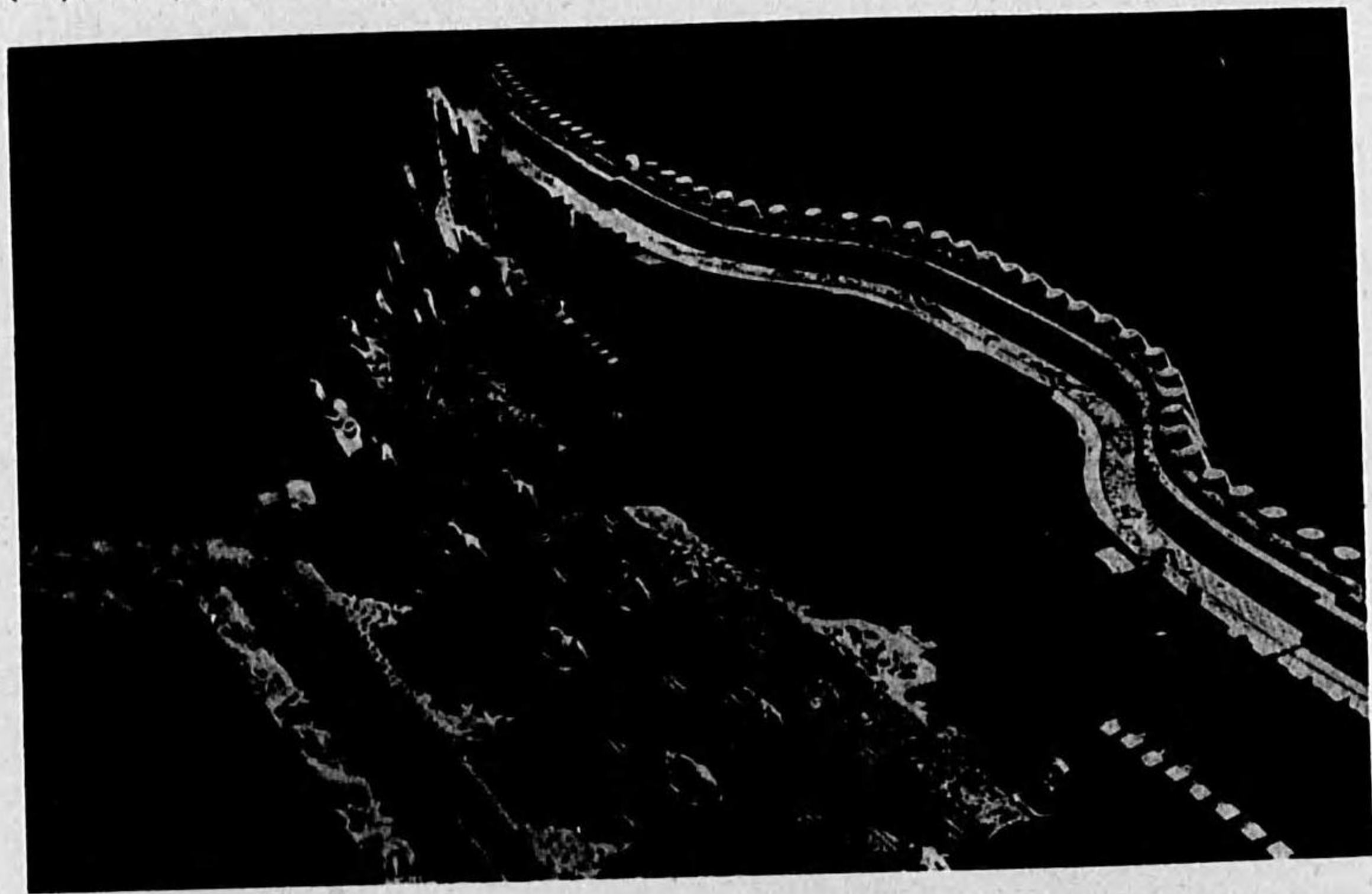
(昭和十一年十月十四日・長押上物差は曲尺の約一尺(一呎))

此頁には薬師堂内部の寫眞(位牌堂同斷)二種を示しておいた。長押上は全部極彩色で、柱・料拱等唐様でありながら、長押を用ひたり、又天井は折上小組格天井とし、裏板は金色で格縁には飾金具を打つてある。長押の柱當りには桃山から江戸へかけて流行した鬘斗目模様が美しく描いてあるが、此種の飾金具は京都市では高臺寺靈屋及び二條城二の丸御殿に手の込んだ美しいものがある。



右、四八 金剛峰寺薬師堂厨子 (物差は曲尺の一尺・昭和六年八月五日)
 左、四九 同 (昭和六年八月五日) 部分

薬師堂も位牌堂も、共に須彌壇上には、方一間入母屋妻入で軒唐破風の善美を極めた厨子がある。科拱唐椽三手先で、二重の尾檼はその先端が二本共象化してゐる。位牌堂のは屏が半分だけ残してゐるが、薬師堂のは両方共なく、「兔毛通」も「懸魚」も盗まれ、漆塗の上に金で唐草を描いた檼は、地檼飛簷檼も一部は空りとしてゐるが、幸に裏腹は助かてゐる。

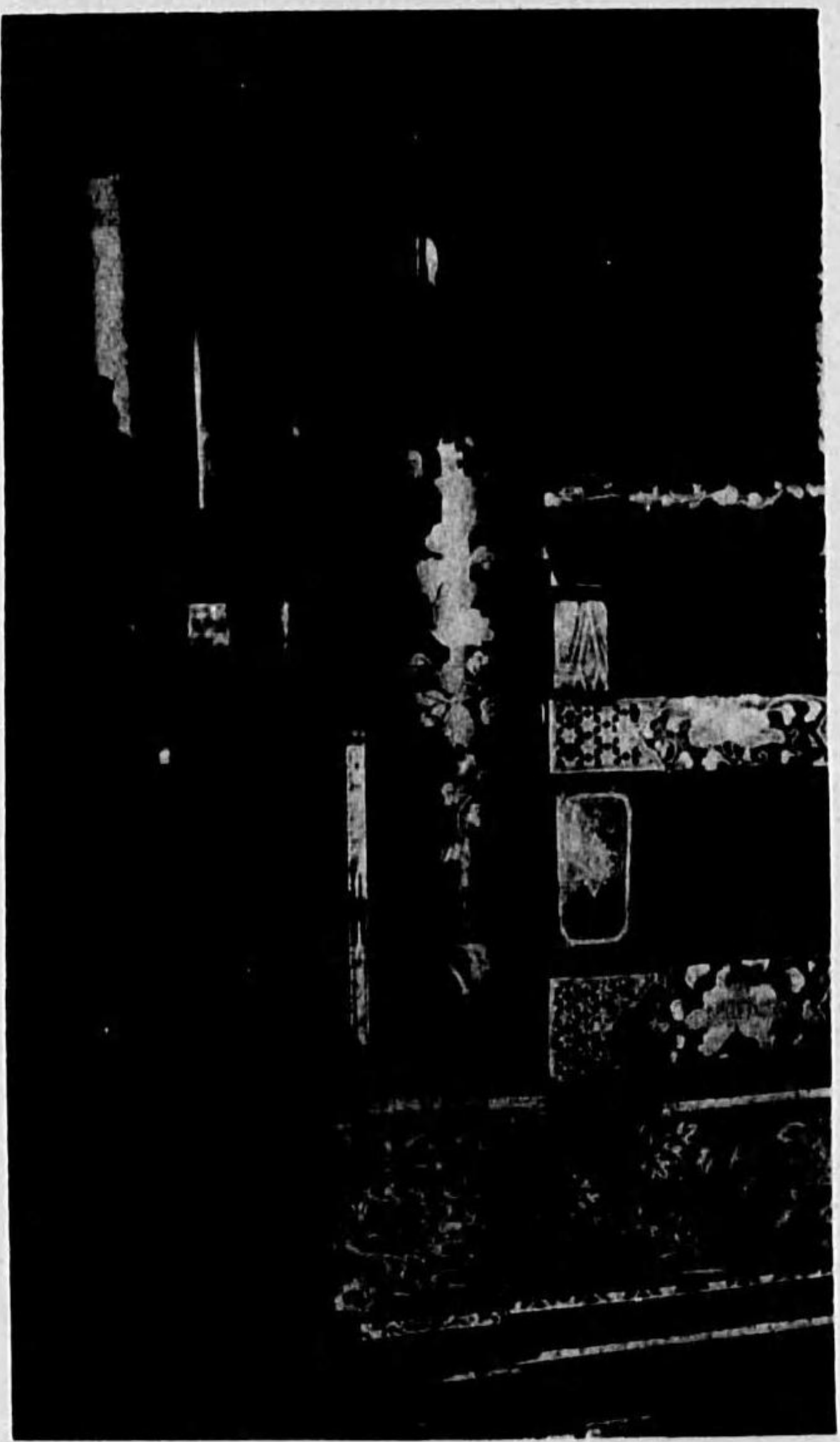
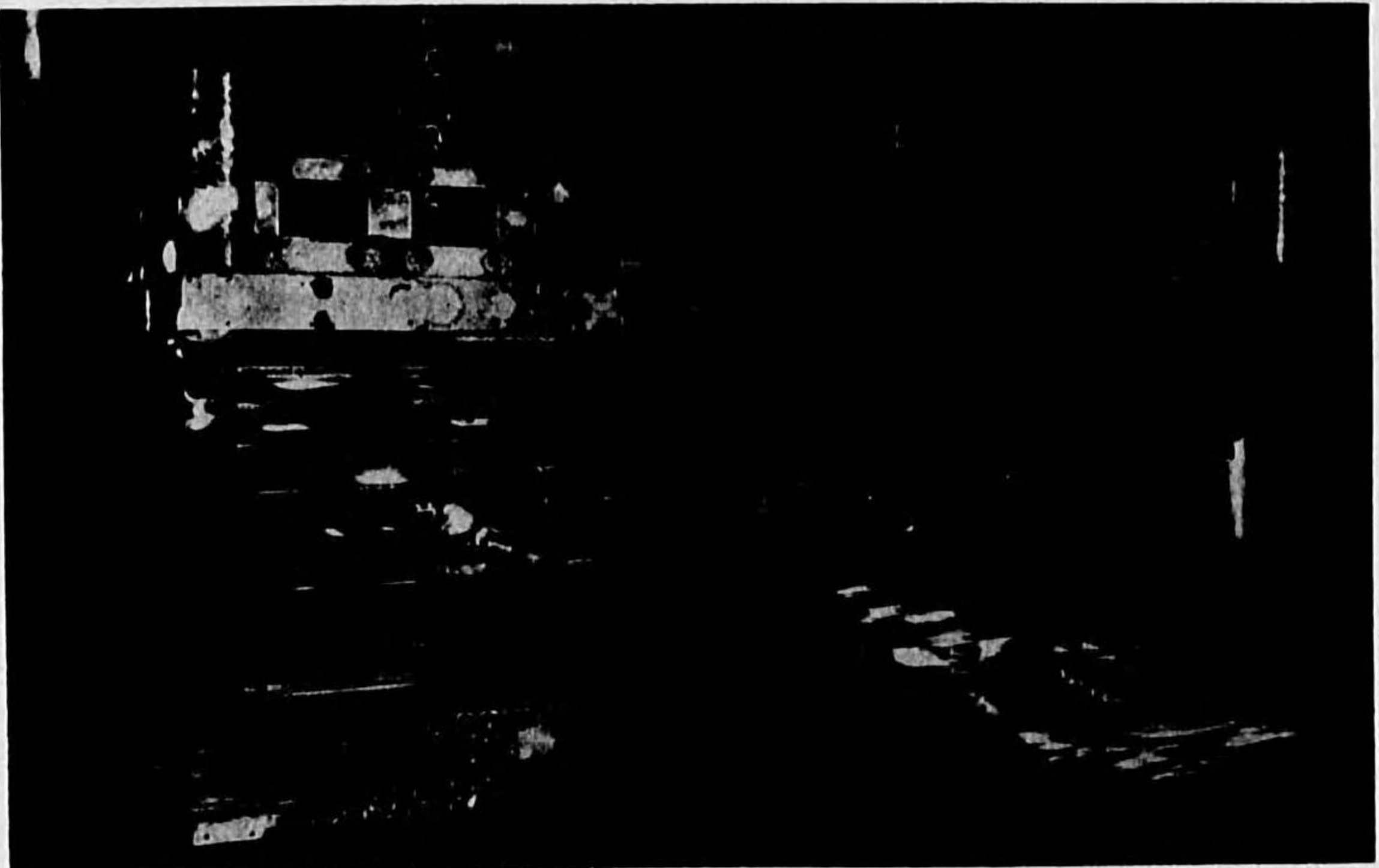


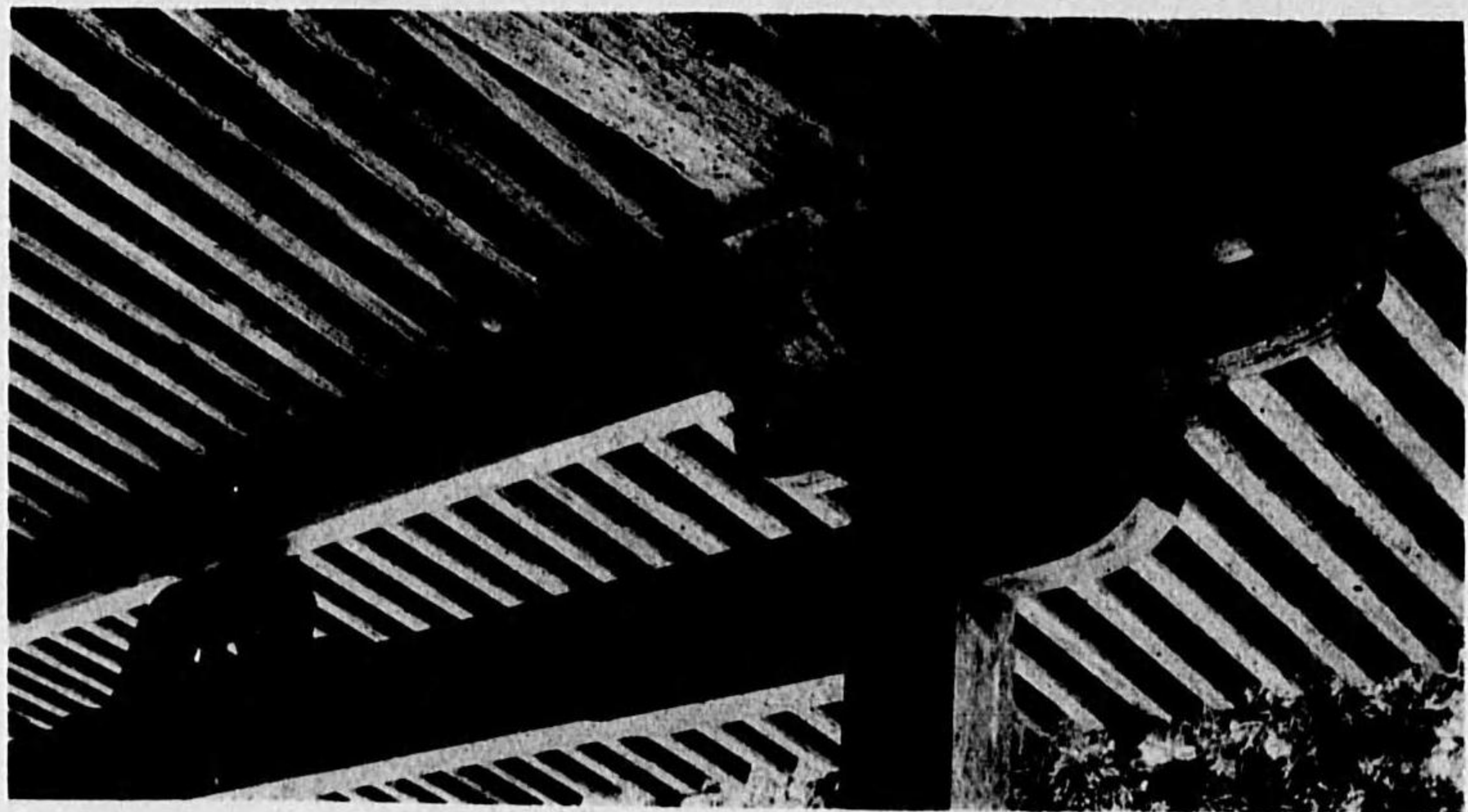
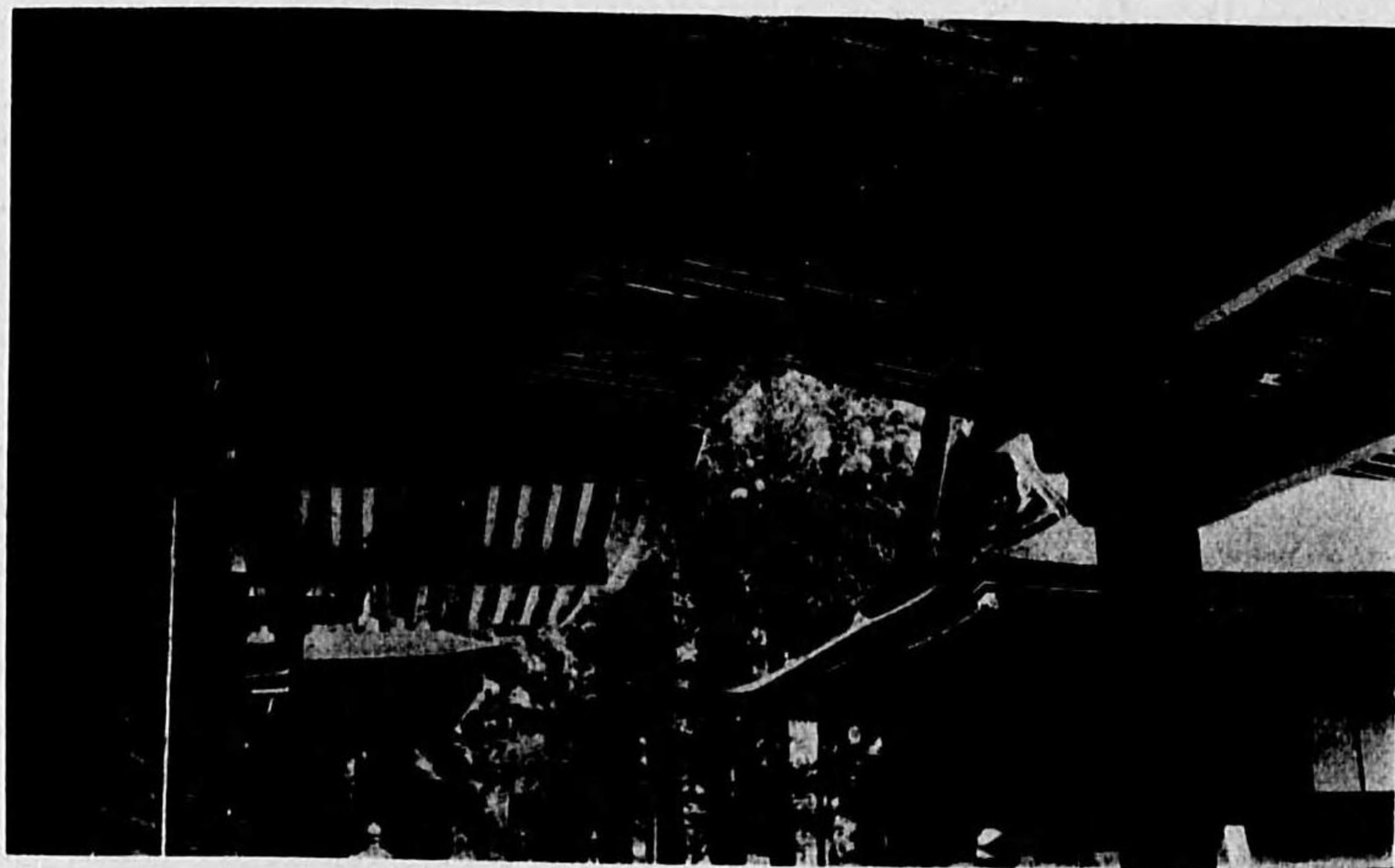
上、五〇 金剛峰寺薬師堂須彌壇
 下、五一 同 位牌堂須彌壇勾欄親柱

(昭和六年八月五日)
 (昭和七年十二月十六日)

(上圖右端物差は曲尺の一尺・下圖物差は曲尺の約一尺(一呎))

須彌壇は唐様で、黒漆地に唐草・蓮瓣・幾何模様等を金で描いてあり、其上隨所に飾金具が打つてあるから、其美さ例ふるものがない。上下線形の間は少しく外方に彎曲した束を適宜に入れ、其間には「牡丹に唐獅子」の彫刻を充填してある。下圖は位牌堂須彌壇に残された唯一の寶珠柱で、來迎柱についてゐるのならあるが、完全に遊離して立つてゐるのはこれのみである。

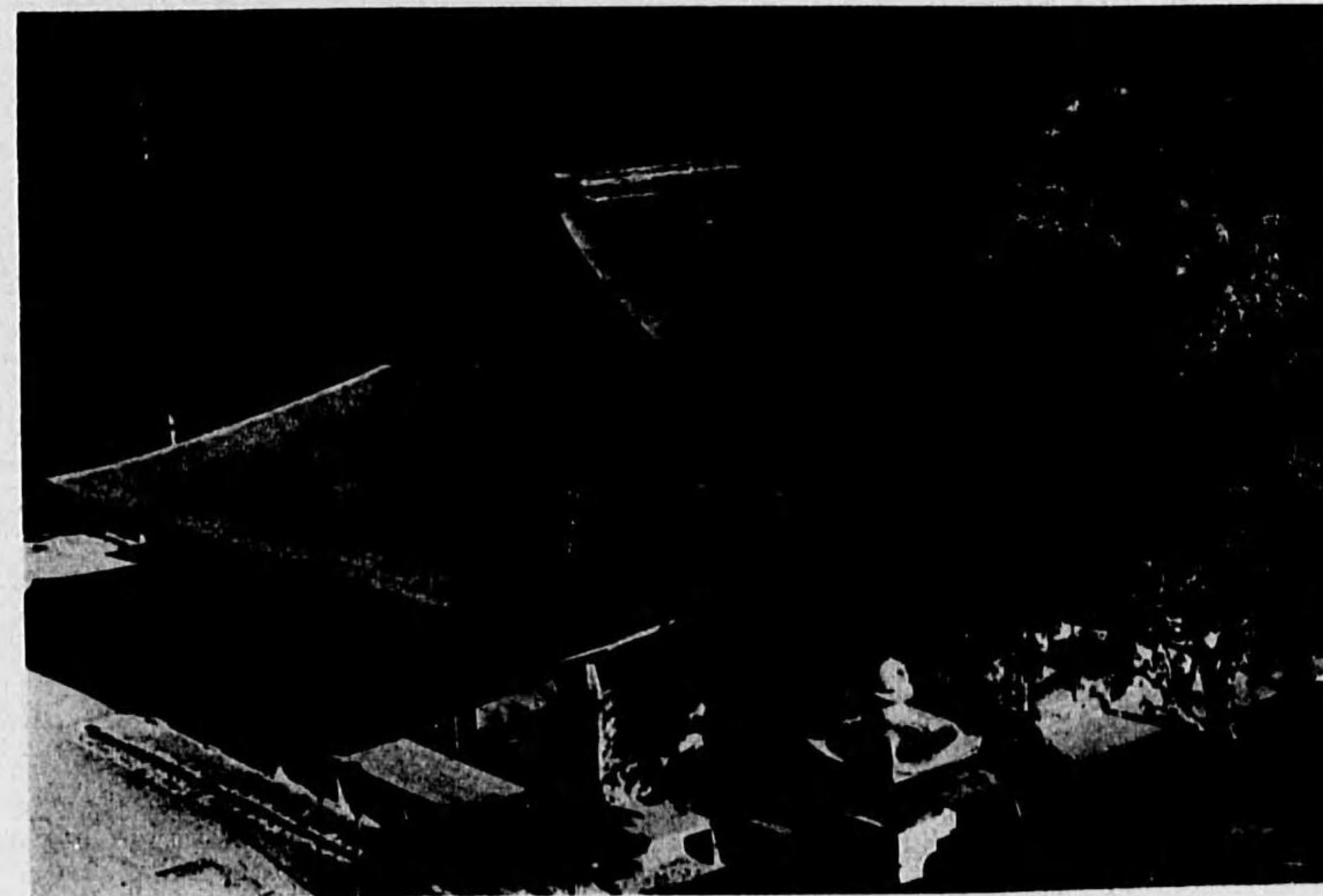
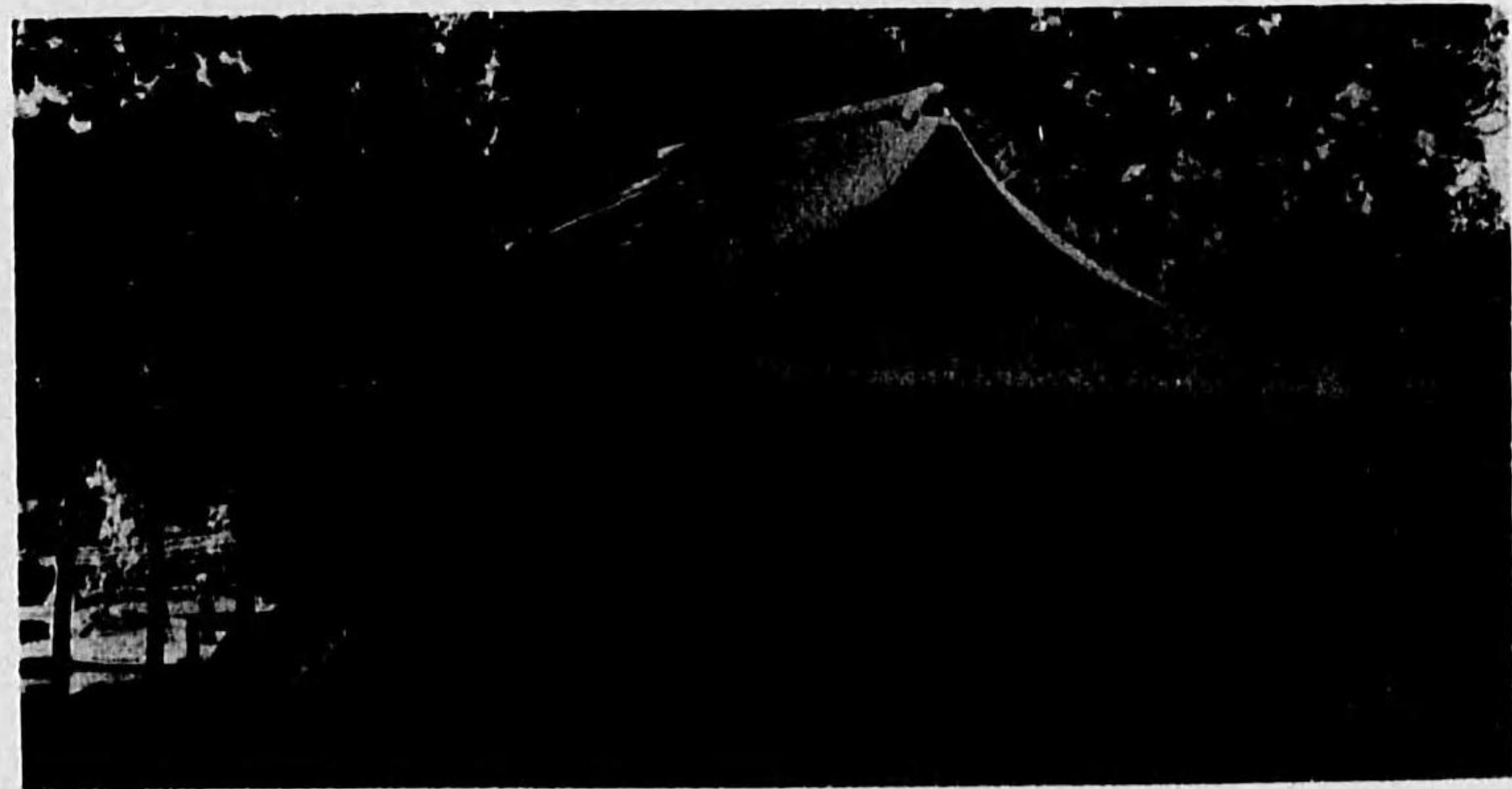




上、**五四** 金剛降寺不動堂本堂向拜部分 其一（昭和八年七月十四日）
 下、**五五** 同（ ） 其二（昭和八年七月十四日）

上圖は向拜の繫虹梁二本のうち、北方のものを南から見た所。細過るといふ感があるかも知れぬが、普通此種のは割合にきょしなものである。下圖は同じく向拜柱間の虹梁の一部を、南方の柱上料拱と共に内側から見たもので、其北端は上圖の右方に現はれてゐる。此等虹梁は何れも「袖切」も「眉」もなく、肘木・丸桁と共に、其下端に大面が取つてあるが、此等は總て純和様の手法である。丸桁や虹梁に大面をとるのは、奈良時代からある手法と認められるが、肘木のは前代に始まつたらしい。

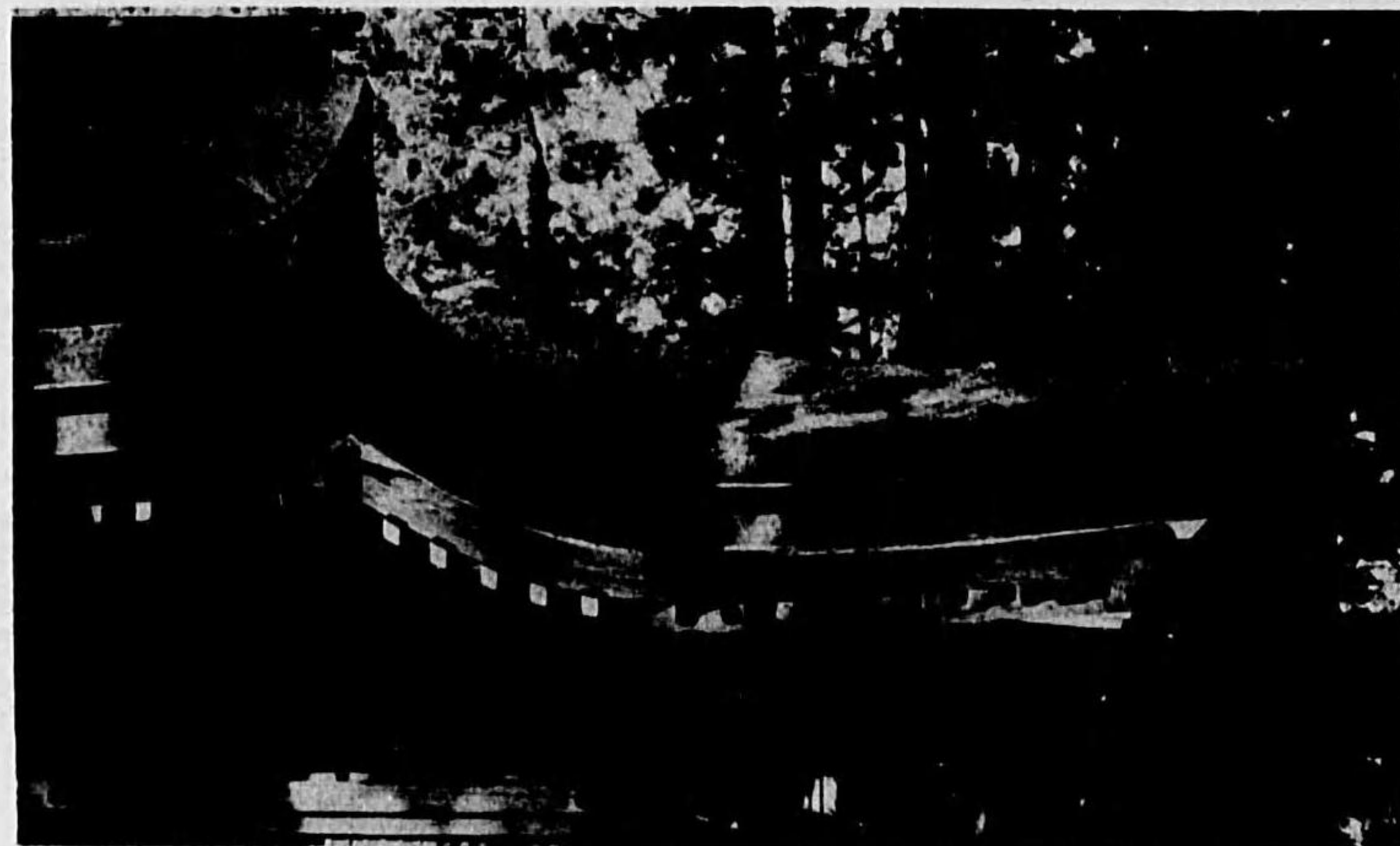
上圖の下がらゐる鍵の手の鐵は半部を吊る爲である。



上、**五二** 高野山不動堂本堂 其一（昭和五年四月一日）
 下、**五三** 同 其二（昭和十年五月十六日）

此堂は一心院谷にあったが、明治の末年に近く大修理のあった時、都合により現在の位置に移したもので、其四隅の形式が同じでないため、四人の工匠が別別に一隅づつ造り、後につき合はしたといふ傳説を生じたのである。本文に詳細記述した通り、邸宅建築を巧みに佛寺建築に取入れたものとして頗る有名である。上圖は東北方から見たものだが、下圖は大塔の足代棧橋から俯瞰したところで、再びとれない

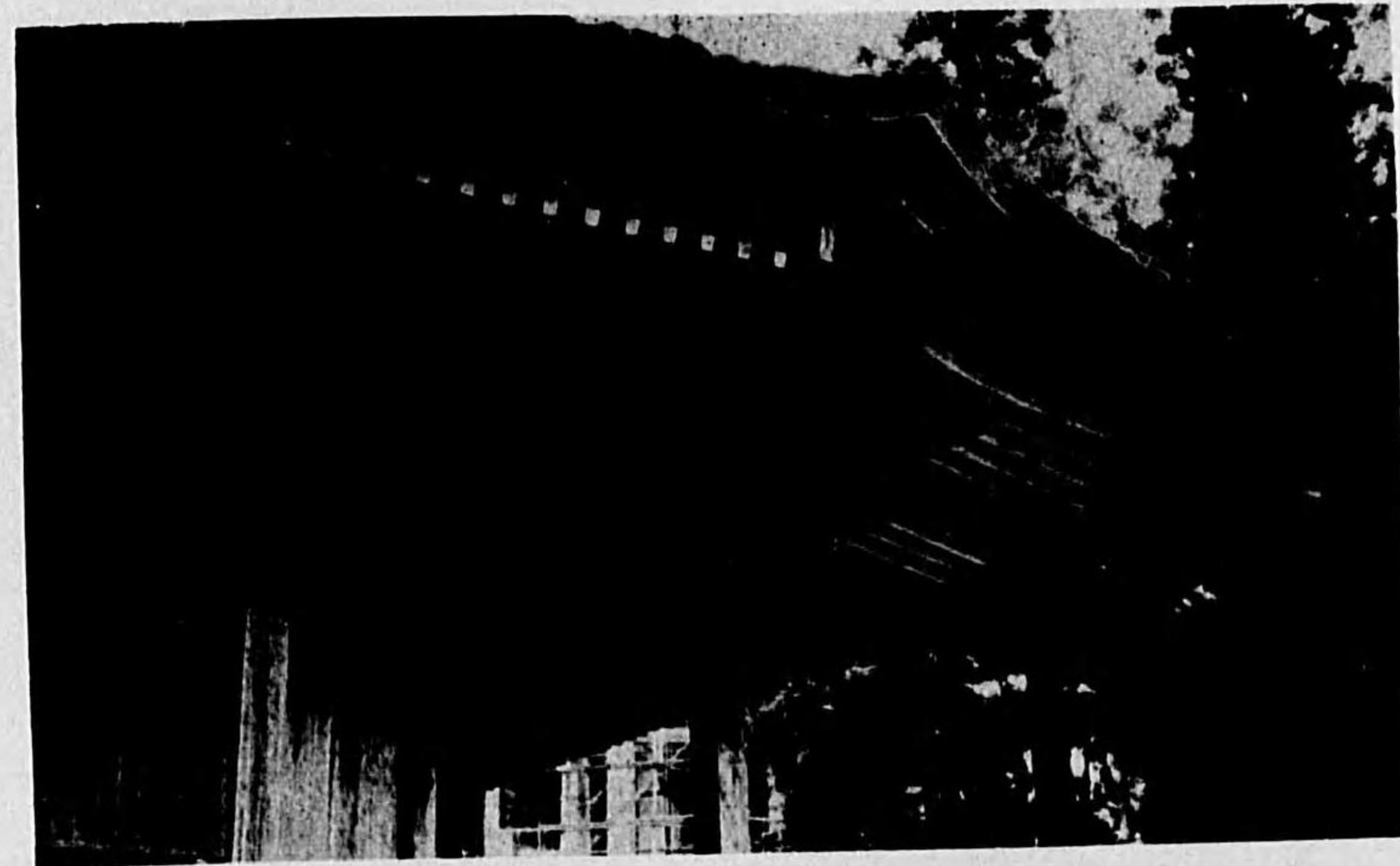
寫眞である。八條女院の御願により、建久八年建立されたものといふ。



上、**五八** 金剛峰寺不動堂本堂西北隅縄破風 (昭和十年五月十六日)

下、**五九** 同 西南隅縄破風 (昭和十年五月十六日)

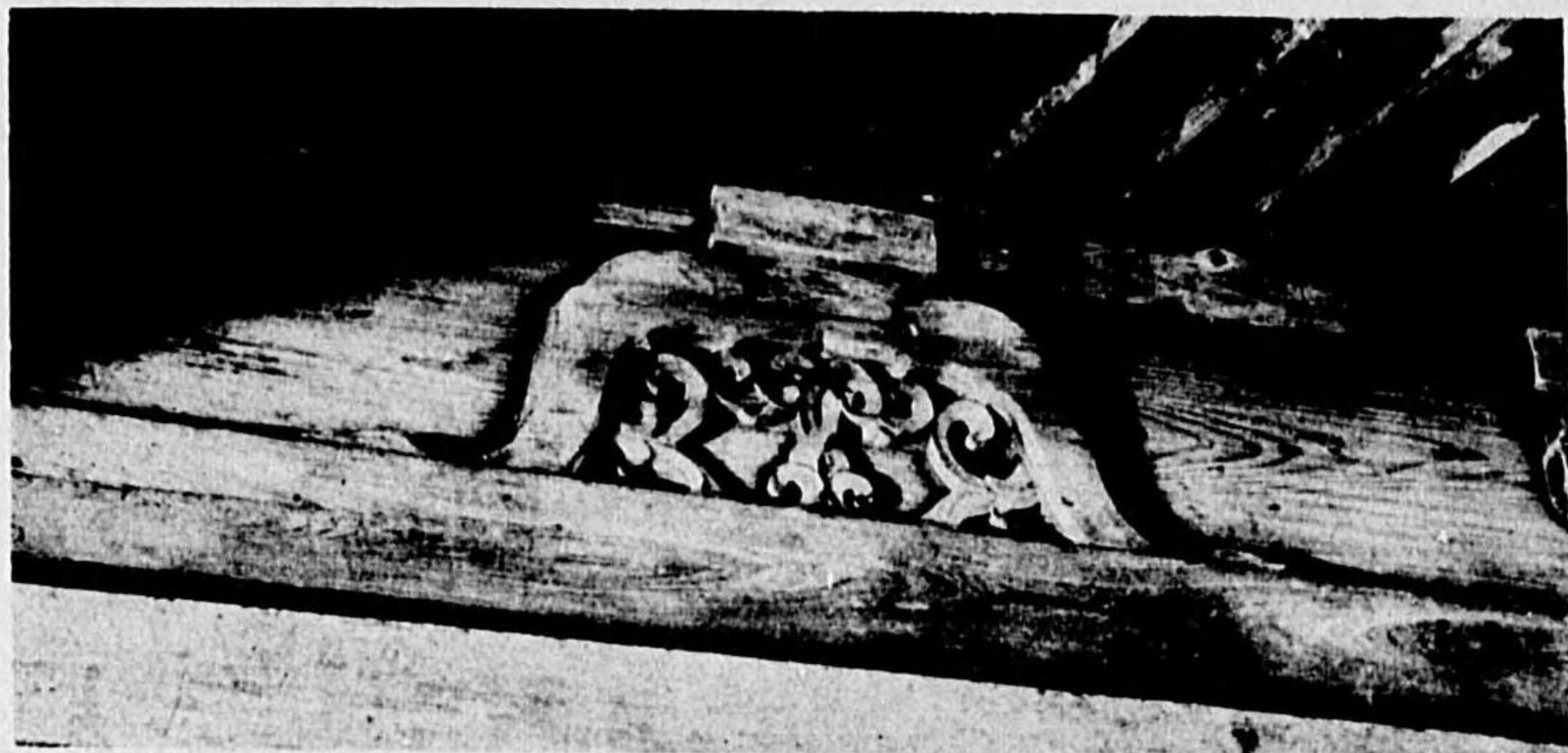
前頁下圖右方の柱に沿ひて曲つた入隅の部分を真正面にみたのが上圖である。だから其左方の柱は、丁度**五七**の右方の柱に當るので、この柱の上の方に見えてゐる縄破風は**五六**の夫の反對側のである。だから正面の東北隅は軸部のみ入隅をなしてゐるのに對し、裏手の西北隅は屋根迄が入隅になつてゐるのである。夫から後面を廻つて西南隅になると、**五九**の様に、恰も「日吉造」の背面の如き取扱がしてあるのである。だから少くとも正面左隅と背面兩隅と、三通は異なつてゐる。



上、**五六** 金剛峰寺不動堂本堂東北隅縄破風 (昭和八年七月十四日)

下、**五七** 同 北面西端部分 (昭和八年五月四日)

上圖の殆んど中央、角柱上二手先の持送りと其上の軒桁とは、**五四**の左下に黒くはらきり寫つてゐるのと同じものであるから、此圖は不動堂のどの邊だといふ事が知れよう。即ち北側の廂は「縄破風」を以て主屋に取付けられてゐるのである。この縄破風下の垂の勾配は、軒桁から内と外とで異なつてゐるのもよく判る。下圖は北側西の間中央の養股と柱上の料拱を見せたもので、北側三本の柱上に限り、きゃしゃな「舟肘木」を用ひてある。



上、六二 金剛峰寺不動堂本堂北面東端臺股 (昭和八年五月四日)

中、六三 同 北面西端臺股 (昭和八年五月四日)

下、六四 同 背面中央臺股 (昭和八年五月四日)

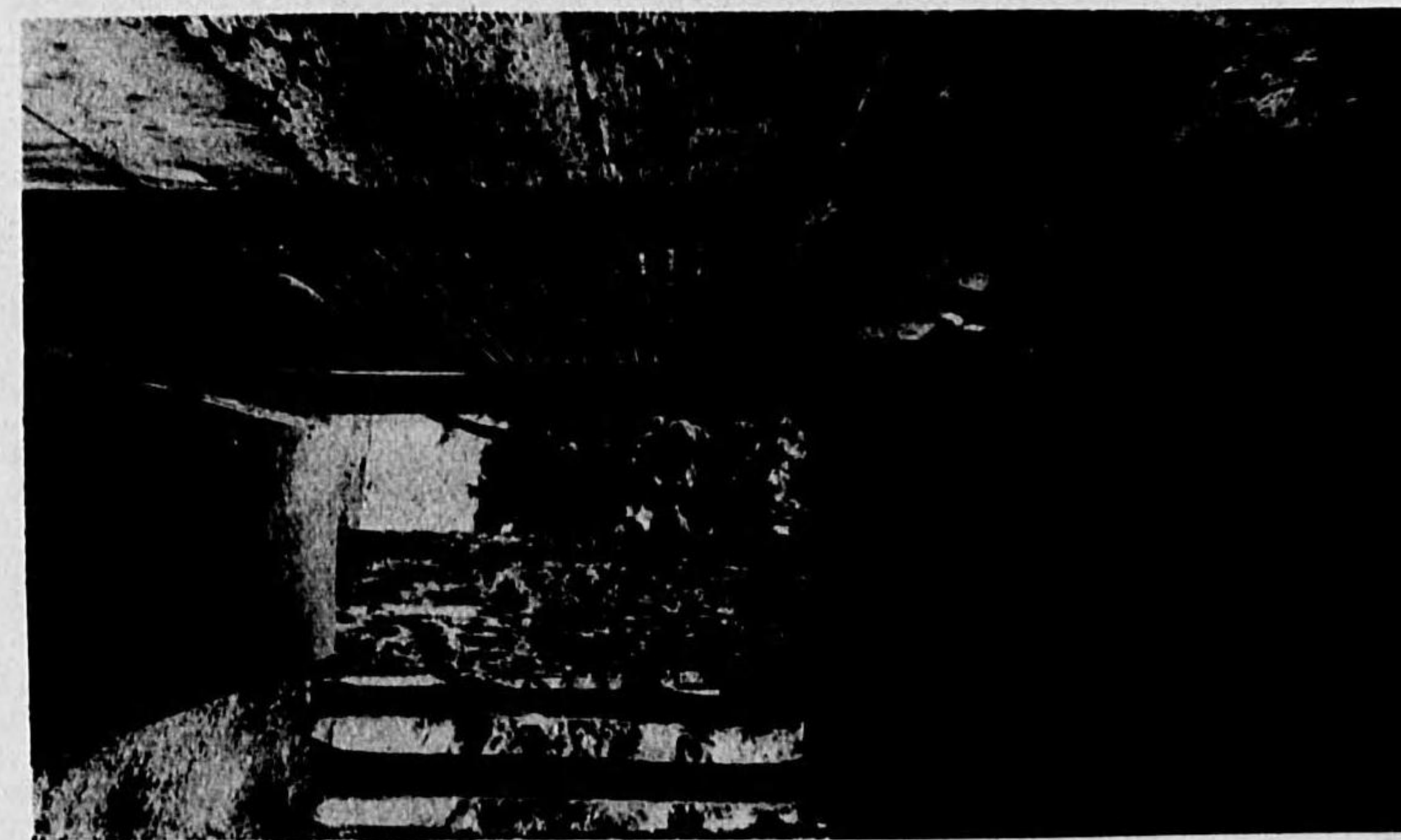
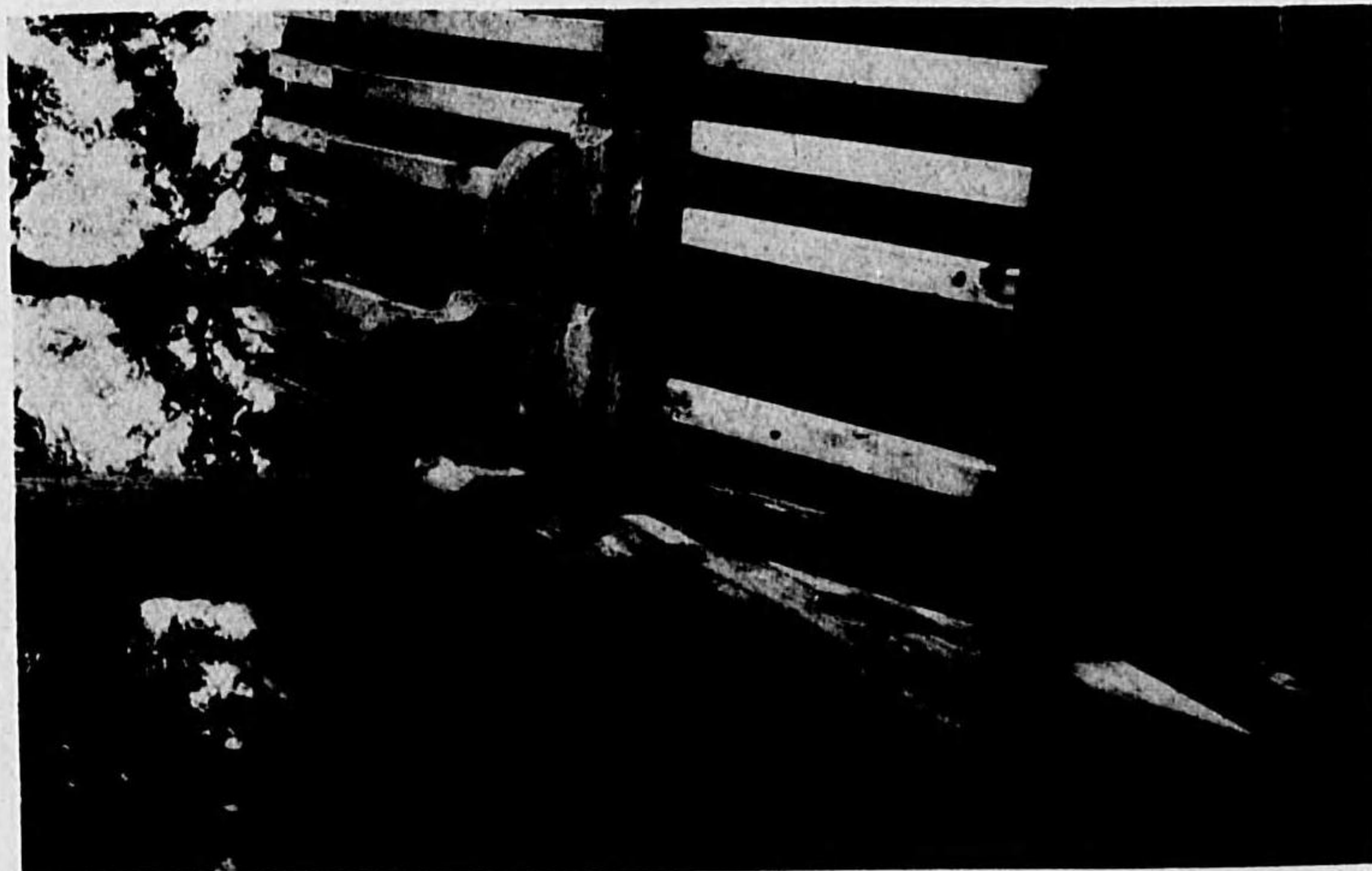
不動堂外部には、向拜の分も入れて合計十八個の臺股がある。そのうち六二の様なものが最多で總數十五。六三のは僅に一二、殆んどこれと同様なものが他に一つ。背面中の間のは寶珠入て是亦一個(六四)。何れも傑作で、建久頃に

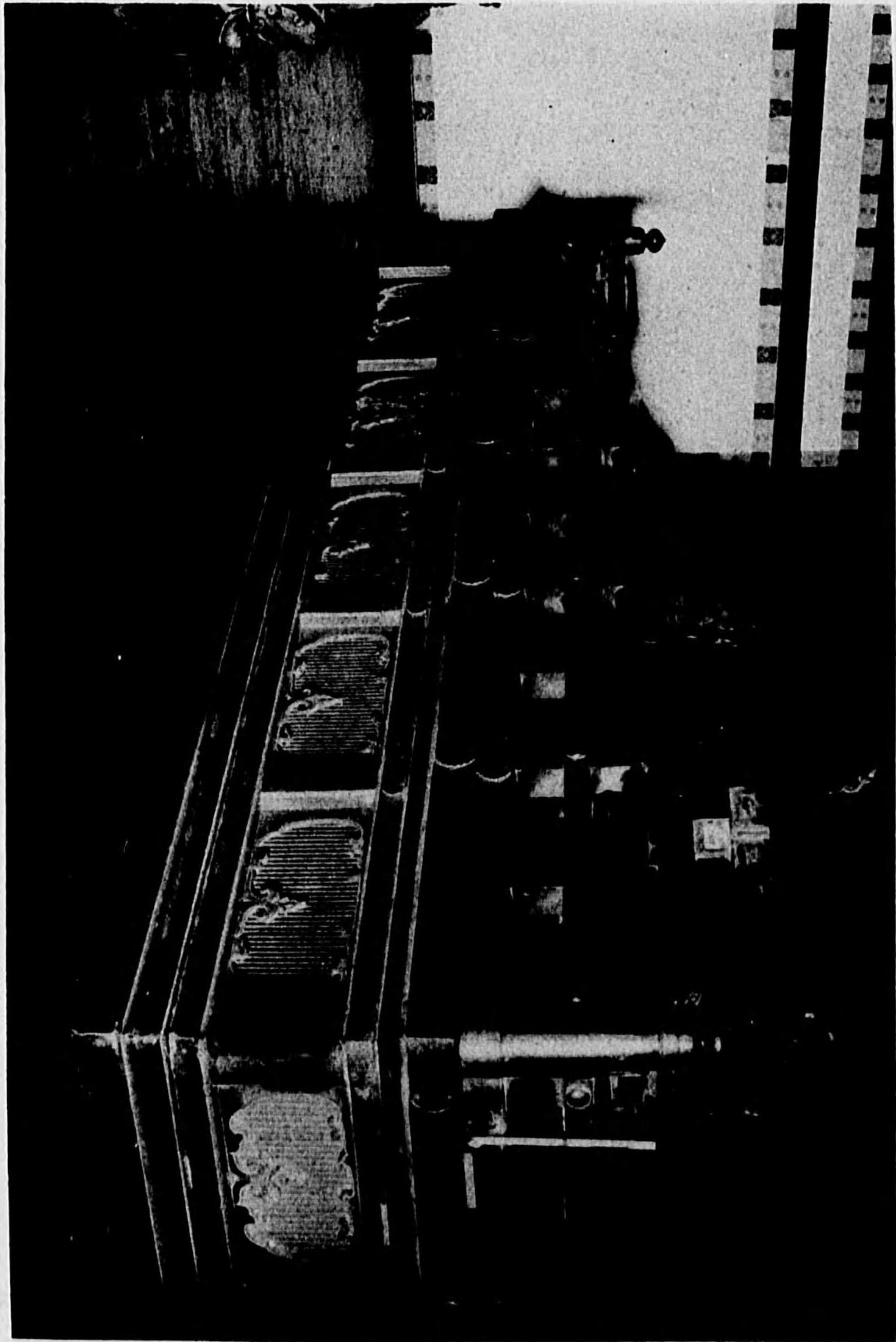
よくもこの位發達したものだと思ふ。

右圖は東西隅を南側椽上から、左圖は其東端を北方から見ただけである。だから右圖部戸の前方に黒く見えたる遊離した柱は、左圖のものと同じ柱である。この隅を東からみると、總破風のついでであるのは五九を變りはないが、軸部が吹放になつてゐるのと、さうでないのとの差がある。これで此建物の西隅が何れも互に異なるものと判つたであらう。

左、六一 同 東南隅 (昭和八年五月四日)

右、六〇 金剛峰寺不動堂本堂南面部分 (昭和八年七月十四日)

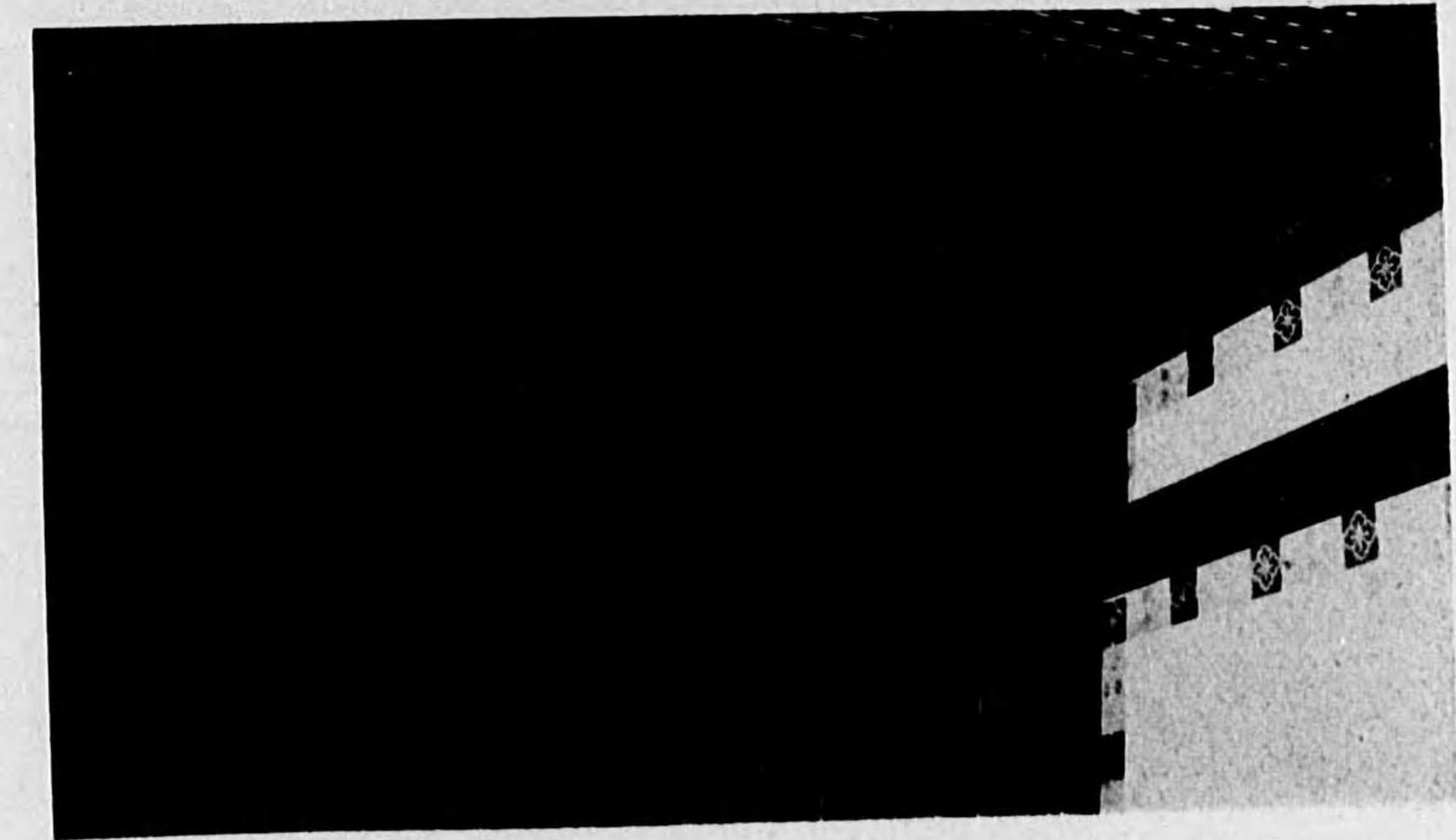
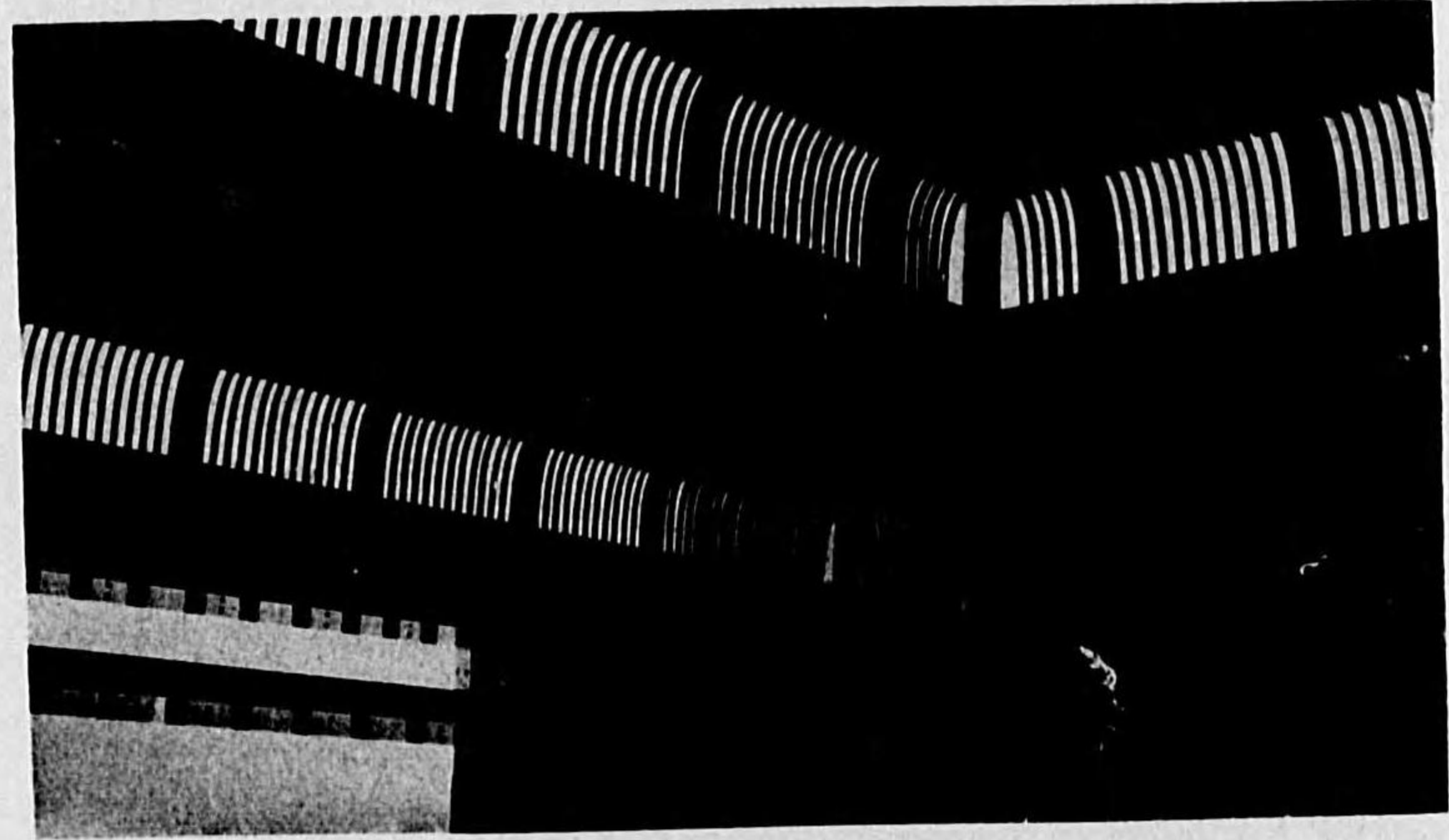




（昭和五年七月四日）

六七 金剛峰寺不動堂本堂須彌壇

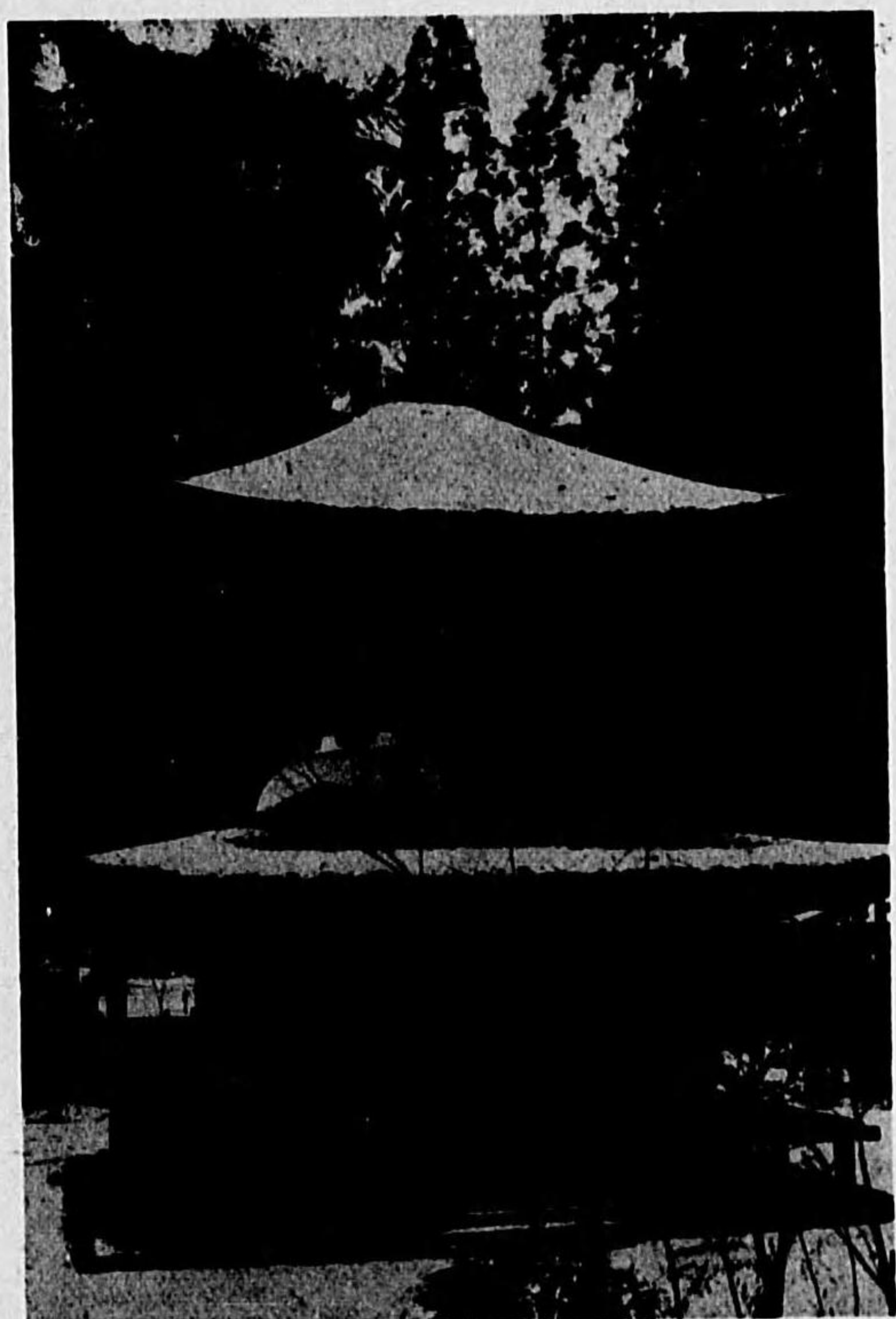
當代の和様須彌壇としては有数の傑作で且つ代表的のものである。御舎具の形並に毛彫の蓮華唐草に注意せよ。物差は曲尺の一尺。



上、六五 金剛峰寺不動堂本堂内部（昭和二年四月二十九日）

下、六六 同 脇間（昭和二年四月二十九日）

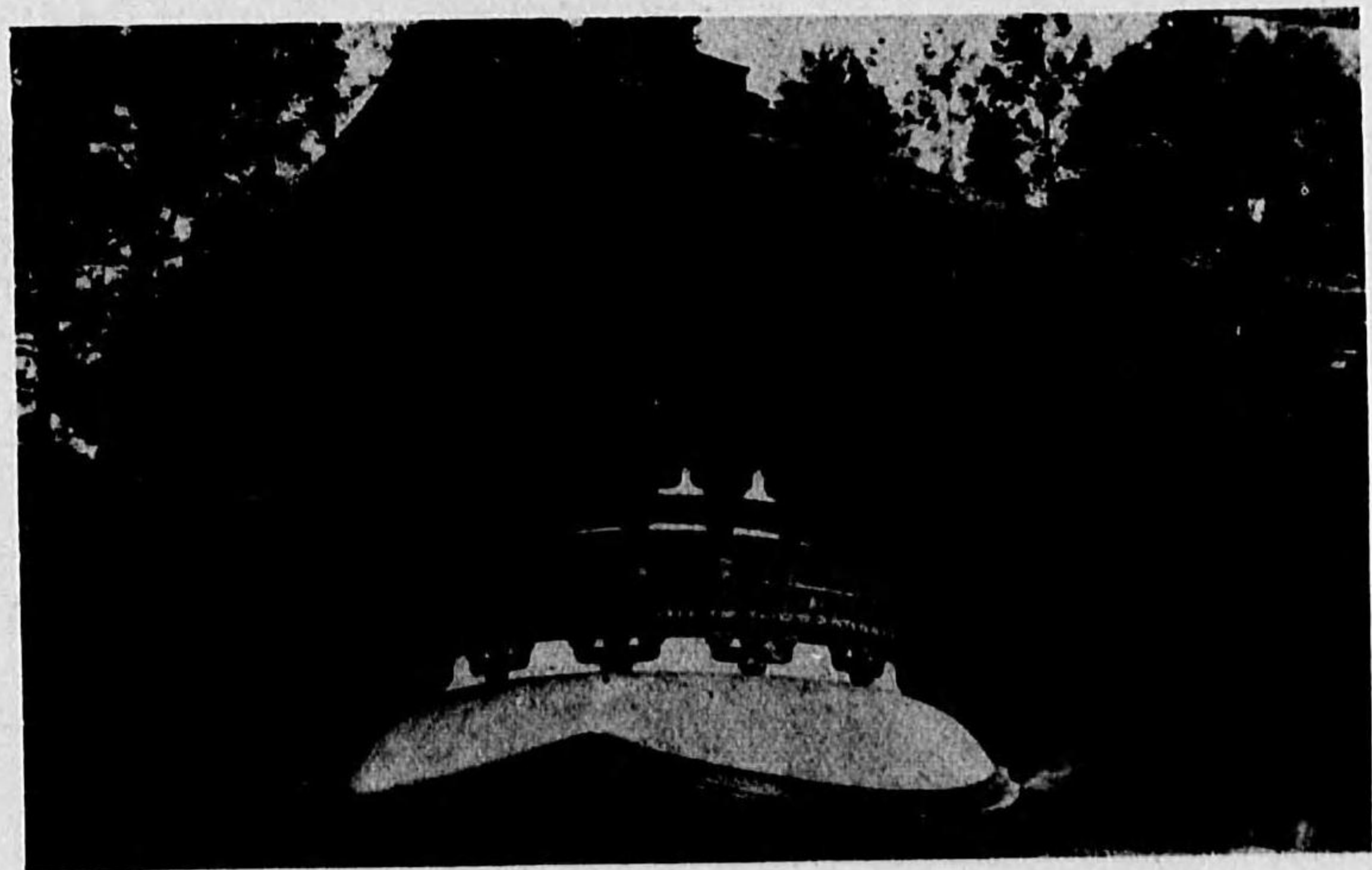
上圖は内外陣の西南隅を見たところで、共に折上小組格天井をはってある。側柱は總て鎌倉一流の四面取方柱であるが、内陣の四本柱は何れも太き圓柱にしてあり、そのうち後方の二本は間に板壁を設け、其間に須彌壇を設けてある(六七)。下圖は北側の脇の間内部で、五二の入母屋下に見えてゐる兩開の板扉をあけて入り、左即ち東を向いてとったのが是。長押上には横の盲連子を入れ、小組の格天井をはってゐるのは、純和様の鎌倉式手法といへるのである。



上、六八 高野山金剛三昧院多寶塔全景
下、六九 同 部分

(昭和七年十二月十六日)
(昭和八年五月四日)

貞應年間平政子の建立といふ。石山寺の夫と共に、我國現存最古の多寶塔と考へられてゐたが、近頃河内の天野山金剛寺多寶塔が、全體としてではないが、一部分に平安時代の様式を備へたところがあることが判つたので、最古とはいへない様だが、恰好は洵に申分がない優秀建築である。



上、七〇 高野山金剛三昧院多寶塔初重飛簷隅木
下、七一 同 出入口上

(昭和八年七月十四日)
(昭和八年五月四日)

下層各柱上料拱間には、脚間に何等彫刻のない、つまり輪郭だけの葺股を入れてあるが、これ等は平安時代の二木片を合せた式の葺股が少しく進歩したものと見られ、反て此塔が鎌倉初期として首肯されるのである。尙ほ初重化粧飛簷隅木の鼻が特殊の形をしてゐるのは珍らしく、孝恩寺觀音堂(木積の釘無堂)に類例を見るのみである。

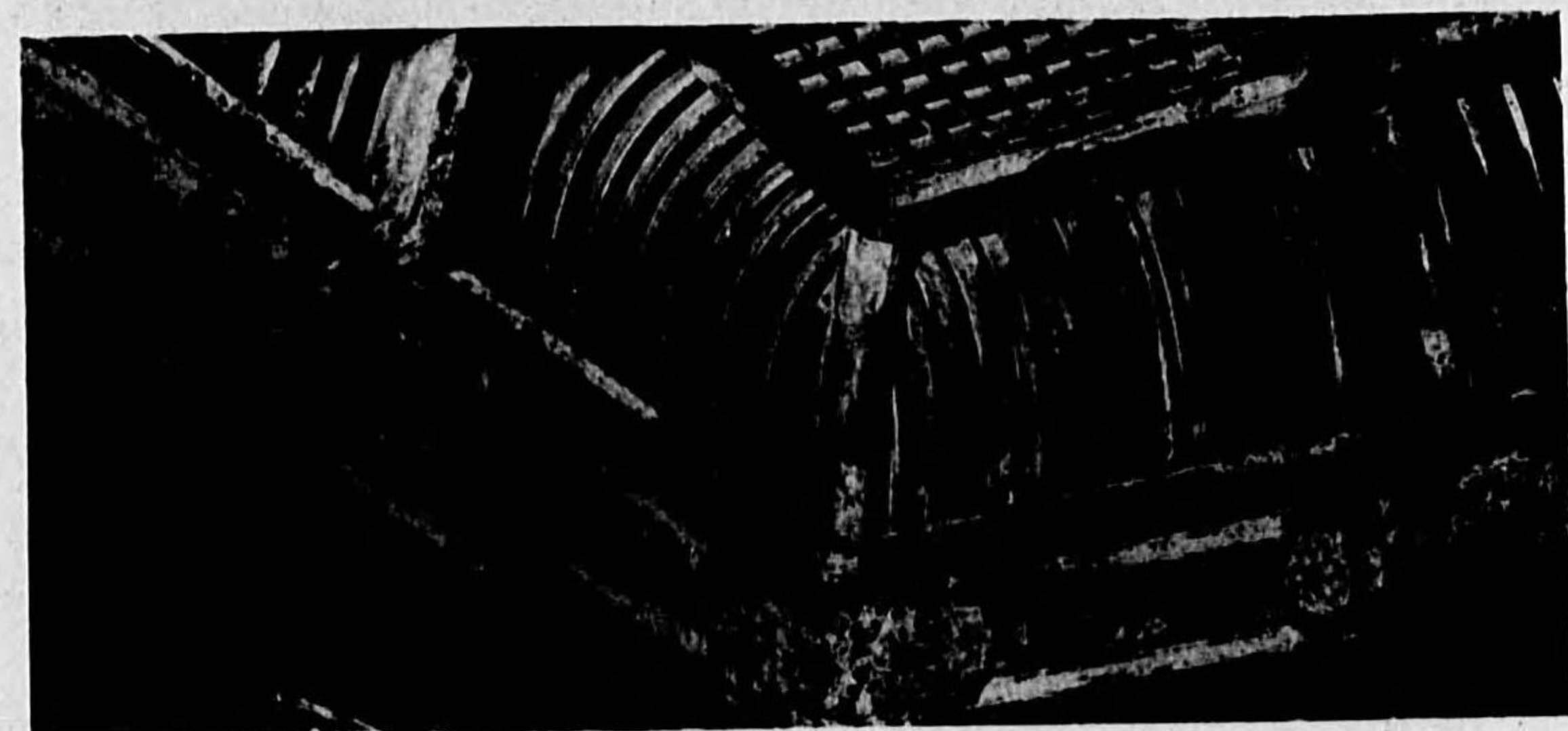
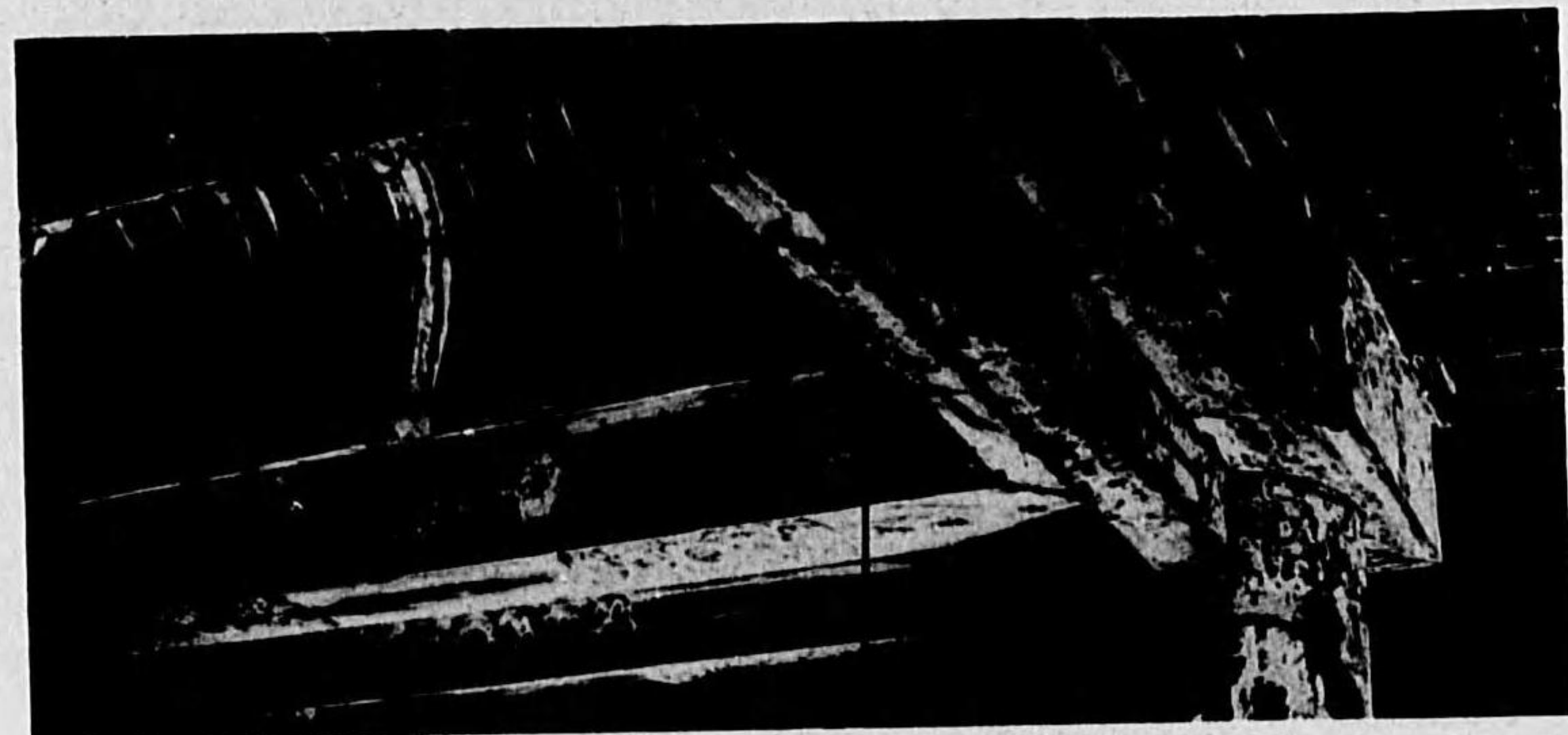
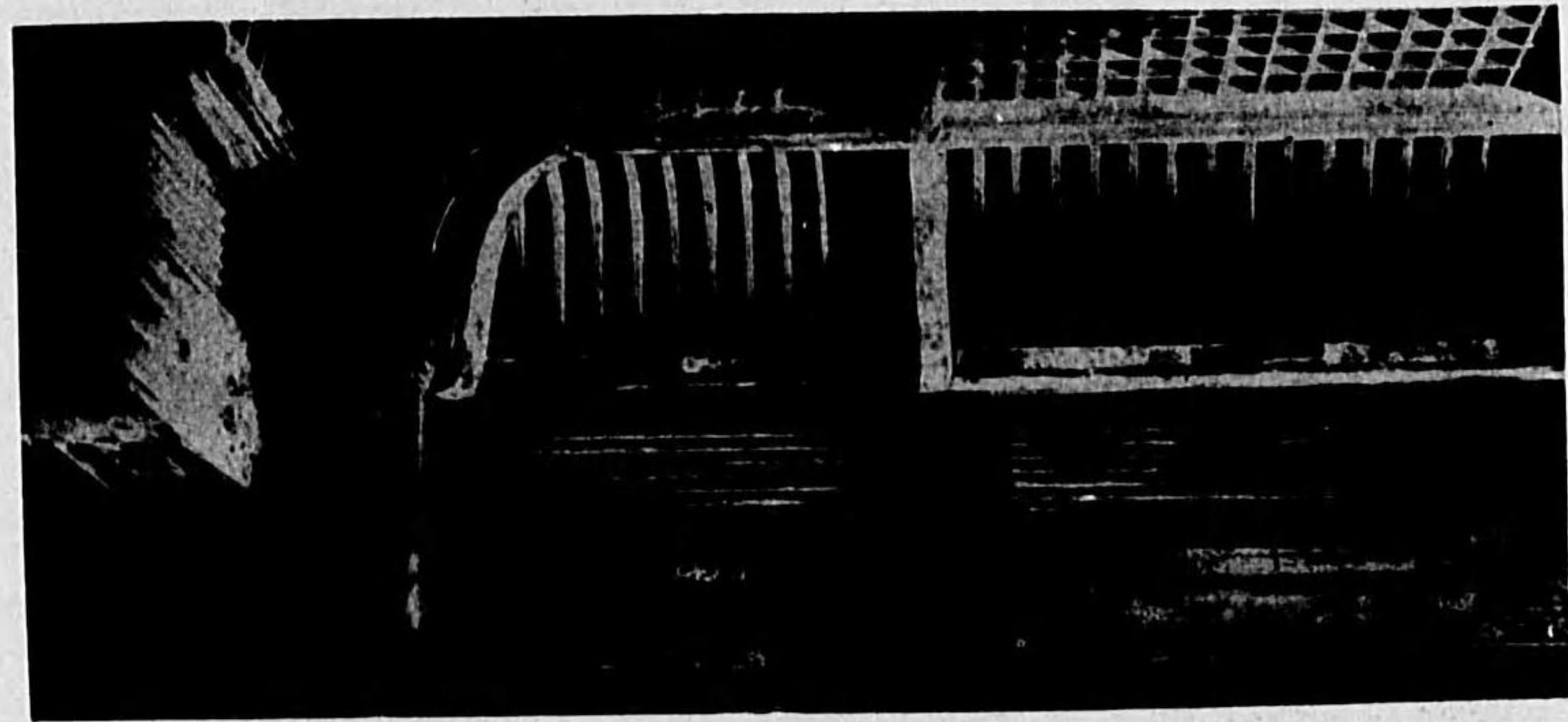




上、七五 高野山金剛三昧院經藏正面 (昭和七年十二月十六日)

下、七六 同 側面 (昭和八年五月四日)

前記多寶塔の傍に建ち、校倉造檜皮葺の小建築であるが、鎌倉時代の校倉造は多くないから、此は貴重な標本である。正面出入口附近と屋根とに後補の箇所があるが、大したことではなく、よく古式を存してゐる。内部は天井なく、桁行を三分して前後に桁を渡し、其桁の中央から左右の側面及び隅行に更に繫梁を出し、夫等が側から外に出る所は肘木となり、其先端に斜(隅は鬼斜)をのせて軒桁を支へてゐる。(参頁参照)。

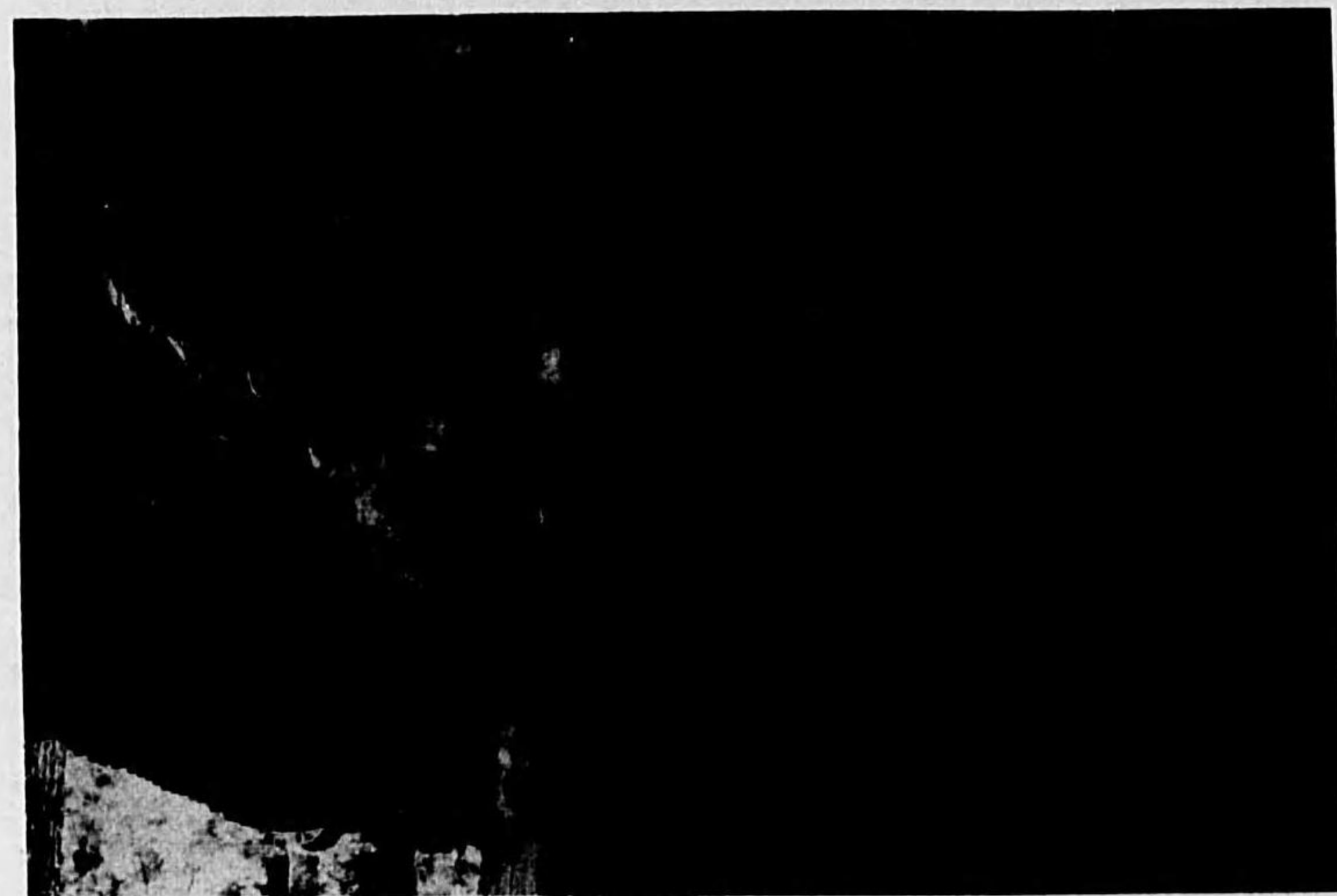


上、七二 高野山金剛三昧院多寶塔外陣天井一部 (昭和八年五月四日)

中、七三 同 四天柱上部 (昭和八年五月四日)

下、七四 同 内陣天井一部 (昭和八年五月四日)

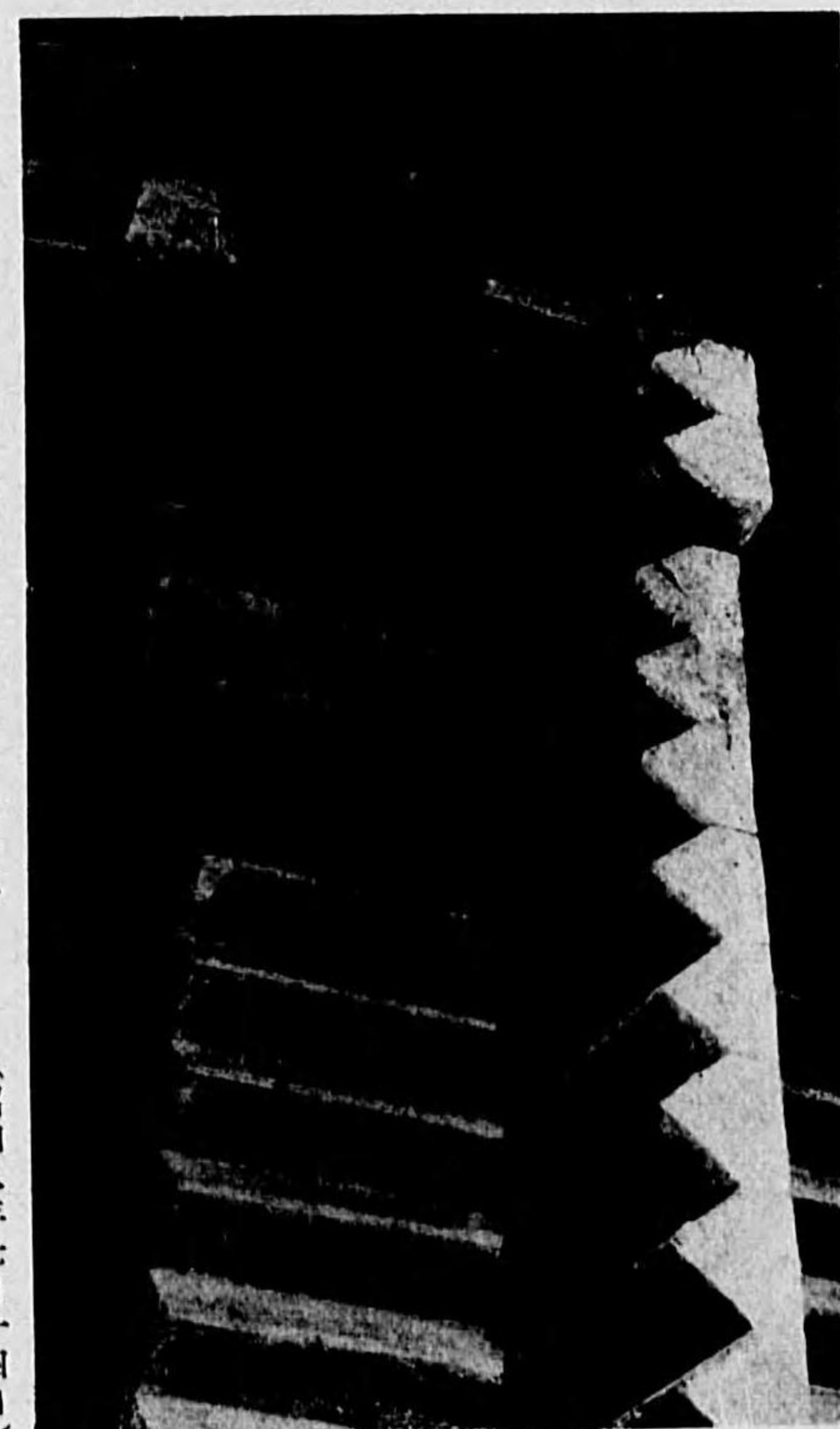
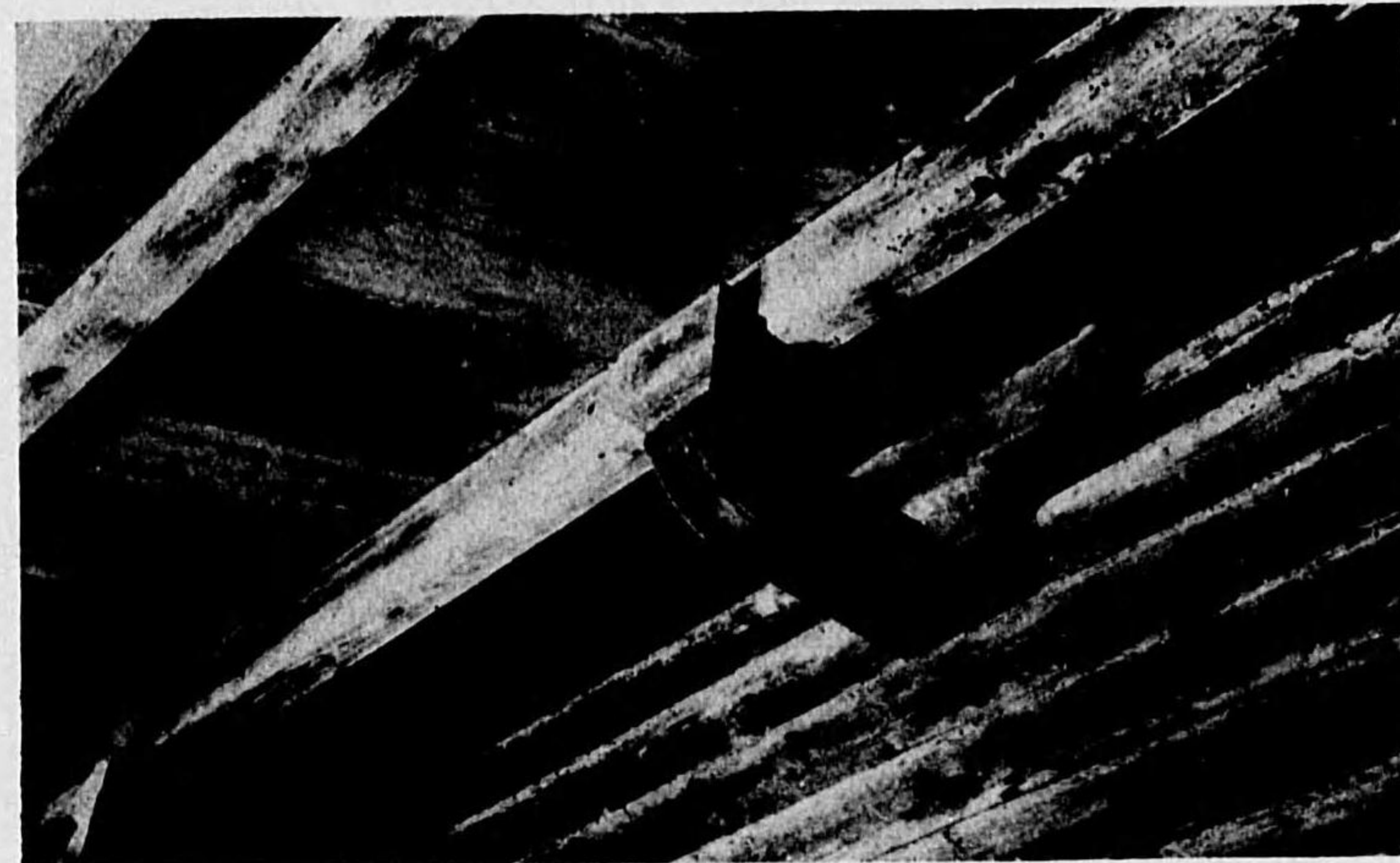
何れも鎌倉時代の典型的和様の手法から成り、彩色も立派に美しく残存してゐる。



上、七九 高野山金剛峰寺奥院經藏全景 (昭和六年八月五日)

下、八〇 同 部分 (昭和七年六月十日)

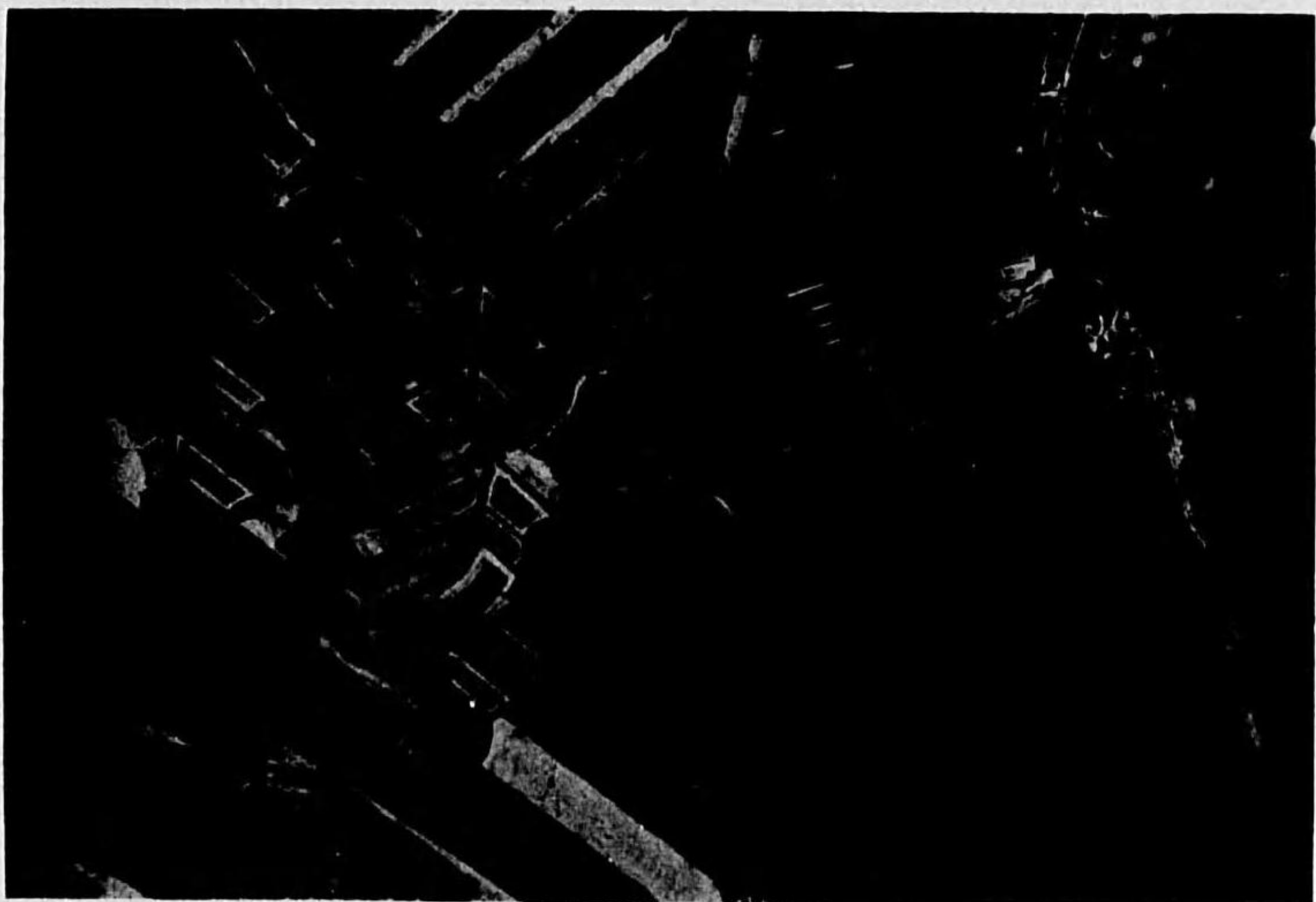
此經藏は正面の額に石田三成が「爲悲母菩提」に建立した(裏に慶長四年三月二十一日)と刻んであるし、各部の手法が何れも桃山式と見られるので、建立の動機及び年月は確かである。方三間竇形造柿葺、外部素木の小建築。下圖は西北隅柱上の出組料拱を見せたもの。



上、七七 高野山金剛三昧院經藏側面中央料拱
下、七八 同 隅料拱

(昭和八年七月十四日)
(昭和八年七月十四日)

兩側面は中央に一所、正背面は三分した點に一所づつ合せて二所、夫から四隅に一所づつ肘木を出し、隅だけは鬼料、其他は普通の料をのせて、夫等で軒桁を支へてゐる。其軒桁は各隅で組んだ三角——實は五角——の木のうち、上の二本を少し長くだし、其上にのせてあること七八の如くで、巧みな方法を用ひてゐる。而も隅行の肘木だけ下端に面をとてゐる。さうして此面は桁と化粧隅木に及んでゐるのは、一層効果的であると思ふ。



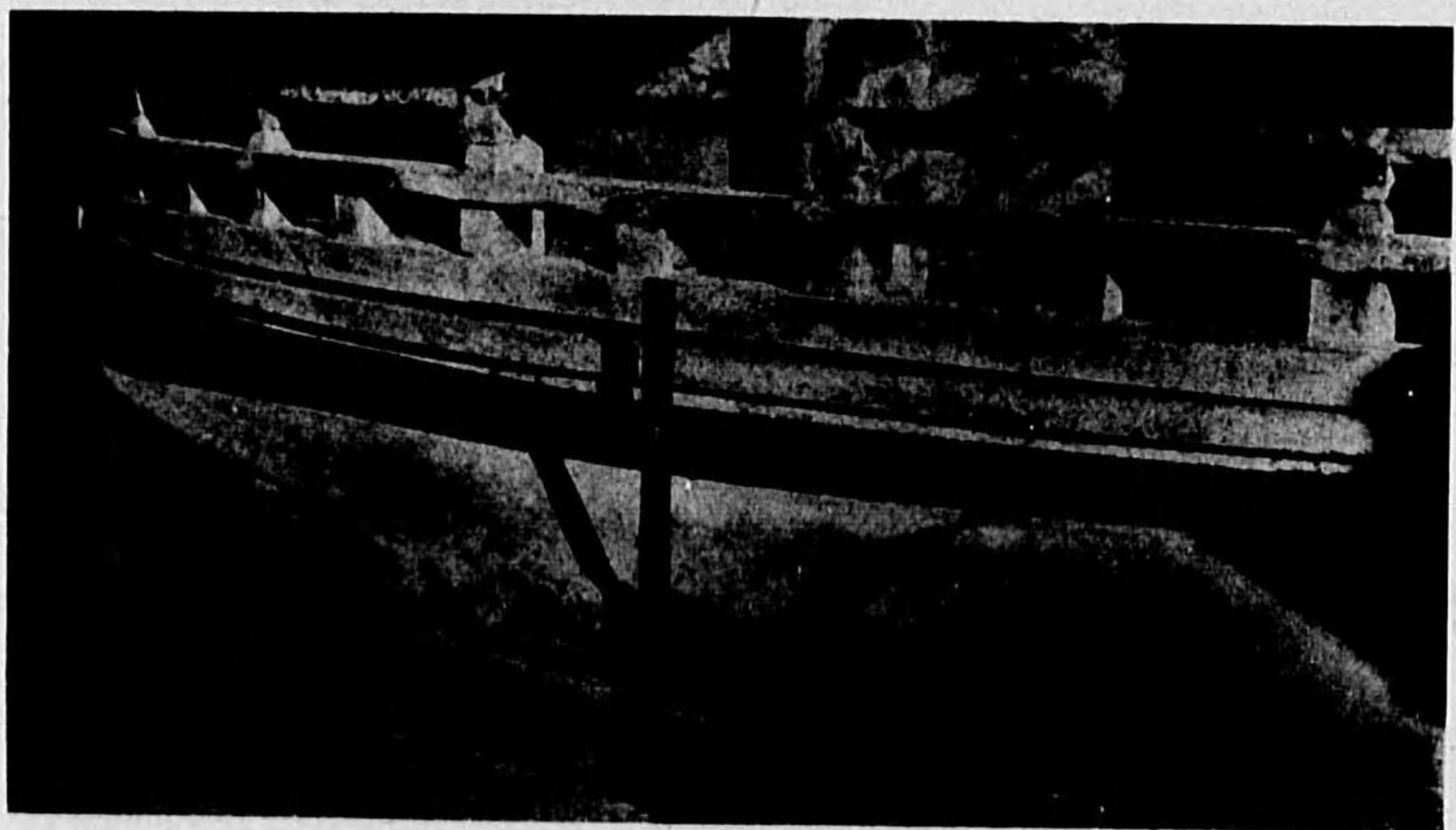
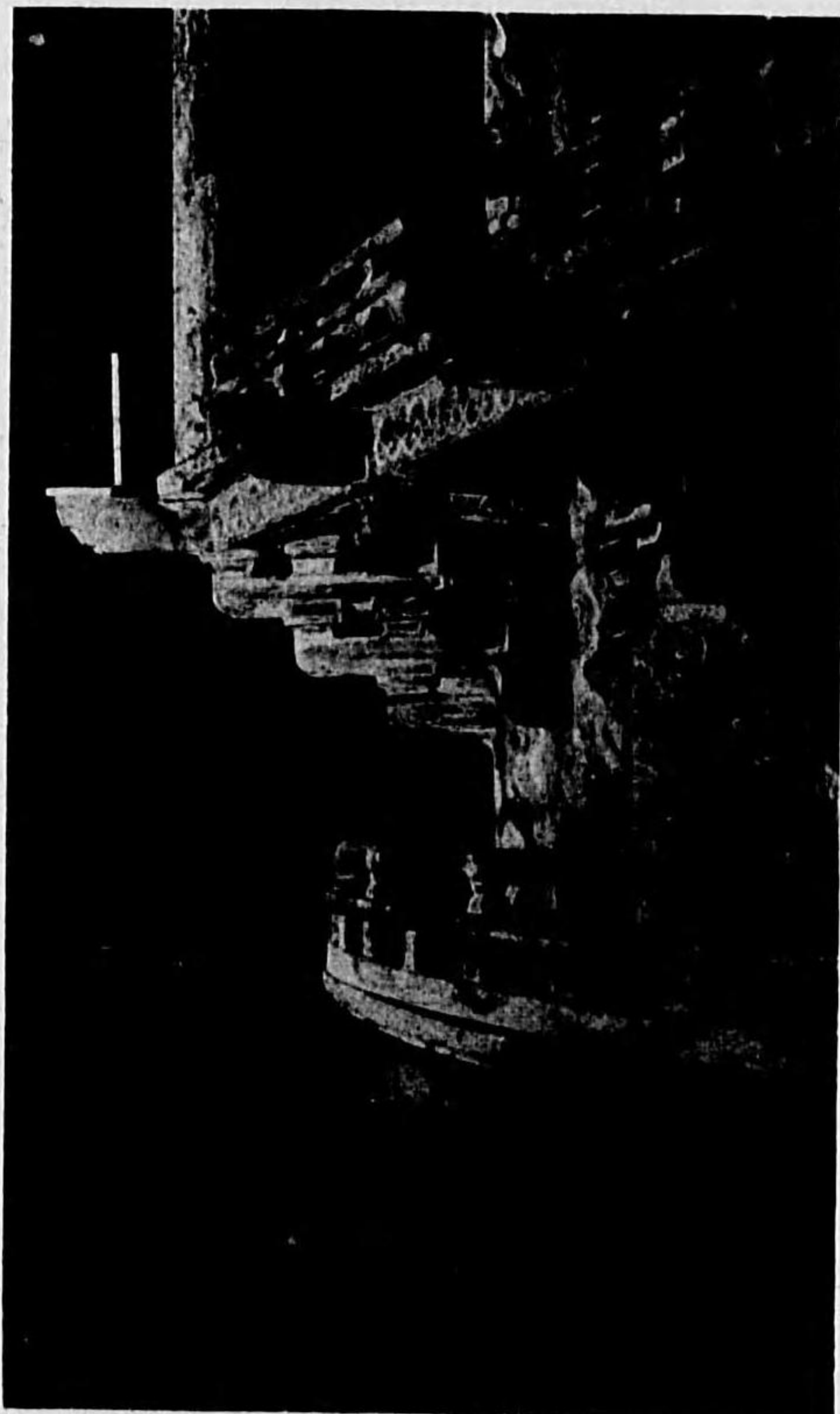
上、八一 高野山金剛峰寺奥院經藏内部 其一 (昭和六年八月五日)
 下、八二 同 其二 (昭和六年八月五日)

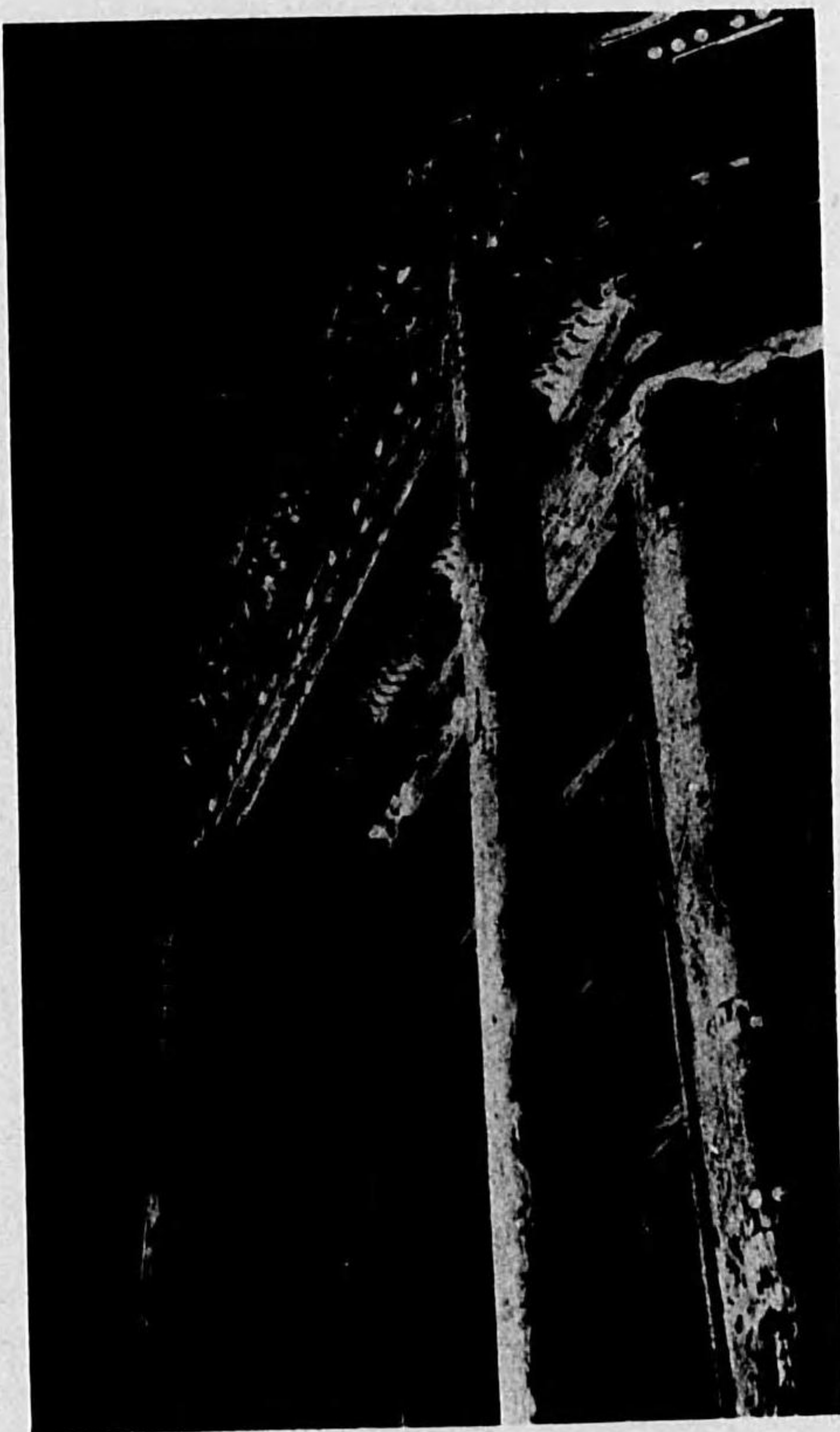
上下圖で明らかな通り、内部は極彩色和樸出組で、柱當りの頭貫側面には疑斗目模様を描いてある(四七)。經藏は例へ建物が和様でも、内部にある輪藏は常に唐様である。此場合も亦さうで、尾樺や扇樺の形から容易に了解できるとあらう(八六―八八)。



下、八三 高野山金剛峰寺奥院經藏内輪藏部分 其一 (昭和七年二月十二日)
 上、八四 同 其二 (昭和六年八月五日)

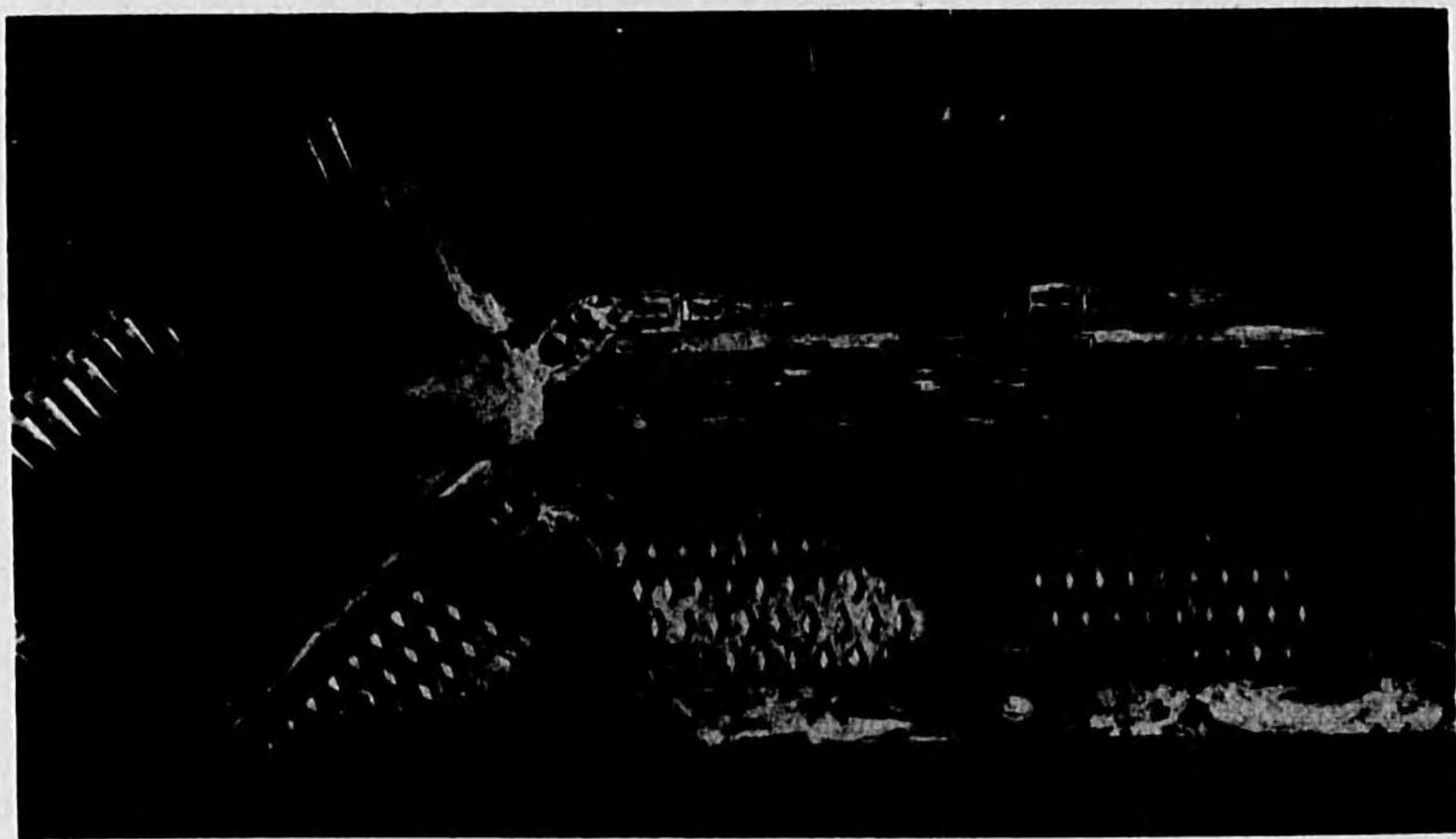
輪藏は經藏の内部にあつて、普通八角形をなし、多くの引出しを備へて、其内に經卷を藏してゐる。さうして自由に廻轉し得る様にしてある。何分多数の卷があるので、讀誦するのは大變だから、全體を一廻轉して夫で全部を讀んだ事になるのだといふ。上圖に見えるてゐる木鼻を押すと容易に廻るのである。



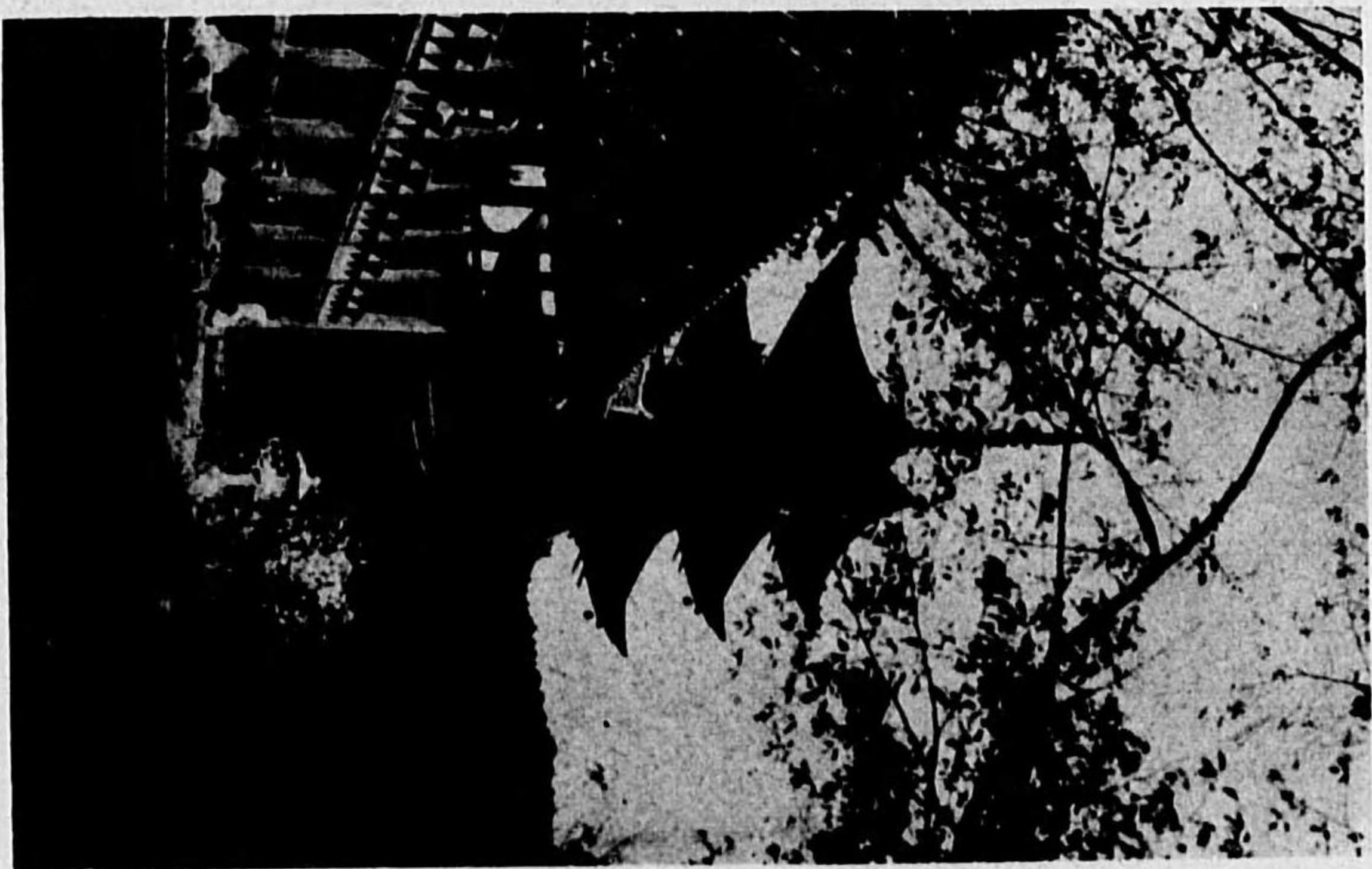


此頁上、八五 高野山金剛峰寺奥院經藏内輪藏部分 其三（昭和六年八月五日）
 此頁下、八六 同 其四（昭和七年二月十二日）
 次頁上、八七 同 其五（昭和六年八月五日）
 次頁下、八八 同 其六（昭和七年六月十日）

輪藏の形式及び手法構造等は、大同小異でいどこにあっても同じである。前頁の解説にかいた通り、一通り讀誦するひまと手間を節約するために、昔支那で傳大士（次頁へ）

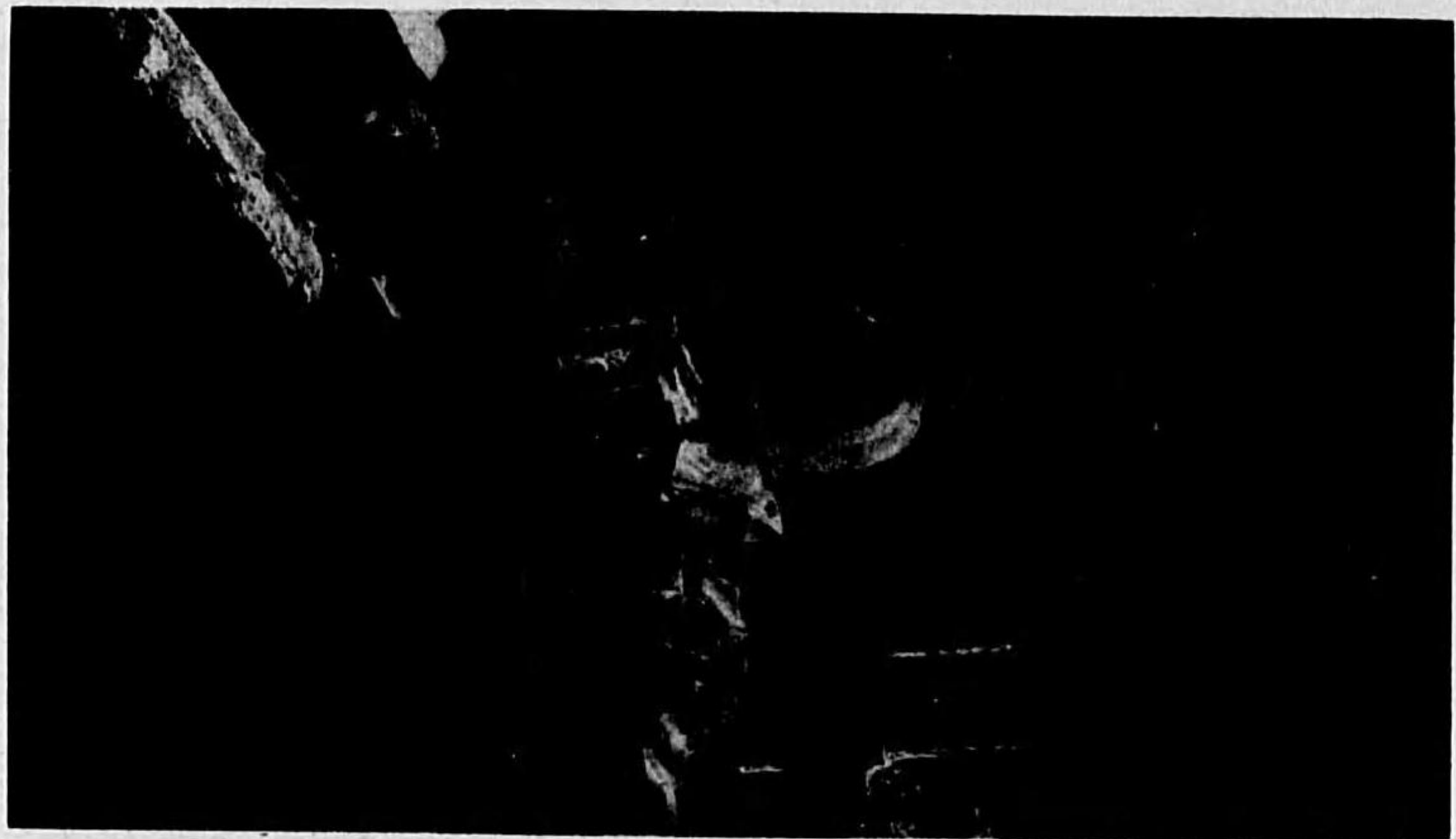


（前頁より）（フダイシ）といふ人が、この廻輪藏を考案したのださうで、大きな經藏になると、大概其内部、丁度輪藏の前あたりに、中央に傳大士、時に其左右へ二人の子なる普賢、普成をまつてゐる。八五には經卷を入れてある引出の一部が見えてゐる。八六・八七は軒の見上げで、料拱間に入れてある彫刻や木鼻の透彫等に見るべきものが多いが、桶子でも持て来ないと可なり見にくい。柱間虹梁下端の「錫杖彫」、繫の海老虹梁等に注意すべく（八八）、殊に「菱天井」は最も變つてゐて、これも亦珍品の一たるを失はない。



右、八九 官幣中社嚴嶋神社五重塔 其二
 (昭和六年三月二十九日)
 左、九〇 同 其二
 (昭和十年四月二日)

右圖は客神社から本社に行かうとする廻廊からの遠景で、左圖は千鳥閣の傍から見たものである。あたりがせまいので、私の寫眞機では近くで全景の寫眞をとる事ができない。此等兩圖はまるで影繪の様な輪郭寫眞に過ぎないが、各重の軒反が非常に強い事と相輪が割合に長い(事實は塔身の殆んど1/3)事だけは看取できるであらう。



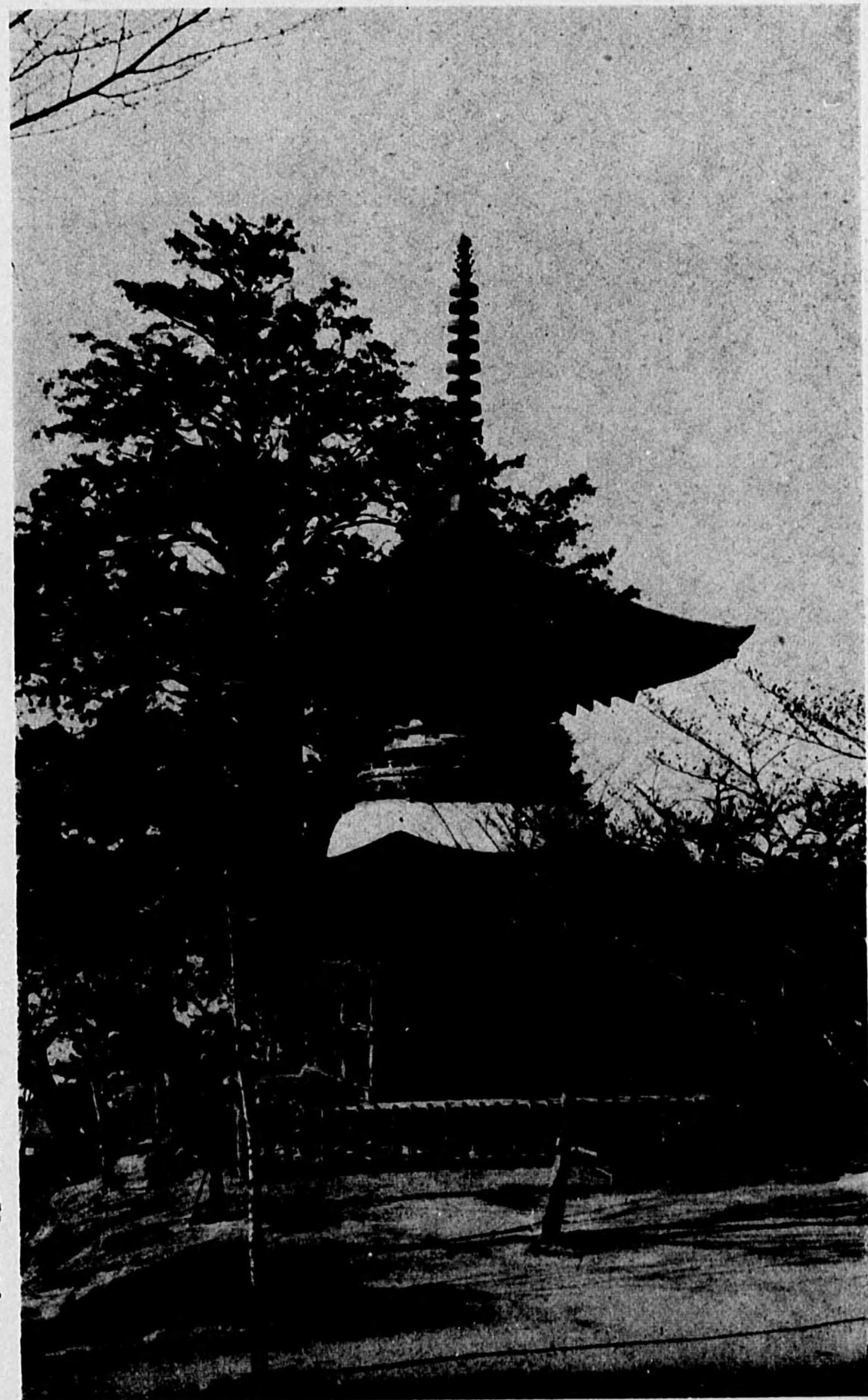
下、九一 官幣中社嚴嶋神社五重塔初重料拱一部
 (昭和六年三月二十九日)
 上、九二 同 内部天井廻
 (昭和六年三月二十九日)

下圖に於いて、柱・臺輪・料拱・尾極等は唐様であることは一見明らかであるが、料拱は詰組にならず、料拱間には囊束(ミノツカ)を用ひ、支輪板は蛇腹でなく、板其物が断面S字形になつてゐる所をみると、和唐折衷式といつてよからうと思ふ。併し上圖の細部には和様のところは見當らない。



上、九四 官幣中社嚴嶋神社多寶塔初重軒一部（昭和七年三月三十一日）
 下、九五 同 隅木鼻（昭和七年三月三十日）
 上圖は東面中の間上の一部分で、此養腹だけが全體古く、中央に入れてある梵字「ウン」亦當初の儘である。支輪は室町になつては、この様にS字形のものがあつて差支はない。下圖には大きく寫つてゐる木鼻は頗る拙い形をしてゐる。

明治十三年加藤清正を祀り、寶山神社といつたが、大正七年豊國神社に合祀し、塔は神社の附屬となつた。故に今は何も祀つてない。

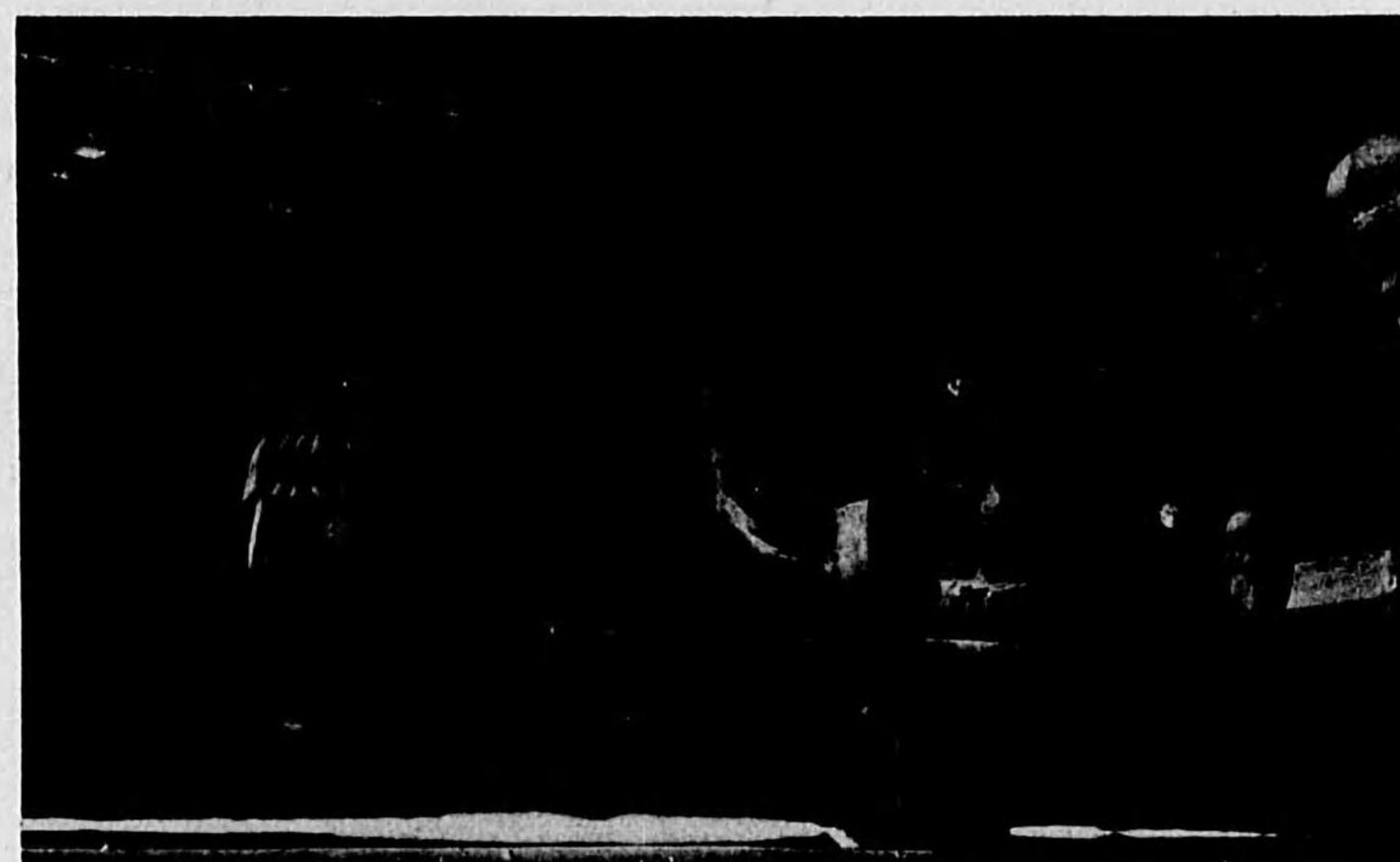


九三 官幣中社嚴嶋神社多寶塔

（昭和七年三月三十日）



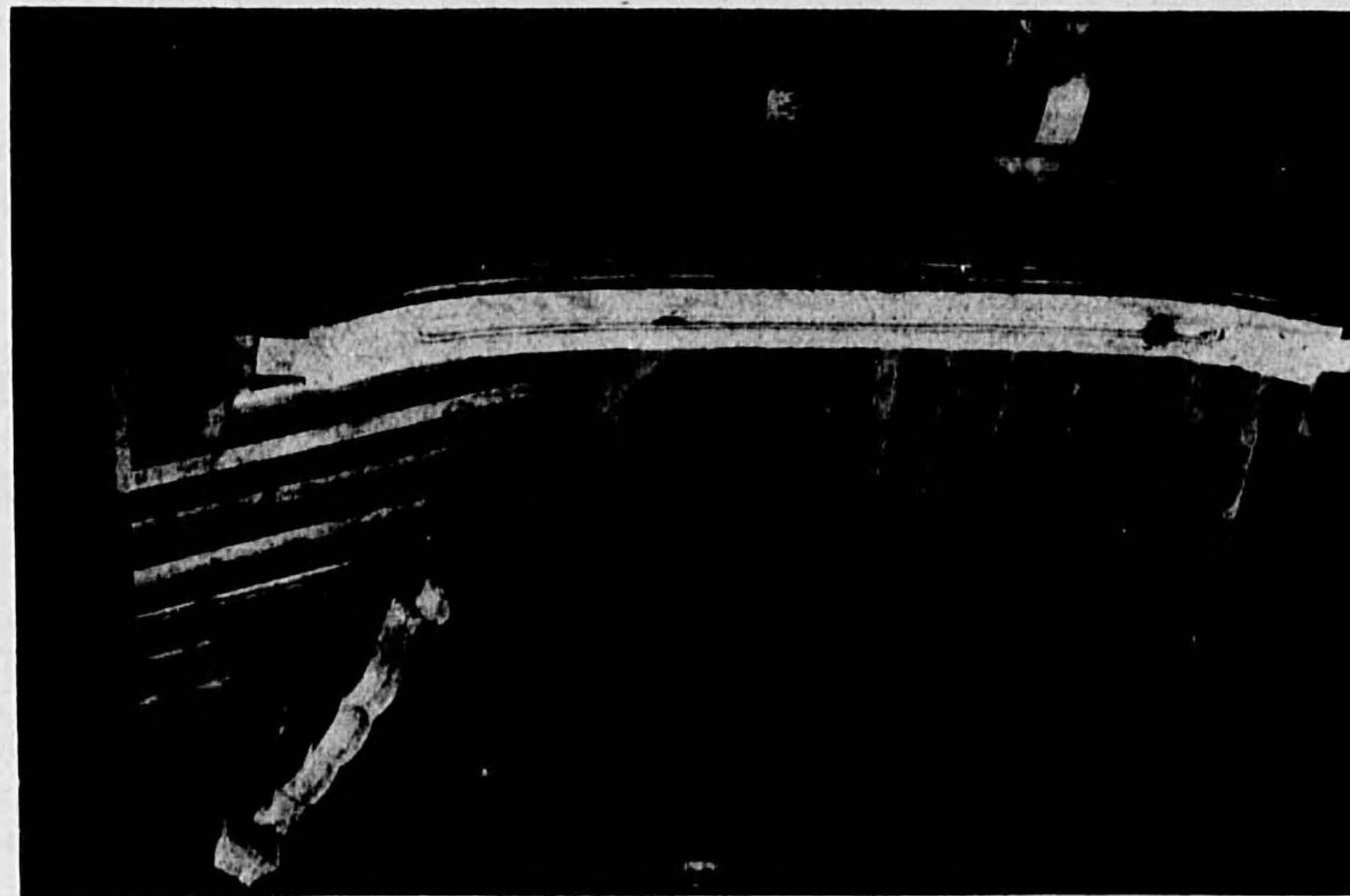
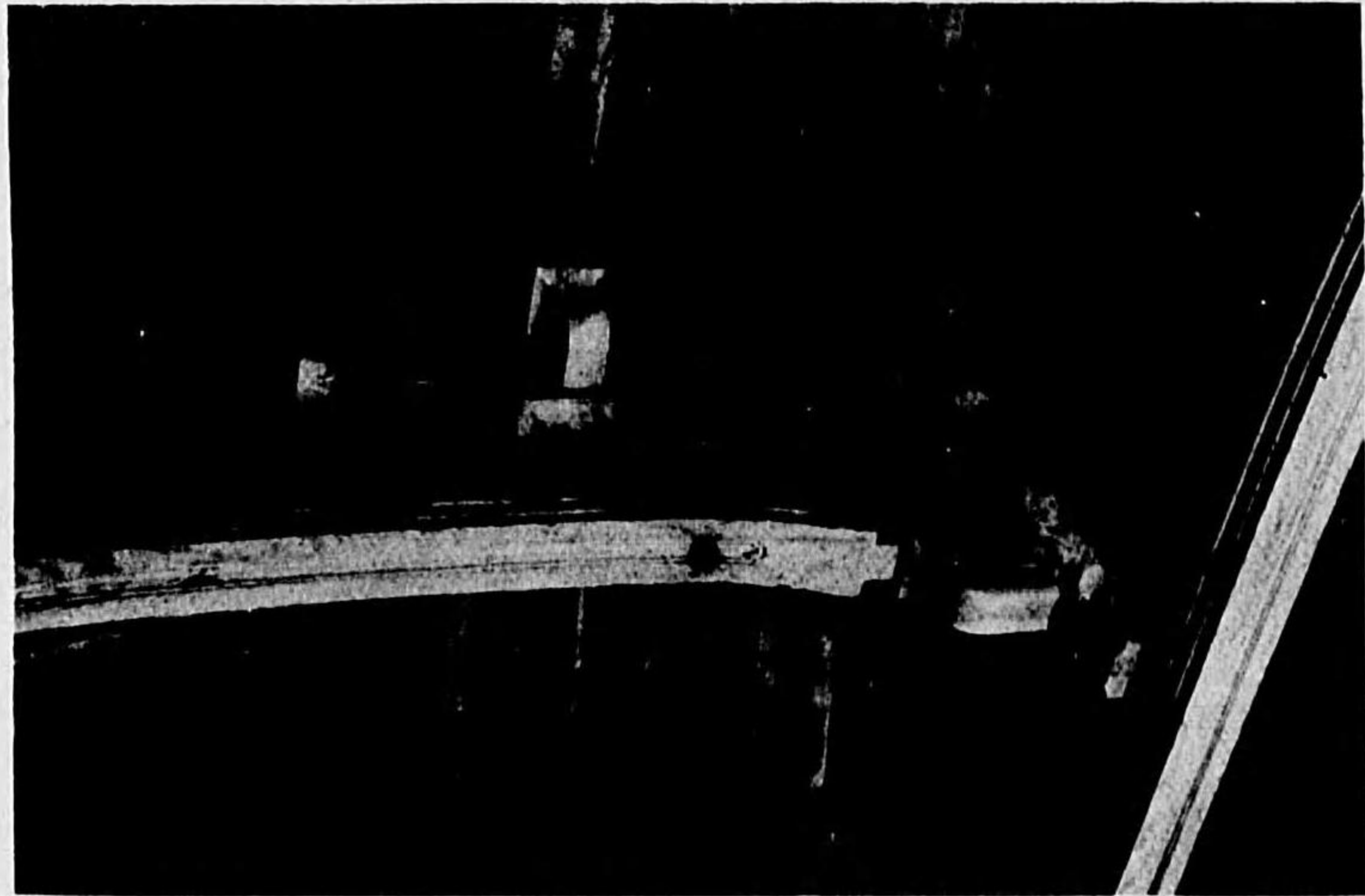
上、九八 官幣中社巖嶋神社多寶塔須彌壇上蓋股(新補) (昭和六年三月三十一日)
 下、九九 同 初重内部來迎柱上 其一 (昭和七年三月三十一日)
 下圖の解説は前頁に併せて記したから、ここでは上圖の説明だけにしておく。この蓋股は全部新補であるが、中央圓相内の梵字「キリク」が怪しいと思ふのである。元の本尊は樂師如來との事であるが、若し樂師の種子を入れるのなら「ベイ」でなくてはいけないと思ふ。併し東側に「ウン」が残っているのだから、ここは「バン」であったのだらう。



上、九六 官幣中社巖嶋神社多寶塔内部裏東 二種
 下、九七 同 來迎柱上 其一
 (下圖物差は曲尺の約一尺(一呎)・兩圖共昭和七年三月三十一日)

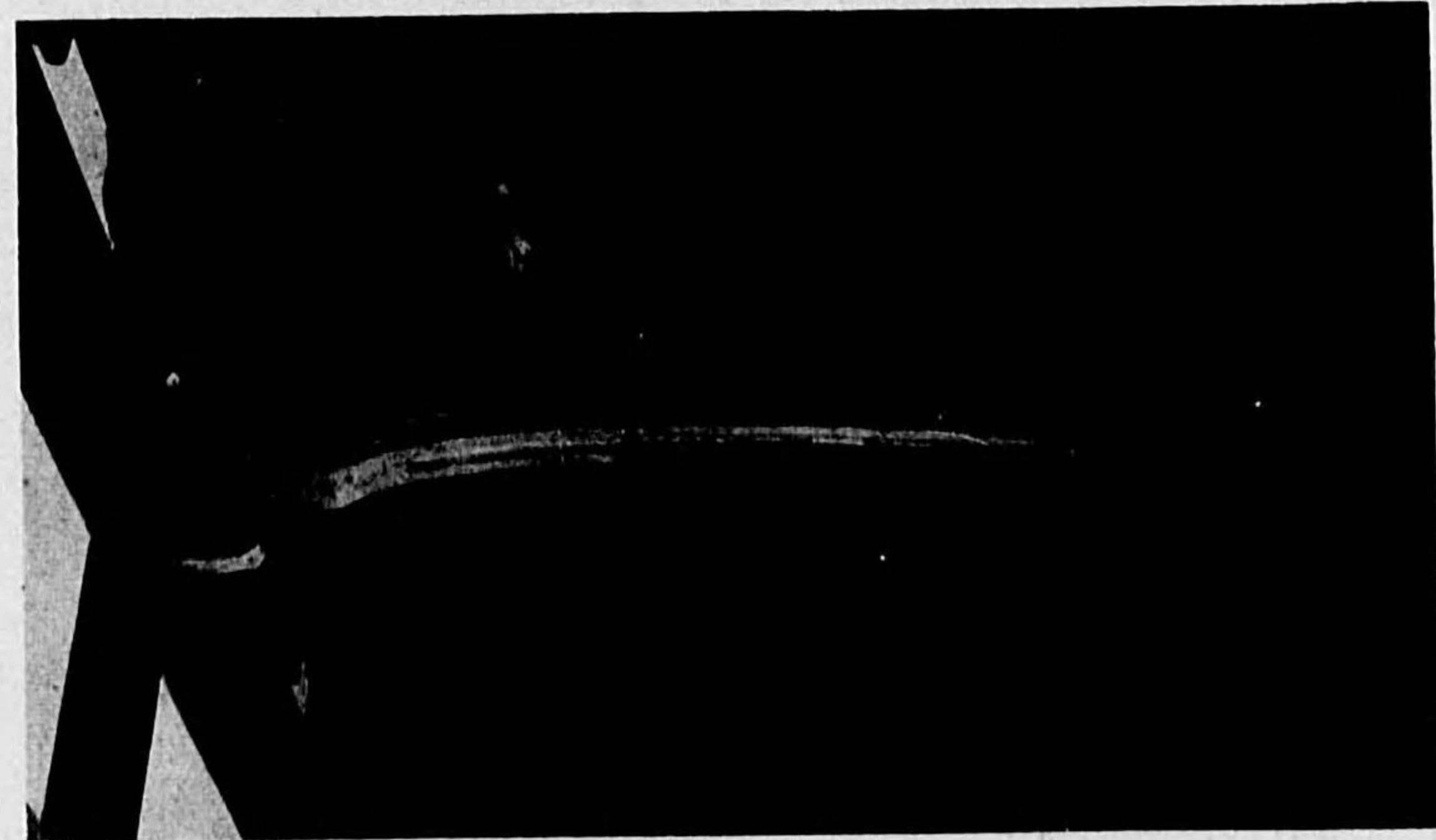
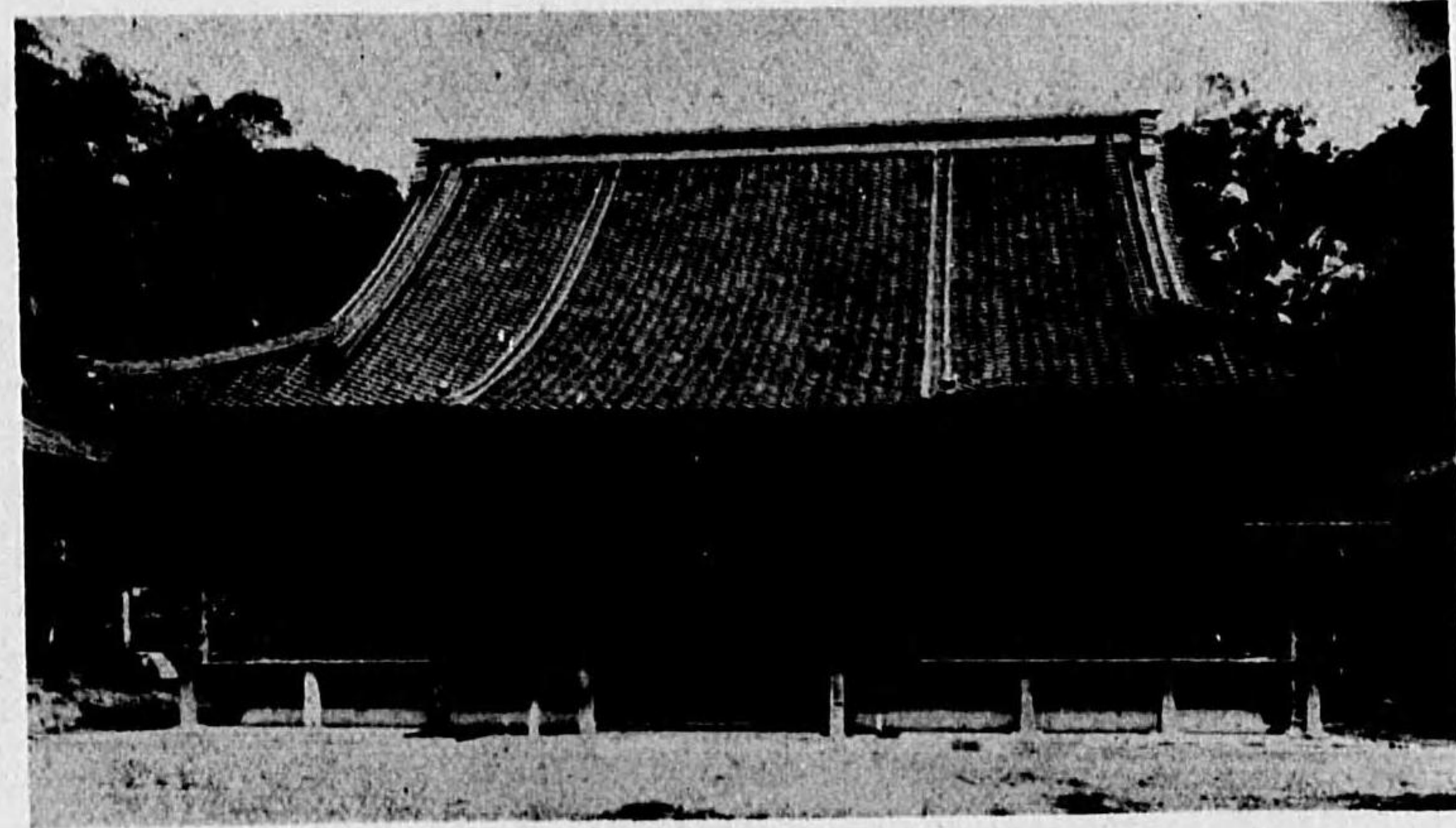
上圖は初重内部南面中の間(左)と脇の間(右)の「裏東」を見せたのである。この内部中を間の分は、外部では——中の間は蓋股だから——脇の間に用ひられてゐる。脇の間の分は内部にのみ用ひられてゐるのである。

九七・九八は來迎柱上のところで、肘木(と料)を除いては全部唐様である。何故に肘木は唐様でないかといふと、下端と木口との差が明らかで、圓弧又は圓弧に近い曲線から成らず、且つ下端に大面が取つてあるからである。



(前頁より)に鏡天井をはり、周囲は化粧屋根裏にしてあるのは、別に珍しい事はないが、其繫虹梁は大分に彎曲してゐるのが變つてゐる。これは一種の地方色と見られない事はあるまい。夫から化粧隅木下端に持送りを使用してゐる事に注意し、鶴林寺本堂外陣の夫(九・一〇)と比較せよ。

此堂は慶長十七年前田利家の再建といふ。寺は金榮山と號し、本堂と合せて九棟の國寶建築を有するも、何れも桃山時代に屬してゐる。



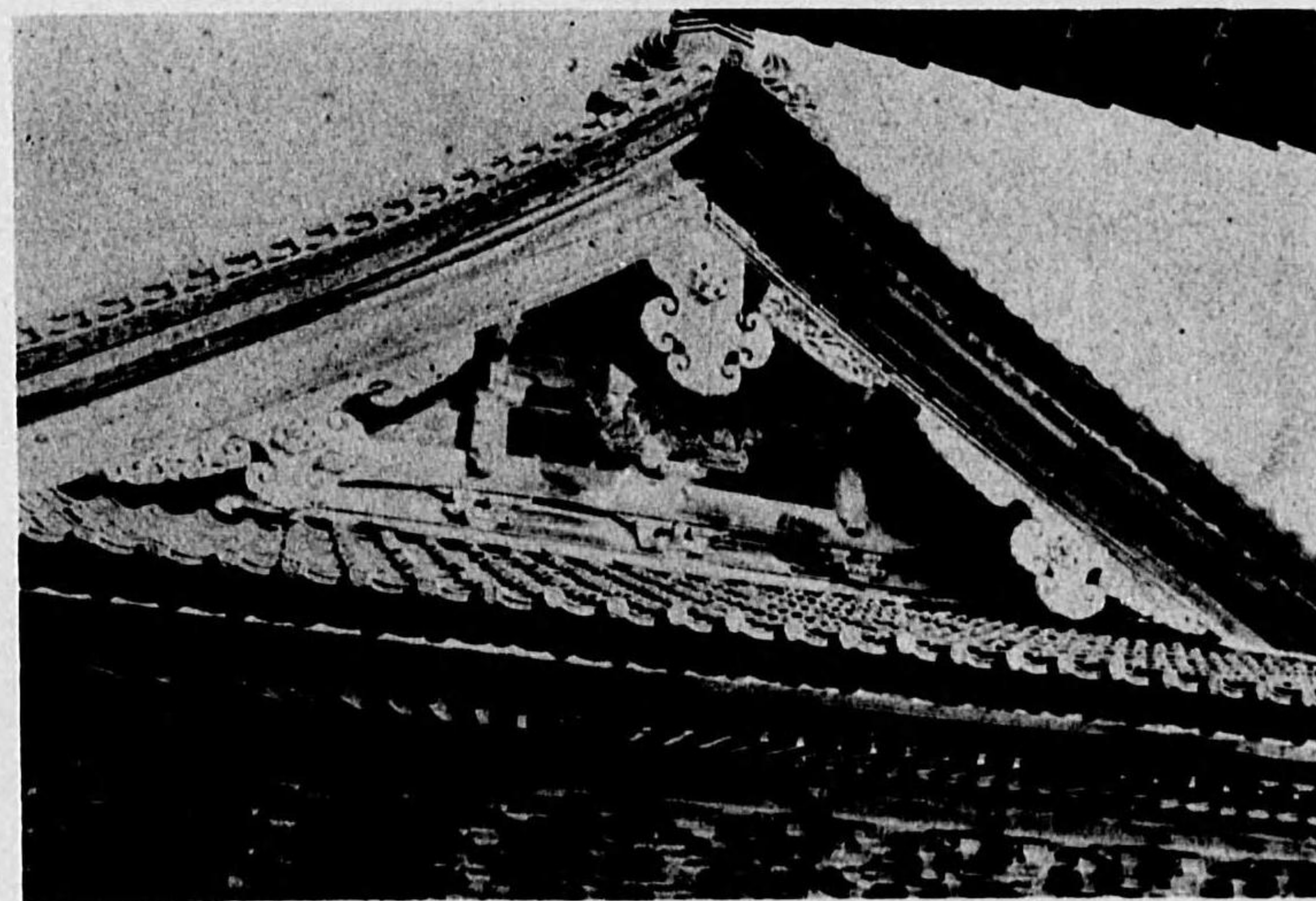
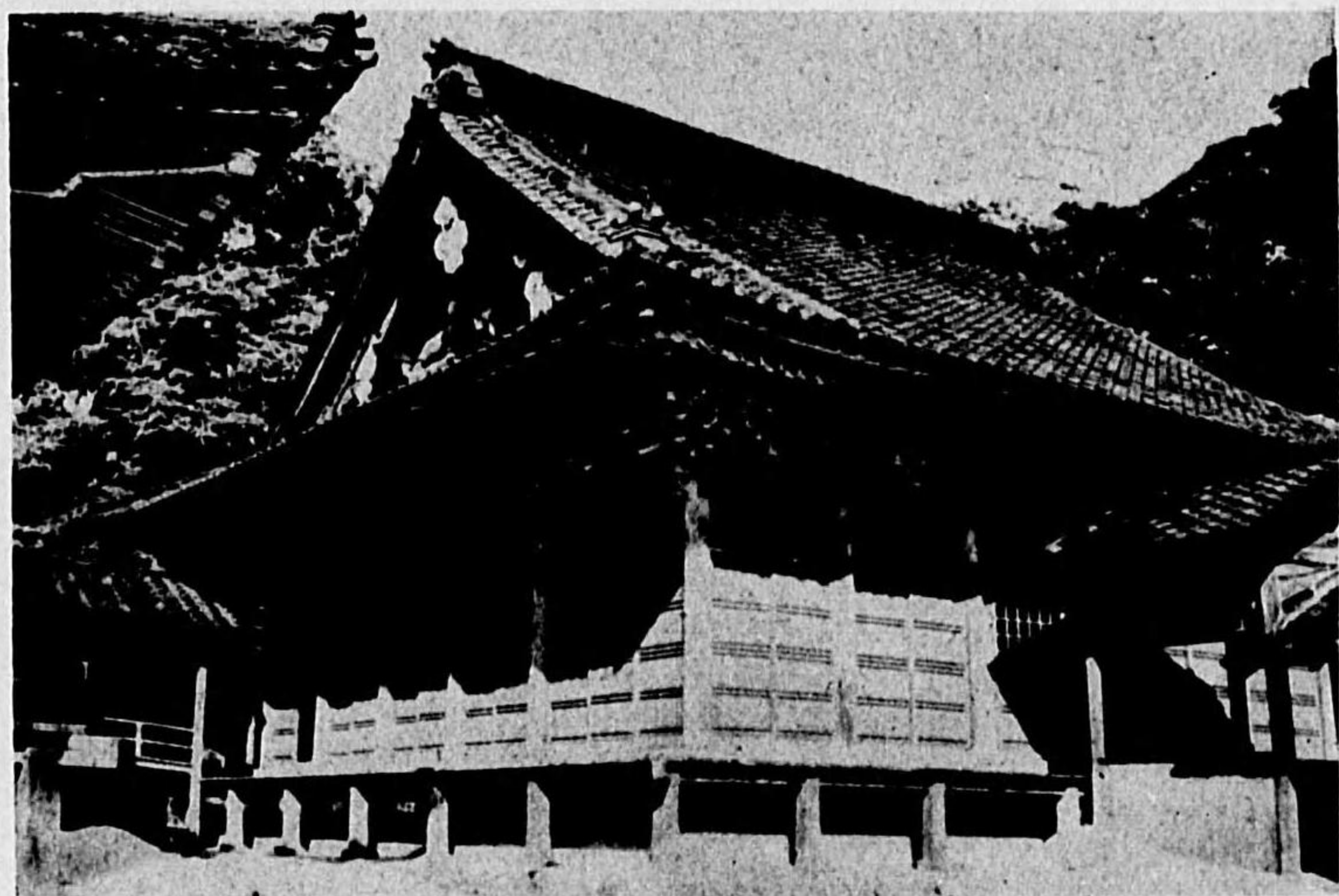
此頁上、一〇〇 妙成寺本堂正面 (飛鳥園)

此頁下、一〇一 妙成寺本堂外陣繫虹梁 其一 (昭和十六年二月十三日)

次頁上、一〇二 同 其二 (昭和十六年二月十三日)

次頁下、一〇三 同 其三 (昭和十六年二月十三日)

方五間單層入母屋造棧瓦葺で、細部は多少異なるにしても、この様に記すと祖師堂と同じになって了ふ。併し料拱は全く異なり、同じく詰組ではあるが、簡単な出三料だから、軒はさっぱりとしてゐて少しも複雑な感はない。一〇〇—一〇二は何れも入側の天井廻を見せたものであるが、此入側の外陣に近い方には一部分(次頁へ)

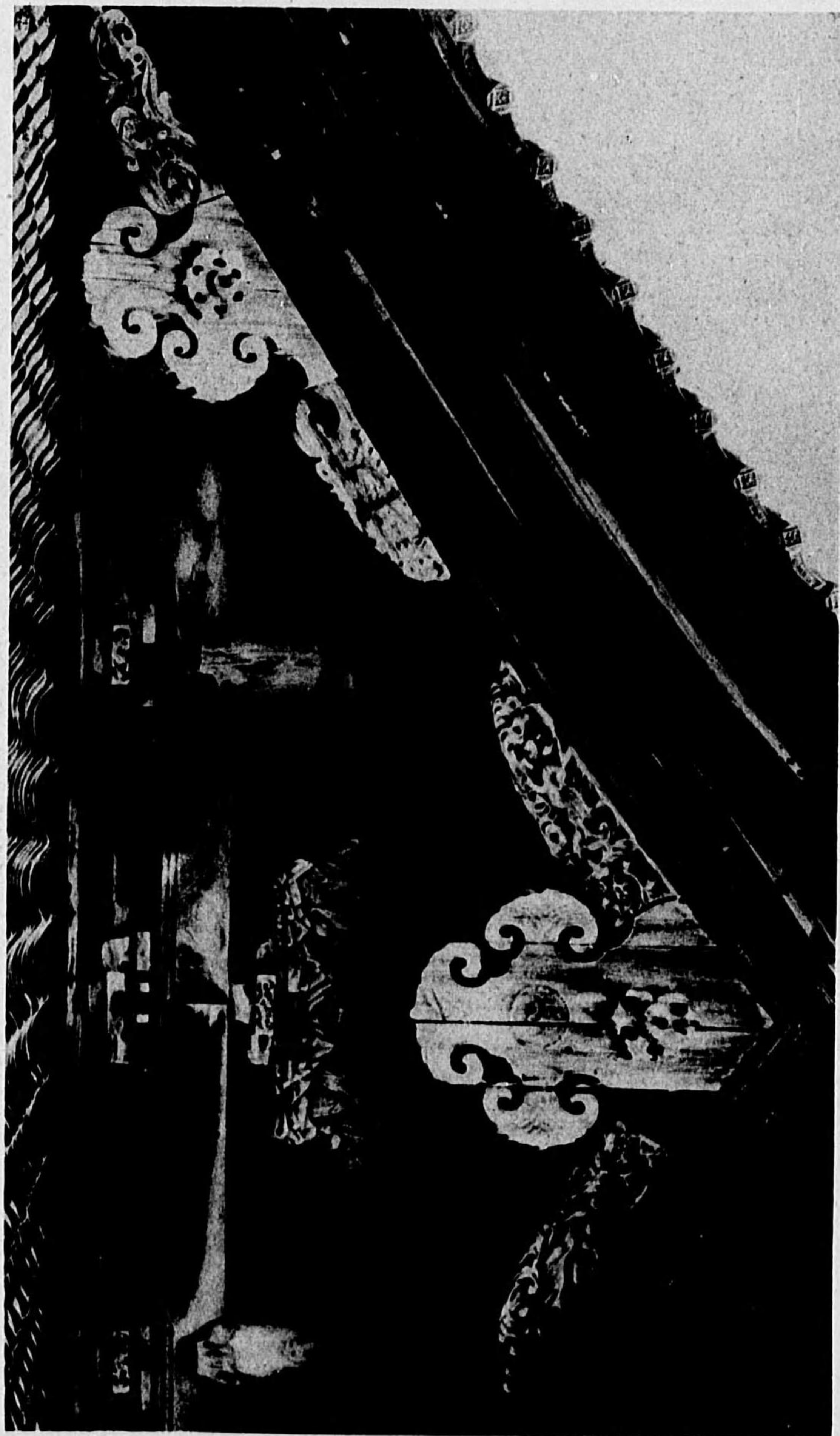


上、一〇四 妙成寺祖師堂全景 (藤原義一氏)

下、一〇五 同 妻 (藤原義一氏)

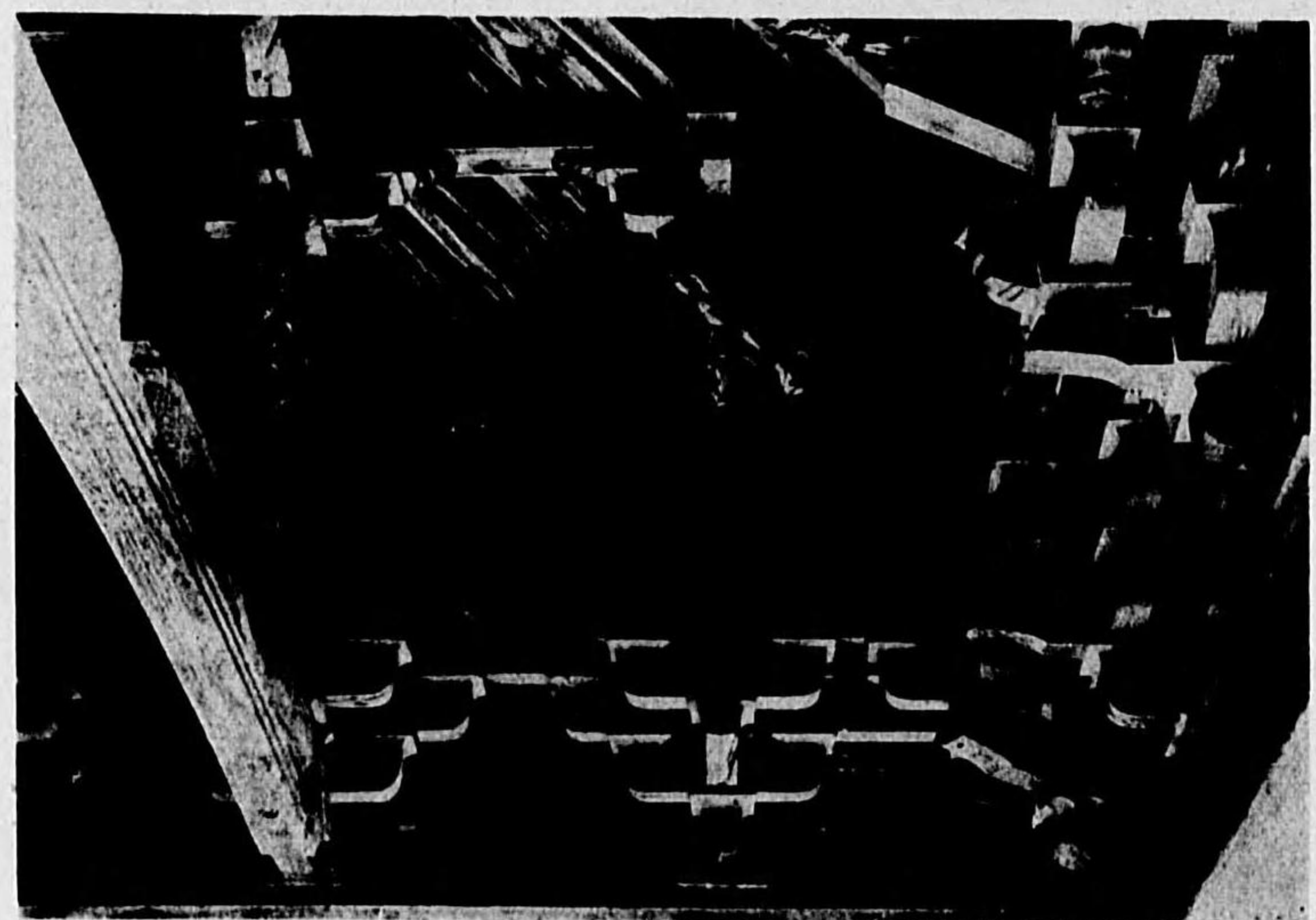
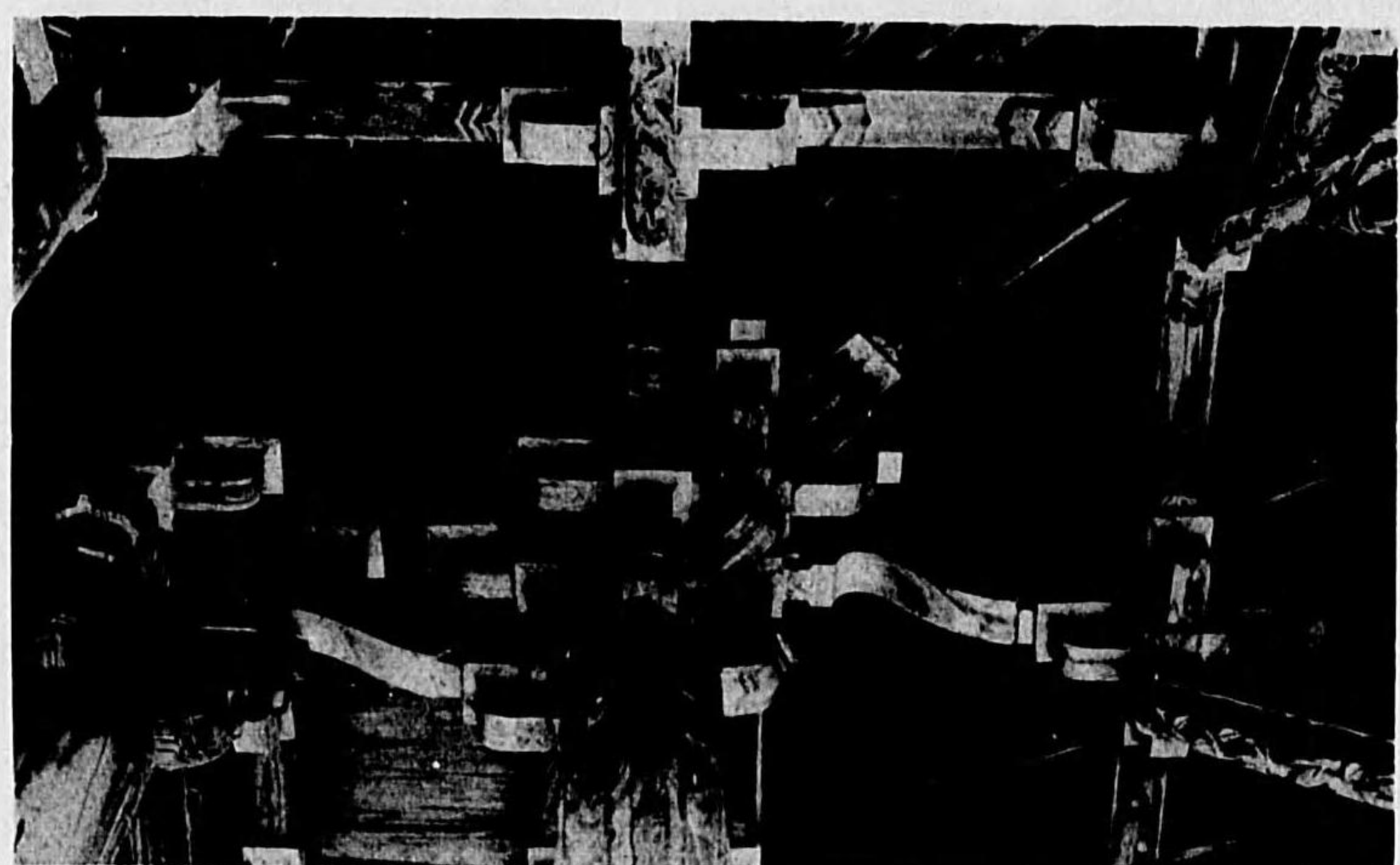
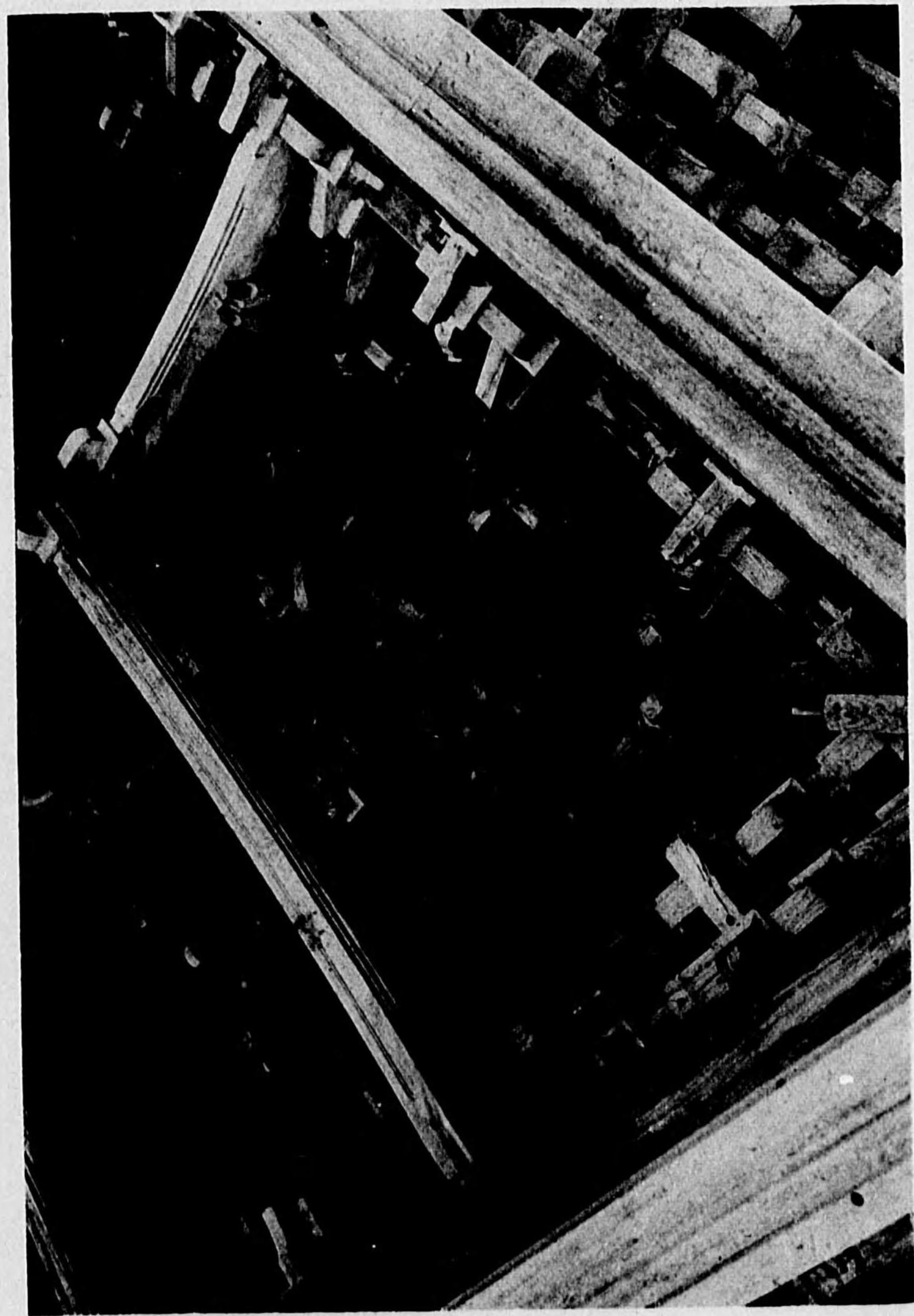
方五間單層入母屋造棧瓦葺。料拱は唐様三料詰組だから、軒下は下圖の様に料と肘木で一ぱいである。此圖には、一〇六に寫つてある拜懸魚の向つて左の鯨が寫つてゐないのはどういふわけか。怪しからん次第。

一〇六 妙成寺祖師堂妻飾詳細 (飛鳥園)



拜三花懸魚の「浪に兎」の鯨、二重虹梁大瓶束の間及び大棟下下の左右に置かれた敷面に彫刻を施した大料・花肘木・二つ料、中央二つ料の人物を彫刻した極端に發達せる花肘木等に特に注意せよ。

107 妙成寺祖師堂内部 其二
 (昭和十三年・竹原吉助氏)
 内部へ入って隅から入側の部分を見上げた所で、側面第一の間が少し廣いため、隅
 柱から右上に向ってゐるのは正面の、左方に出てゐるのは側面の夫夫繫虹梁である。



上, 一〇八 妙成寺祖師堂内部 其二 (昭和十二年・竹原吉助氏)
 下, 一〇九 同 其三 (昭和十二年・竹原吉助氏)

上圖中央の大瓶束(結綿は見えぬ)と、左下隅の柱とは、前頁圖の中央の大瓶束と
 其左の隅柱とである。下圖左方の大瓶束と繫虹梁とは、同じく前圖の長い方の繫虹
 梁のこちら側を正面に向って見た所。尾極下持送に注意せよ。

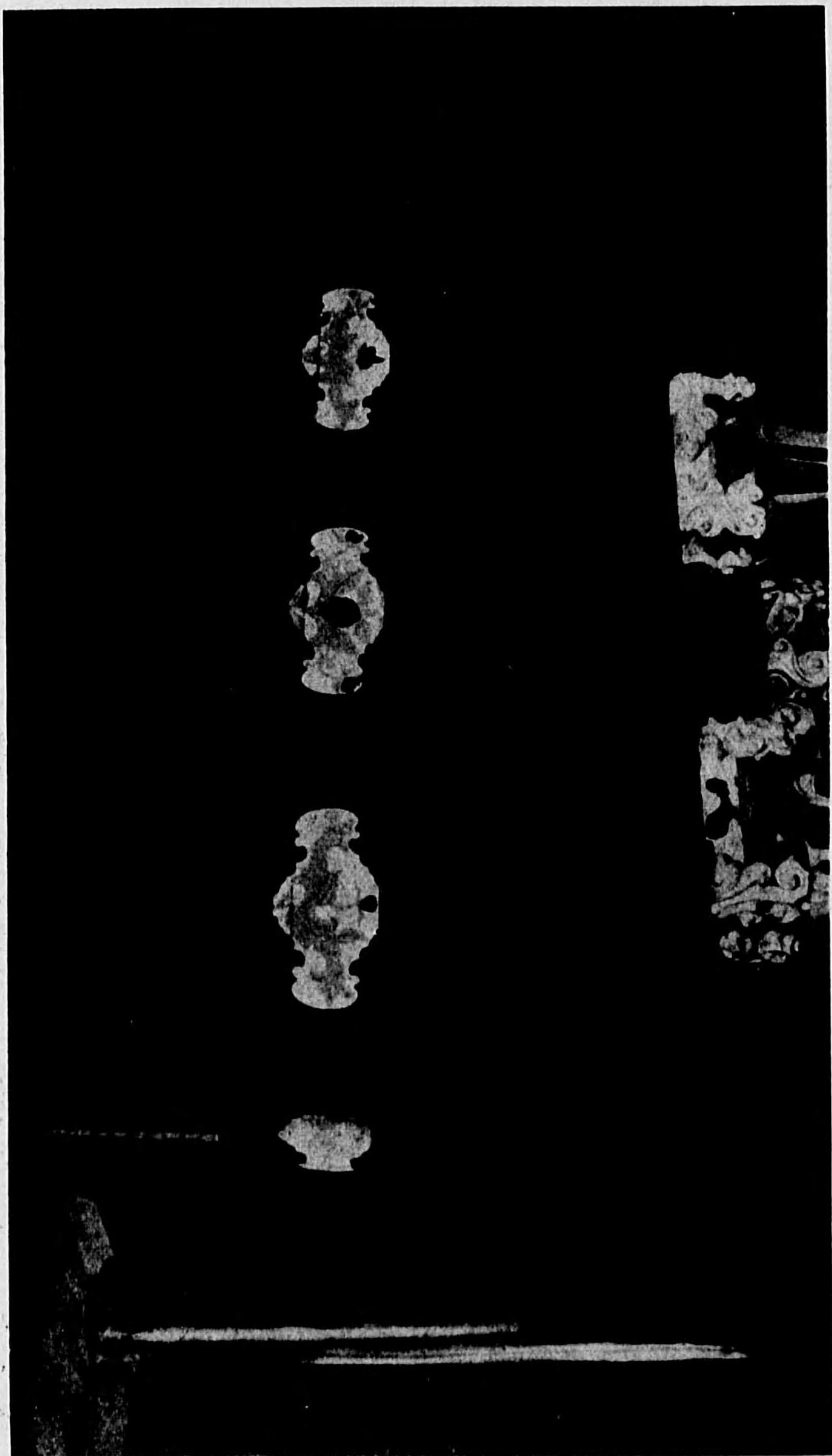


上、—○— 妙成寺鎮守堂全景 (藤原義一氏)

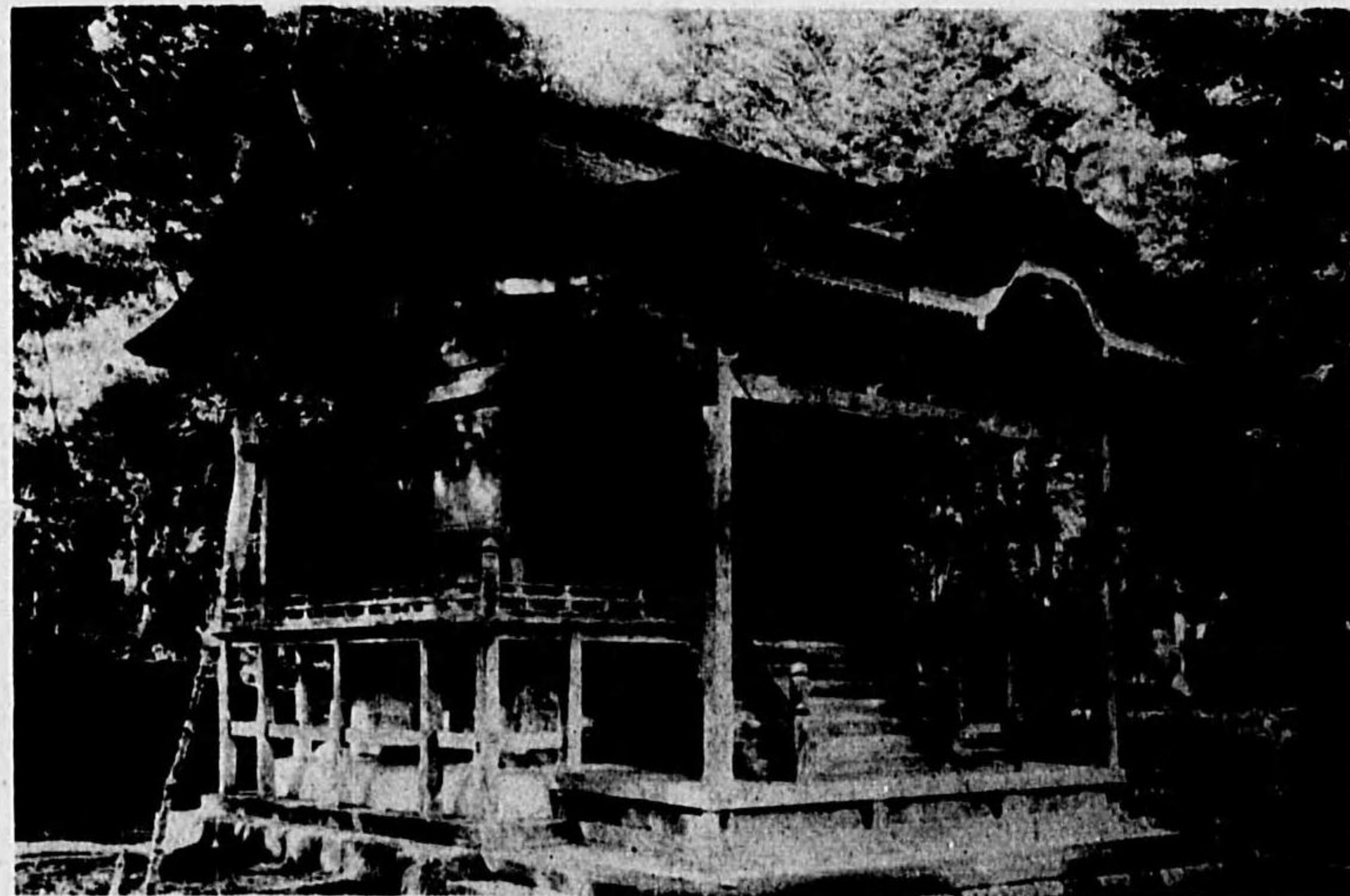
下、— — 同 内部欄間 (藤原義一氏)

此建物も亦方五間單層入母屋造檜瓦葺であるから、これだけでは本堂や祖師堂と區別をつけかねるが、これは料拱が頗る簡單で「三料」で、而も詰組でないから、祖師堂等と全く異なった外観を呈してゐる。下圖は内外陣境正面欄間の一。

— — 妙成寺鎮守堂須彌壇 (昭和十六年二月十一日)



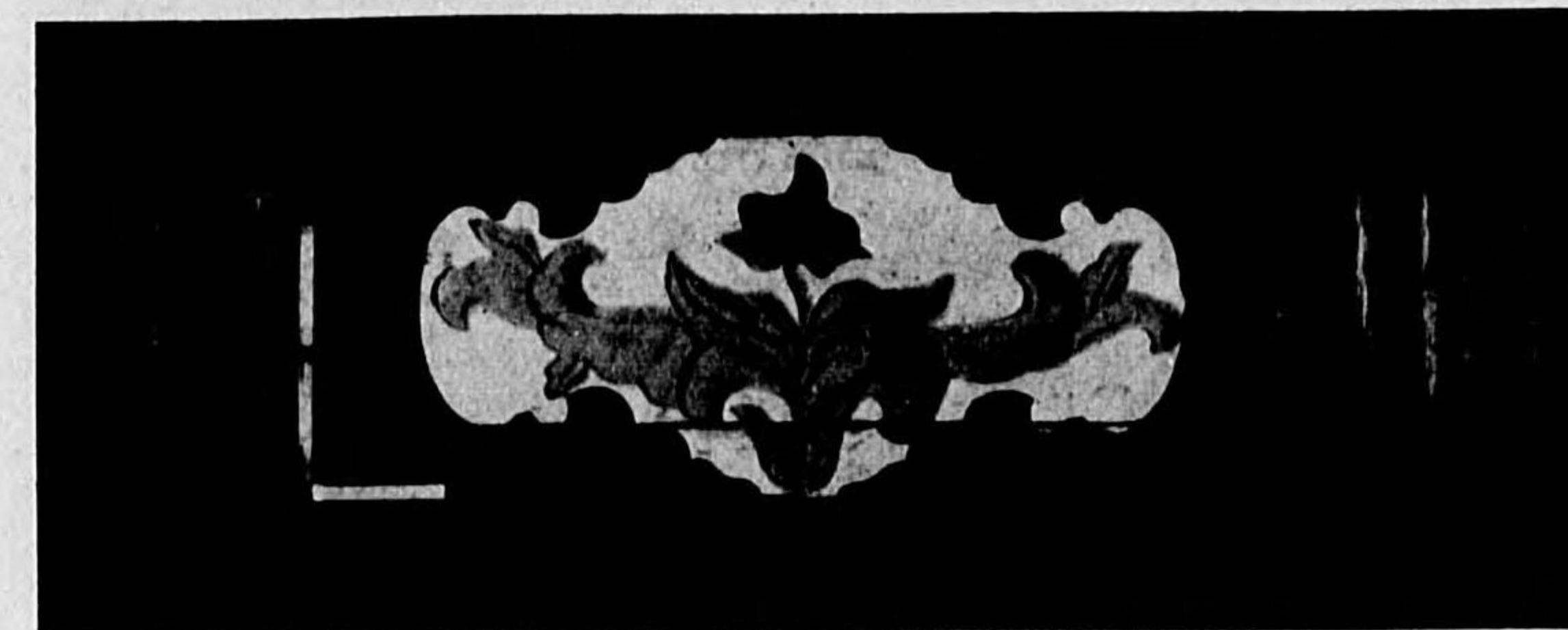
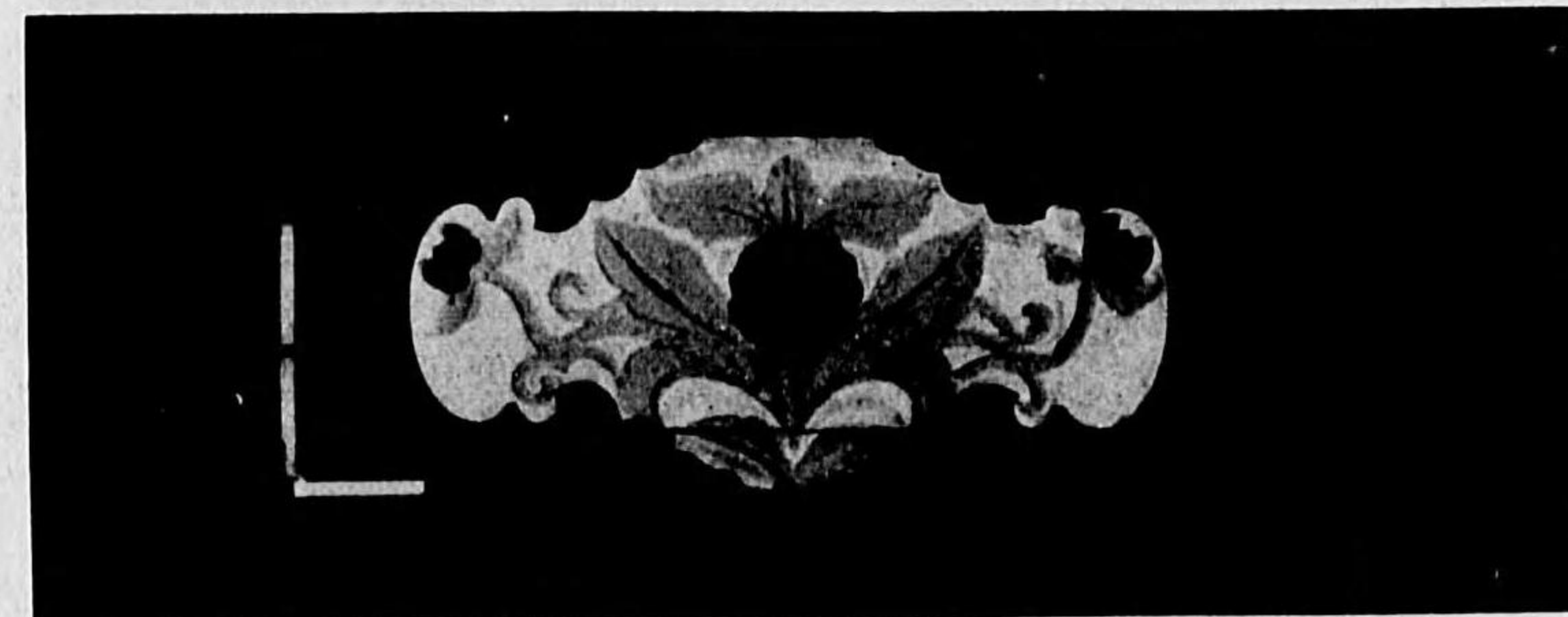
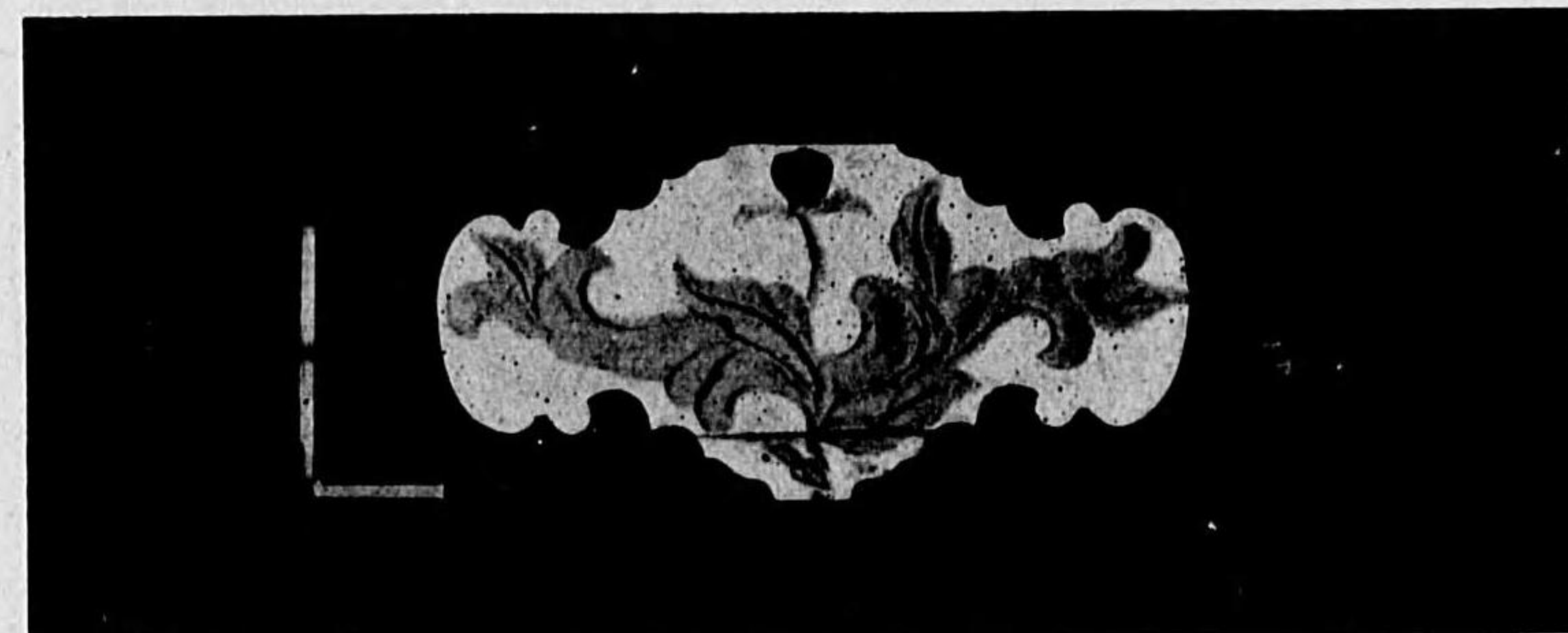
護法堂内陣にある和唐折衷須彌壇。普通なら勾欄の正面のところは獸手にするのであるが、さうしないで隅と同じ親柱をたて、そこで勾欄を切つて了つた所が變つてゐる。羽目板格夾間の形、及其内部の牡丹の彫刻が面白い。物差は曲尺の一尺。



上、一一六 妙成寺祈願堂全景 (藤原義一氏)

下、一一七 同 部分 (飛鳥園)

番神堂ともいひ慶長十九年京都から移建したものといふ。三間社流造で正面に軒唐破風がある。三間社ではあるが、向拜には長い虹梁を用ひ、間の柱を省いて一間にしてある。修理前は假屋根下にあつたので、全景が見えなかつたが、昭和六年の大修理後、其美しい全形が現はされた。



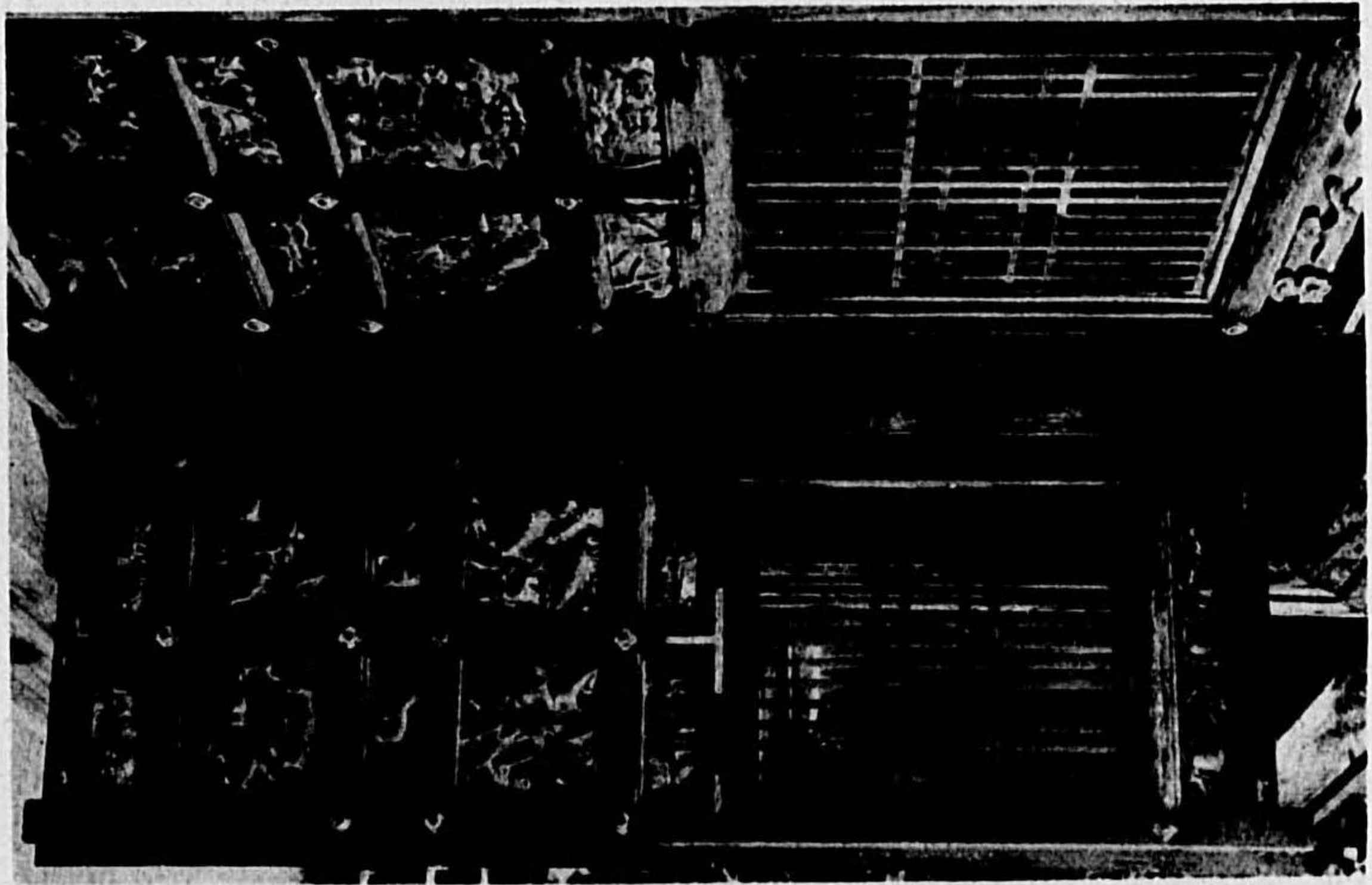
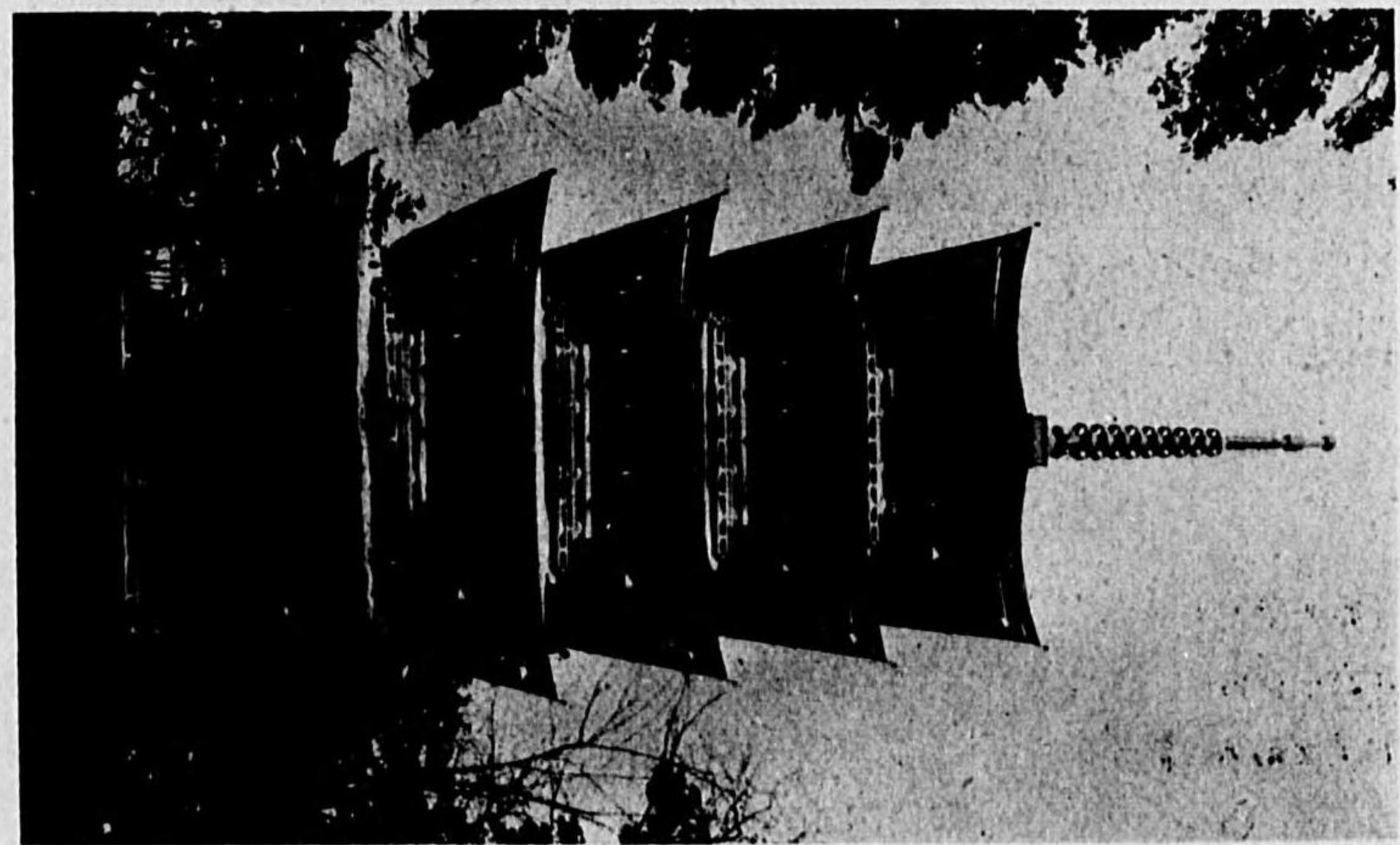
上、一一三 妙成寺鎮守堂須彌壇格狭間 其一

中、一一四 同 其二

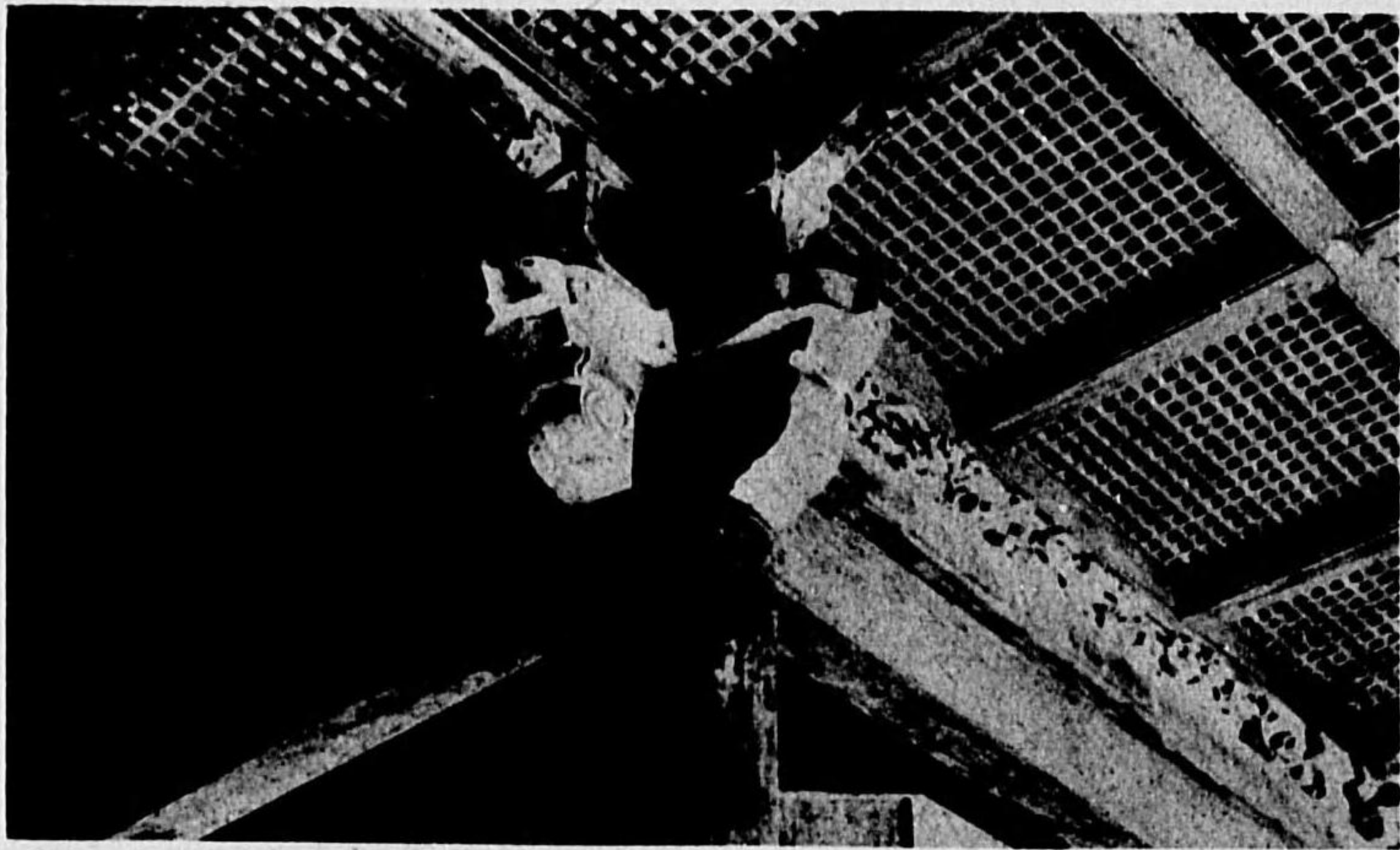
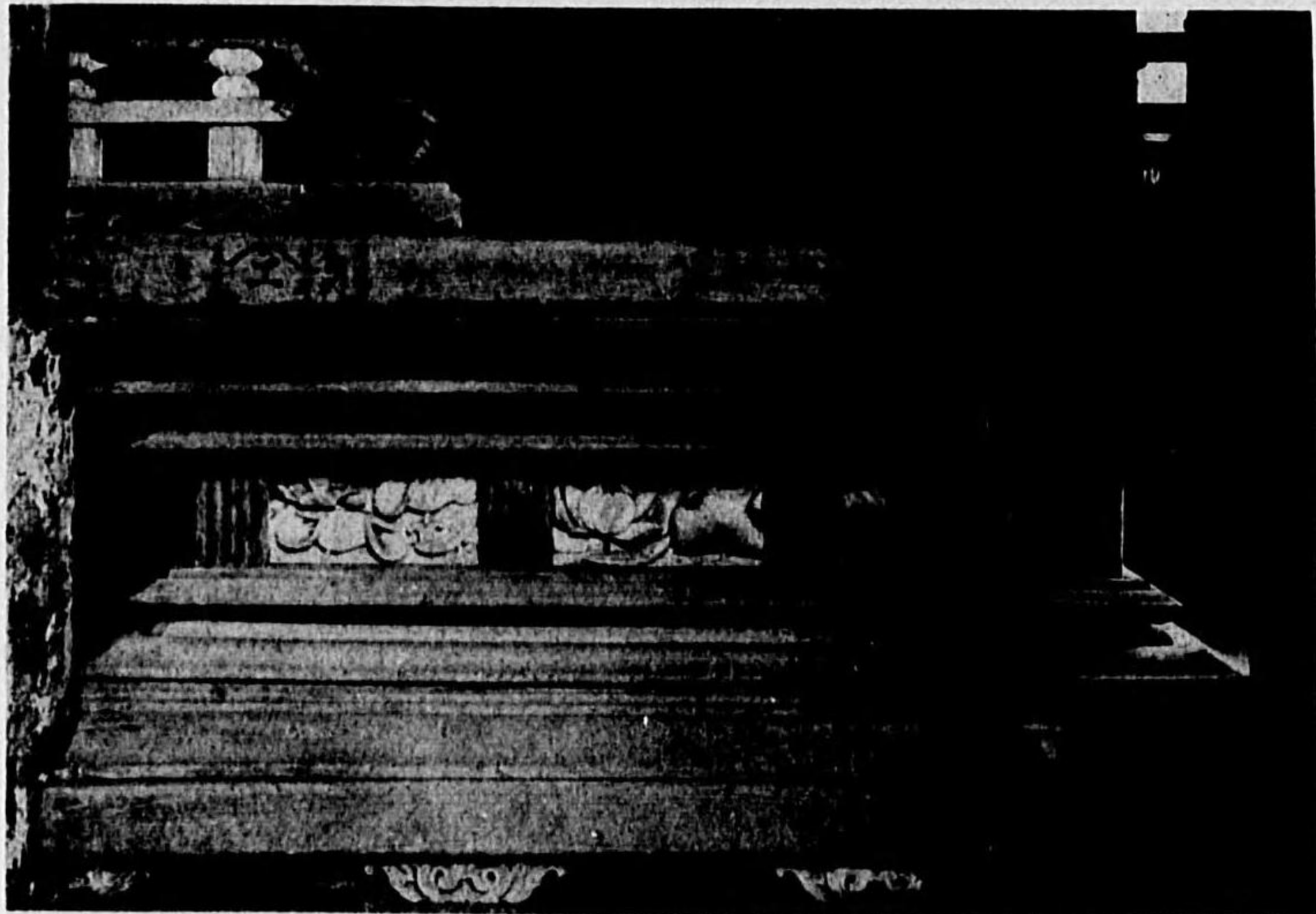
下、一一五 同 其三

(三圖共物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和十六年二月十一日)

前圖向うて右から左へ、順にここで上から下へ並べてみた。中央の分は中央に花左右に蕾で、中央から左右が同形、右の分は蕾で左は半開、この二つは中央にだけであとは葉ばかり、彫刻としては扁平で幼稚で原始的であるが、三つ共變化をつけた點と、格狭間の形に注意する必要がある。



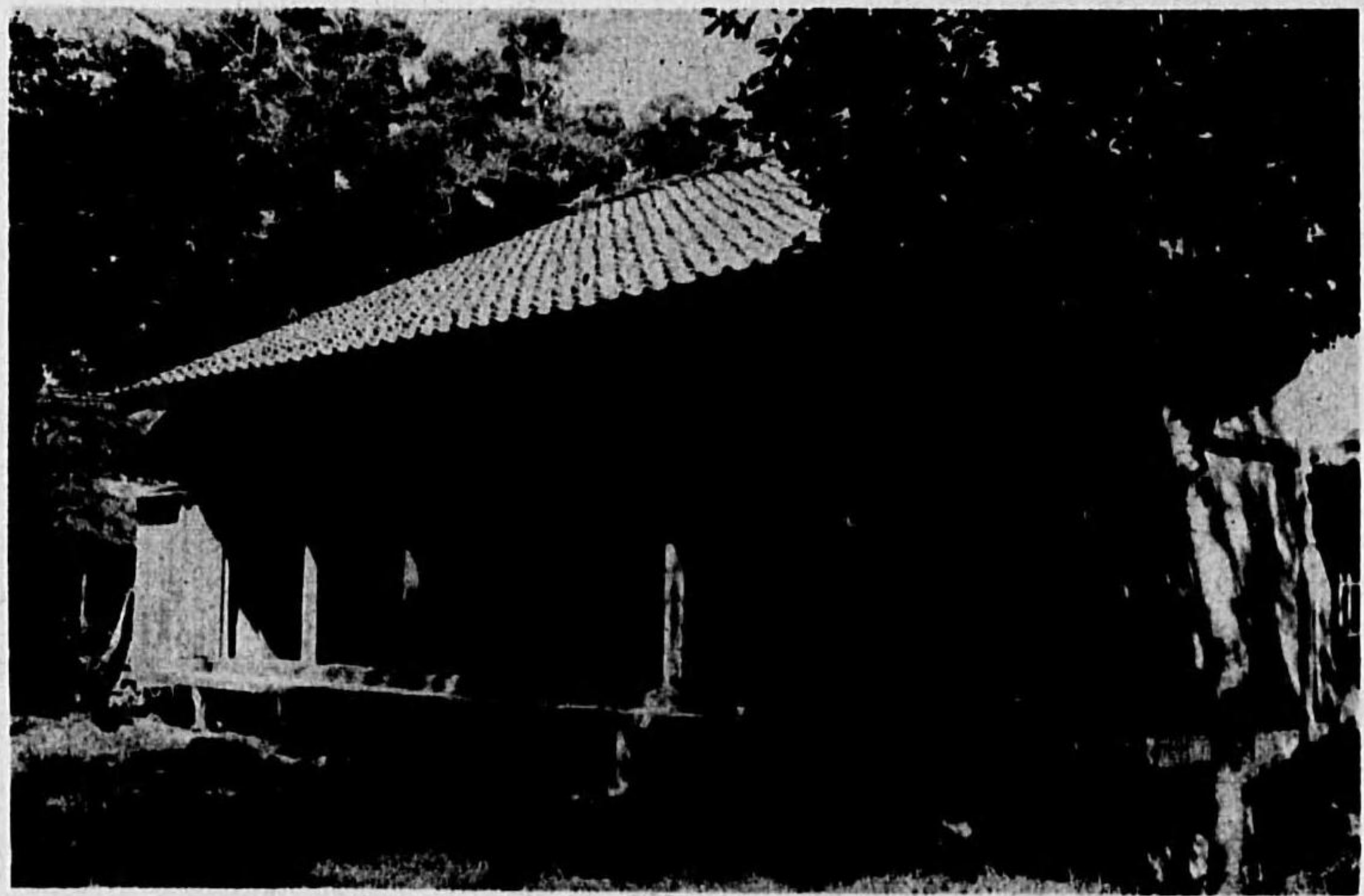
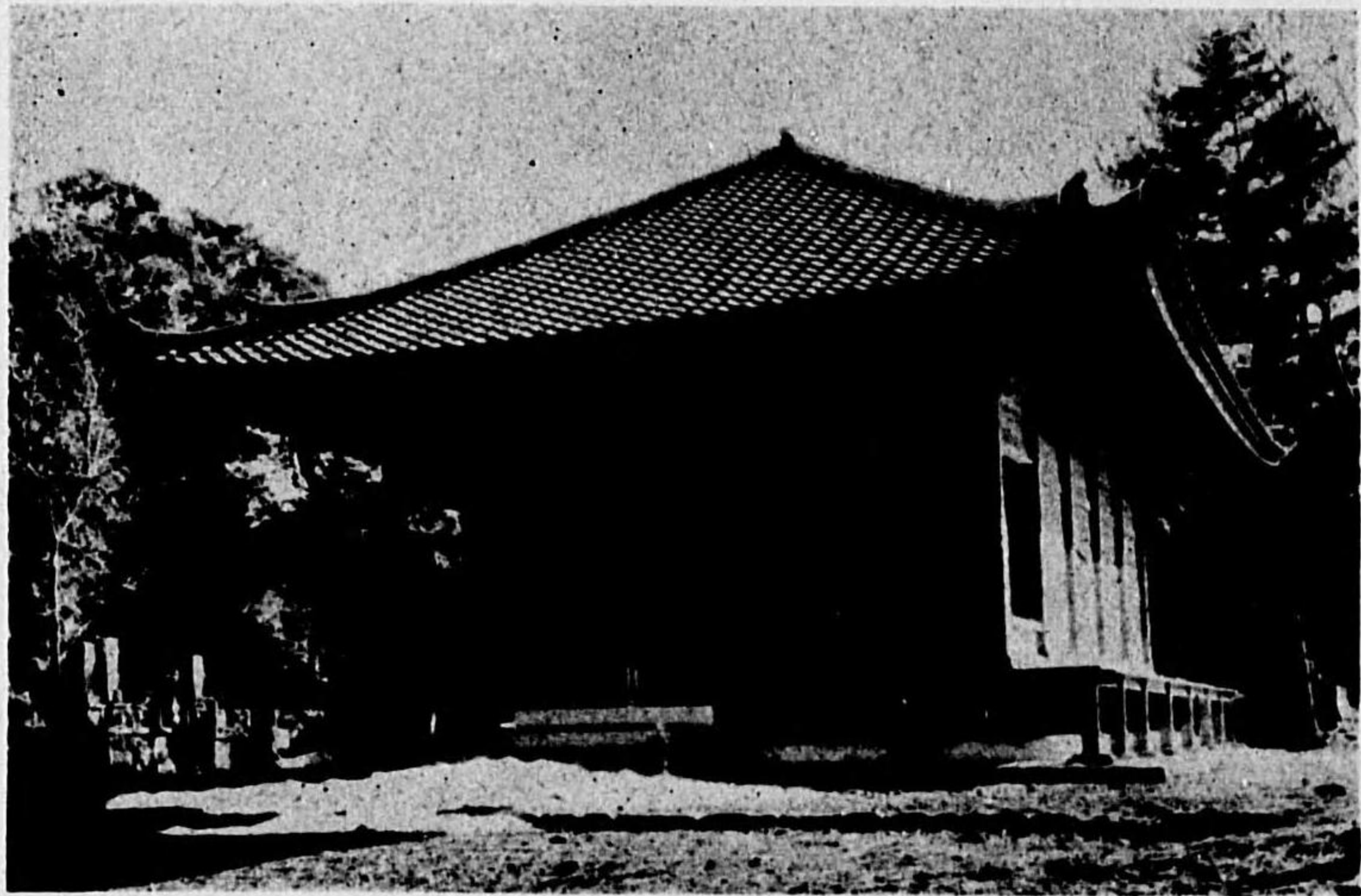
右、一一八 妙成寺五重塔全景 (昭和十六年二月十三日・近藤豊氏)
 左、一一九 同 初重東面扉 (昭和十六年二月十二日・近藤豊氏)
 五重塔は元和四年落成、大正五年修理成る。方十六尺、全高百十二尺八寸といふ。屋根桁葺で、各重屋根の隅から三本つゝ避雷針を出してゐるのが目障りである。初重扉板には鳥・獸・植物等の薄肉彫刻を入れてあるが、猿がゐったり、柘榴があたり、餘り他で見ないものがある。塔の形態は割合に完好である。



上、一一〇 妙成寺五重塔初重天井一部 (藤原義一氏)

下、一一一 同 須彌壇正面 (近藤 豊氏)

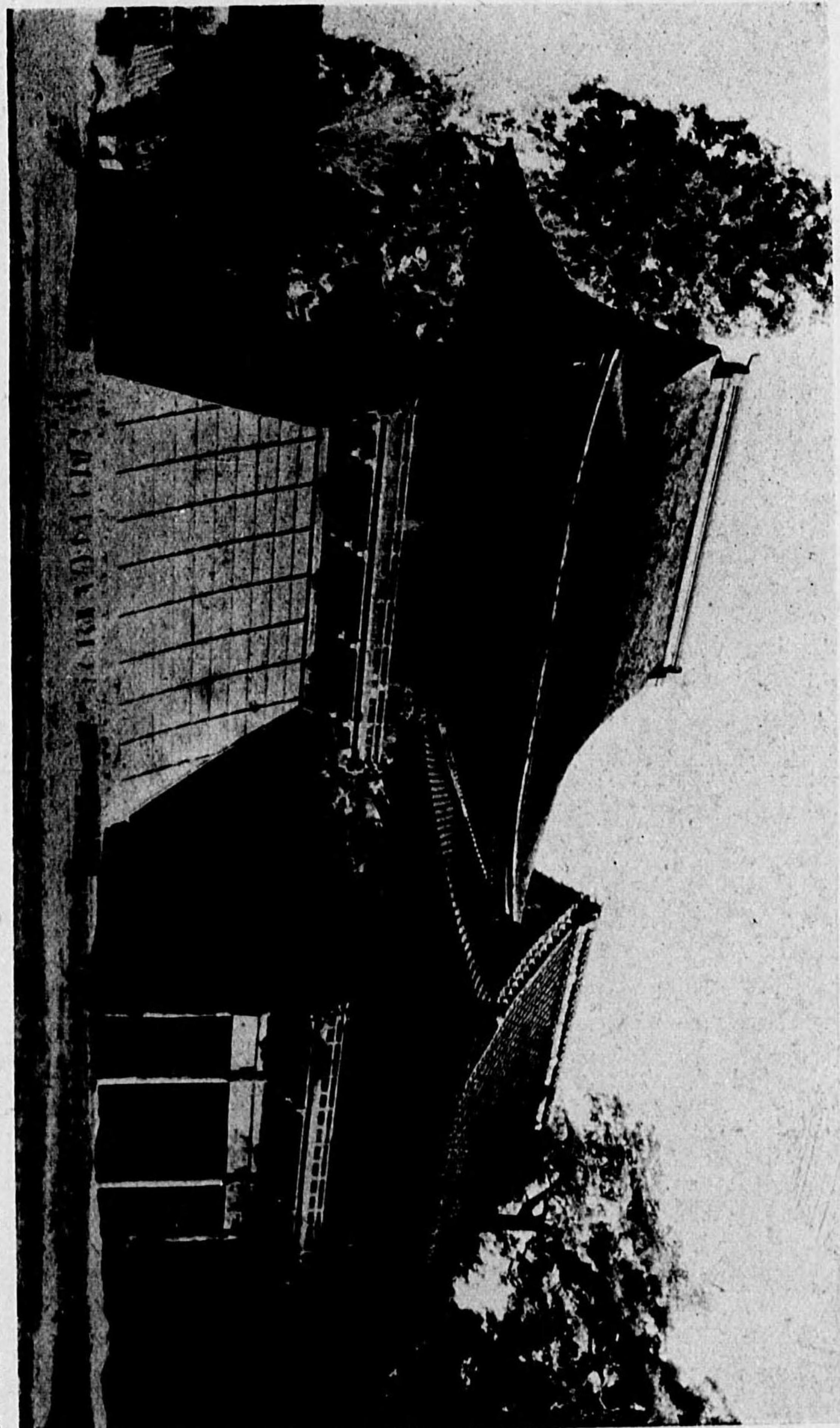
唐様の四天柱・木鼻・臺輪に和様の小組格天井、内陣周圍臺輪と天井廻縁との間に彫刻を入れたところ等、取扱は例により自由自在である。須彌壇はこれなら唐様といつてよからう。四天柱との間がすいてみて面白い。地覆下の「足」は大分變つた唐草で、此時代としては珍しいもの。



上、一二三 妙成寺經堂 (昭和十六年二月日・藤原義一氏)

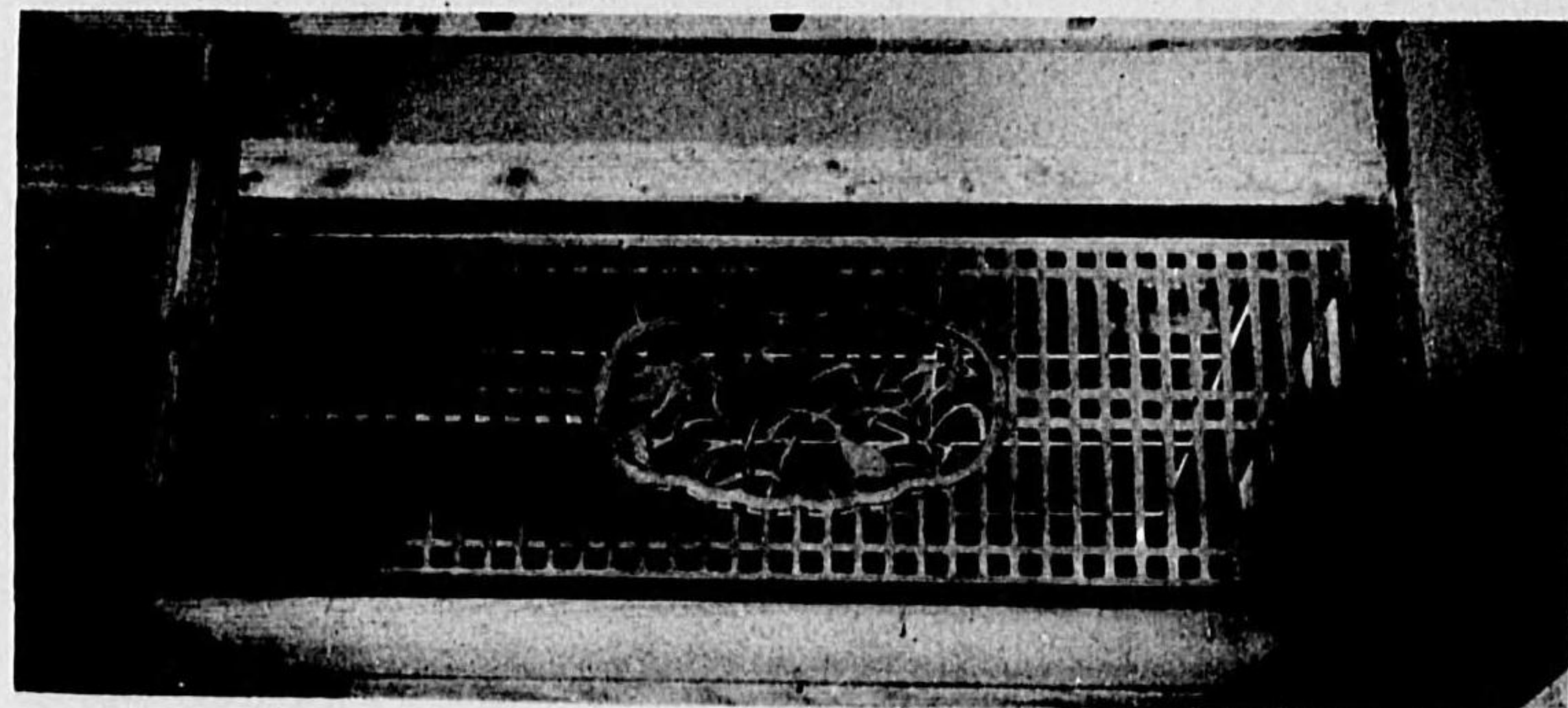
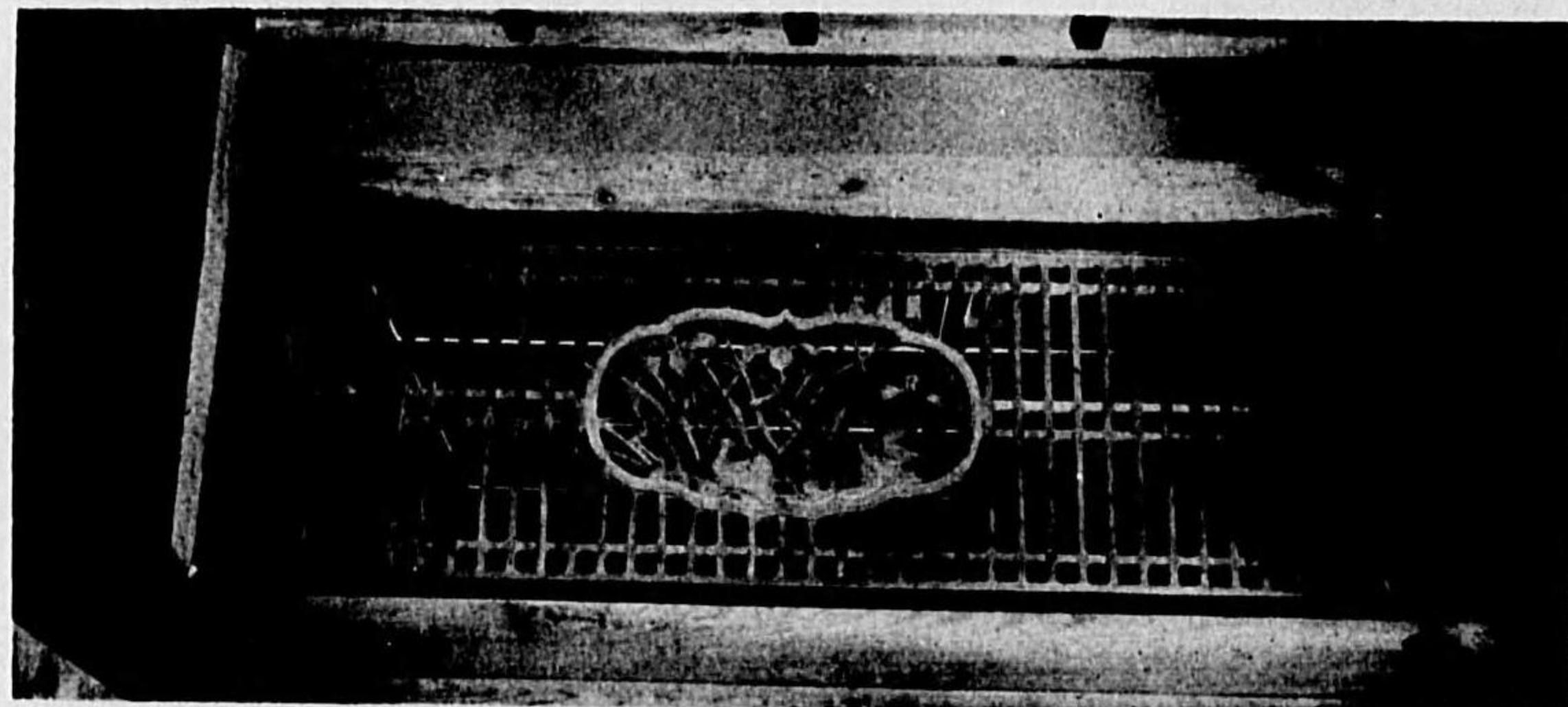
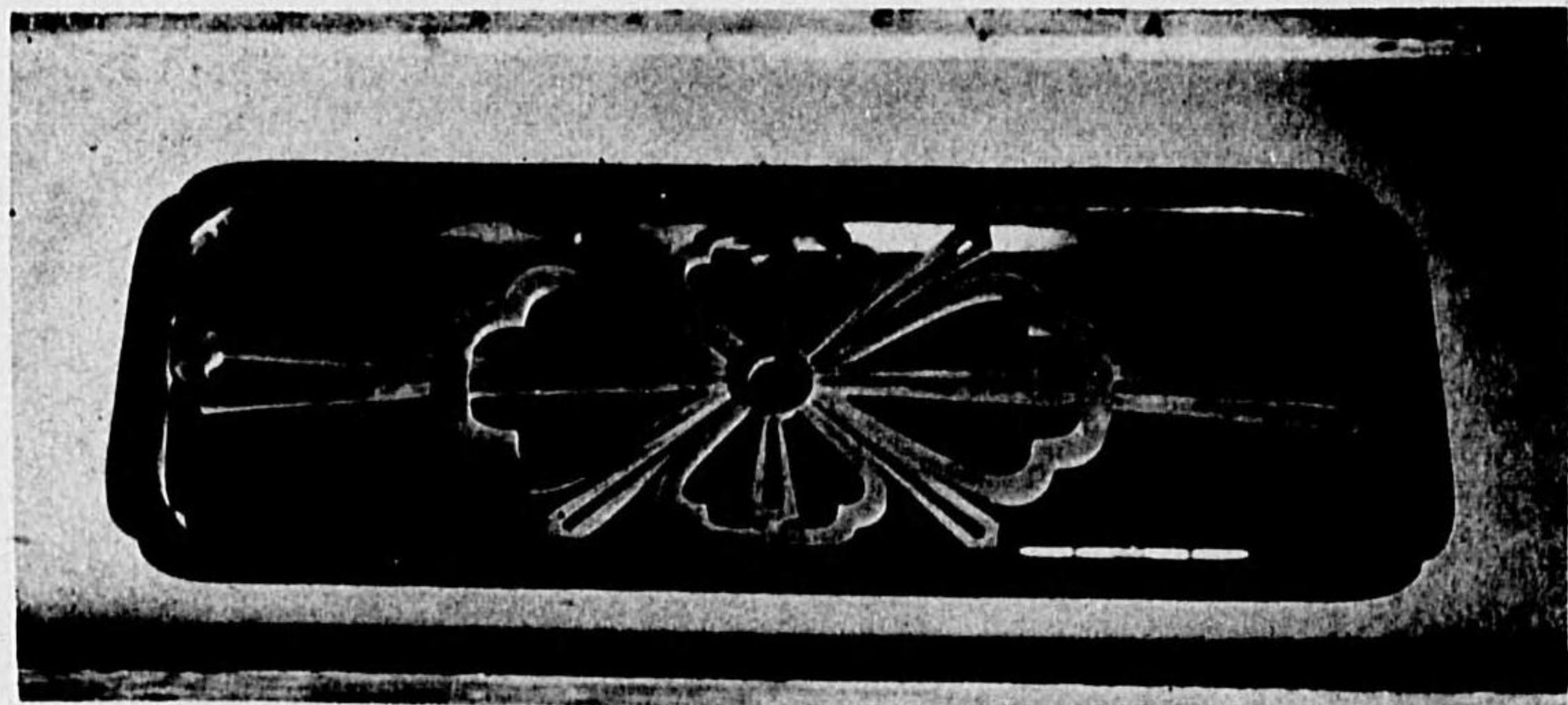
下、一二四 同 書院 (飛鳥園)

經堂は正面三間側面五間單層四注棧瓦葺、天海版一切經を納むといふ。圖で見る通り至極簡単な建築で、寛永九年の建立との事。書院は元和二年の建築といひ、これは修理前の寫眞で、荒廢してゐる様に見えてゐるが、今は既に修理竣成し美しくなつてゐる。室内の欄間は注目に値す。



一二三 妙成寺鐘樓(左)及樓門(右) (昭和十六年二月日・藤原義一氏)

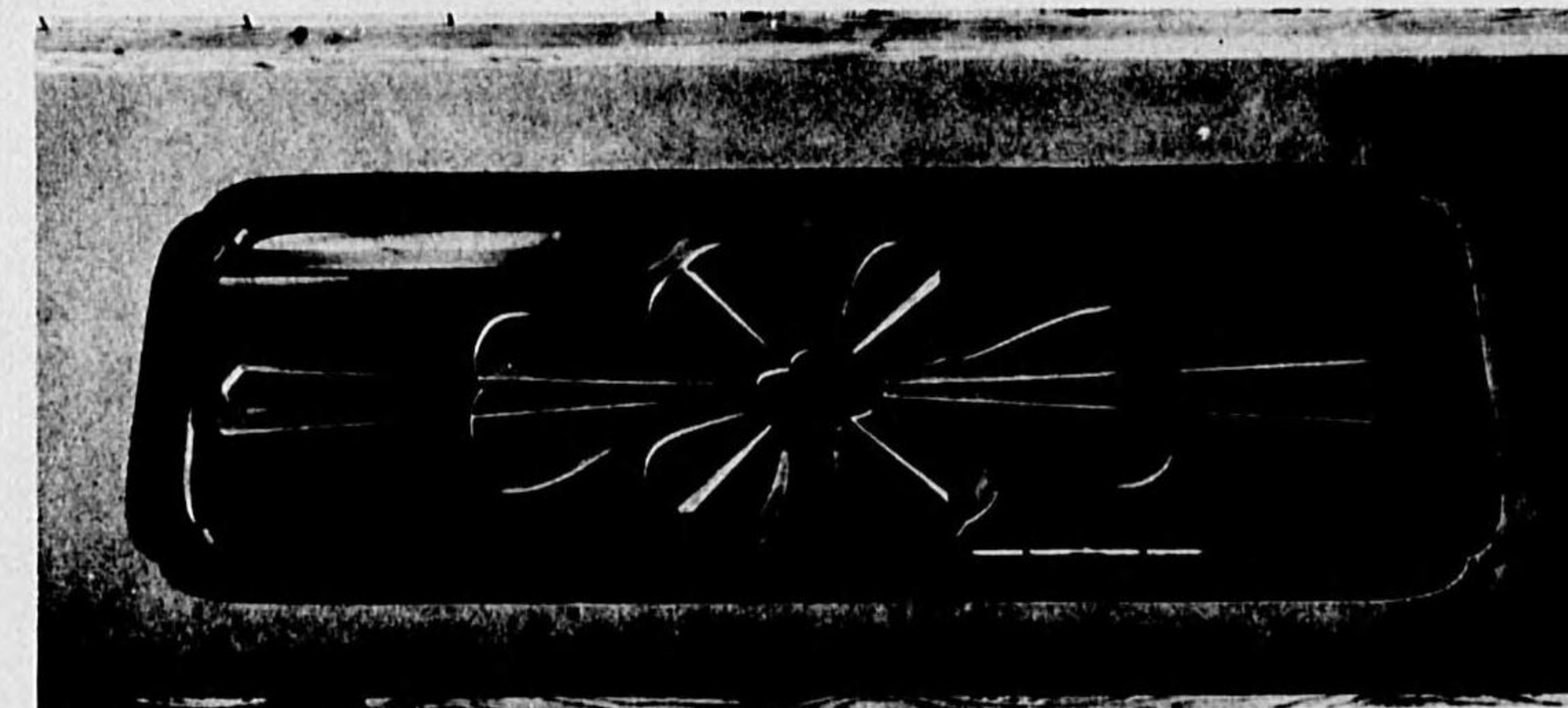
樓門は三間一戸で入母屋造棧瓦葺だが、元は柿葺と見られる。其隣に同じく寛永二年の建立と稱する鐘樓がある、圖に見る如き普通の檜附鐘樓で屋根柿葺、廊を以て祖師堂に連る。



此頁中、一二九 妙成寺書院欄間 其五 (昭和十六年二月十一日)

此頁下、一三〇 同 其六 (昭和十六年二月十一日)

書院は大き七間に五間、前前頁の寫眞は修理前ので可なり荒廢してゐる様に見えるが、昭和十三年修理落成して立派になつてゐる。此書院は専門家だと見方が異ふかも知れぬが、我我には欄間が面白い。



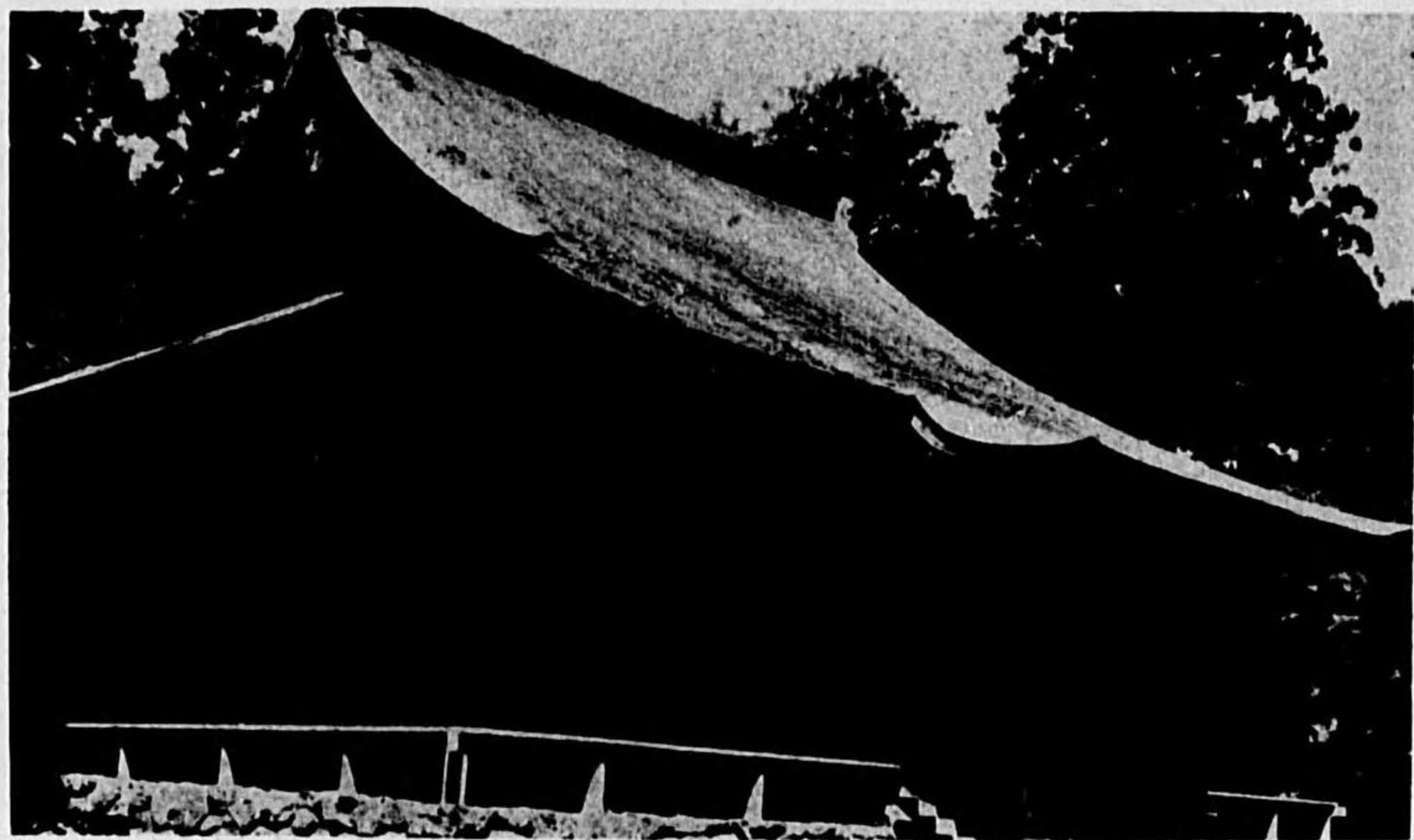
此頁上、一二五 妙成寺書院欄間 其一

此頁中、一二六 同 其二

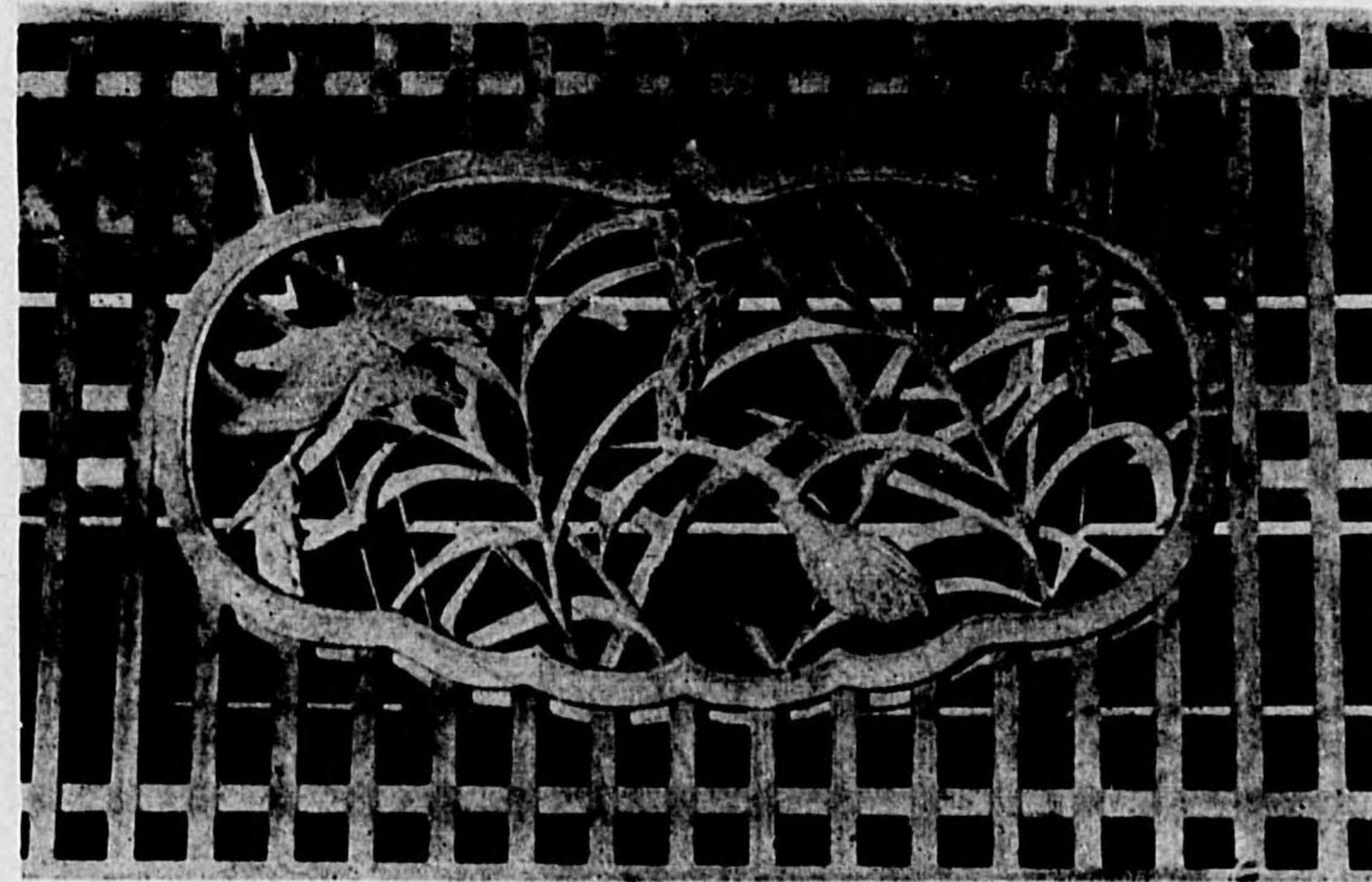
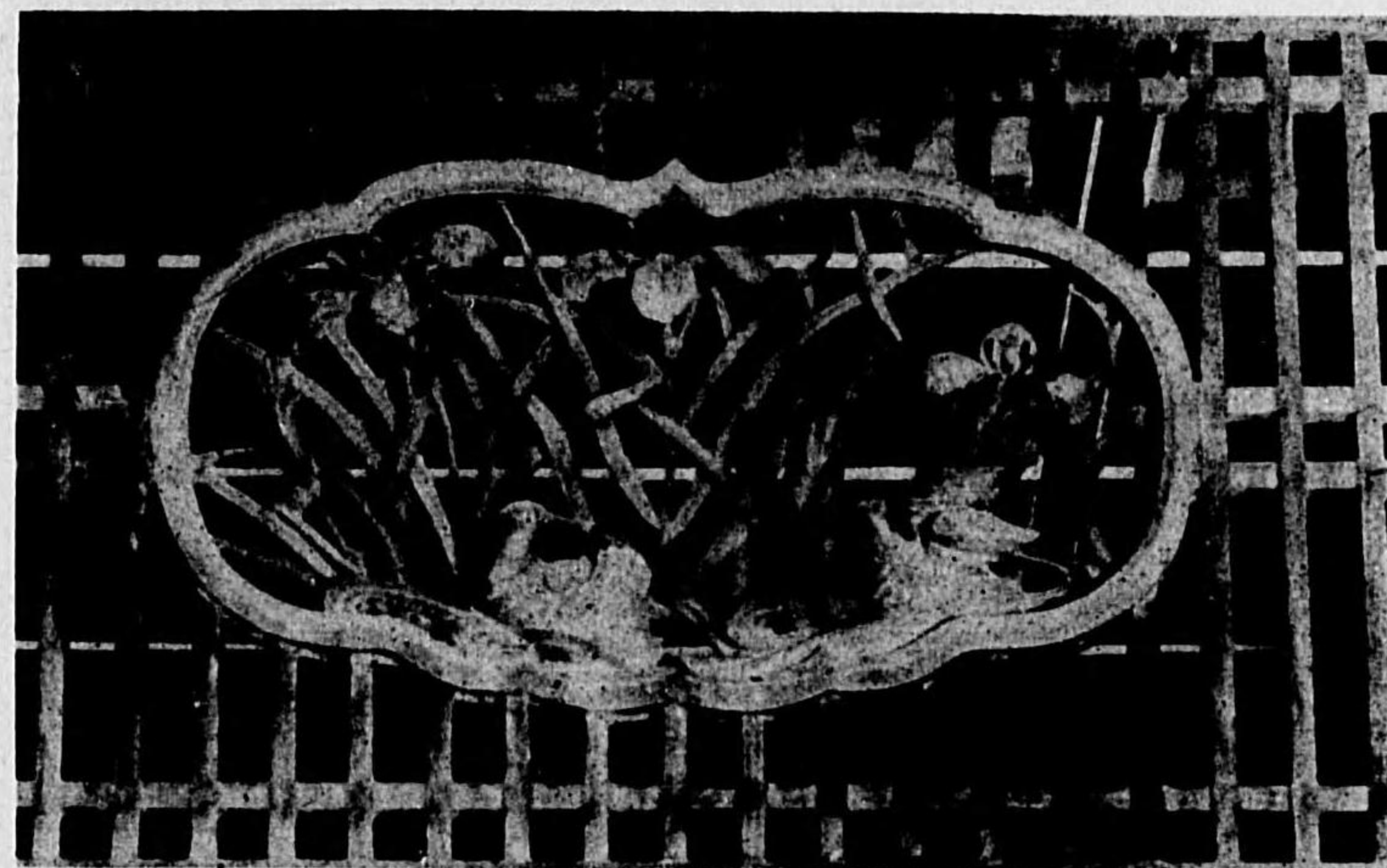
此頁下、一二七 同 其三

次頁上、一二八 同 其四

(以上四圖共物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十六年二月十一日)

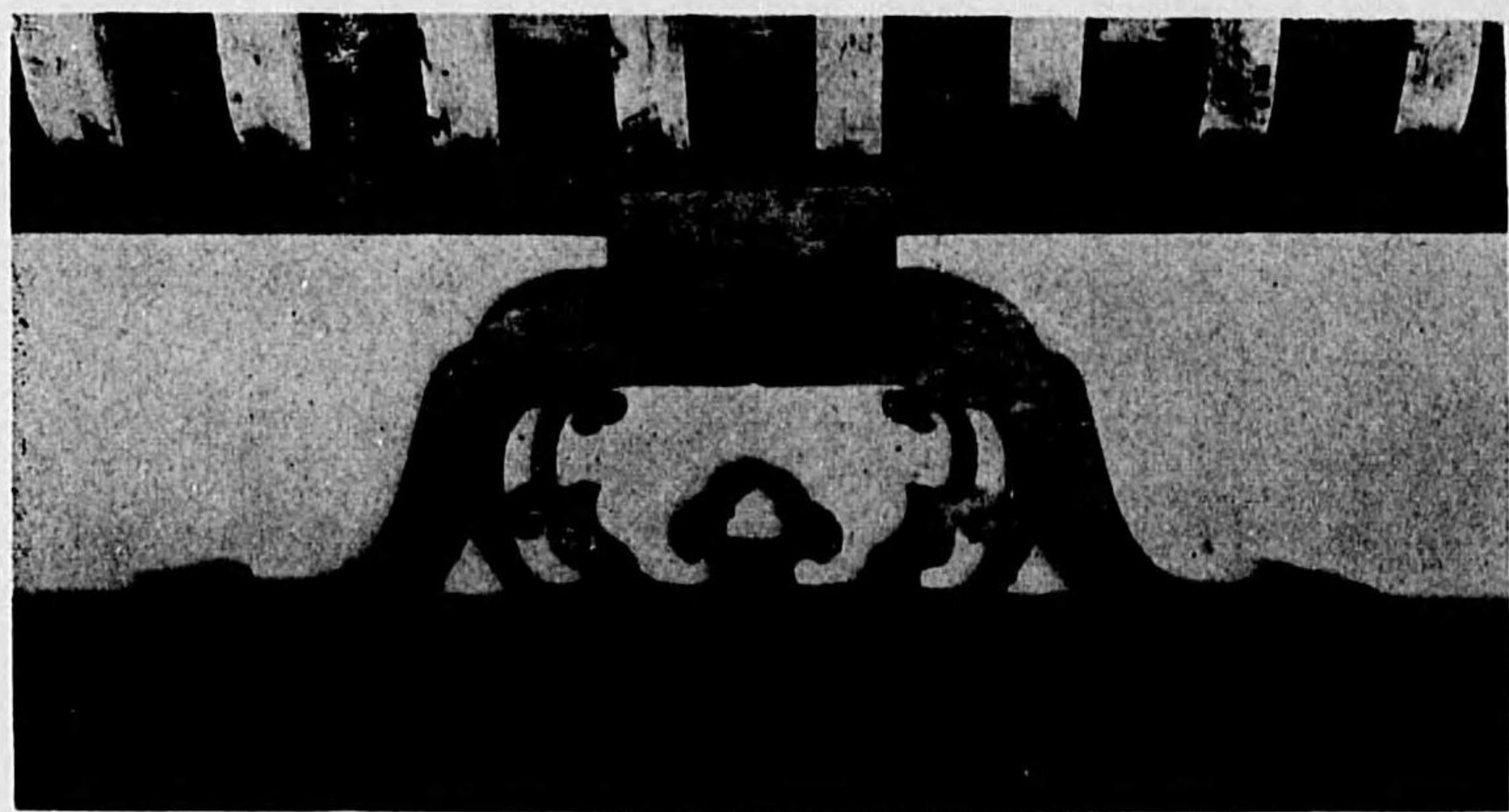


上、一三三 明通寺本堂 其一
 下、一三四 同 其二
 (昭和十六年八月二十二日)
 (昭和十六年八月二十二日)
 庫裏の西方少しはなれた小高い所に南面して建ててある。正嘉二年の建立といふ。五
 間六面單層入母屋造栴葺。正面一間の向拜は後補である。勾欄のない椽が四方を廻って
 るが、内外陣の境に於いて、後方の椽を一段高くしてゐるのは注目すべきである。
 料拱間正面は幕腹、他の三方は間料束。

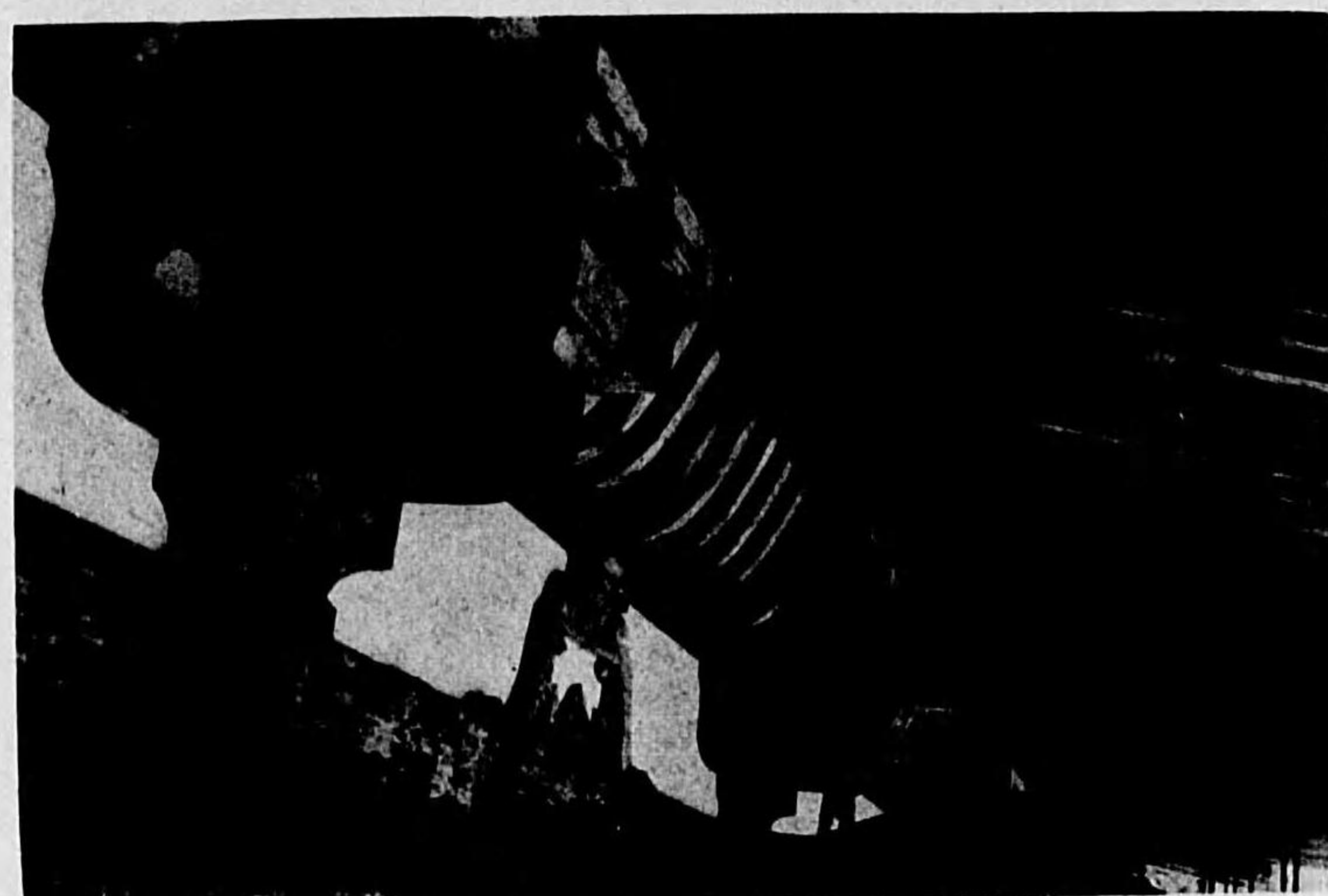


上、一三一 妙成寺書院欄間其五一部詳細 (昭和十六年二月十一日)
 下、一三二 同 其六一部詳細 (昭和十六年二月十一日)

箆欄間の中へ木瓜形・洲濱形・格狭間形等を入れ、其内に精巧な彫刻を挿入した
 例は、桃山から江戸へかけて珍らしくない。此場合、上圖は「鶯鶯に花菖蒲」、下圖は
 「粟に鶴」で、同じくこの時代に賞用されたもの。而も格狭間の輪郭は、其内の彫刻
 がよくできてゐると反對に、線に締りがなくなり、甚だ要領を得ない不満足の形
 をしてゐるのも亦、よく時代の特徴がでてゐる。

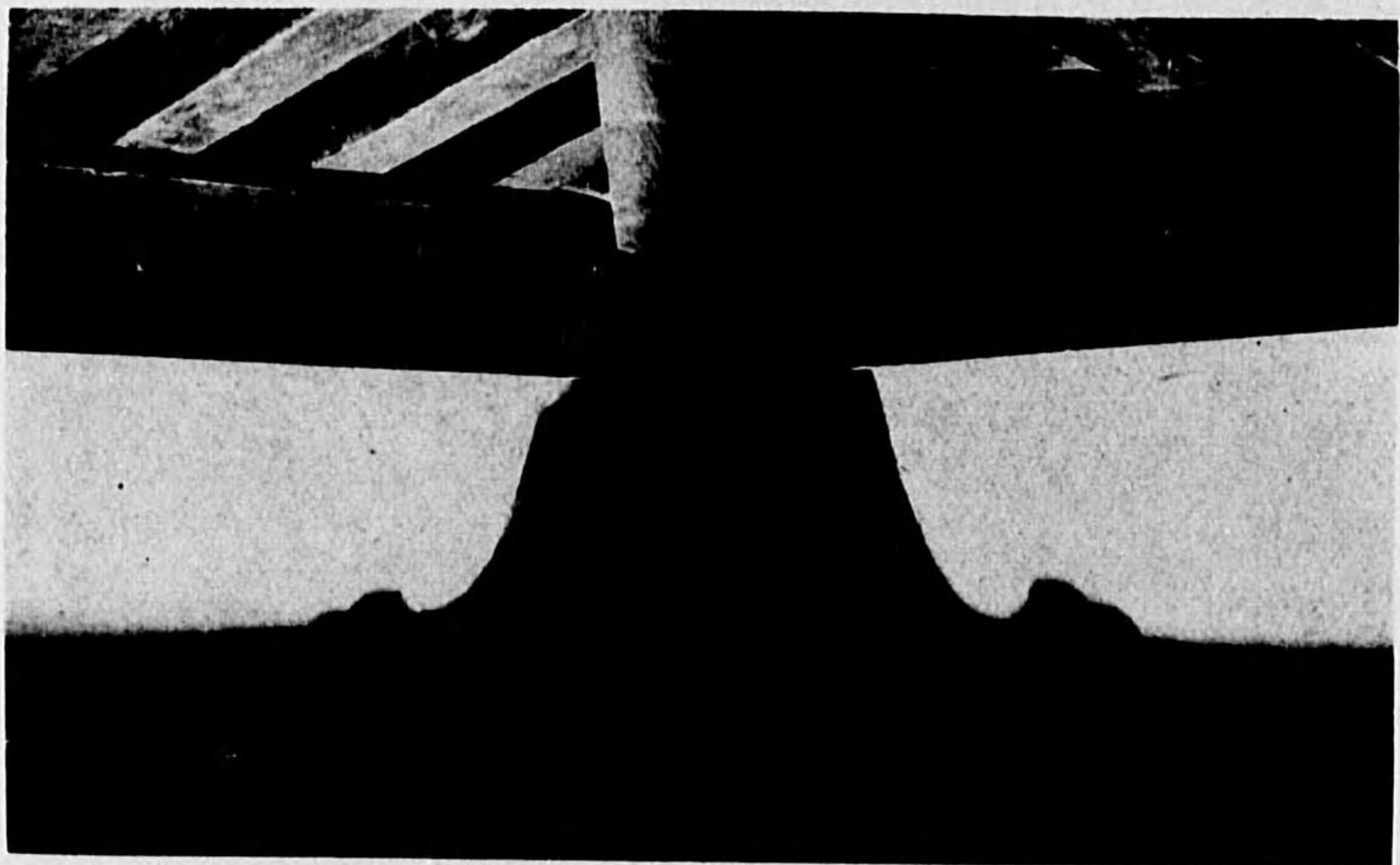
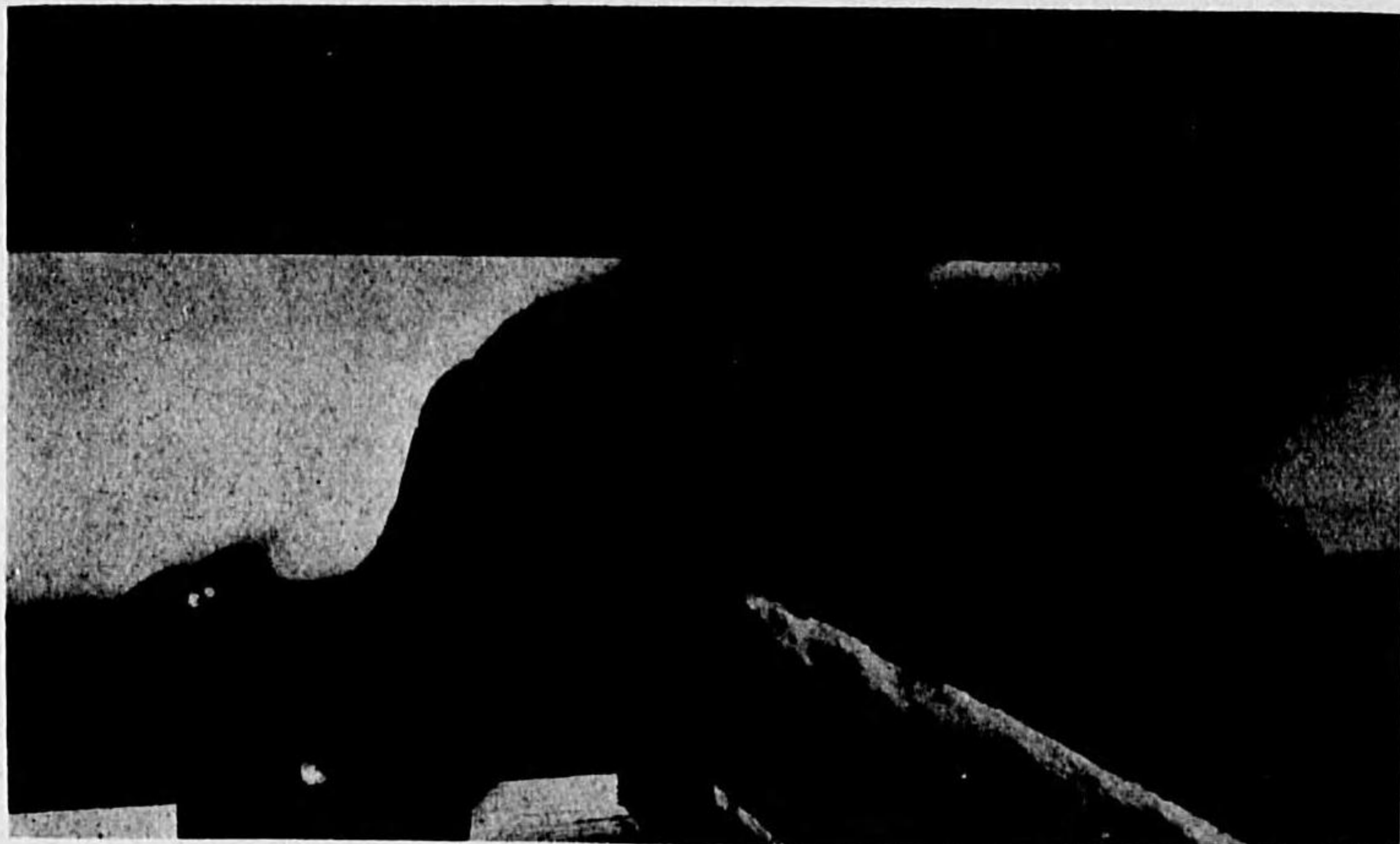


上、一三七 明通寺本堂正面外部料拱間幕股
 下、一三八 同 軒廻 其二
 (昭和十六年八月二十三日)
 (昭和十六年八月二十三日)
 下圖は隅柱上の軒桁の交叉と、夫を受けてゐる鬼料の上ののれる棒肘木、及び隅柱から出
 てゐる木鼻等を見せるのが目的。上圖は正面柱間幕股の一で、平安系統の左右相稱圖案の幕
 股の發達したものの一例。其形完好。



上、一三五 明通寺本堂向拜虹梁部分 (昭和十六年八月二十二日)
 下、一三六 同 正面軒廻 其一 (昭和十六年八月二十二日)

向拜は後に補加したのか、繫虹梁等も上圖で見える様に、袖切の部分の雲形渦文
 や若葉等は桃山以降の形式で、室町にさへもって行けないものである。主屋の軒料
 拱は出組であるが、中央の間の兩側柱上は、内部外陣入側繫虹梁の尻を前方に出し
 てゐること上下圖の如く、下圖では二つ共見えてゐる。

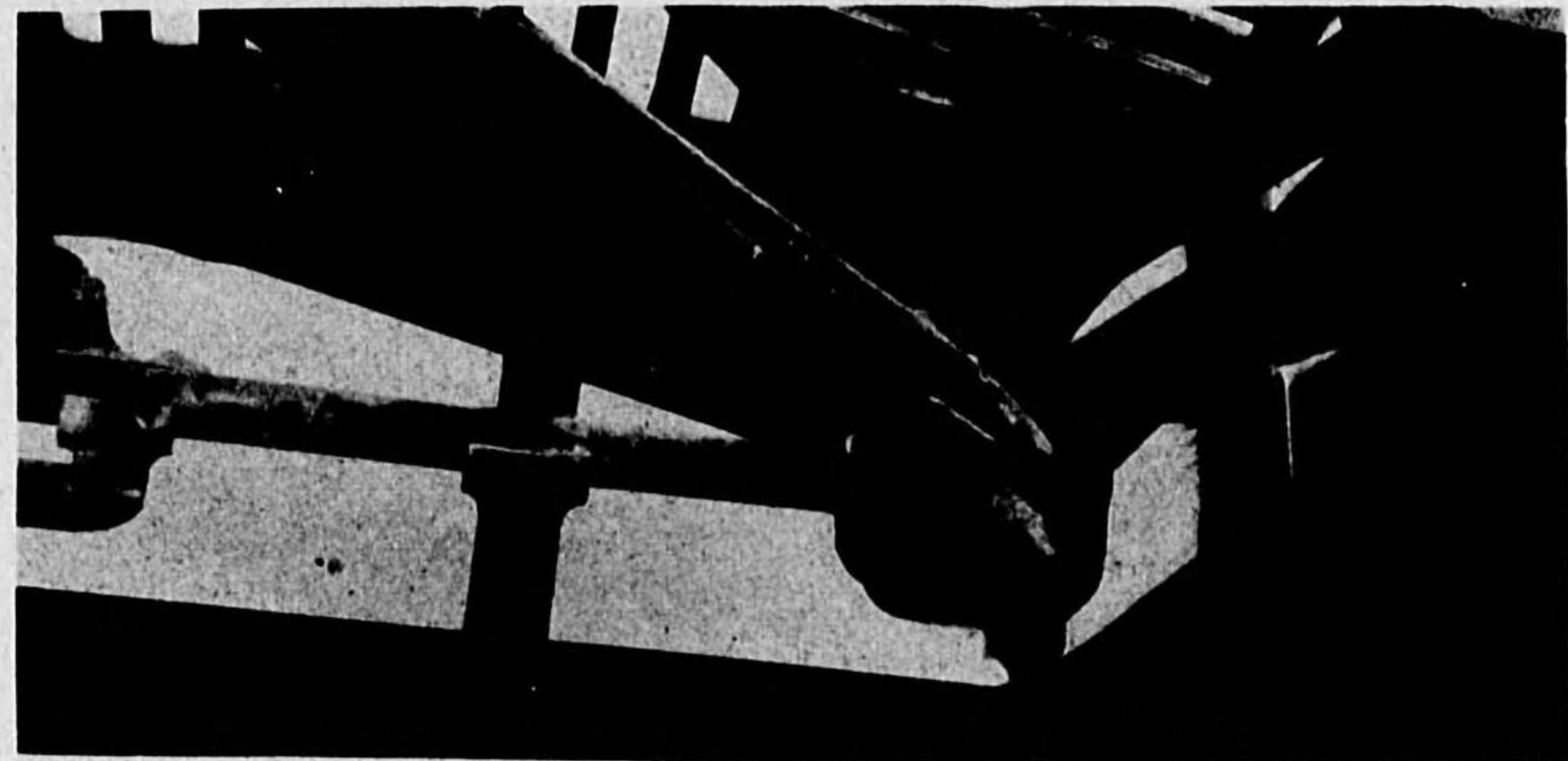


上、一四一 明通寺本堂内部入側葺股 (昭和十六年八月二十二日)

下、一四二 同 隅 (昭和十六年八月二十二日)

一三六・一三八の如く、外部では柱上が二手先料拱だが、内側では三料に含まれた通肘木の上は、鎌倉式の形よろしい大きな板葺股になって居り、入隅も亦中央から縦に直角に折れた同じ形のものにしてあり、外部料拱間のくりぬき葺股の入れである所は、内では間料束にしてあること一三九の如くである。非常に面白い意匠

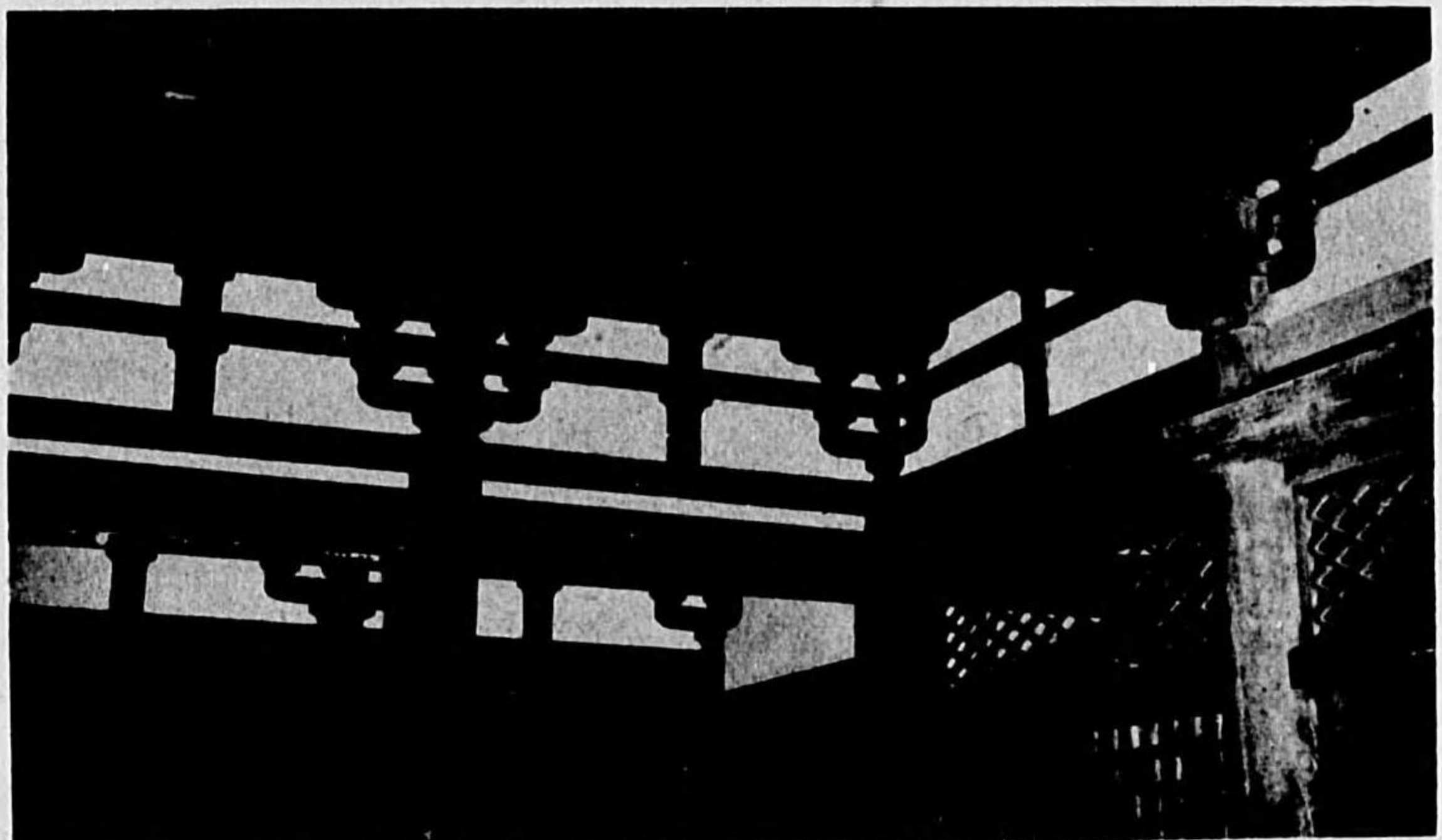
で、獨創的考案に成ってゐる。慾を言へば板葺股の肩の茨の所にもう少し力を持たしたかった。



上、一三九 明通寺本堂内部外陣入側東南隅
下、一四〇 同 東南隅柱上

(昭和十六年八月二十二日)
(昭和十六年八月二十二日)

下圖に於いて柱から三方に袖切も眉もなき平安式虹梁が出てゐるが、其中央の分は隅行の繫虹梁で、其先の方が上圖に現はしてある。此二圖で判明するであらうが、普通の此種の建築の様に、深さ一間の化粧屋根裏の入側が外陣の三方を廻つてゐるが、板葺股や外陣大虹梁鼻等の取扱や手法に變つた所がある。



上、一四三 明通寺本堂外陣内部 其一 (昭和十六年八月二十二日)

下、一四四 同 其二 (昭和十六年八月二十二日)

一四〇に一部分見えてゐる様に、外陣の三方には深さ一間の入側があるから、夫を除いた三間二面の部分には、大虹梁二本を前後に架渡し、上には組入天井がはつてある。此等二本の大虹梁は他の部分と比較して非常に大きく且つ太く、どうも少し他と比例がとれてゐない様である。此等の鼻は入側の部に出で、大料に含まれてゐ

る肘木・其上の料・其上の木鼻に終れる肘木迄、總て一木から刻

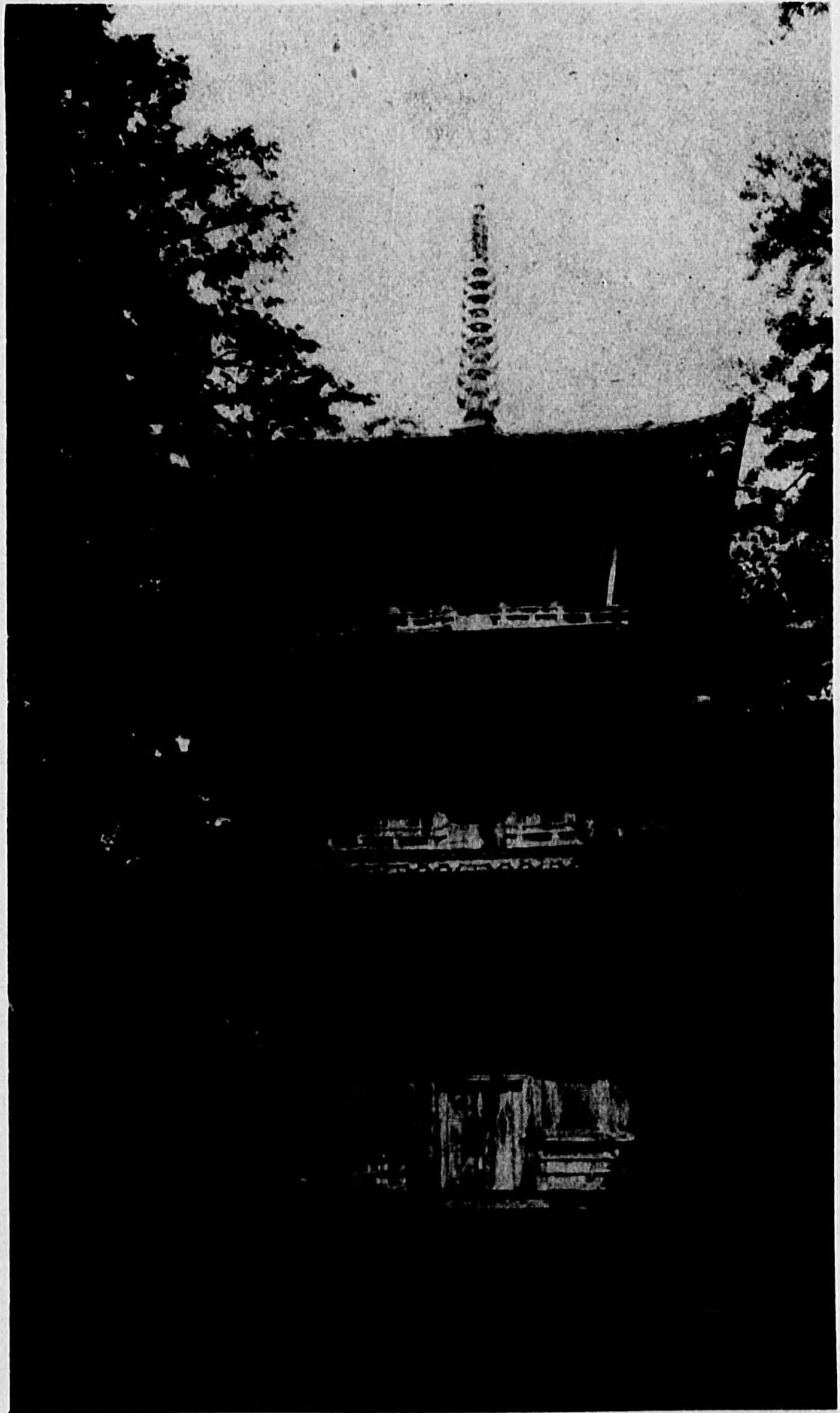
み出されてゐるのである(一四〇及び本文挿圖)。

右、一四五 明通寺本堂内陣一部 其二 (昭和十六年八月二十二日)
 左、一四六 同 其二 (昭和十六年八月二十三日)

内陣にも圖の様に組入天井を設け、入側の化粧柱は後方を巡つてゐるが、内陣を少し廣くするためか、或は何か他に原因があつてか、背面入側の部分を少しばかり狭くしてある。右圖に於いては組入天井の右下、左圖では左下が、直線形の支輪の様に見えるのは、支輪ではなくて實は右圖で判る様に化粧柱の一部である。



一四七 明通寺三重塔



(昭和十六年八月二十二日)

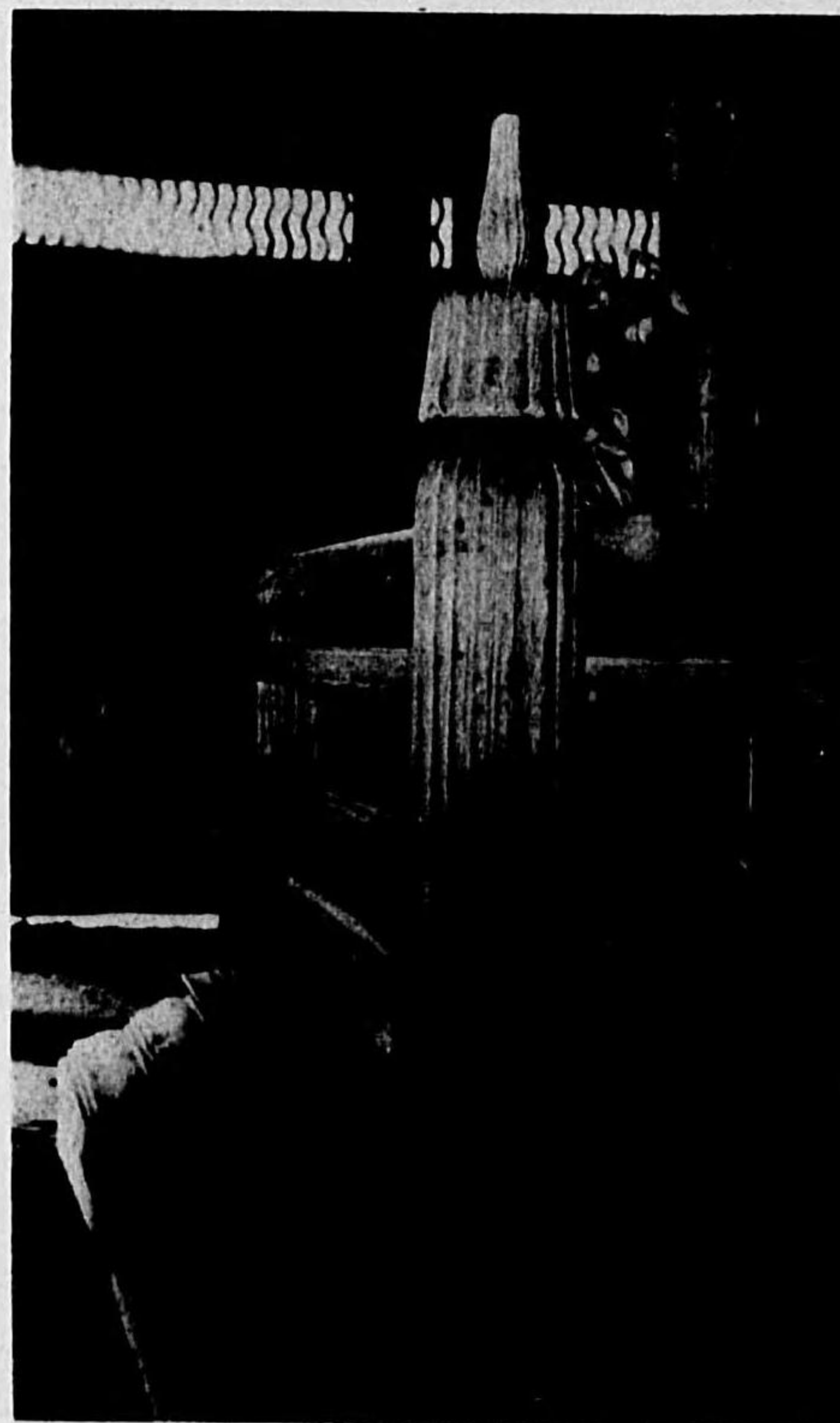
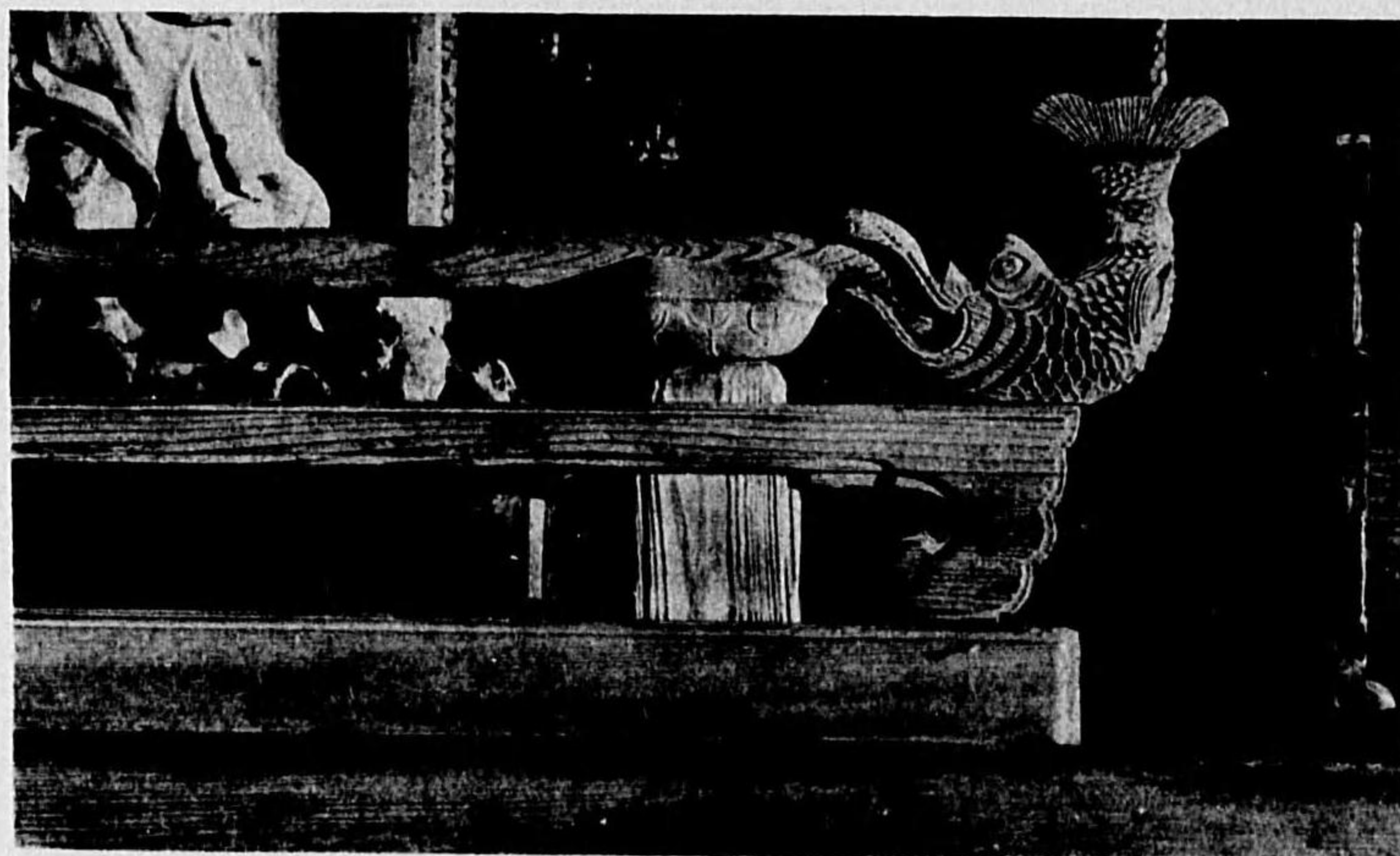
方三間の普通の三重塔。屋根は柿葺であるが、現在は檜瓦で葺いてある。寺傳によると大同年間創建、文永七年再建といふ。立派な鎌倉建築であるが、擬寶珠には元祿の銘がある。内部壁八面及び四天柱に十二天の像が描いてある。

上、一四八 明通寺三重塔内部壁畫水天像
下、一四九 同 四天柱下部

(昭和十六年八月二十二日)
(昭和十六年八月二十二日)
(物差は曲尺の約一尺(一呎))

上圖は西側南手の壁面にある水天像の七分身。頭から五蛇が出てゐるのと、左手には蛇を
持てゐるのが氣に入つた。此繪は桃山末か江戸初期位と思はれる。
初重内部四天柱下及び須彌壇下には下圖の様に蓮瓣を巡らしてゐるが、此瓣は當初のもの
と思はれ、頗るよろしい出来である。和様須彌壇を設け、側面に横目連子を入れてあるから、
何れもよく調和し、大に落つて見える。

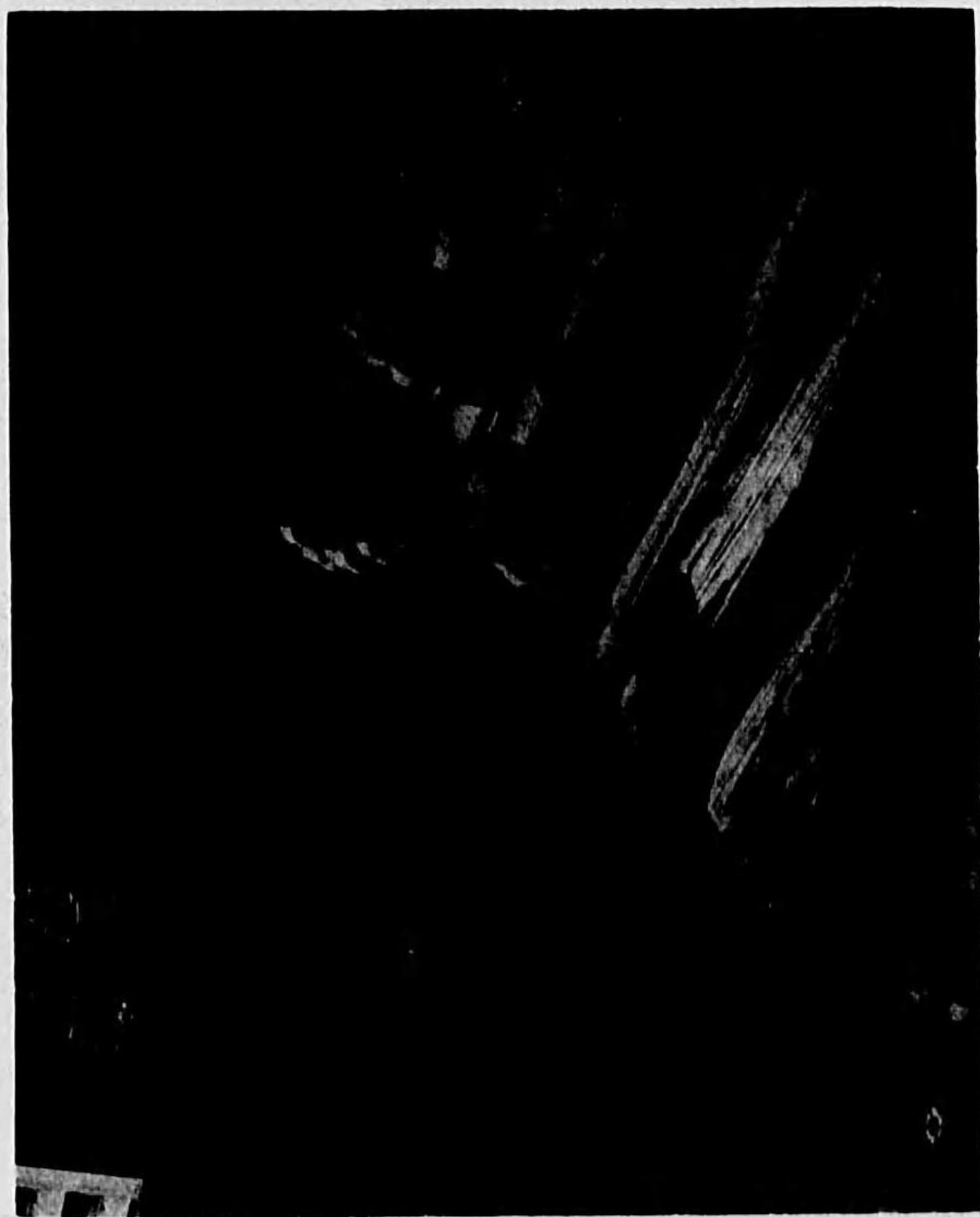
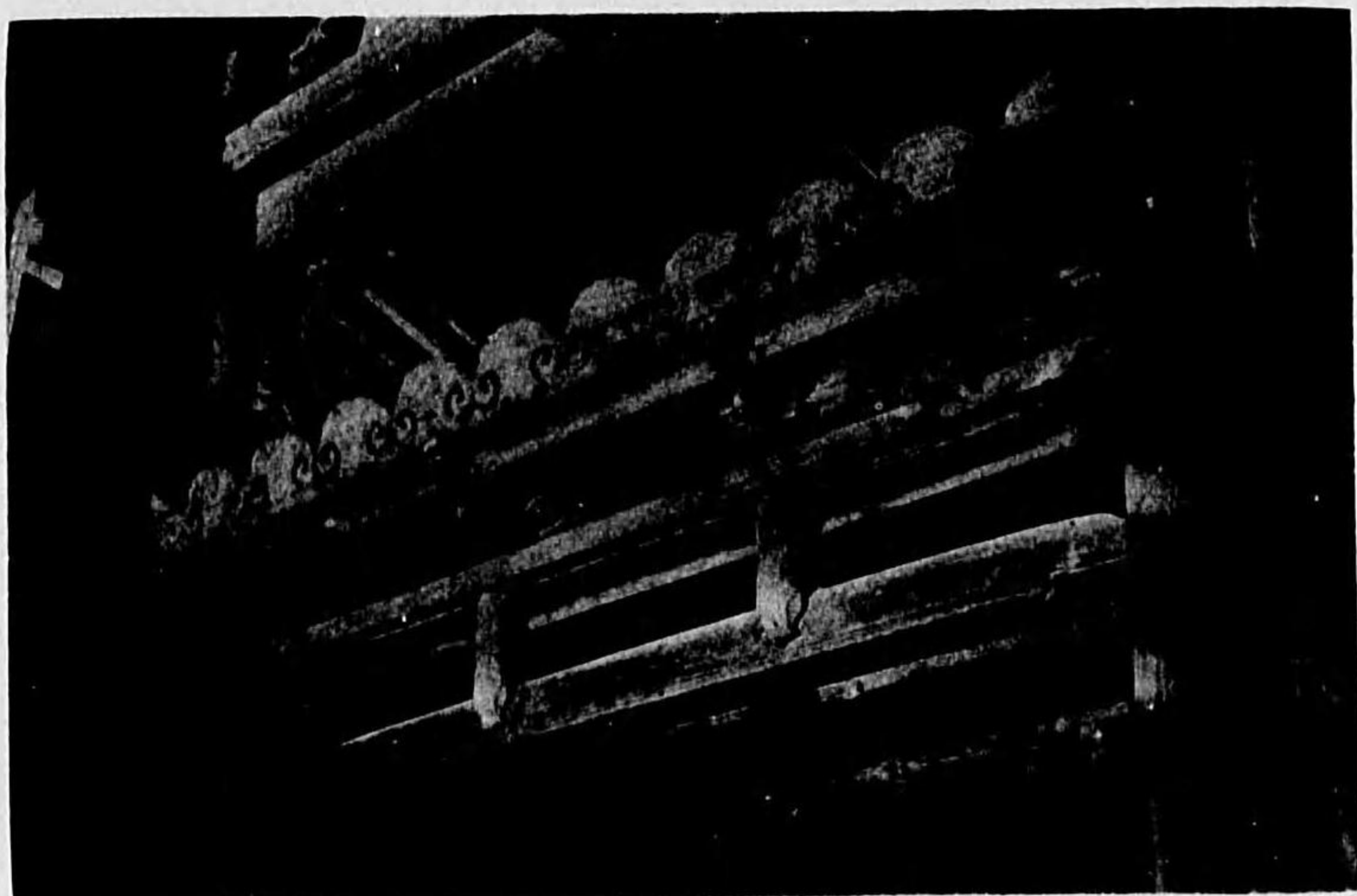




上、一五二 定光寺本堂須彌壇勾欄 (物差は曲尺の一尺・昭和三年九月十五日)
 下、一五三 同 (物差は曲尺の一尺・昭和三年九月十五日)
 須彌壇は普通の唐様であるが、勾欄が珍らしい。勾欄の地覆と平桁との間には、當初何か格狭間の様な簡単な彫刻をした板が入れてあったらしいが、夫等は全部亡くなつて了つた。併し他は全部残つてゐる。平桁の先は恰も懸魚を縦に半截した様な、下向きの蔵手の如き形に終り、架木の先端は尾をあげた鯪にしてあるが、此等は何れも他に類例のない意匠から成つてゐる。東上の蓮葉は少し肥厚し過ぎてゐると思ふ。



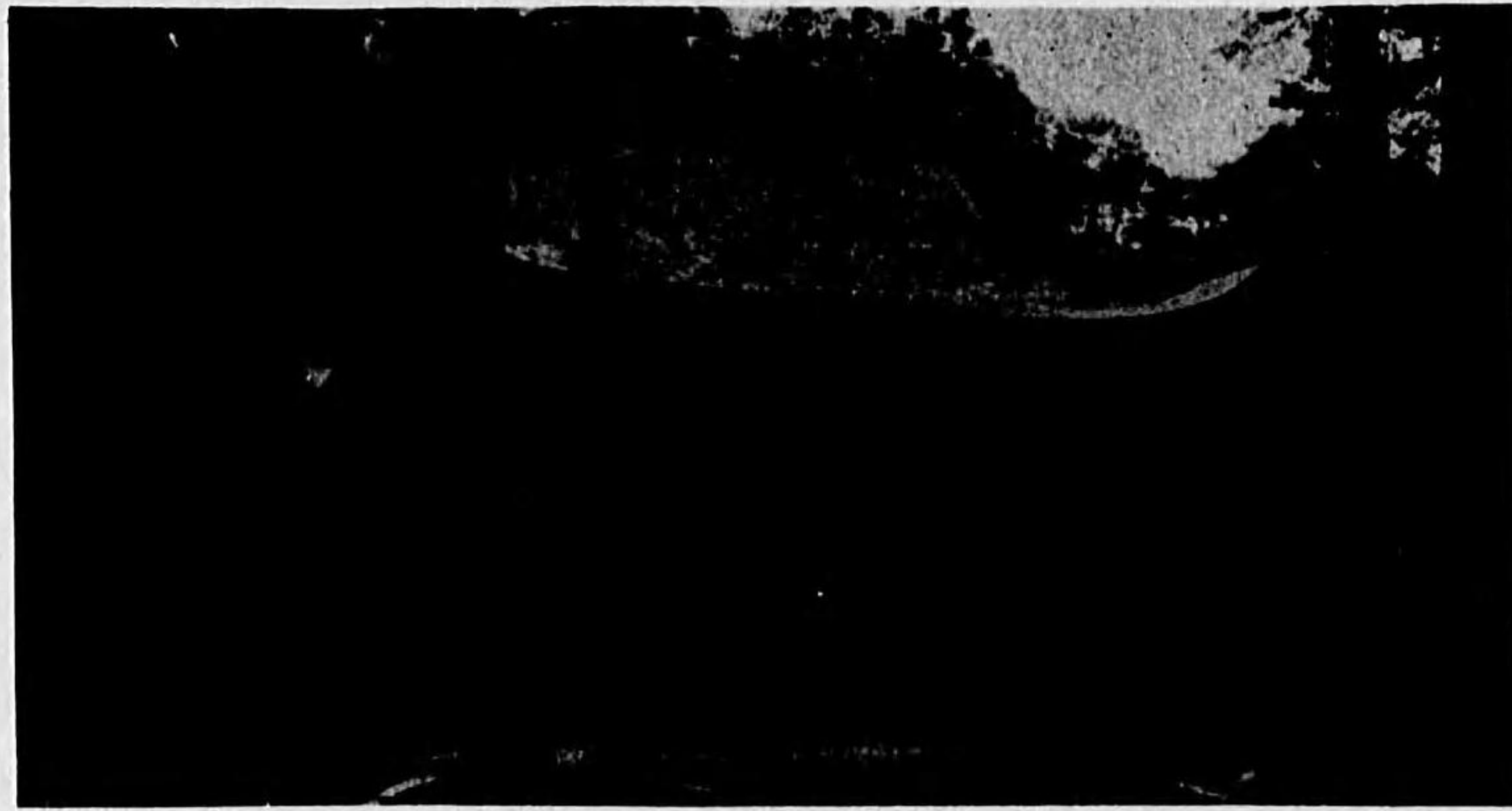
上、一五〇 定光寺本堂正面(修理前) (中野 藝術院)
 下、一五一 同 側面(修理後) (昭和十六年七月三十一日)
 修理前は上圖の様に上層は漸く軸部だけが出来ただけで、切妻造りの假屋根を架けてあつたが、先年修理の際推定復原をして、下圖の様に立派に室町式にでき上つた。細部の様式に就いては多少意見がなくもないが、概してよくできてゐる。



上、一五四 定光寺本堂脇壇上部詳細 (昭和三年九月十五日)
 下、一五五 同 須彌壇上厨子部分 (昭和十六年七月三十一日)
 能く似てゐるが、上と下とは夫々如意頭文の茨が二つと一つ、前方及び隅に突出してゐる木鼻が小さいのと大きいのと、夫位の差である。



上、一五六 永保寺観音堂正面 (昭和二年一月四日)
 下、一五七 同 下層軒一部 (昭和十六年八月一日)
 岐阜縣多治見町にあるが、町からは大分離れてゐる。寺には観音堂と開山堂と二つ立派な國寶建築がある。観音堂は方五間重層入母屋造檜皮葺。唐様建築だのに床も椽もあり、料拱も結組でなく、且つ上下層共化粧樫は一木もない。正和三年の建立といふ。



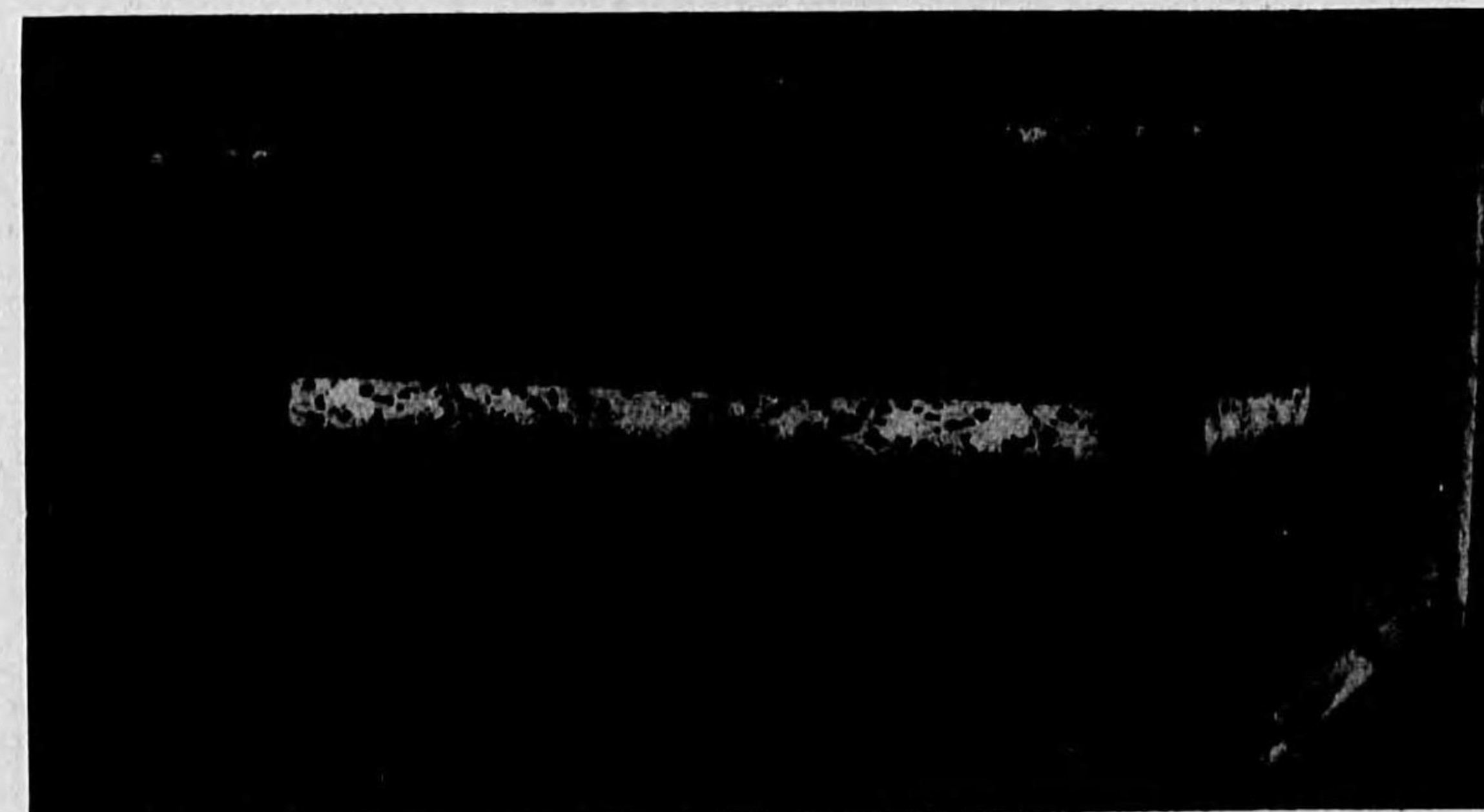
上、一六〇 永保寺開山堂正面 (昭和九年九月十四日)
 中、一六一 同 背面 (昭和二年一月四日)
 下、一六二 同 禮堂妻 (昭和九年九月十四日)
 入母屋造で文和元年の建立で有名な建築。禮堂の懸魚に注意せよ。



上、一五八 永保寺觀音堂内部陣隅
 下、一五九 同 須彌壇

(昭和九年九月十四日)
 (昭和三年七月十六日)

上圖は内部陣隅の一隅で、圖で大概想像できると思ふが、まことにさばりとした建築。
 下圖は須彌壇で、これは先づ純唐様であるが、勾欄の地覆・平桁間に入れてある唐草及び羽
 目板のところにある細長い透彫の唐草は後補ださうで、これは實によくできてゐるので、今
 迄氣がつかならた。これははづして見た人の話だから誤ではあるまい。





上、一六三 永保寺開山堂禮堂軒料拱
下、一六四 同 祠堂軒裏

上圖は三手先唐様諸組の料拱を見せるのが目的の寫眞で、一具につき尾極が二本用ひであるから、複雑極つてゐる。圖に於いて唐様肘木と尾極の特有な形が明らかであらう。下圖は祠堂背面の軒裏の一部で、觀音堂と同じく化粧極を用ひてないが、料拱は諸組にしてある。



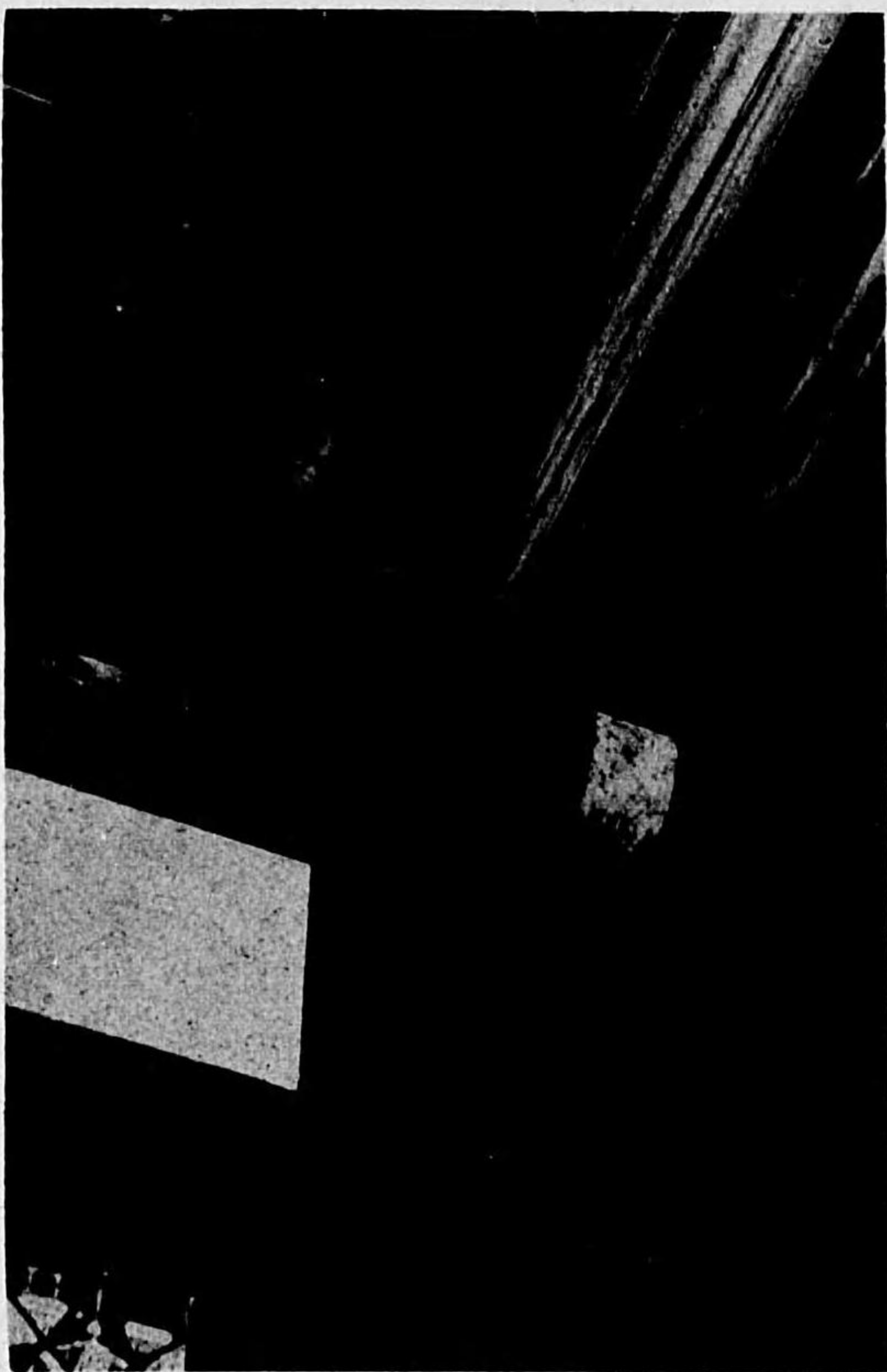
(昭和九年九月十四日)

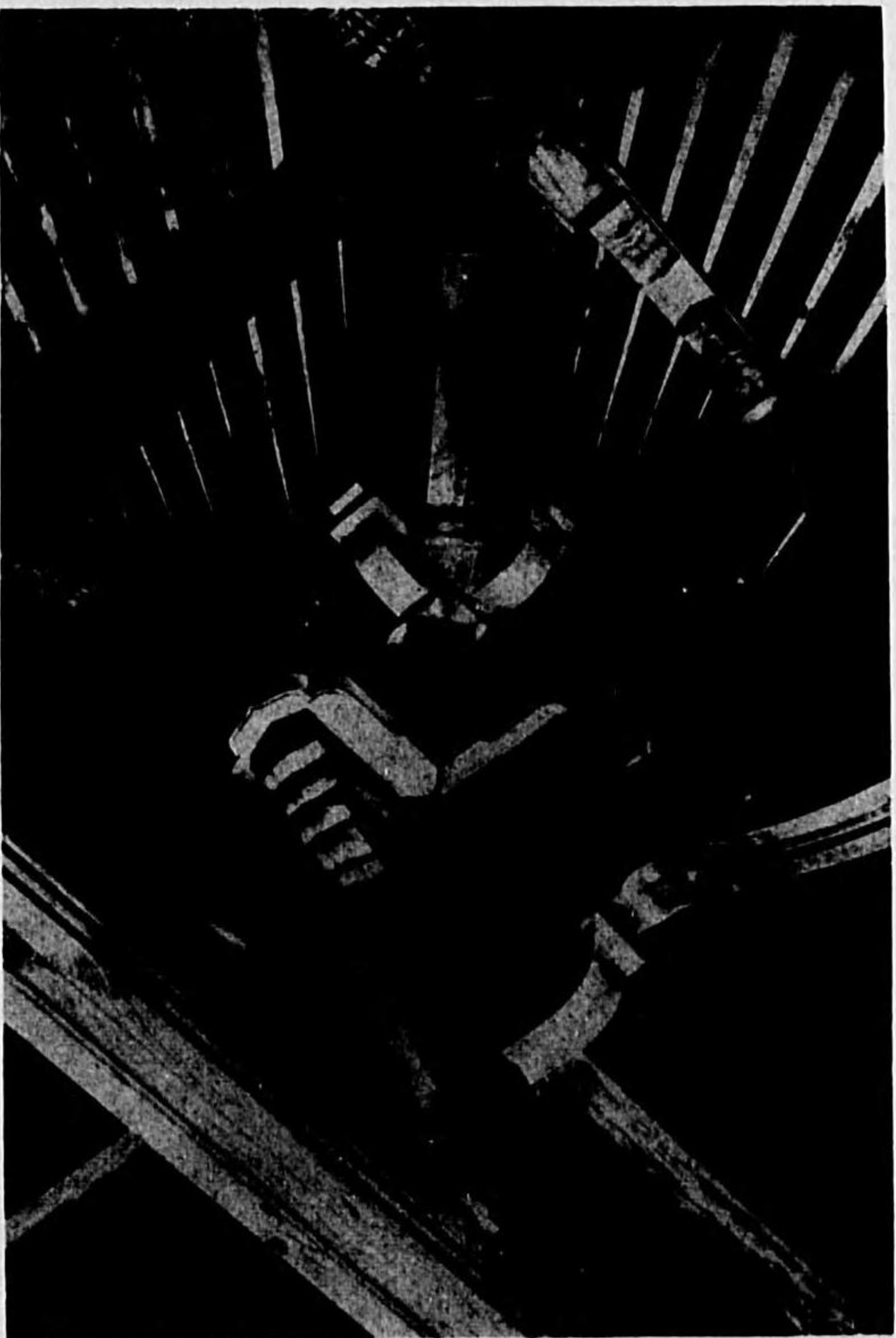
(昭和十六年八月一日)

上、一六五 永保寺開山堂禮堂あひの間境
下、一六六 同 其二

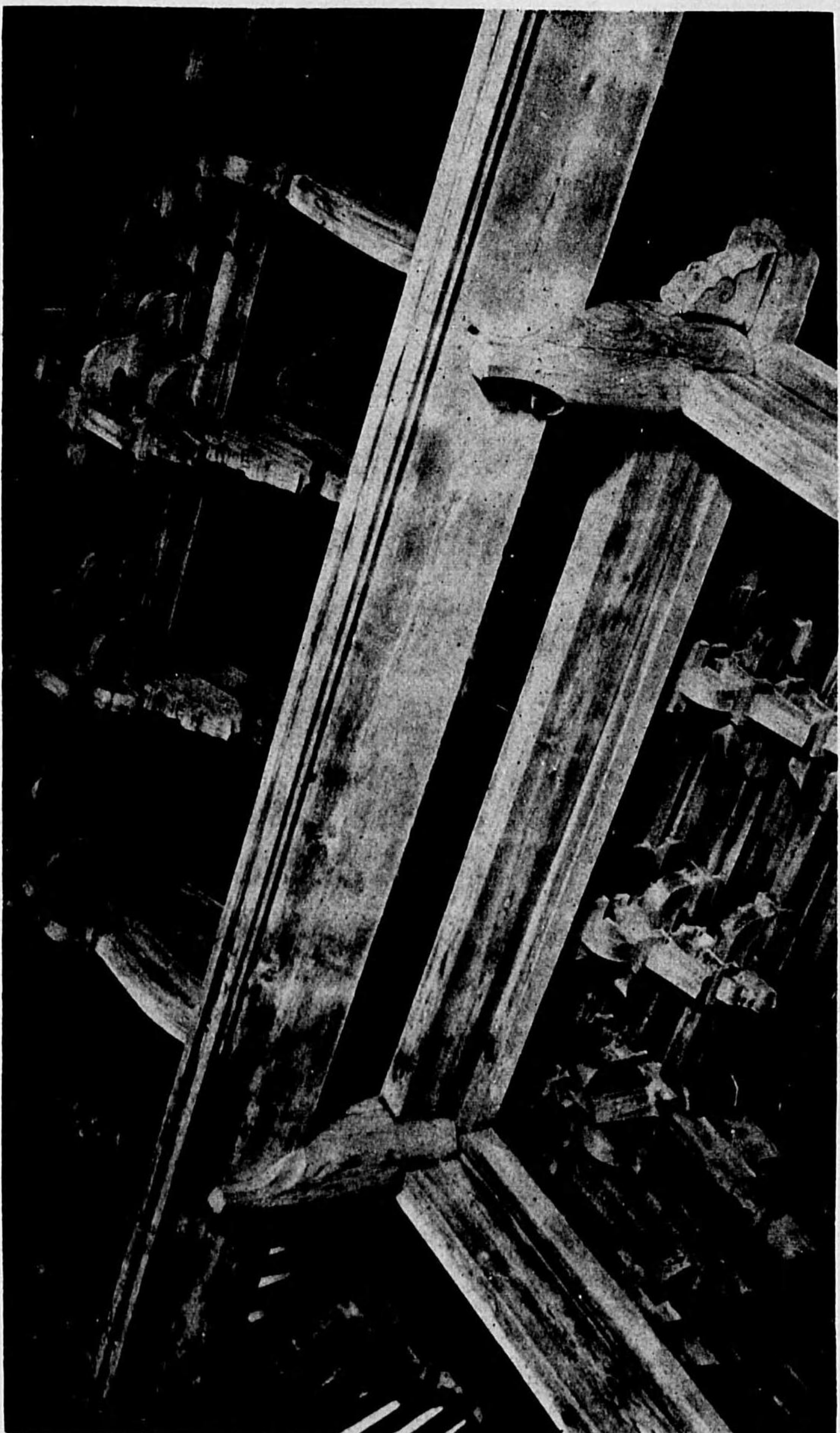
(昭和十六年八月一日)
(昭和九年九月十三日)

上圖は禮堂側から、下圖はあひの間の側から、其境に用ひてある大虹梁を見た所で、其大虹梁を柱に挿込んである部分を、側面から削りとり、扱て細くして巧にさし入れ、下端は二手先の持送りで支へてゐる。ついで他に類例を知らない珍しい取扱方である。



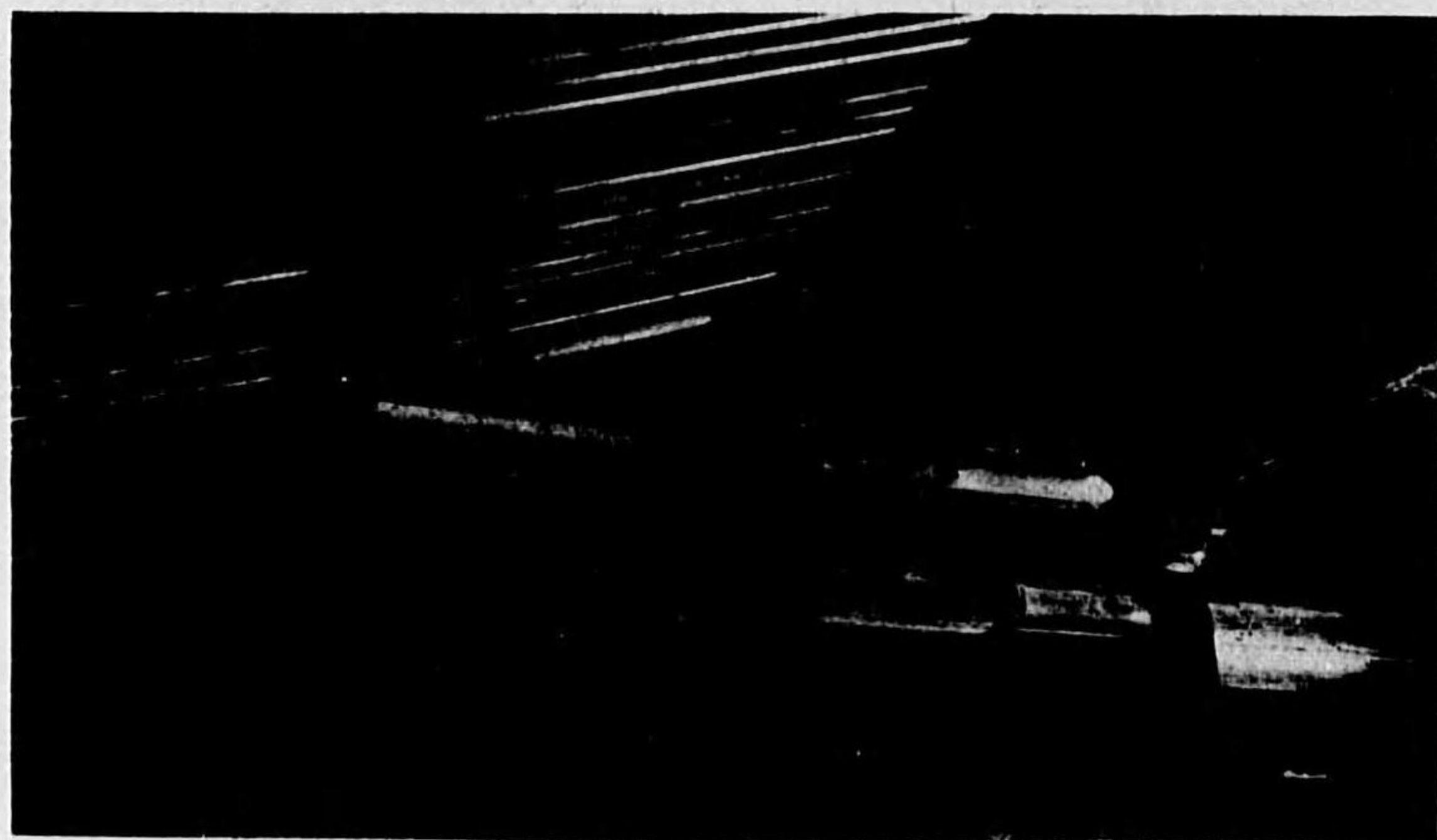
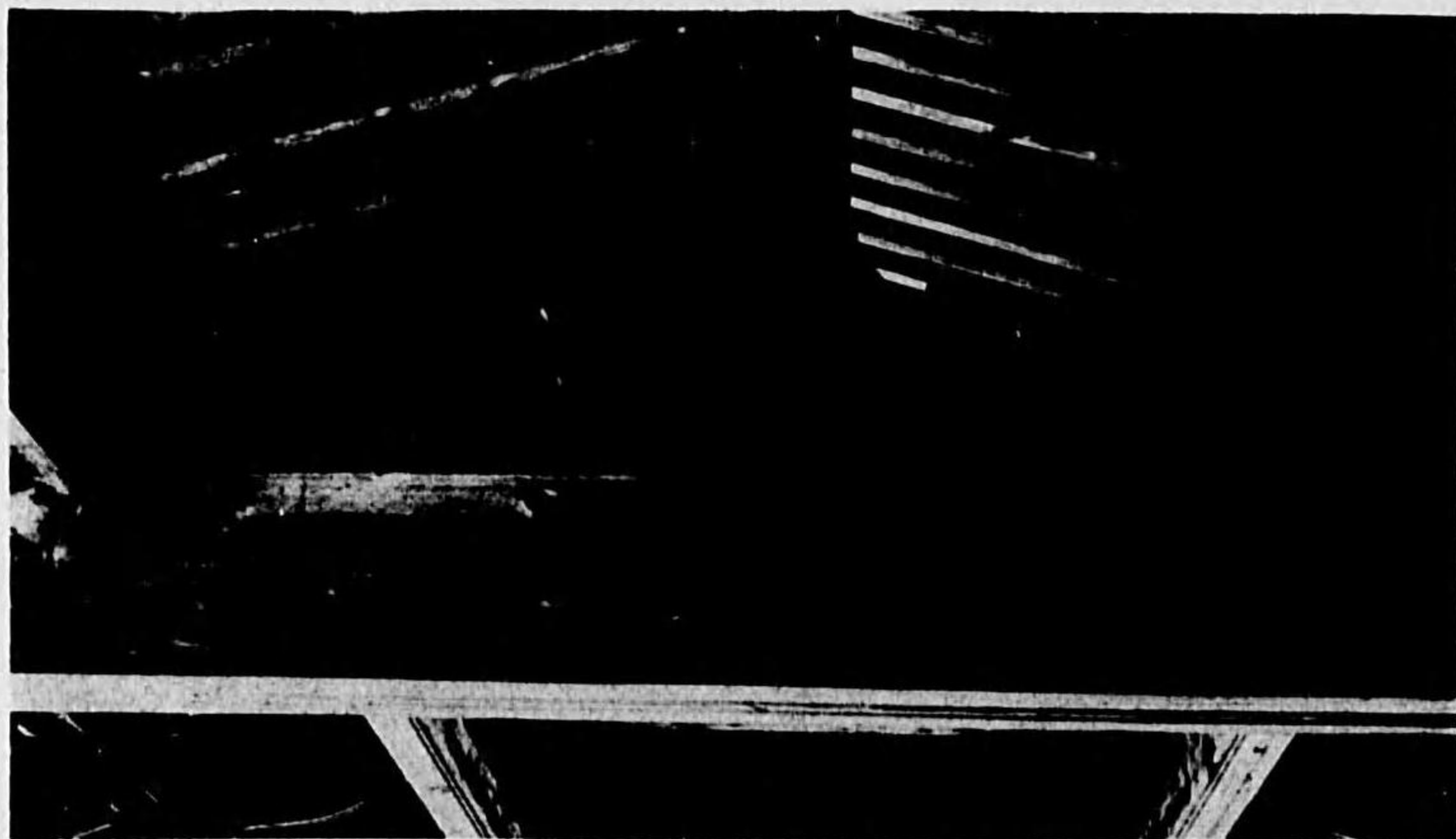


上、一六七 永保寺開山堂禮堂内部 其一 (昭和三年九月十六日)
 下、一六八 同 其二 (昭和九年九月十四日)
 前頁上圖即ち一六五に掲げたと同じ隅を、少しひろく見せたのが一六七。唐様建築の隅は、「火打梁」を使ふか、左もなくばこの様に長い肘木を用ひて補強するのである。一六八は大虹梁上に大瓶束を建て、中央の部を方形に區劃し、周圍を化粧屋根裏とし、その内に鏡天井をはった所を見せたのである。



一六九 永保寺開山堂禮堂内部 其三 (昭和三年九月十六日)

前頁下圖に於いて、大虹梁・大瓶束・頭貫・基輪等は、何れも此圖に現はれてゐる。つまり此は前圖を寫したと反對の方から見たので、右下の隅は一六七の隅と同じ所であるから、總て此圖の見當はついた筈である。内陣天井廻り拱は二手先。



上、一七一 永保寺開山堂あひの間大虹梁上蓋股 (昭和九年九月十三日)
 下、一七二 同 祠堂正面虹梁大瓶束 (昭和九年九月十三日)

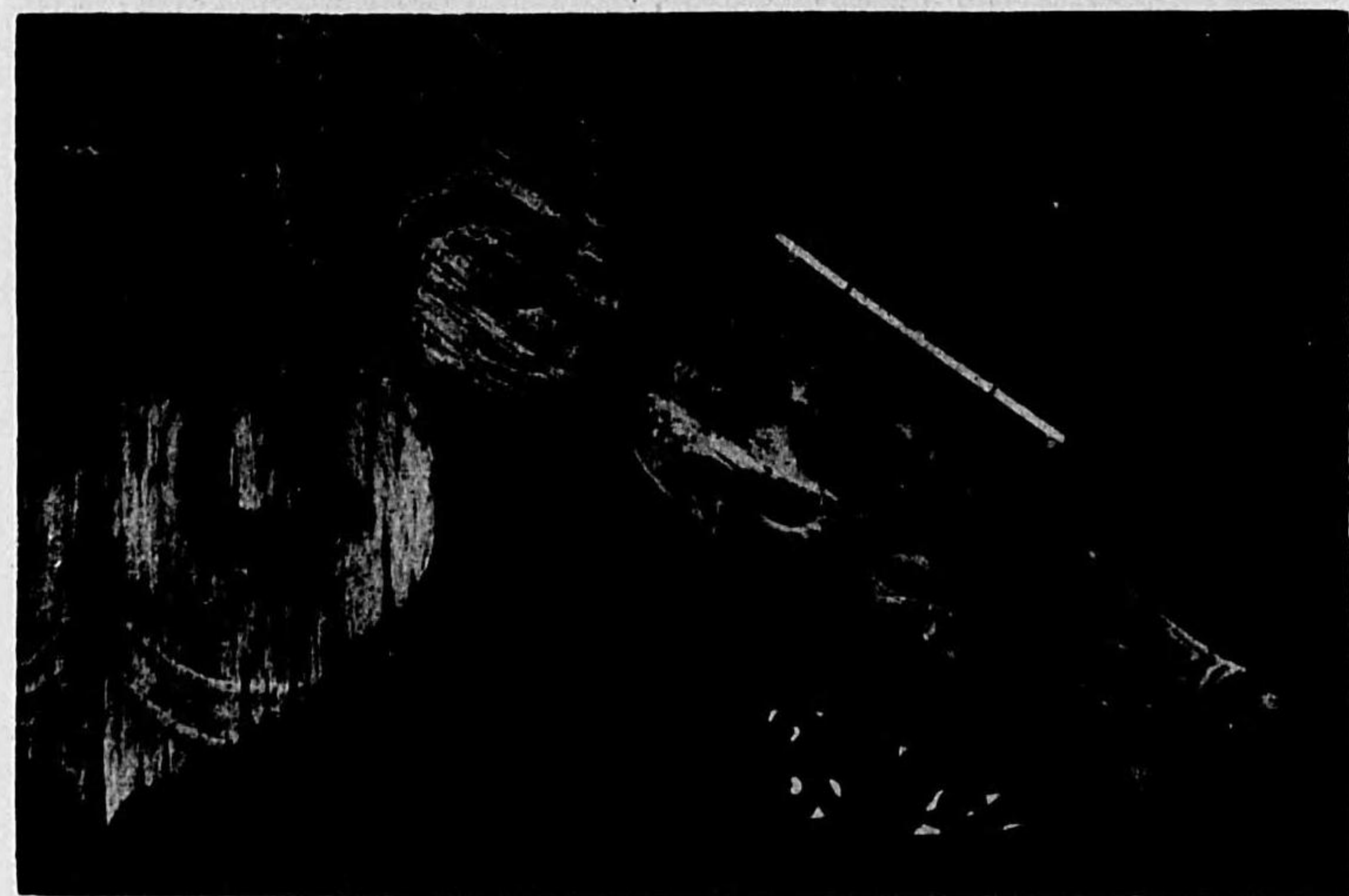
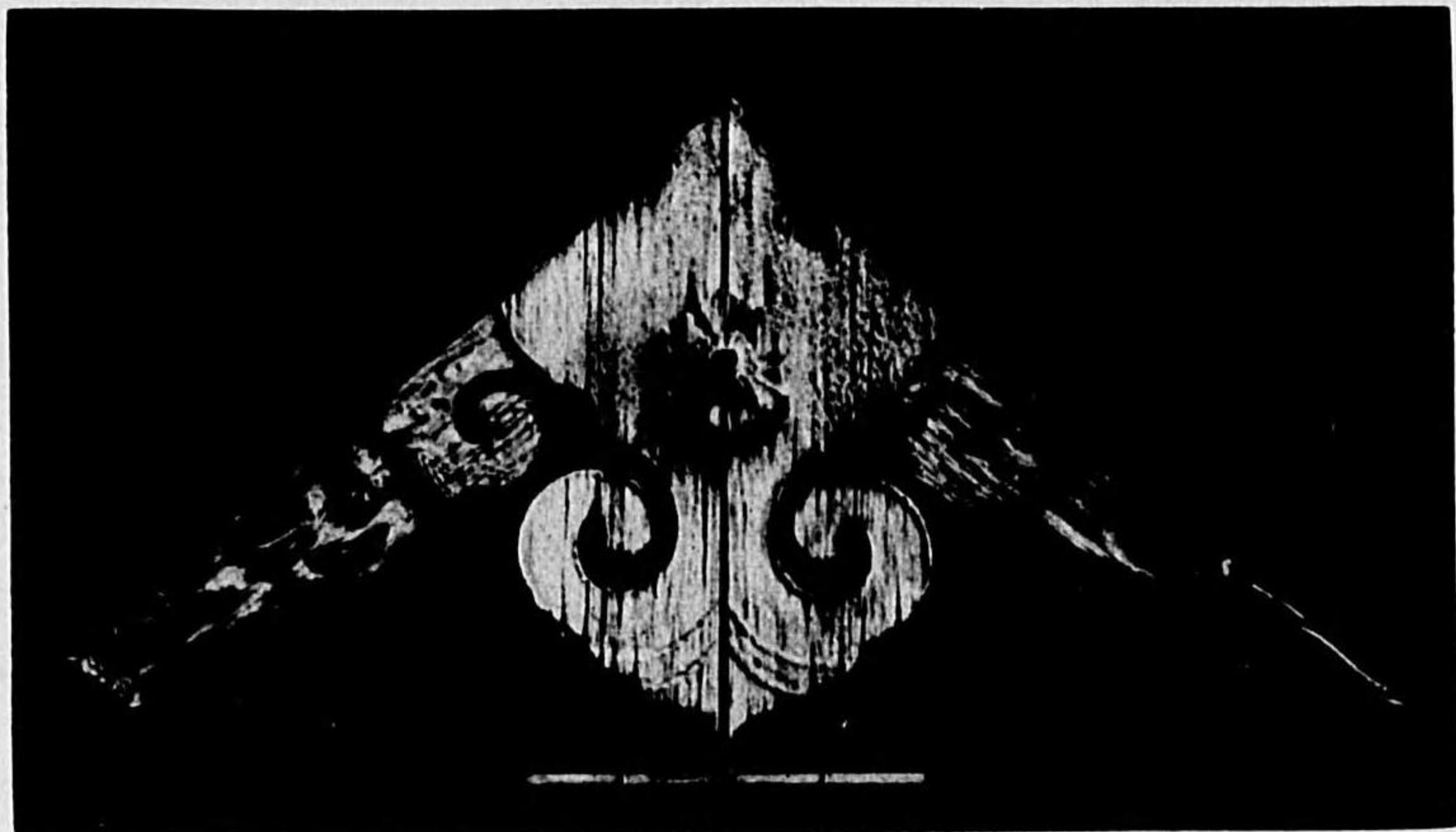
上圖に於いて下方に近く平たい太い木は、一六五・一六七等に見えてゐる禮堂あひの間の境の大虹梁、其下左右に先が少しづつぼまって寫つてゐるのは一六八・一六九等の禮堂内前後に架渡した大虹梁の夫夫一部である。下圖は其反對側即ち祠堂とあひの間の取合はせである。下圖では隨所よく唐様の特徴が現はれてゐるのが看取できるが、上圖では化粧棟木受に板葺股を用ひてゐる點に注意すべきで、これだけは和様である。



一七〇 永保寺開山堂禮堂内部 其四

(昭和三年九月十六日)

一六九の大虹梁と其上の大瓶束とは、此圖の右方下から上にかけて皆寫つてゐるし、左下の隅は一六七・一六九の隅と同所である。本圖では「海老虹梁」の先の尖つた特殊の肘木・尾榿下端の雲形持送等に注意せよ。



上、一七四 金戒光明寺鐘樓東妻懸魚 (昭和十四年二月二十二日)

下、一七五 同 部分 (昭和十四年三月一日)

(上圖の物差は曲尺の二尺・下圖のは曲尺の約一尺(一呎))

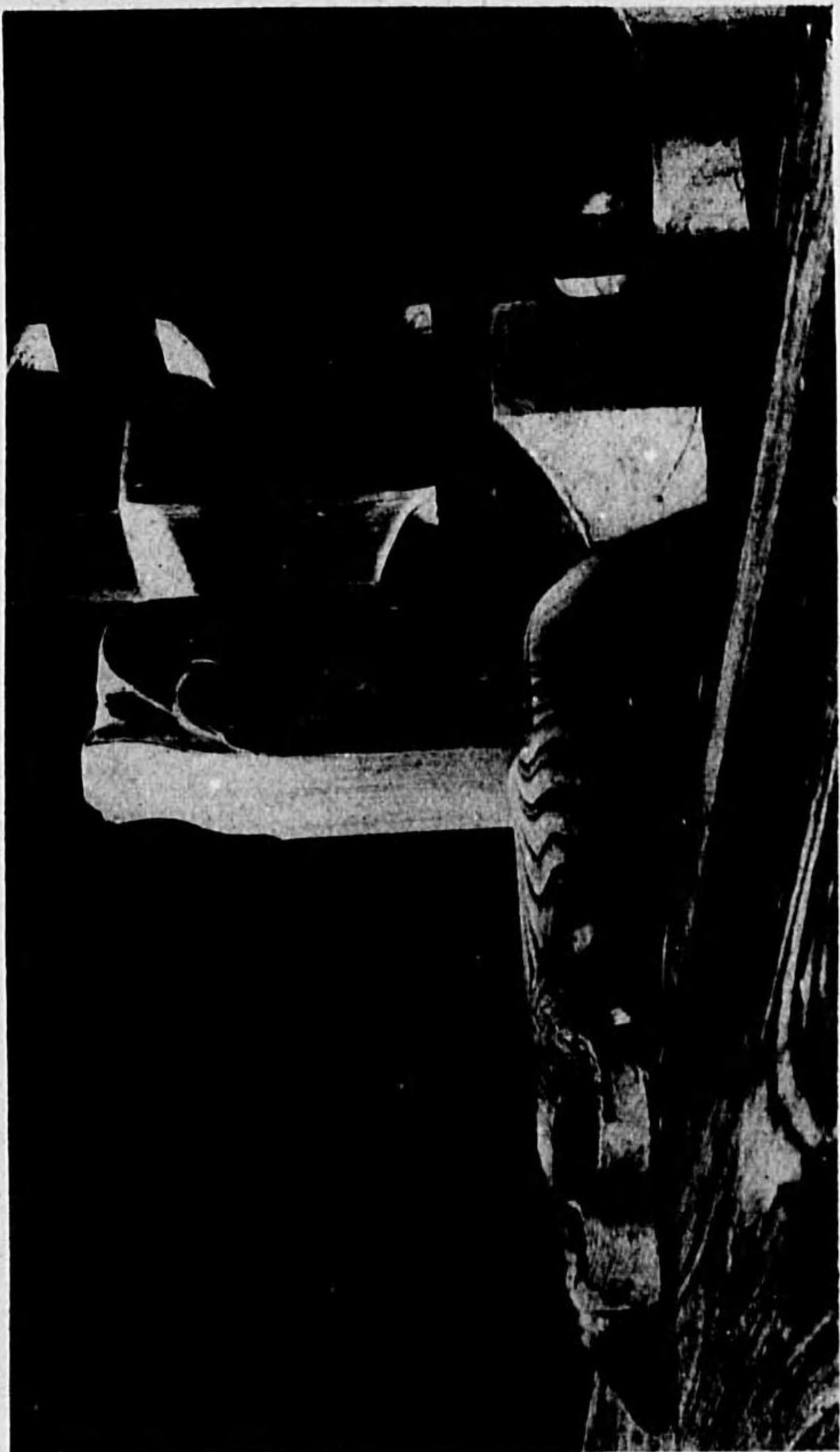
懸魚の「鱗」は、遺物から見ると鎌倉からこちらのものらしく、平安時代には未だなかったらしい。其鱗は最初は至極簡単で、天竺椽木鼻の様なグリグリの縞形をつけたものと思はれるが、漸く發達して遂に込み入った形、例へば菊・牡丹・蓮等をつけたが、此鐘樓に於いては、東妻に限り天人をつけたので、首を無理に曲げてゐて甚だ窮屈らしいが、確かに珍らしい。



一七三 金戒光明寺鐘樓全景

(昭和十四年三月一日)

切妻造の鐘樓である。木鼻・葦股・大瓶束・懸魚等、細部も中中よろしい。殊に東側拜みの懸魚の鱗に天人を刻んでゐるのは珍らしい。鐘は元和八年の鑄造で、銘文に明らかである。黒谷案内記に樓は元和九年の建立とある。

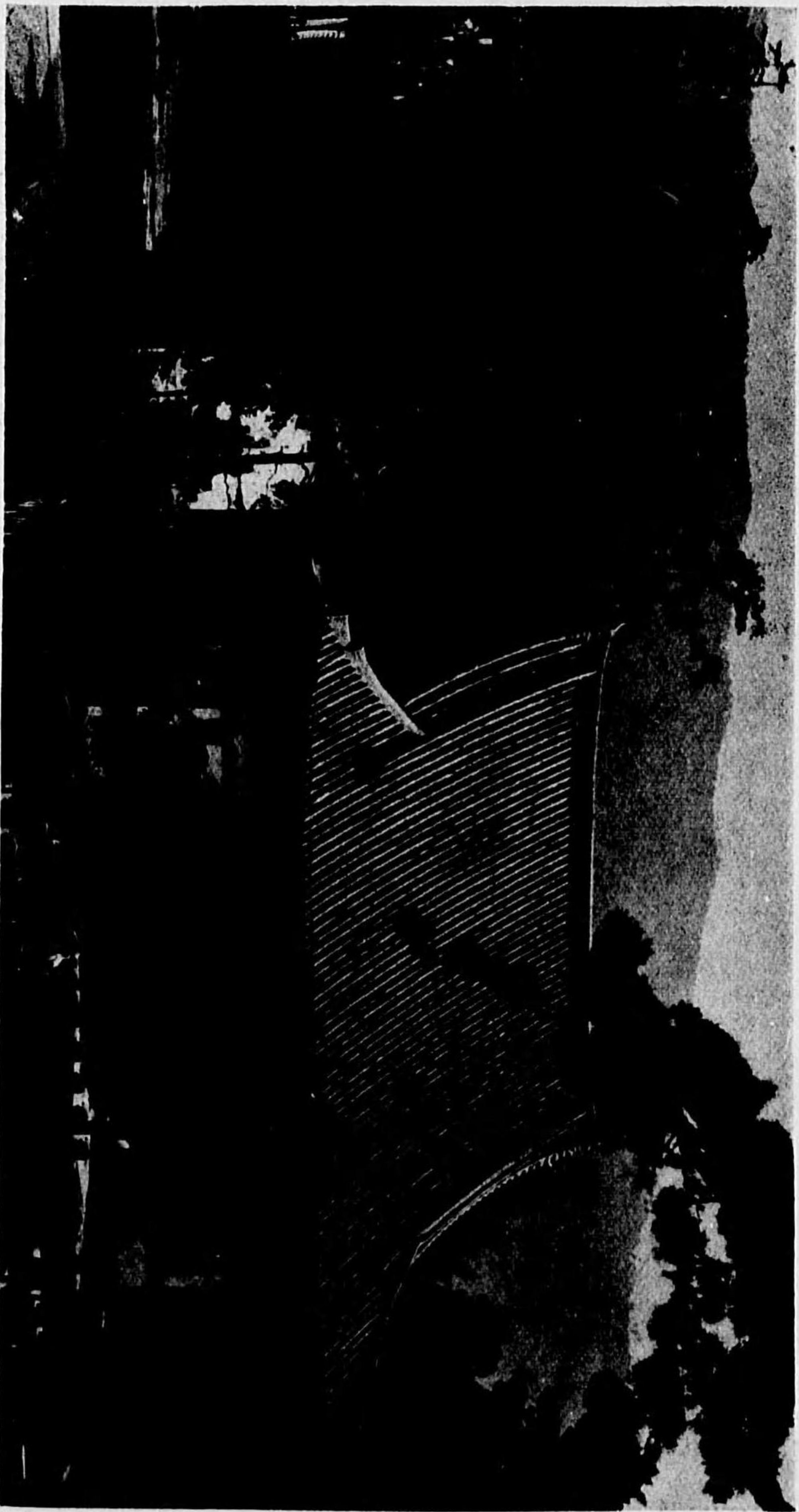


上、一七六 金戒光明寺鐘樓東妻飾一部
 下、一七七 同 西妻大瓶束及木鼻
 (昭和十四年二月二十二日)
 (同年同月同日・木下助三郎氏)

上圖は鐘樓大瓶束の左右についてゐる牡丹唐草で、これは兩妻とも同様である。大瓶束についてゐるから「笈形」には違ひないが、殆んど三角の部分を全部埋めてゐるから、妻飾と見れば見られる。兩方兼ねさせたのであらう。

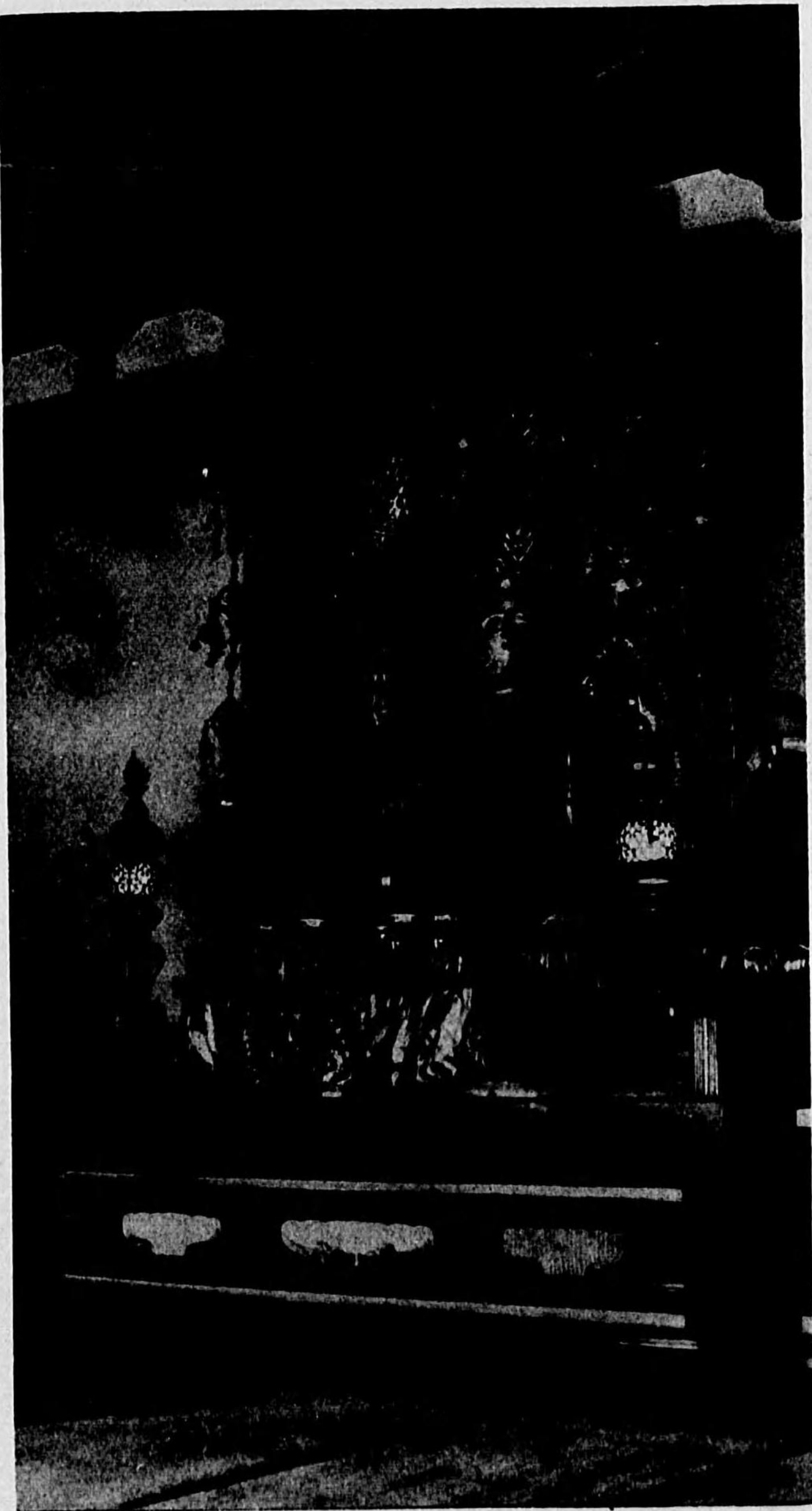
下圖は大瓶束の側面と、夫から前方に突出してゐる木鼻の彫刻がはきり判るであらう。これは勿論植物性のものであるが、象を植物化したと見られなくもない。

一七八 金戒光明寺阿彌陀堂全景 (昭和十六年十一月二十八日)



方五間單層入母屋造本瓦葺。慶長十年の建立ださうだが、文獻は先年の火災で全部焼いて了つたさうだし、棟札等の有無も知らないから、確かかどうか知らないが、様式からは慶長頃でよささうである。正面の一間向拜は臨時のもので、其柱は石壇の葛石上から建ててゐる有様。料拱出三科、料拱間葺束、妻飾虹梁大瓶束、懸魚等よろし。左上遠景の三重塔は東方の高所であり、傑作の文殊像を安置すといふ。

一七九 金戒光明寺阿彌陀堂須彌壇及本尊

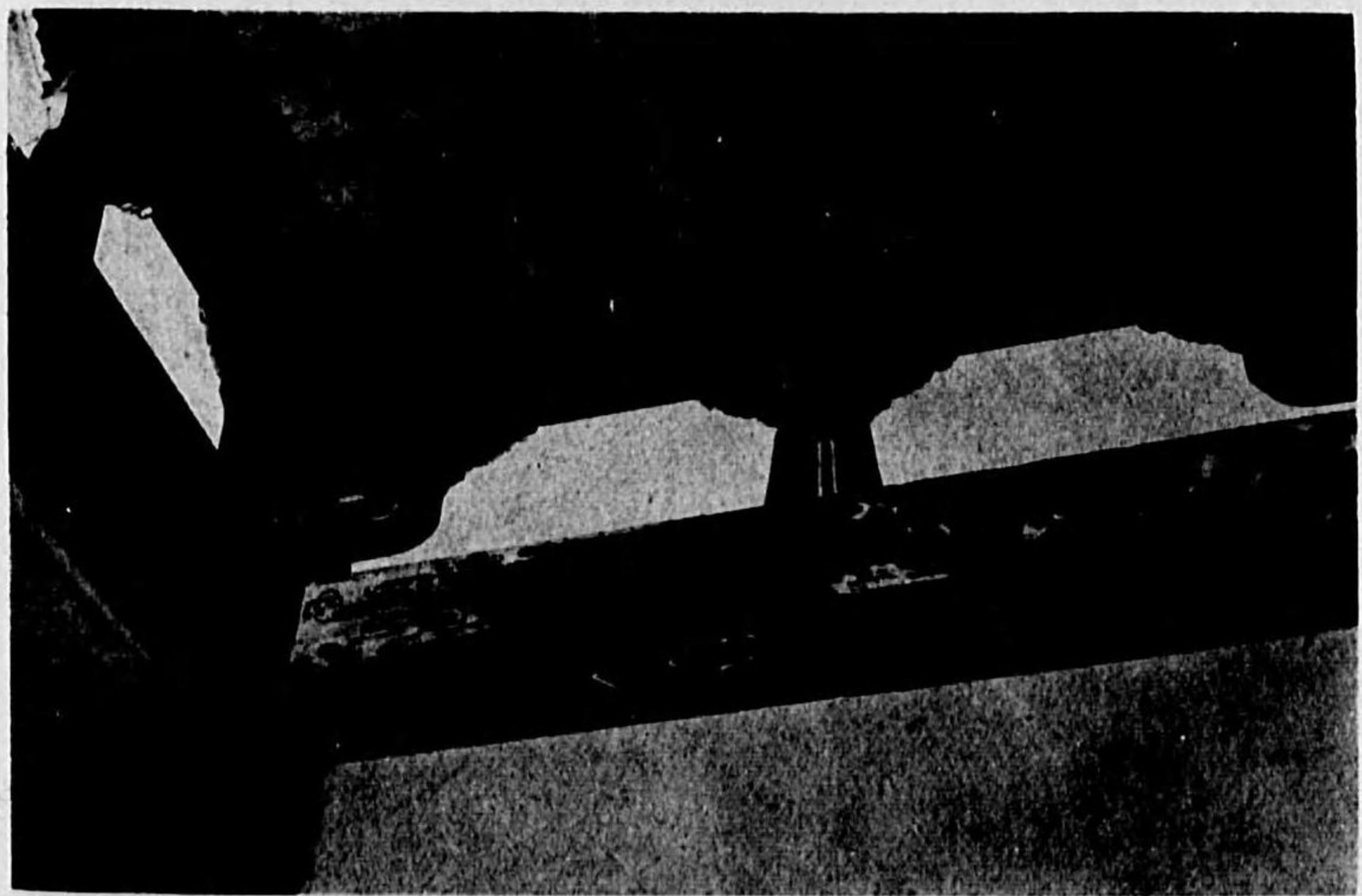
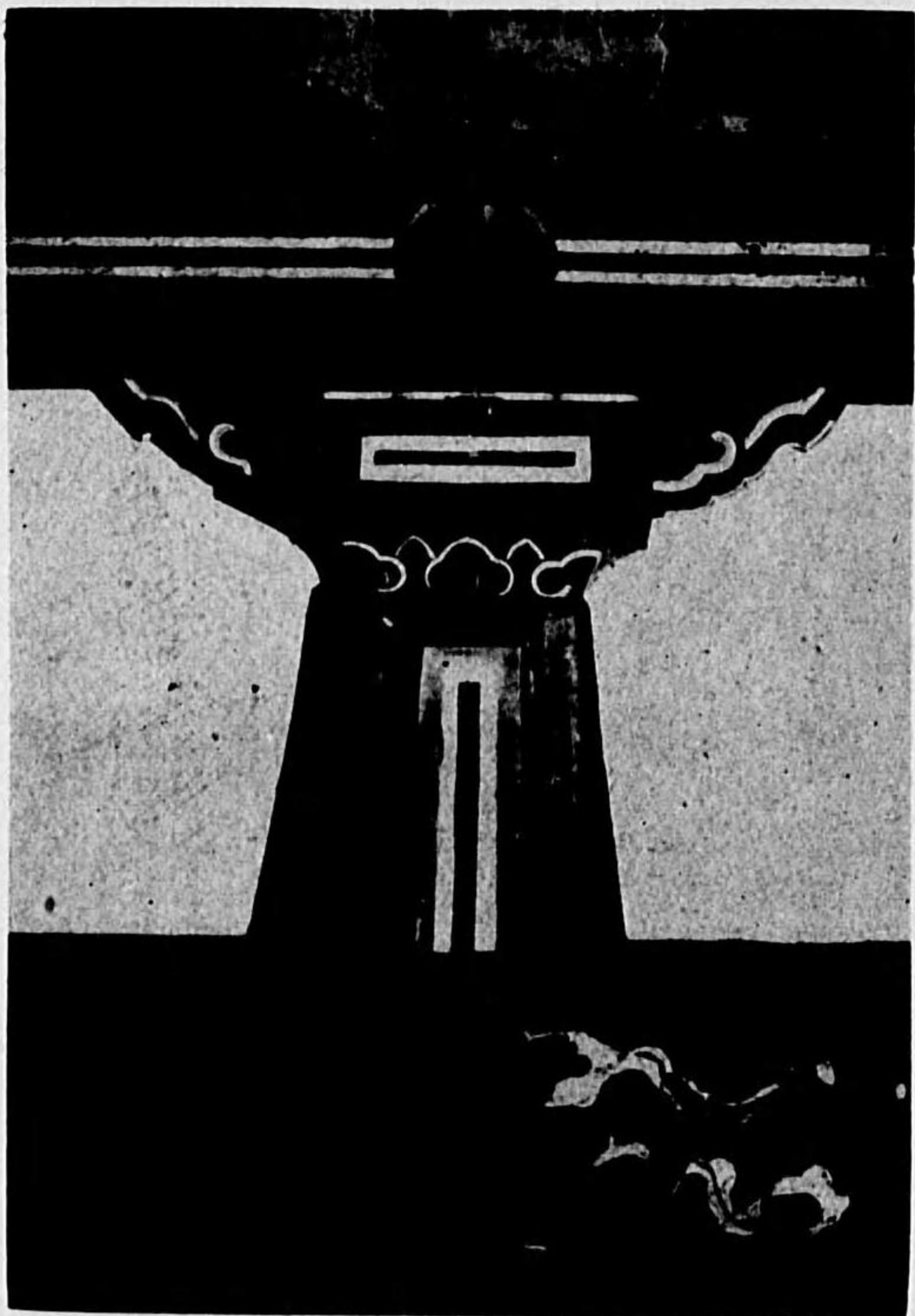


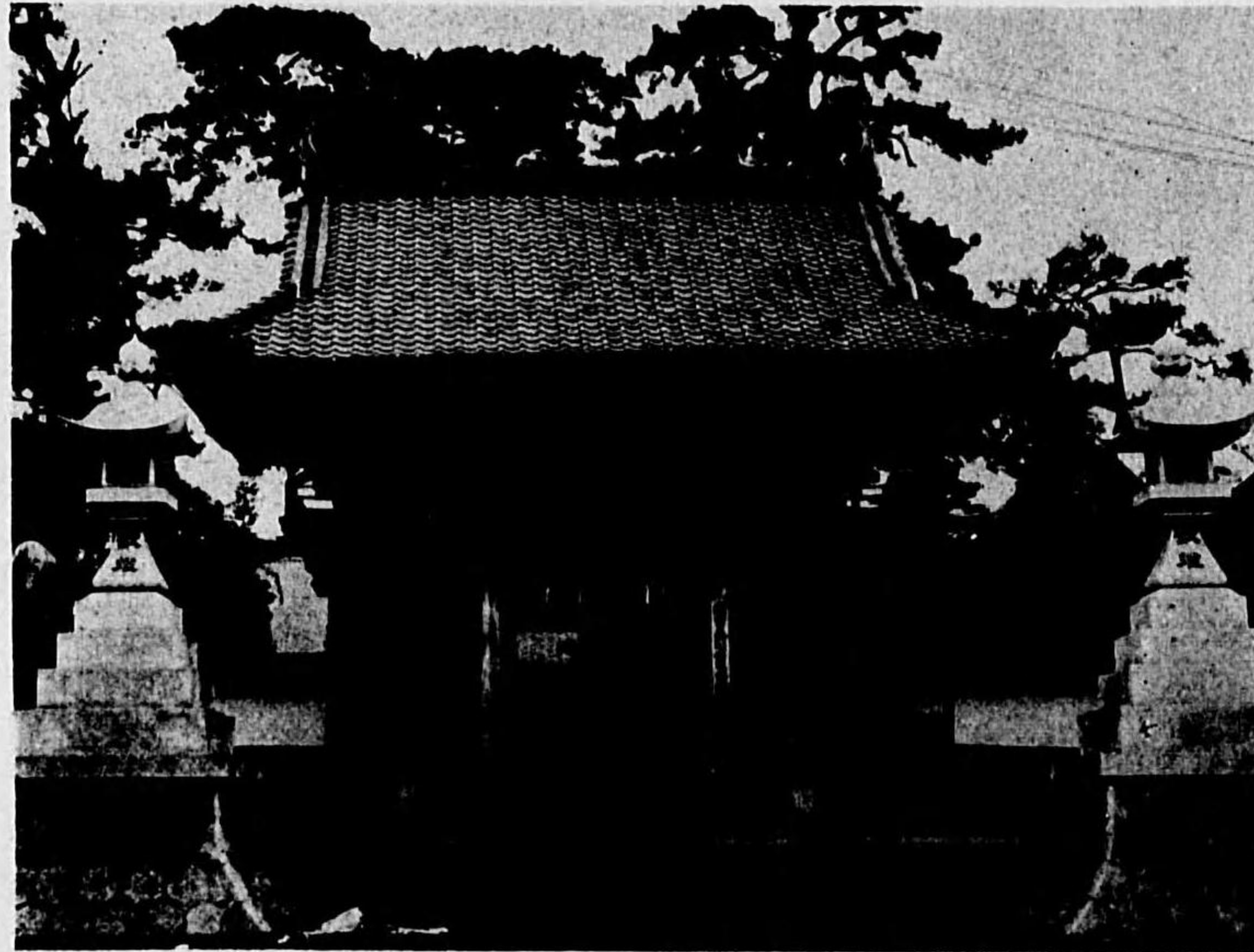
(昭和十四年二月二十四日)

後壁の柱は金箔を塗り、頭貫から上は極彩色、天井は中央大圓内に墨畫の龍あり。深さ一間で化粧屋根裏の入側が方三間の内陣を四周してゐる。須彌壇は和唐様折衷式、羽目板の格狭間は正面中央・左右・側面とも形を異にし、何れも傑作。

上、一八〇 金戒光明寺阿彌陀堂内部東北隅 (昭和十四年二月二十八日)
下、一八一 同 東側北の間間料束

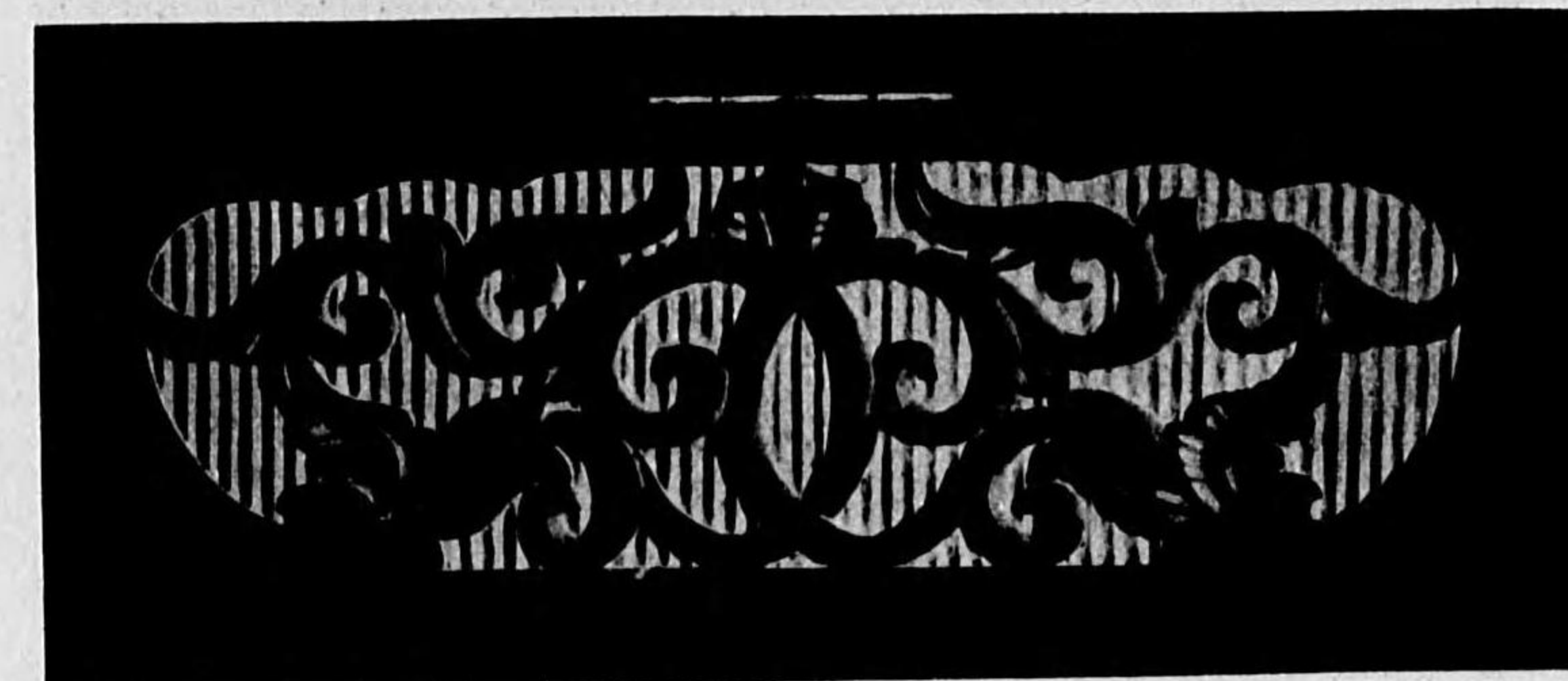
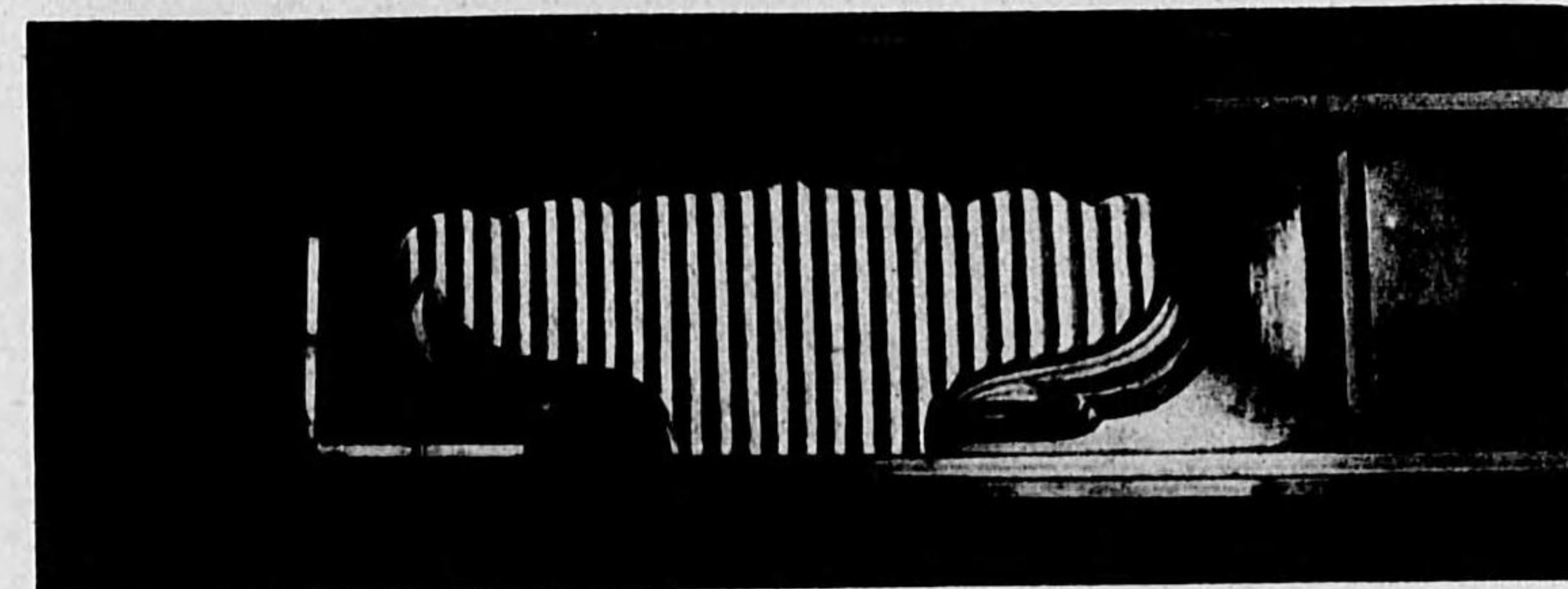
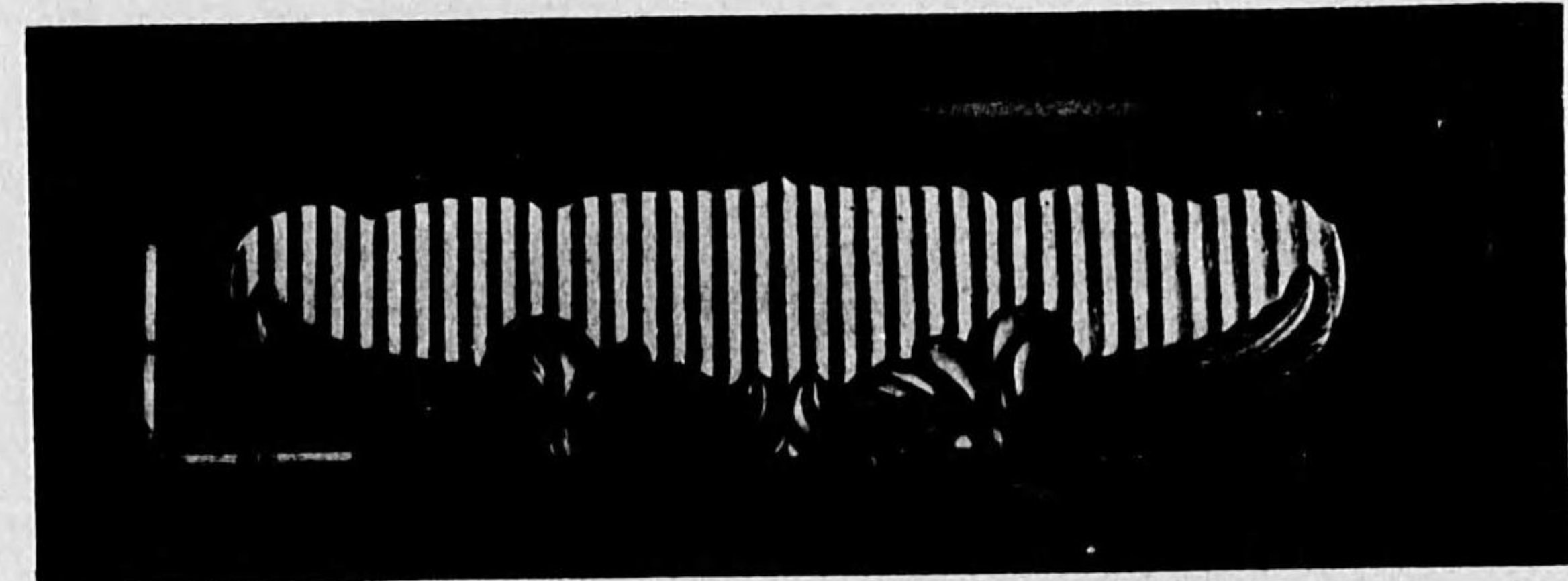
(料上物差は曲尺の約一尺(二呎)・昭和十四年九月十八日)
方五間で周圍に深さ一間の入側があるから、内陣は方三間、從て後壁には柱が二本建つてゐて、柱間には間料束がある。其上の天井廻縁には圓文をおき、中央のは「キリク」、左右は夫夫「サ」・「サク」。上圖は勢至菩薩の種子で「サク」。





上、一八五 本遠寺樓門正面 (昭和七年一月四日)
 下、一八六 同 中の間正面慕股 (昭和十六年八月二日)

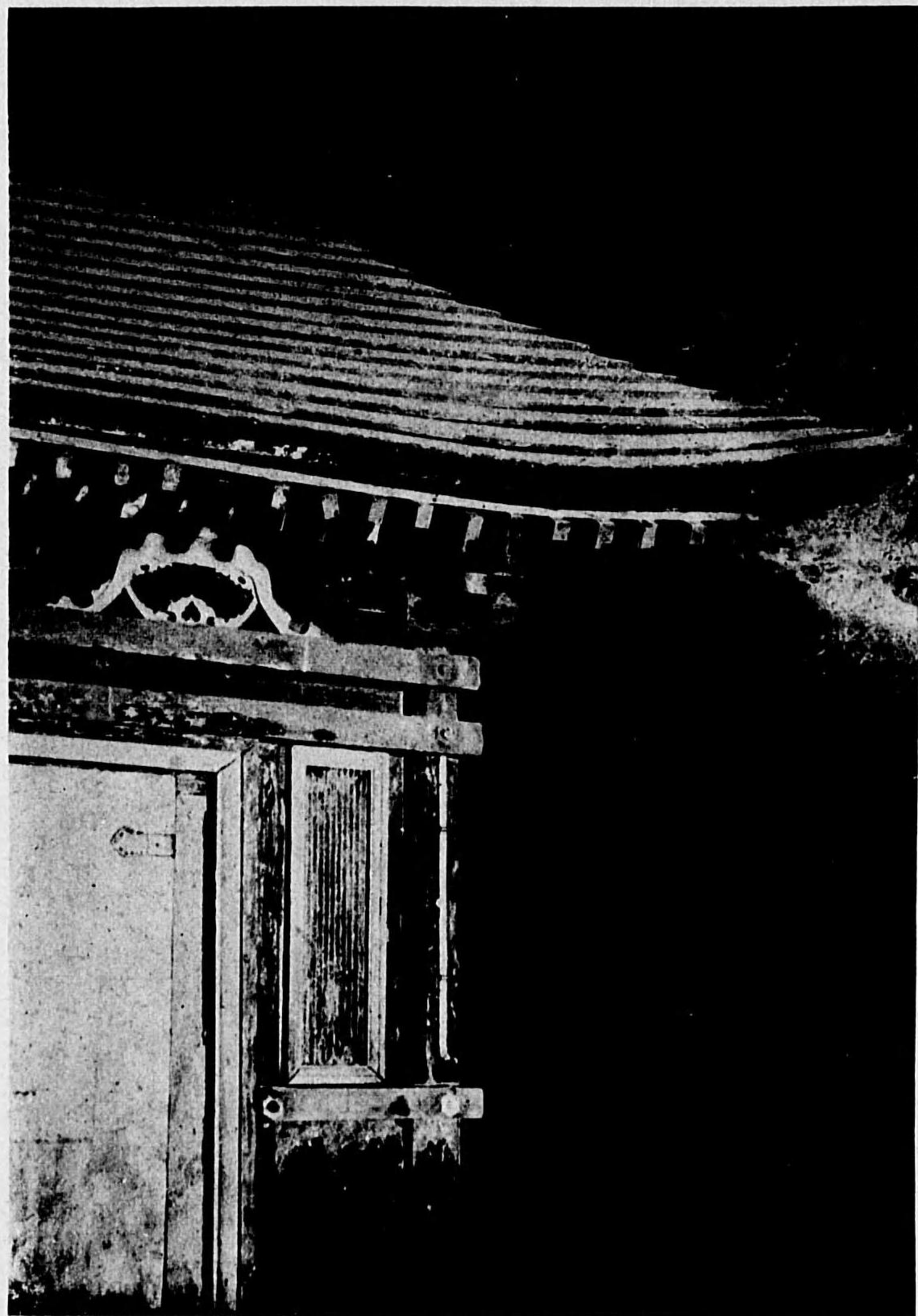
本遠寺は熱田神宮の附近にある。三間一戸の樓門で、屋根を棧瓦葺にしたので、大分外観の美を減殺した。正面下層中の中の龕股は、ある書物に「有翼の象」の彫刻が入れてある様にかいてあったから、昨年八月初よく調べてみたら、下圖の様に「猿」であつたので、漸く安心する事ができた。



上、一八二 金戒光明寺阿彌陀堂須彌壇格狭間其一(昭和十四年二月二十四日)
 中、一八三 同 其二(昭和十四年二月二十四日)
 下、一八四 同 脇壇格狭間 (昭和十四年二月二十四日)

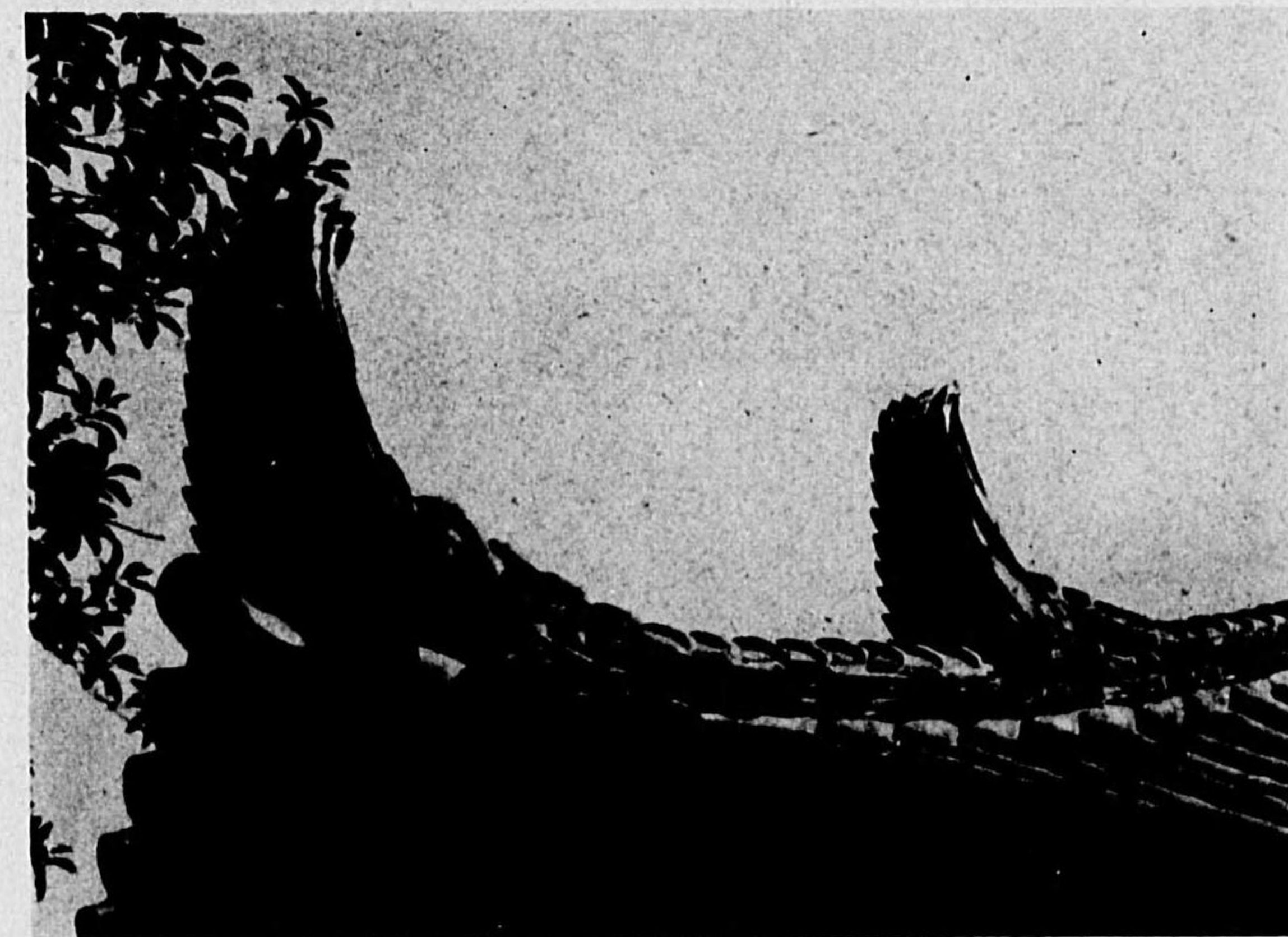
(上・中圖物差は曲尺の約五寸(六吋)・下圖物差は曲尺の約一尺(一呎))

和唐折衷様須彌壇正面羽目板の部分は束を以て三つに分ち、夫夫格狭間を入れてあるが、上圖は中央、中圖は兩端のもので、側面のはまた異なる形をしてゐるが、何れも中中よくできてゐる。下圖は兩脇壇なのでこれも亦頗る傑作。何れも地の首連子は白縁、下圖唐草其他面は朱、上中圖若葉は金箔押。



一八九 釋尊寺觀音堂廚子部分 (昭和十年五月二十三日)

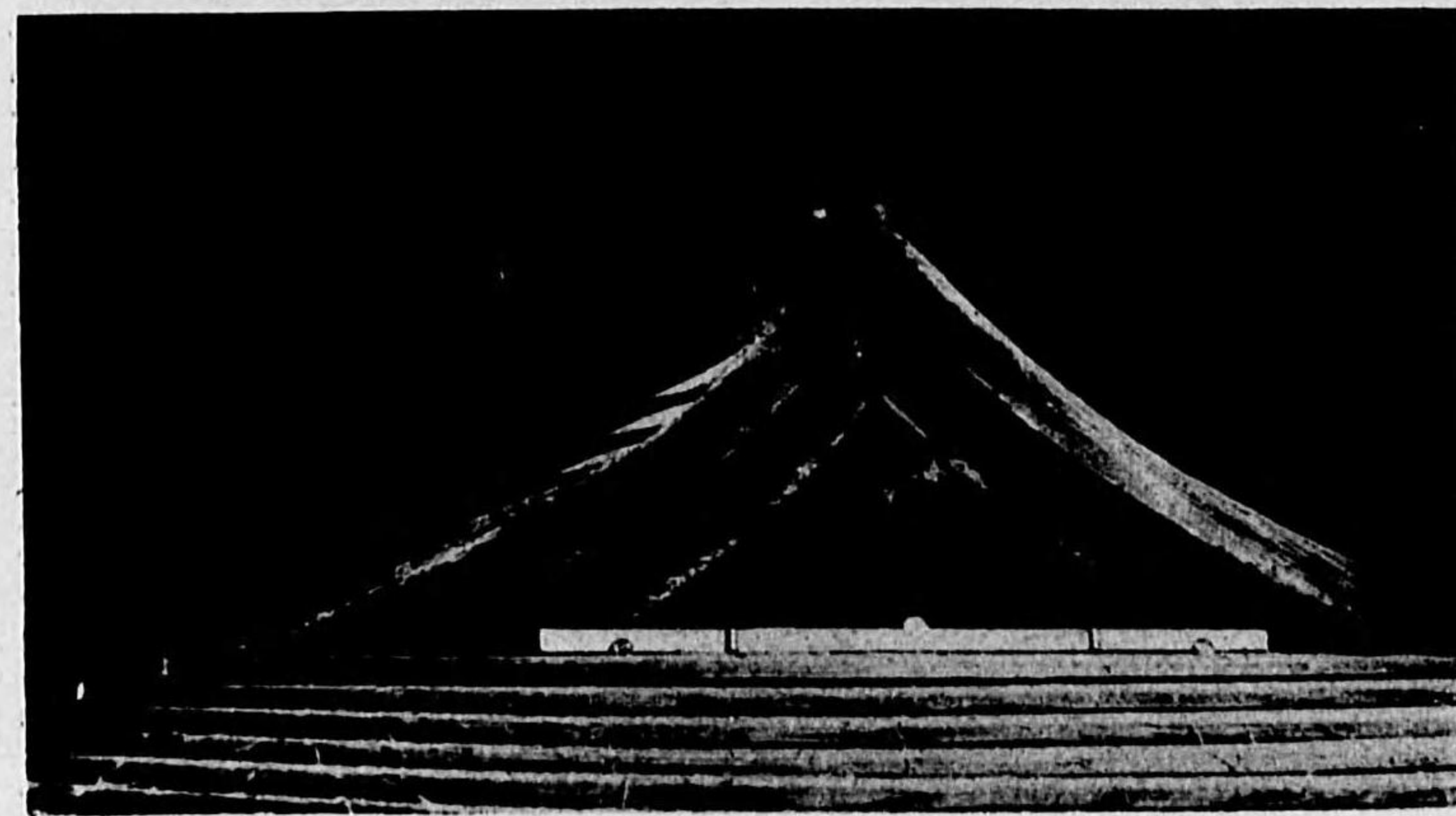
釋尊寺は俗に「布曳觀音」として知られてゐるが、其觀音堂の内陣の奥の廚子の内に、更にもう一つ廚子がある。方一間の碎けかかったものではあるが、夫が世にも珍しい美術工藝品で、殊に其藝股は洵に天下一品であるのである。



上、一八七 今治市南光坊太子堂屋根部分 (昭和十二年十二月十五日)

下、一八八 同 鴟尾詳細 (家藏寫真複製)

昭和十二年十二月十五日朝、偶然此寺へ行つて見付けたもの、新しいけれども、降り棟に鬼瓦や獅子口の代りに鴟尾を用ひたものを非常な興味をもつて觀た。下圖は其後入手した同じ隅の鴟尾詳細寫真。

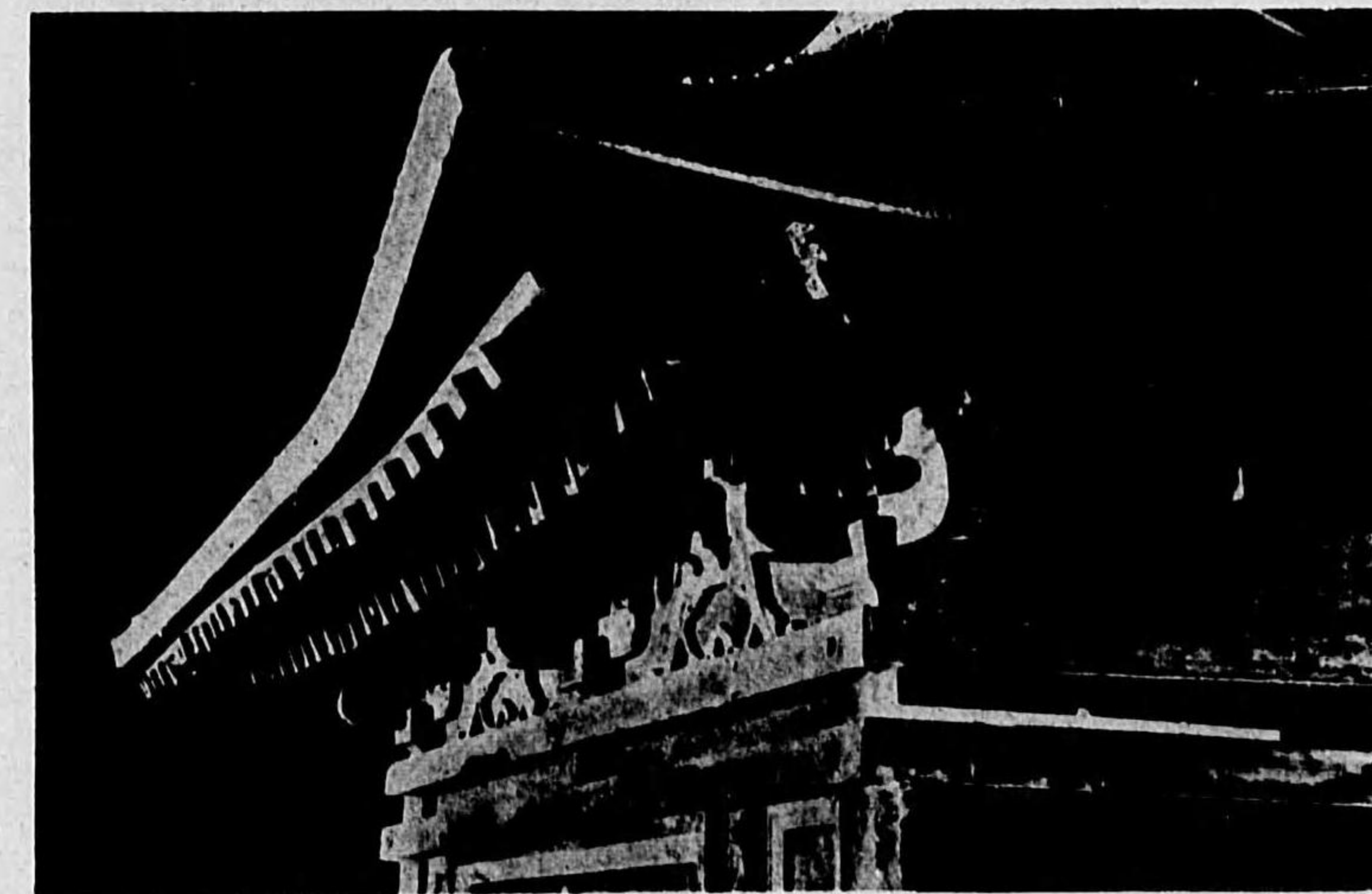
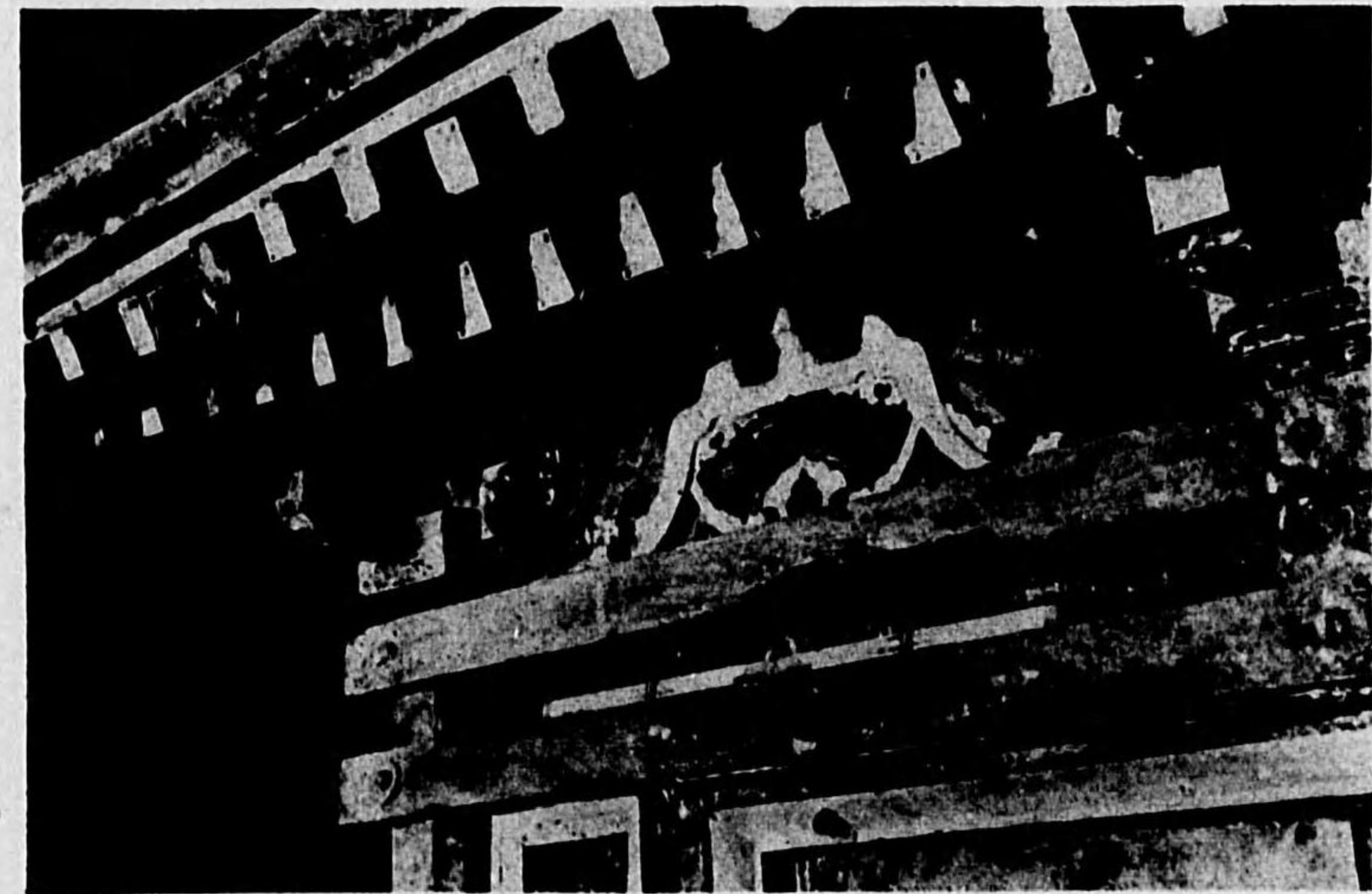


上, 一九二 釋尊寺本堂廚子墓股詳細 (家藏寫真復寫)

下, 一九三 同 妻 (昭和十年五月二十三日)

上圖は墓股の立面であるが、兩脚の外側に上向きに更に脚端の様な線形が、全く装飾のためにつけてあるのが珍らしく、つい他に見た事がないので、多分さうであらうと推定して、天下一品としたのである。

下圖に於いては、最も珍らしいのが梅鉢懸魚で、破風と共に鼠に嚙られてはゐるが、これも恐らく此種の懸魚の唯一の實例ではあるまいかと考へられる。影になつてしまつたが、大棟の鬼板も亦同時代であらう。



上, 一九〇 釋尊寺觀音堂廚子部分 其二

下, 一九一 同 其三

(前頁圖共物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十年五月二十三日)

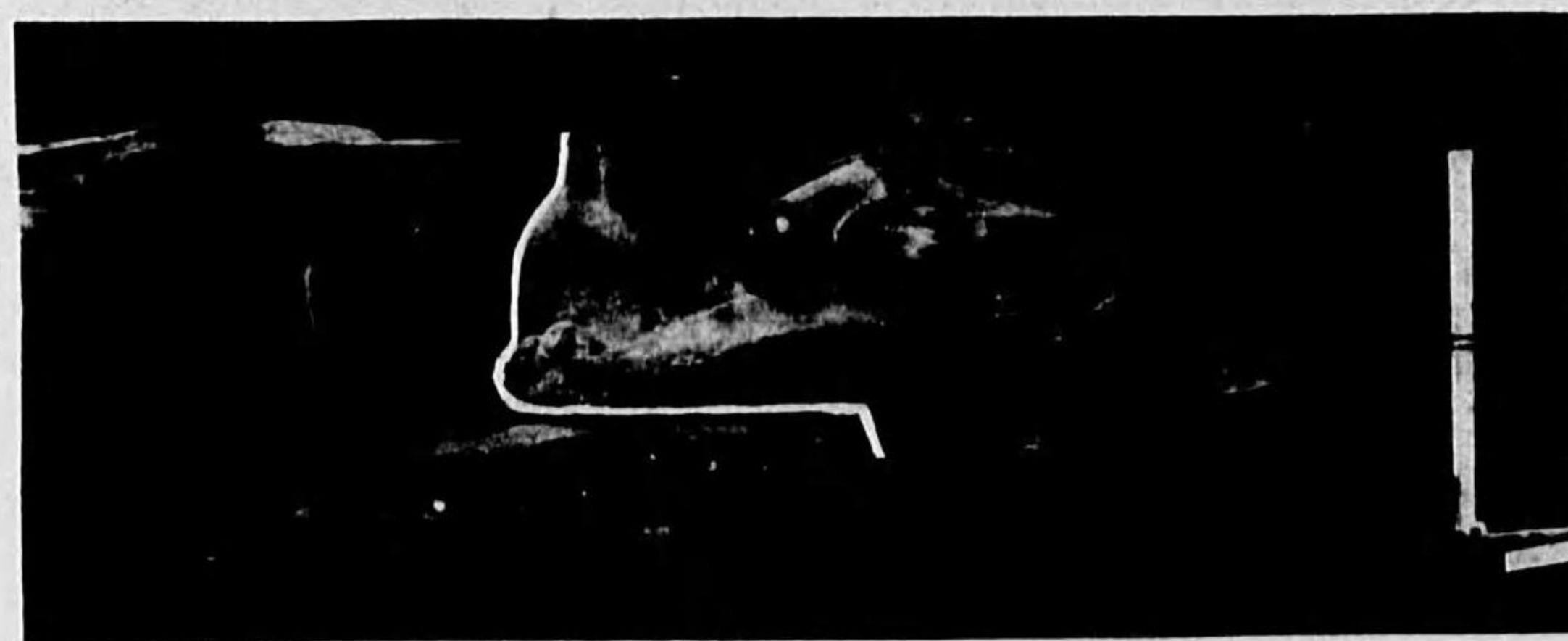
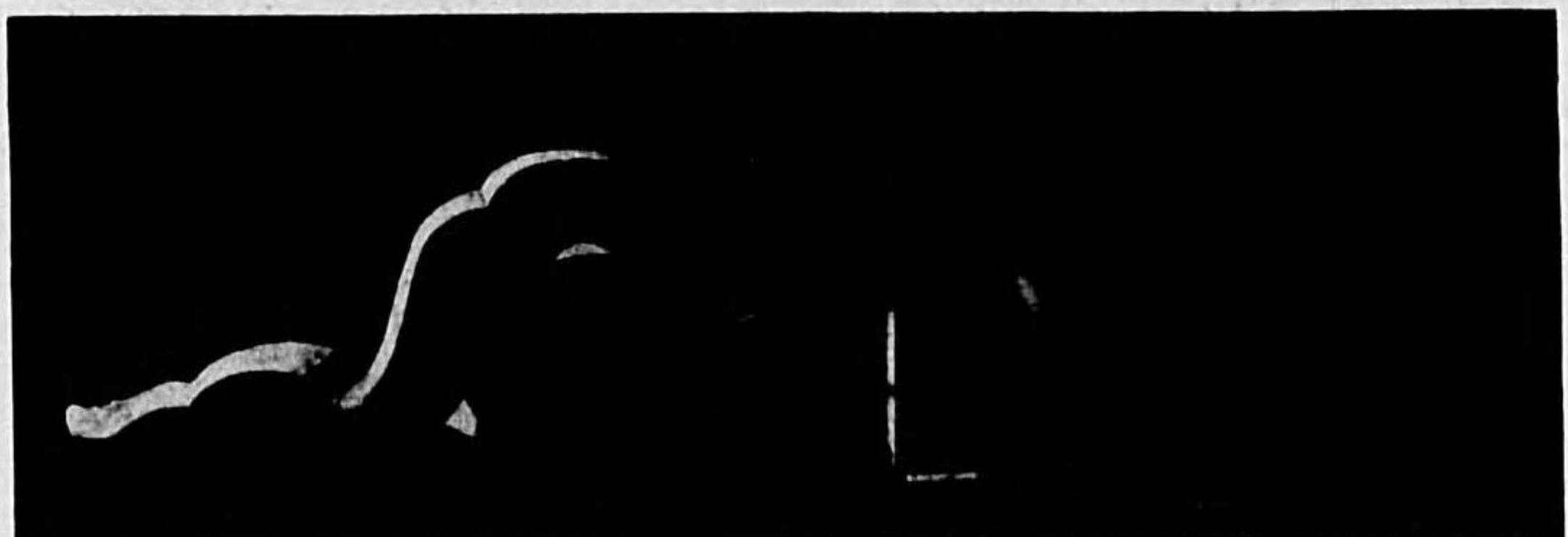
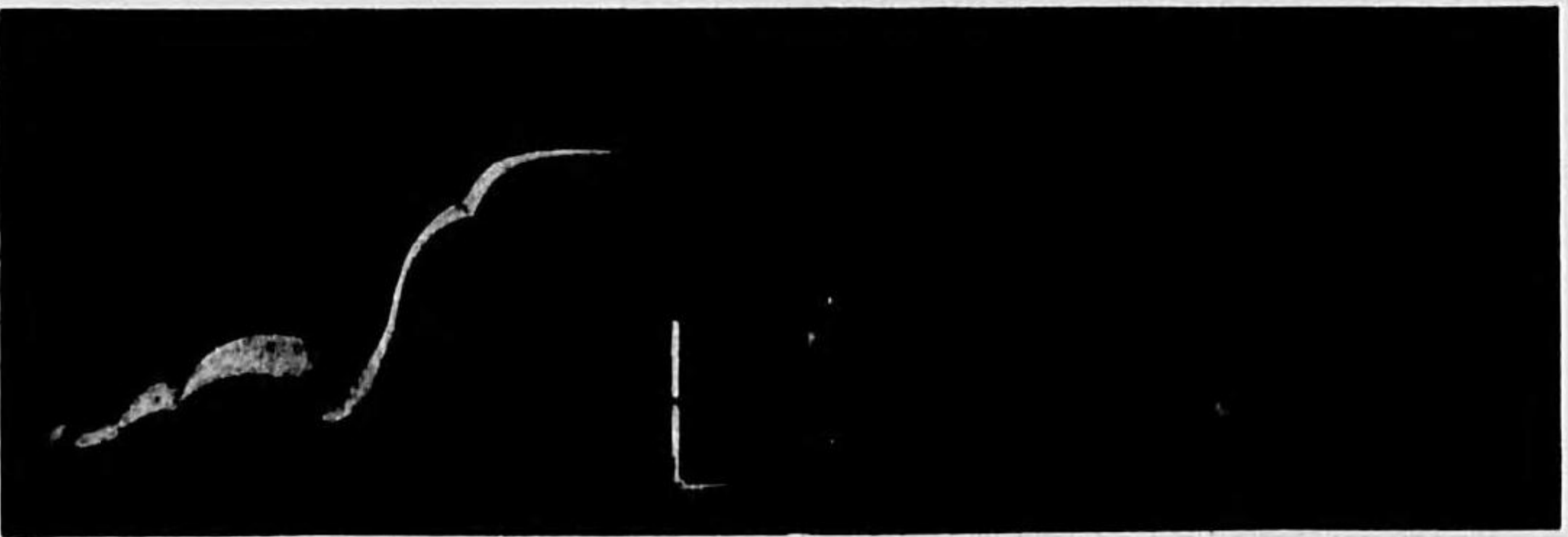
上圖は前頁圖の向つて左へつく半分、下圖は正面上部全體を見たところで、次頁下圖と併せて廚子の形を髣髴し得る事と思ふ。正面中央に一具の出三料が置いてあるから諸組の如く見えるが、上長押と臺輪との間にある柱形により、さうでない事が判る。

一九四 吉野水分神社中殿右手扱右側面 (昭和七年八月二十五日)



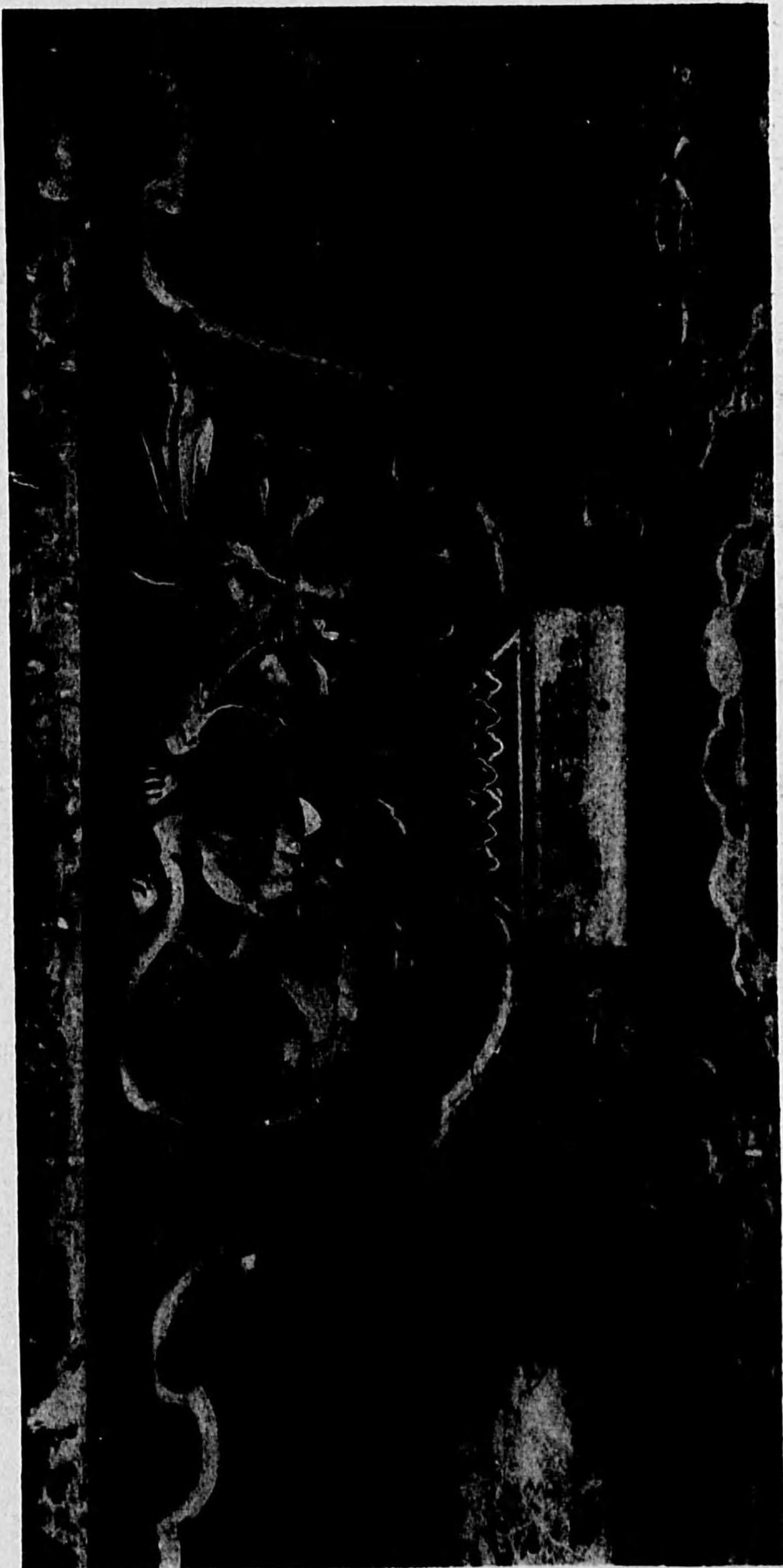
此建築は慶長十二年の建立。「猫に牡丹」の透彫の手扱だが、猫は眠てゐるか起きてゐるかよく判らないけれども、多分起きてゐるらしく思はれる。一部分破損してゐるが、ここには揚羽蝶がほつてあつたのかも知れない。

上、一九五 四天王寺太子堂北門簷股正面 次、一九六 同裏面 次、一九七 同一部詳細 下、一九八 同下面

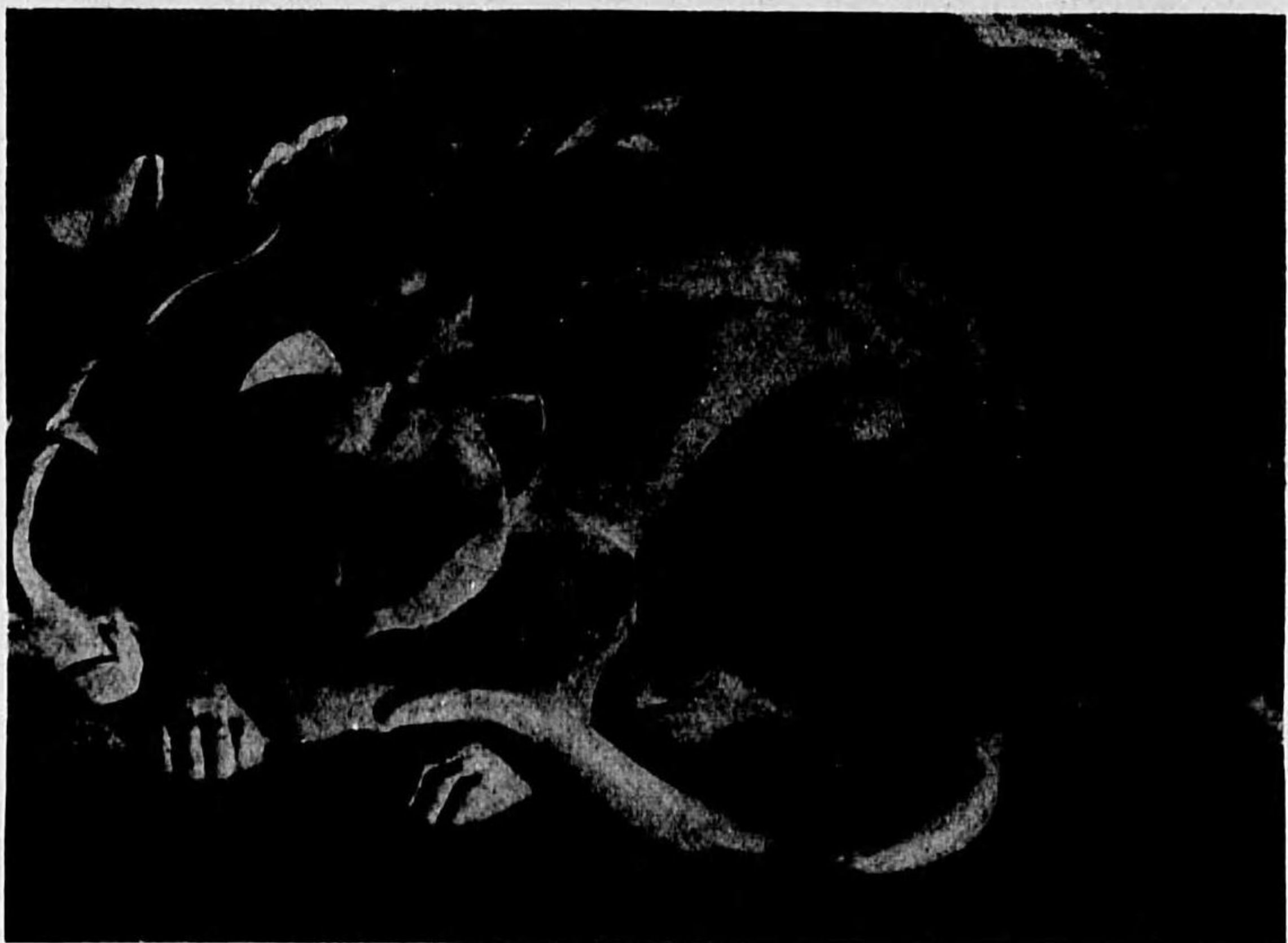


右四圖の内上の二つ及び下の分物差は曲尺の約五寸(六吋)、詳細圖の分は約一尺(一呎)。四圖共昭和十年三月三日の寫眞。

一九九 四天王寺經藏內部南側墓股 (昭和十六年十一月二十七日)

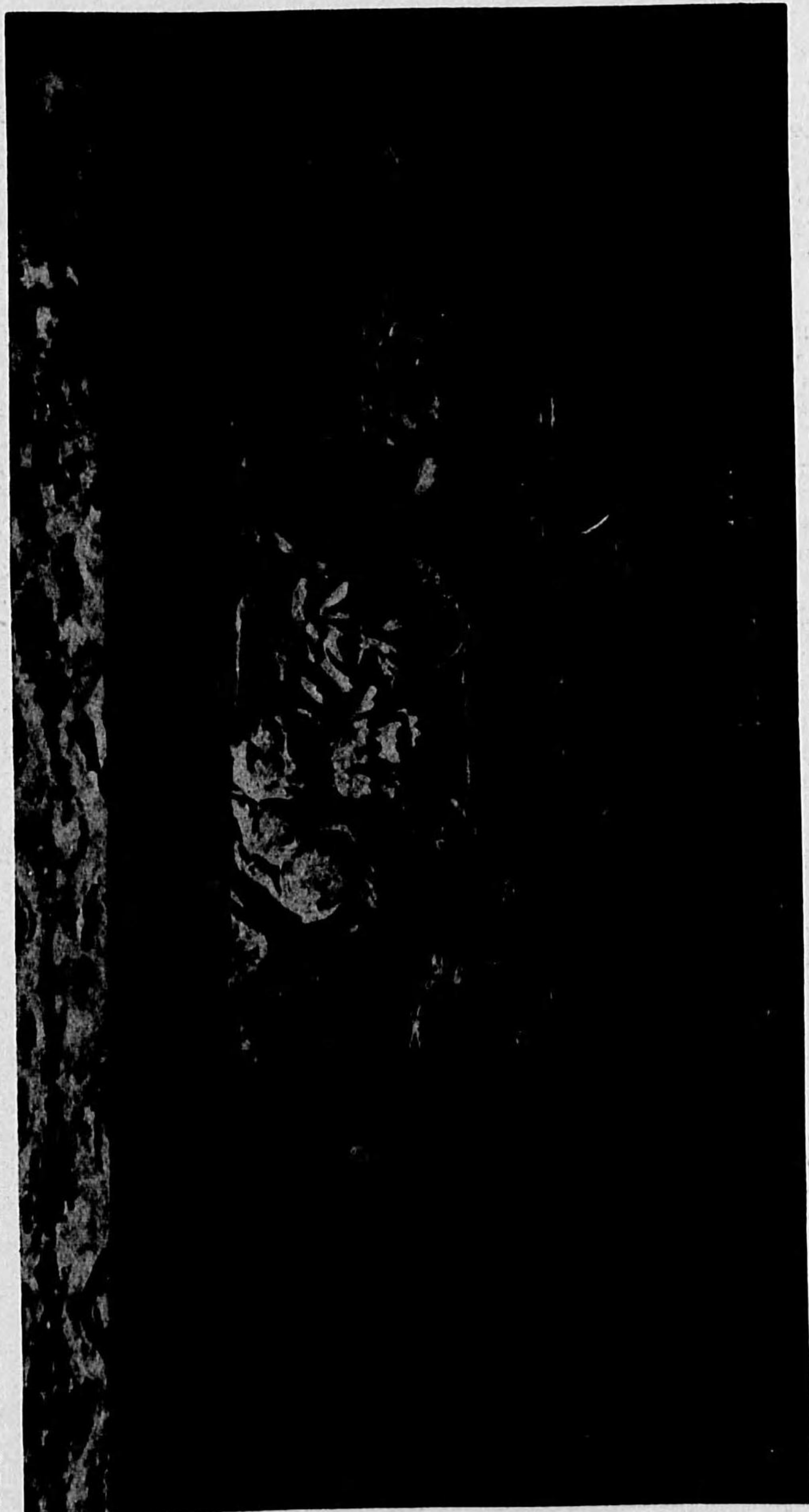


經藏は寺傳では元和三年の建築といふ。棟札の有無も文獻も調べておかないから間違があるかも知れないが、全然桃山式だから元和の建築と見てよろしい。此猫は確かにねである。牡丹の葉も雷も輪郭からはみ出してあるし、殊に掛羽蝶は殆んど全體輪郭外にあると云つてよろしい。蝶は後翅も前翅も殆んど同形同大で、且つ後翅が前翅より上になつてゐる所は、頗る寫生に遠く、口器が渦卷になつてゐなければ、蝶トソボといった有様だが、夫でも後翅に「尾」がつけてある。



上、二〇〇 四天王寺經藏內部南側墓股部分詳細 其一
下、二〇一 同 其二

(兩圖共昭和十六年十一月二十七日)



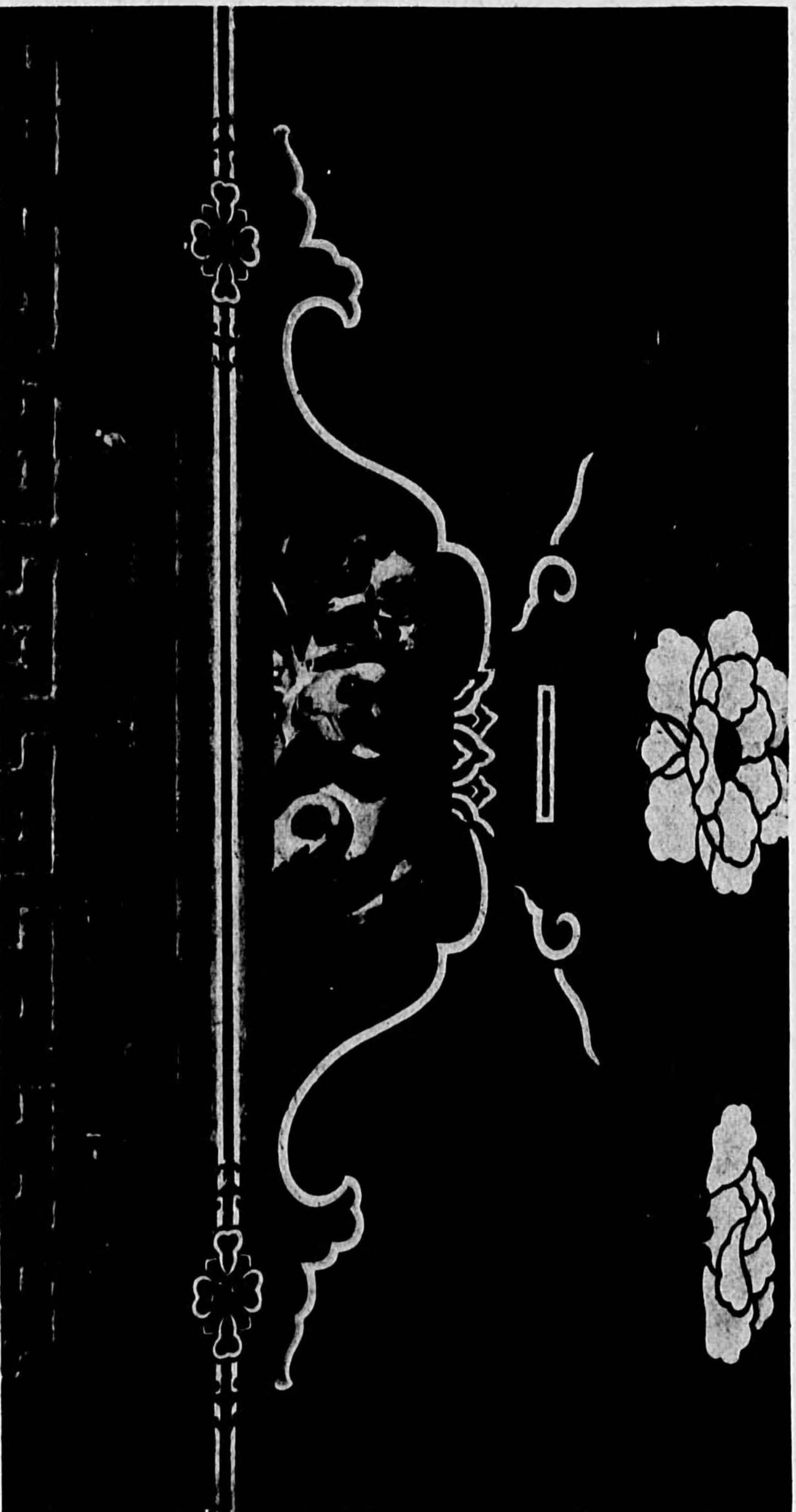
猫は右方に左を向いて居り、牡丹は大きな花が左方に配してあるのは、前三例の通りである。此場合猫は後脚をたててゐるから、多分起きてゐて、牡丹の花の上にかけてゐる鳳蝶を狙つてゐるのであらう。此彫刻はやはり當初のものである。



上、二〇三 北野神社拜殿南側臺股 (能勢丑三氏)
 中、二〇四 天満神社(紀伊)本殿部分 (昭和十年)
 下、二〇五 同 臺股 (昭和十年)

猫らしくない顔をしてゐるが、猫ださうで珍らしく右向、さうして唯一疋。尾が深山にさけてゐて、化猫の資格を備へたやうなもの。和歌山縣海草郡天満神社のは右に猫左に牡丹に鳳蝶で、正に公式通りのもの。

二〇六 別格官幣社東照宮廻廊幕段の一 (昭和十一年七月二十五日)



此幕段内の猫が、前敷例といくらか異なつてゐる所は、これは中央に進出をしたので、自然牡丹の花は猫の後方即右下にもある。鳳蝶はゐない。ただ夫だけが異つてゐるので、猫は眠つてゐる。「日光の眠り猫」左甚五郎作として獨り盛名を馳せてゐるのが不思議である。併し此猫が名高くなつたのは、さう古い事ではない。少くとも今から約一八〇年前には未だ無名で、誰も注意はしなかつたと思はれる。

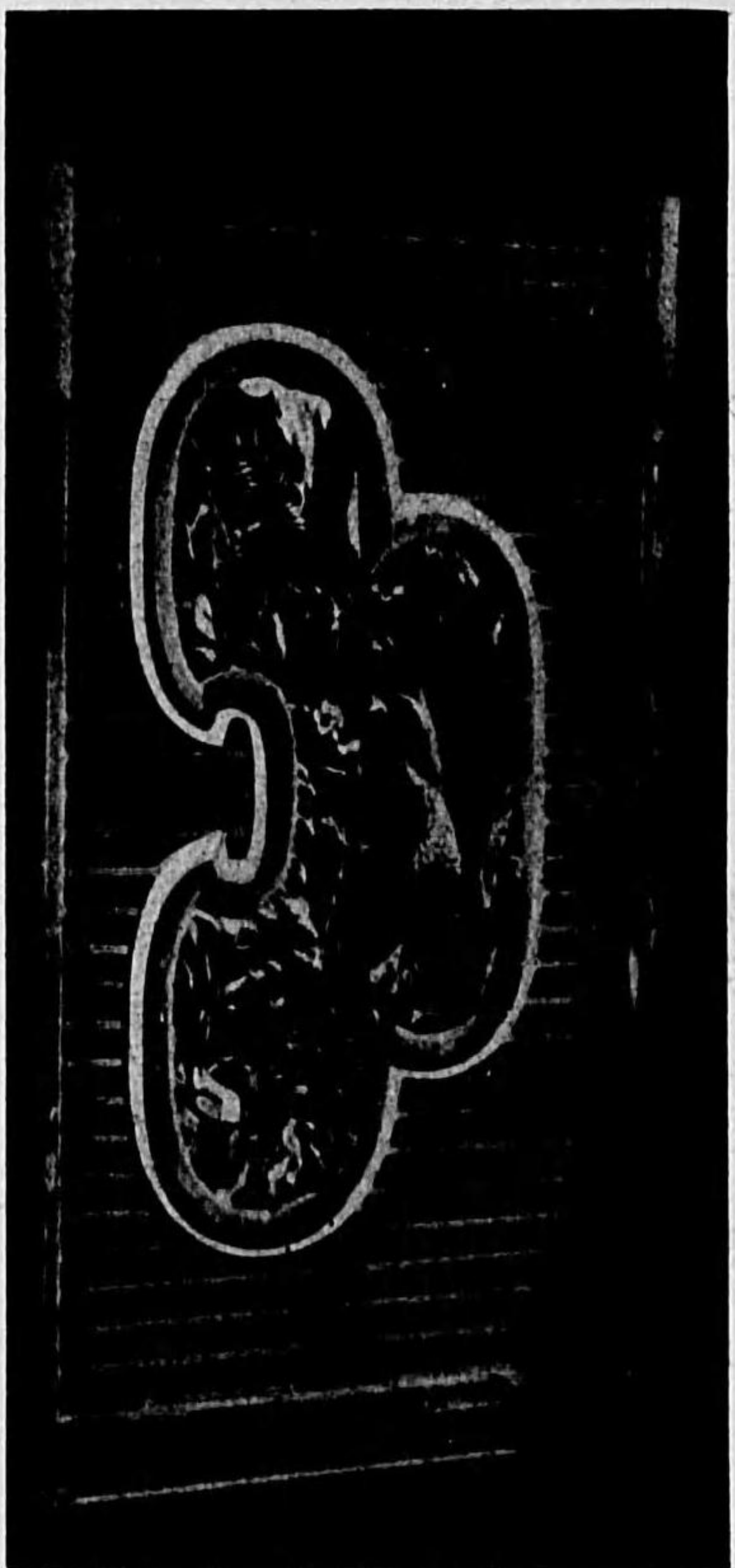
二〇七 瑞巖寺本堂欄間の一 (昭和五年七月三十日)



瑞巖寺本堂の正面には美事な欄間——彩色も彫刻も共に——が幾つか入つてゐるが、そのうちの一つに「松・竹・梅」がある。夫が即これである。尤も岩も鷄も雲もあるにはあるが、とにかく一つの欄間の内に三つ揃つてゐる。欄間の彫刻は、室町時代迄は左程發達せず、いはば一枚の板に透彫をした様なものであったが、桃山時代になつてから非常に進歩して、厚い板から刻み出す様になつてきた。換言すれば立體的になり、彫刻としては完好の域に達したのである。



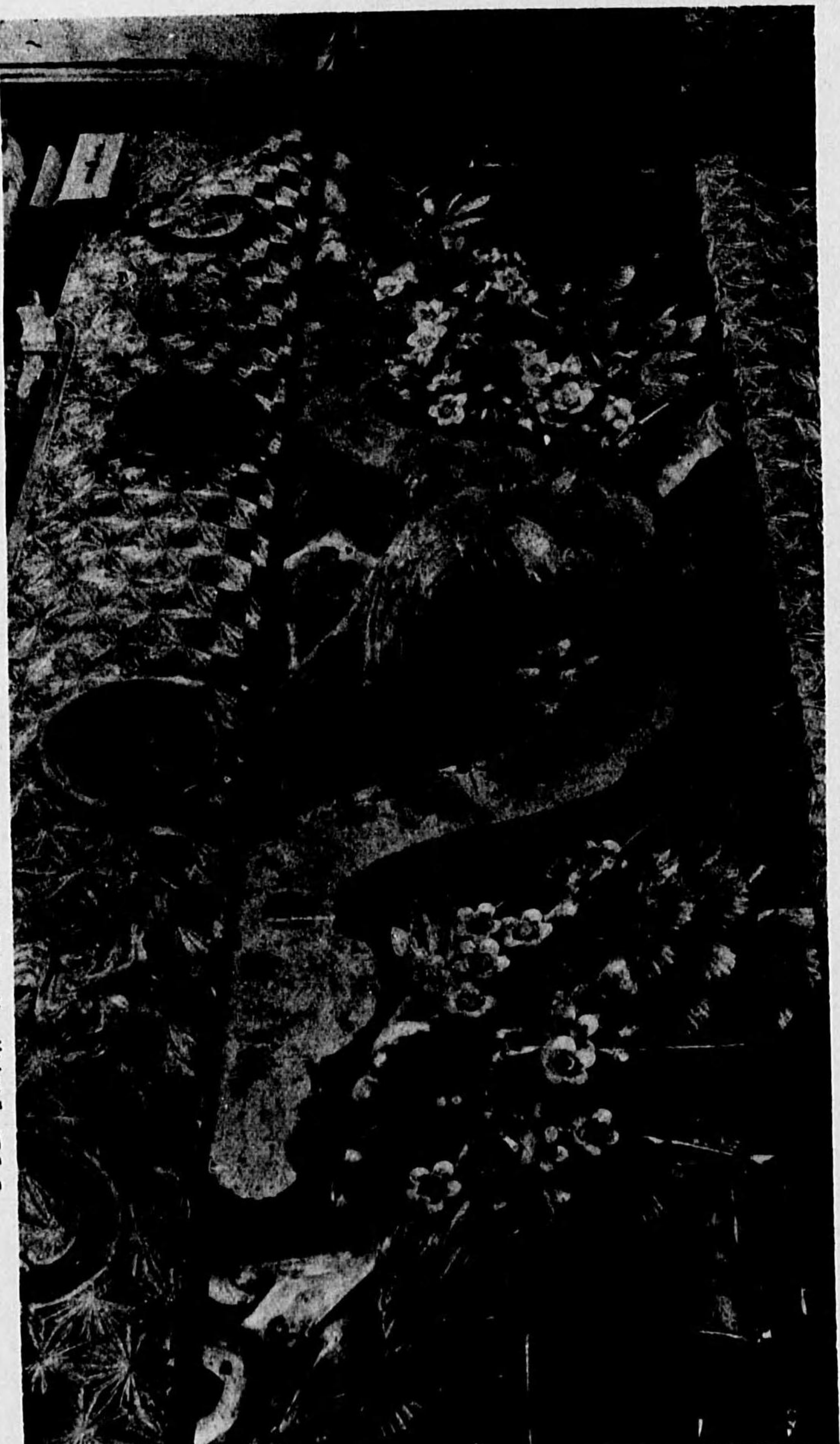
上、**二〇八** 二條城東大手門正面控
柱虹梁上彫刻一部
(昭和十六年十一月十四日)
下、**二〇九** 二條城二の丸御殿交關
欄間の一
(昭和十六年十一月十四日)
上圖の上下虹梁の間、鶴が飛んでゐる背
景は松・竹・梅の彫刻である。又下圖に
於いては篋欄間(ラサランマ)の中央の洲濱
形のうちに、同様の彫刻が入れてある。
此他次圖に見る如く、ここには頗る美事な
のが使用されてゐる。



上、**二一〇** 二條城二の丸御殿大廣間上段の間裏欄間彫刻 其一 (物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十六年十一月十四日)
下、**二一一** 同 其二 (物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十六年十一月十四日)
欄間の西面で、上の左に下の右がつく。裏面には小鳥が彫つてない。



上, 二一三 園城寺圓滿院廣椽欄間彫刻部分 (昭和五年七月十五日)
 下, 二一四 別格官幣社東照宮本殿左側脇障子欄間彫刻 (昭和九年七月二十七日)
 上圖は大津の園城寺(三井寺)の境内, 圓滿院廣椽欄間の一で, 明らかに「松・竹・梅」と思ふが, こんな竹はないといふ人があるかも知れない. 若し左下のが竹でないとするれば, 止むを得ないから「松・梅」としておく. 下圖は左に竹右に梅. 松はこの欄間にはないが, 下の脇障子の上部に澤山にほつてある. だから夫を入れて立派な「松・竹・梅」となるのである.



二一四 日光大猷院靈廟拜殿向拜軒梁上彫刻部分 (昭和八年七月二十五日)

裏腹内は明らかに「松に鷹」であるが, 其左右料拱との間には確かに「松・竹・梅」が入つてゐる.



上, 二一八 飯道神社本殿正面中央藁股 (昭和十年四月二十一日)

中, 二一九 久世神社本殿向拜藁股 正面

下, 二二〇 同 背面

(中下圖共物差は曲尺の約一尺(一呎)・昭和十年六月六日)

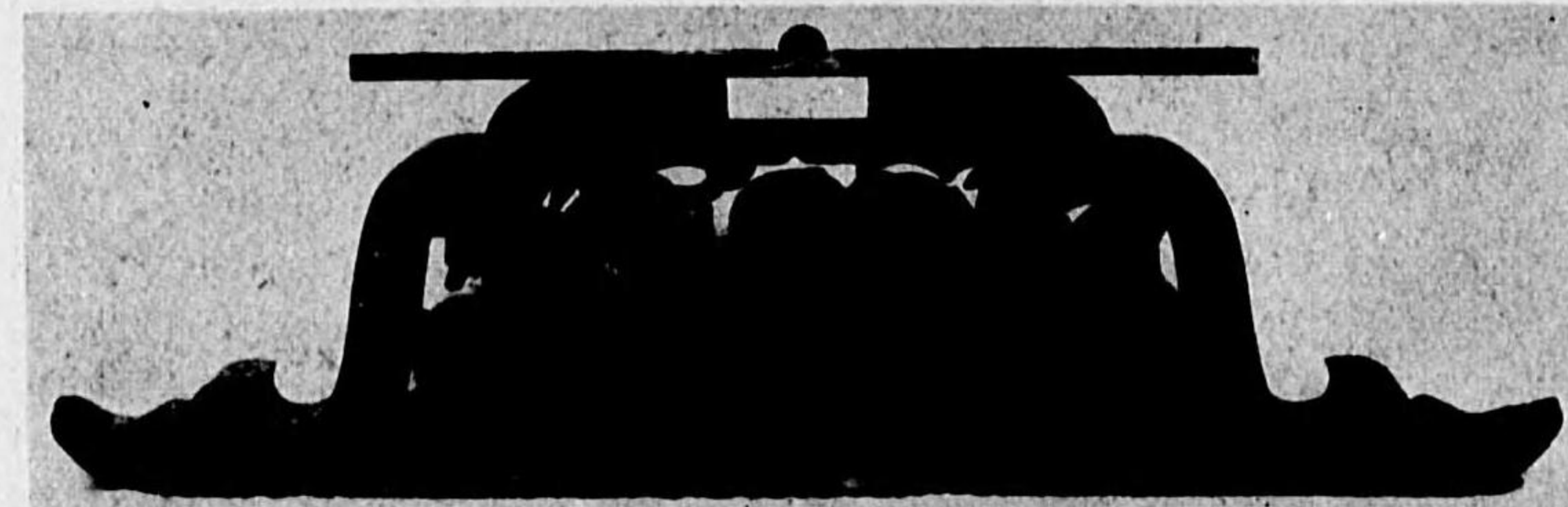
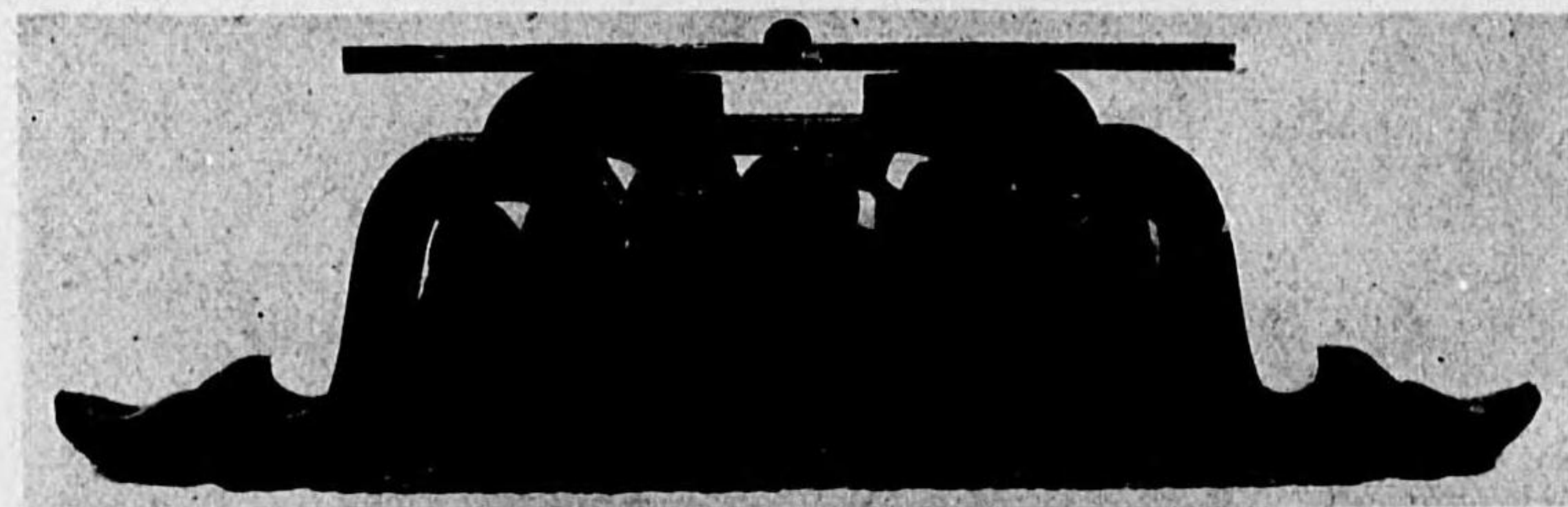
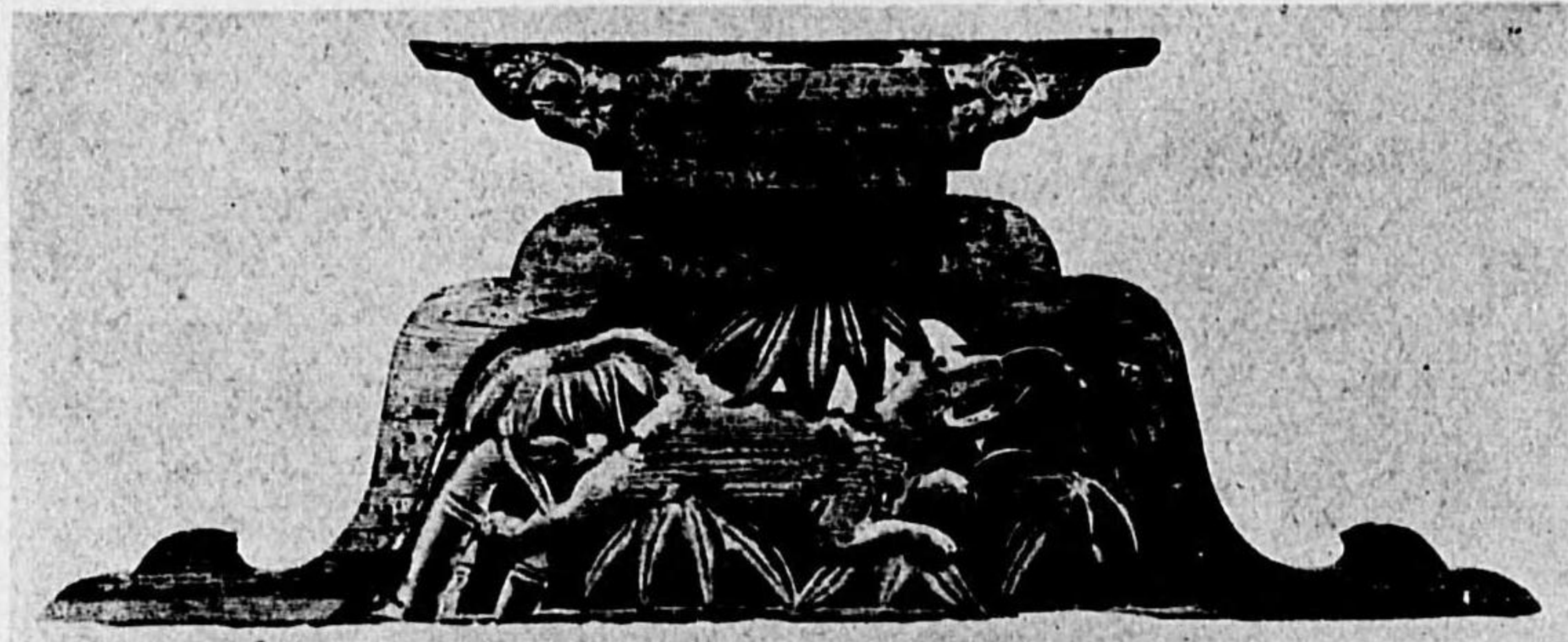
上圖は甚だ不明瞭だが、確かに「松・竹・梅」が入れてある。中下圖は前者が正面、下圖が背面で、正面には「鶴・龜・松・竹」、背面には「梅」がある。よくできた彫刻だが、輪郭が少しく物足りないので後補と推定した。めでたい藁股。



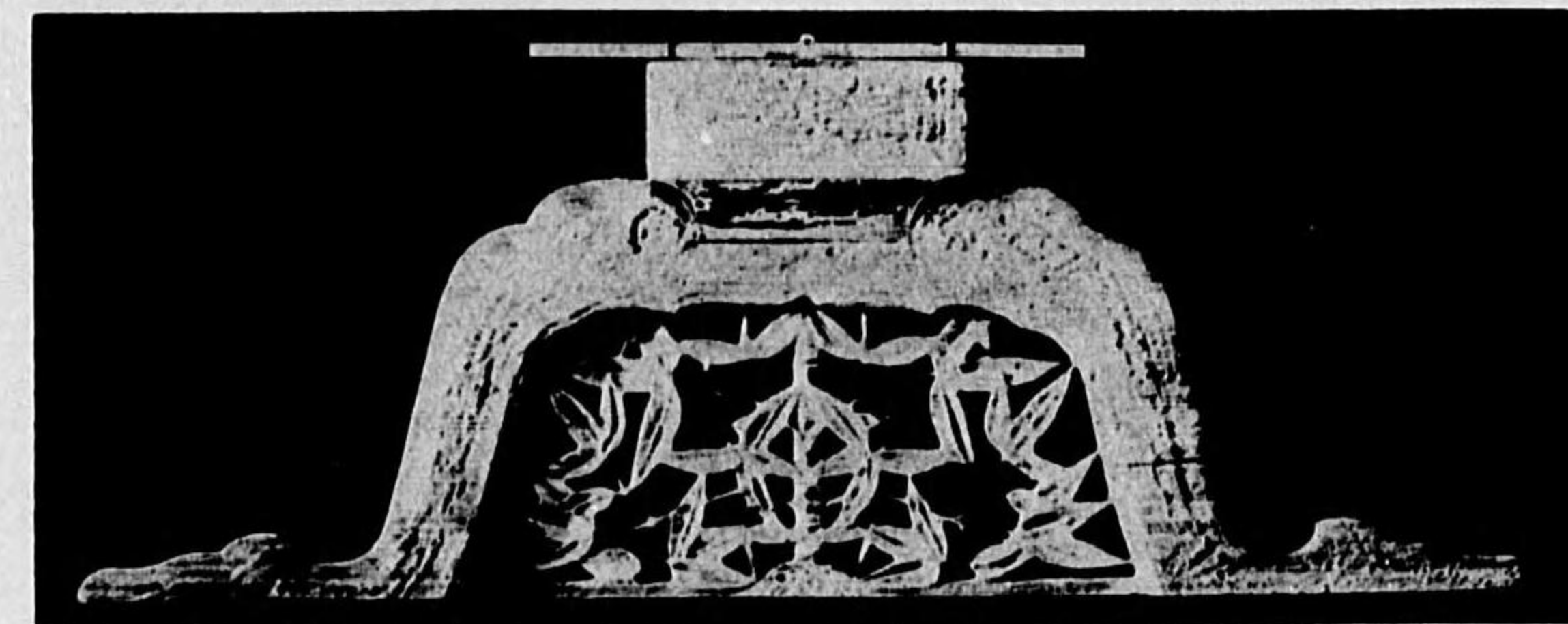
上, 二一五 古能神社本殿正面左端藁股 (昭和十二年六月二十五日)

中, 二一六 同 中央藁股 (昭和十二年六月二十五日)

下, 二一七 同 右端藁股 (昭和十二年六月二十五日)



(前頁より)れてゐる。又「竹に虎」も同様であるが、虎が竹林の前をかけてゐたり、竹にかみついてゐたり、實際に頗る遠い影方で反て面白味がある。



此頁上、**二二一** 八幡神社(兵庫加東)本殿東側面北藁股

此頁中、**二二二** 同 南藁股

(兩圖共物差は曲尺の約一尺〔一呎〕・昭和十年八月二日)

此頁下、**二二三** 伊那森神社社殿向拜藁股

次頁上、**二二四** 油日神社本殿藁股 (家藏寫眞複製)

次頁次、**二二五**、其次、**二二六** 佐藤佐氏藏藁股 表面及裏面

次頁下、**二二七** 八幡神社(兵庫神崎)本殿藁股 (昭和七年三月二十七日)

(次頁藁股上物差は何れも曲尺の二尺)

此等で見ると「松・竹」及び「竹」は室町に始り江戸になつても尙ほ用ひら (次頁へ)



上, **二二八** 大行社本殿臺股の一 (昭和五年六月八日)

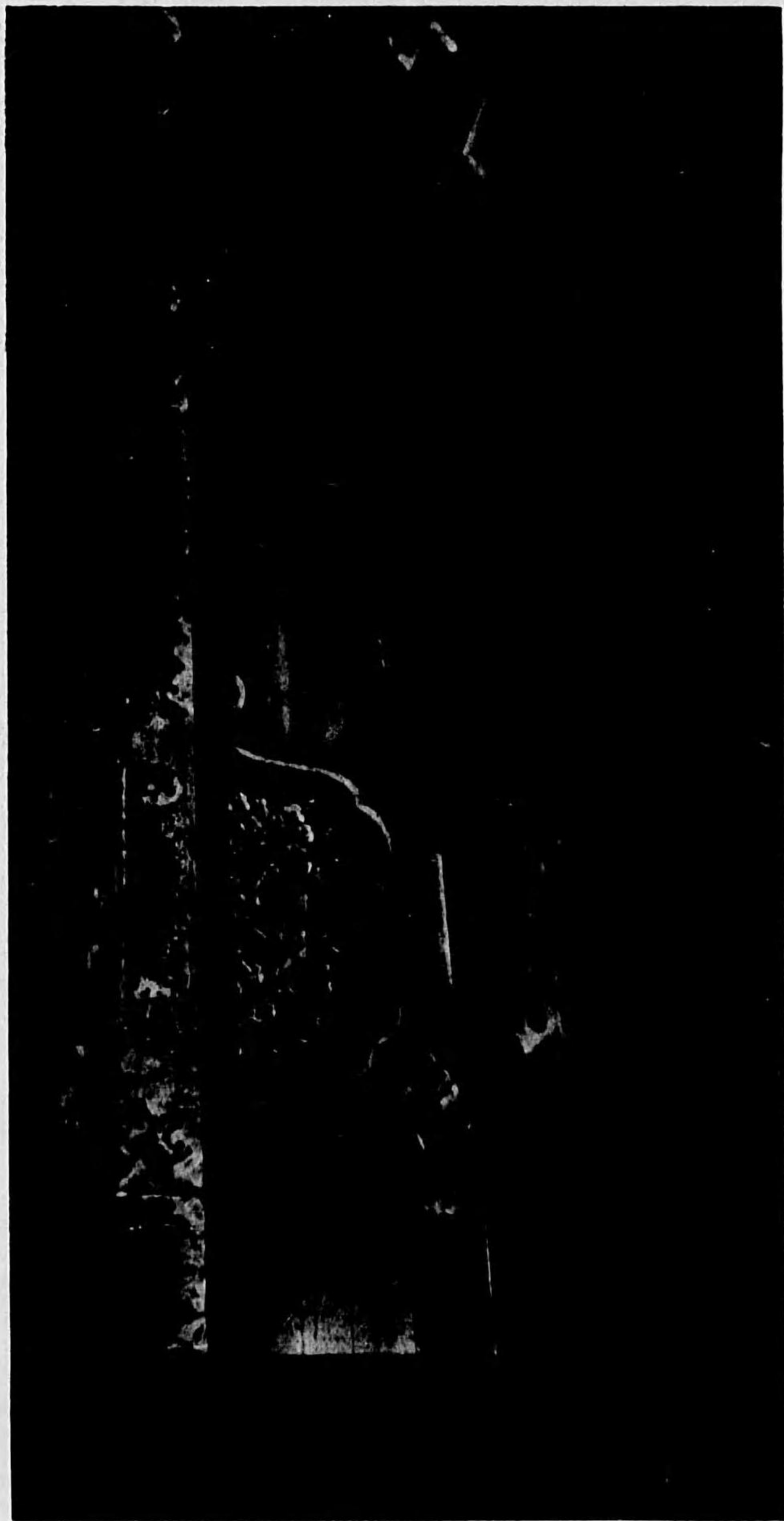
下, **二二九** 妙心寺勅使門臺股の一 (昭和六年五月三日)

大行社は滋賀縣愛知郡秦川村字松尾寺にある。有名な金剛輪寺を距る遠くない。現在の建物は寛正四年の建立で、村社としては割合に立派である。三間社流造に一間の向拜があり、料拱田三料で、料拱間には何れも臺股を入れてある。其内の一つが上圖であるが、これは「梅に竹」だと思つてゐる。そこで他の何が何が入つてゐるか、又正面と背面と同じもの、つまり單なる透彫であつたかどうか記憶がないが、どうも今もう一度行つてみるだけのひまがないから、とにかく室町時代

梅竹臺股の一例に此を採用しておく。

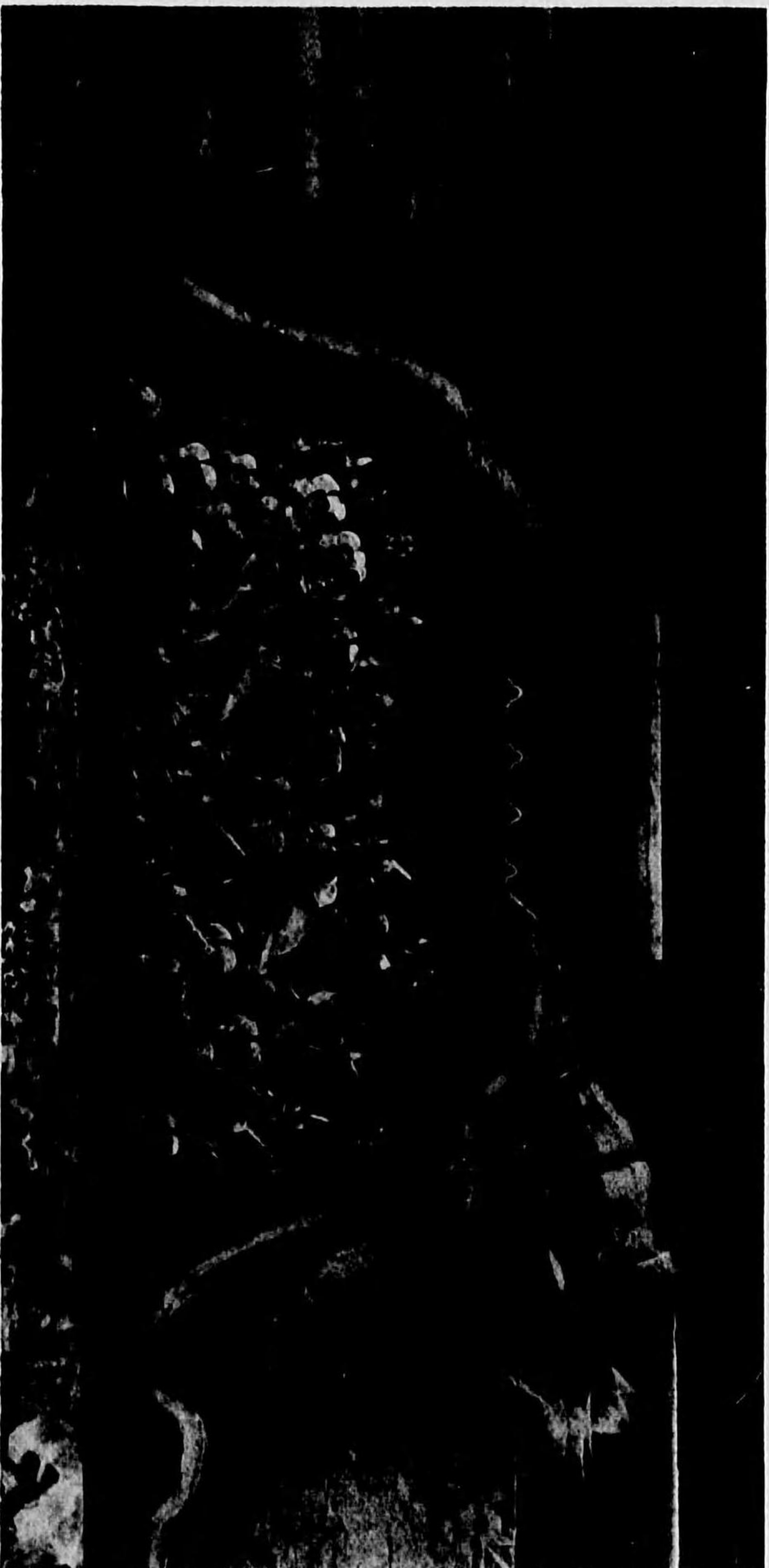
妙心寺勅使門は慶長十五年の建築。一間一戸四脚門で、内部冠木上に、此と直角の方向に二つの大臺股がある。下圖は西側の西面で、「梅に竹」、この裏即ち東面は「竹に虎」。この梅に竹は頗る上出来である。

二三〇 四天王寺經藏内部東側一部 (昭和十六年十一月二十七日)



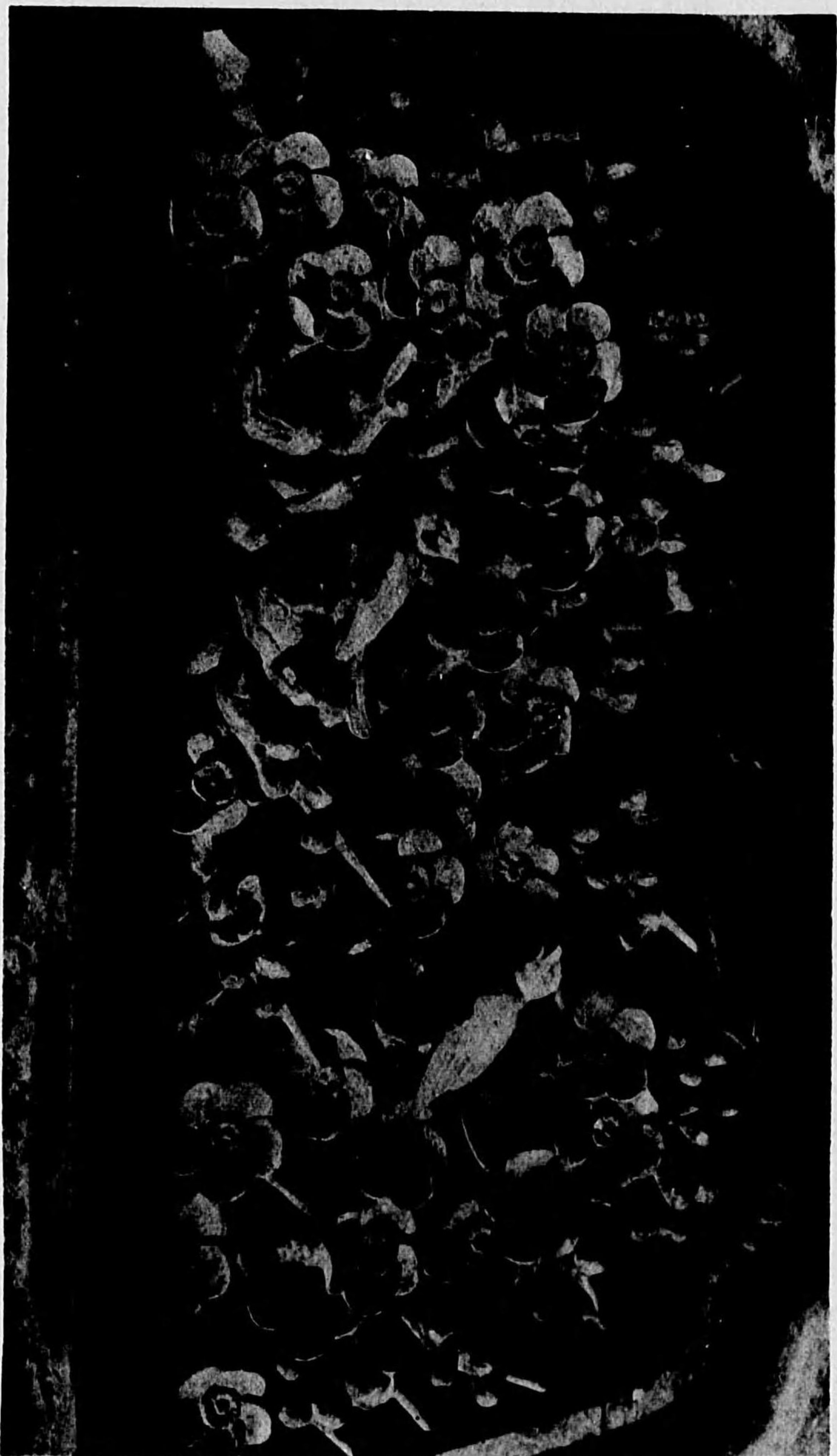
經藏内部東側上部、主として其臺股を西南方から見つたもの。右端の黒いところは東南方の内陣柱の一部で、左上に見えてゐる榿・尾榿等は輪藏のである。柱上部に「檜」があつたり、臺輪があつたり、天竺漆系統の料を用ひたりしてゐる。

二三一 四天王寺經藏内部東側基段 (昭和十六年十二月四日)



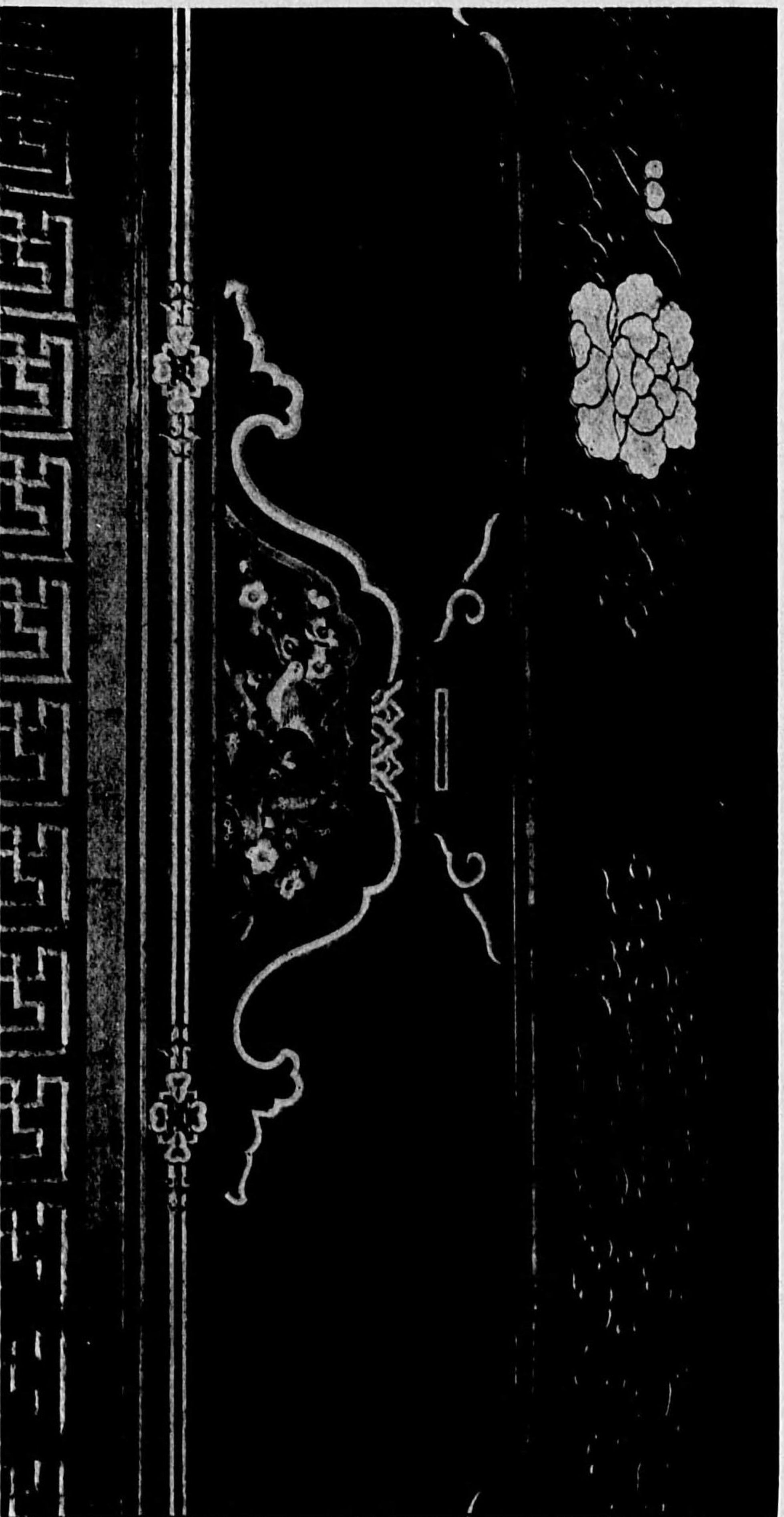
前圖の基段を近く見た所で、次頁の圖は脚内彫刻の大寫である。彫刻は「梅に鶯」だが、此場合は鶯が二羽ある。右上のは雄で左下のが雌。雄鳥は嘴をあげ、尾を上げてゐるのは、囀つてゐる所を現はしたので、鳥が囀る時は必ず尾を上げるものだと思ふ。先生が教へてくださった。此種の彫刻としては實に立派な出来栄で、申分はないと思ふ。私が今日迄見たうちで「梅に鶯」としては特に傑出してゐる。元和の建築としては基段の輪郭もしっかりしてゐるし、旁、無條件で優品に推薦する。

二三二 四天王寺經藏内部東側基段彫刻詳細 (昭和十六年十二月四日)



梅の花が大き過ぎるか、鶯が小さ過ぎるか、比例はいけなしか彫刻はよくできてゐる。

二三三 別格官幣社東照宮(日光)本殿廻廊幕段の一 (昭和三年七月二十四日)



東照宮の本堅を圍んである廻廊には、合計三百有餘の幕段が用ひてあるが、そのうちに「梅に鶯」の彫刻入のは二つあったと記憶してゐる。これはものが小さいから前例程複雑ではないのは當然である。右下に萬年青の模なものが添へてあるが、はつきりしない。

昭和十七年十一月十五日印刷
昭和十七年十一月二十日發行

日本古建築行脚 ⑥ 價六・〇〇
初版一五〇〇部

出版文協承認
ア280081



著者	天 沼 俊 一
發行所	京都市上京區上塔之段町四九四 白 井 喜 之 介
印刷人	堀 井 清 京都市下京區烏丸通七條下西入

發行所
京都市京大北門前
白 井 書 房

・配給元・東京・神田淡路町・日本出版配給株式会社 (西京二二號 弘文社)
振替京都九三三番
電話上三九八〇番
文化協會會員一〇三〇一一號

21529

圖書集成



中華民國二十一年一月一日

五洲大書局

上海

五洲大書局

上海

五洲大書局

終